



○ 英雄達の消えた街 1

「ハア…………ハア…………」

夕日が落ちるとある街中。その場所にかける、一人の少年の姿があった。青い体にフサフサの尻尾を持つ、狐だった。

「居たぞっ！！」

「ッ！！」

だが今の彼は、今までの生活を送れるほどの余裕は失われてしまった。そう、その街からは彼の知る英雄達は居ないからだ。

もう誰も、助けてくれる人が居ない。そしてそんな追っ手が行う、弱者へ対する仕打ちの数々。それから逃げる存在達もおり、必死の抵抗を続けていた。だがそれは虚しく、全て拘束と拷問の名の下に一人また一人とその街から姿を消していった。彼もそのうちの一人で、追っ手から必死に逃げていた。

だが、

「あっ！ しまった！」

街の路地裏を必死に逃げていた狐は、迂闊にも行き止まりの路地へと逃げ込んでしまったのだ。他のの移動手段を持たない彼にとって、これ以上の逃走は図れなかった。一步また一步と、追っ手達は距離をつめていた。

「あ…… ……」

「無駄な抵抗だったな。さあ、貴様もこっちに来てもらおうか。」

そんな追っ手達は、手に拷問用の手錠を手にし、彼に絞めるために様子を伺っていた。アレに捕まれば、もう明るい日の元には出てこれない。だがもうなす術も無い。

狐は半ば諦め、目をつぶった。すると、

「……おい、貴様等。」

彼らの後方に、一つの影が浮かんでいた。その声を聞き、狐と追っ手達は視線をそっちに向けた。狐ほどの小柄な体系の、影だった。

「ああ？ 誰だ貴様。」

「名乗るほどの名は持ち合わせていない…… ……ココで何をしていると、聞いているんだ。」影はそう言いつつ、こちらへとゆっくりやってきた。それは、狐のような小柄の体系の、龍だった。だがここの存在とは少し違った雰囲気をもたせていた。

「貴様なんかに関係ねえんだよ！ とっとと失せろ！」

「……そうか。なら、」

バツ！

「！！」

追っ手達は影に対してそう言い放つと、龍はそう呟きいきなり間合いを詰めた。急な事に、その場に居た狐も含め皆が驚きを隠せなかった。

「貴様等が失せろ。」

スパパパンッ！

龍はそう言い放つと、失せろと言った追っ手を数回の手刀を放ち、その場に落とした。急な事に、狐は味方なのか敵なのかすら分からないほど驚いた。

「……………」

「なっ！ このやろう！！」

味方がやられた事を悟り、追っ手の残りの皆がそう言い放ち、拳を握りしめ殴りかかった。だが、

バンッ！

「！！」

その場から飛び立った龍はその場から両者の顔にターゲットを絞り、宙から回し蹴りを繰り出した。それをもろに食らった追っ手達はそのまま吹き飛び、路地裏の壁にぶつかり、意識を失った。

「……………」

そんな数秒の光景を見て、狐はあっけにと取られて何も言えなかった。敵なのか、味方なのかすら分からないその龍の行いだけで、自分は助かった。そんな事を悟っていると、龍はその場に降り立ち、元来た道に戻ろうとした。

「あ！ 待って！」

「……………」

その光景を見た狐は、龍を引きとめようと声をかけた。その声を聞いて、龍はその場に足を止め、軽く狐の方を見た。

「あの…………… ……君は、僕の味方……………なの……………？」

もしかしたら自分も、さっきの追っ手みたいに何かされるかもしれない。だがそれだけは確かめたかったのだろう、狐は恐る恐るそう言った。すると、龍はこちらに体ごと振り返り、言った。

「……敵だったら、助けるつもりは無い。俺は俺自身が、正しいと思ったことをしているだけだ……」

狐からの問いかけに龍はそう答えると、再び歩を進め、その場を去っていった。

「敵じゃ、ない…………… あ、あのっ！」

龍からの返答を聞いて安心したのか、狐は龍の後を追いかけて路地裏を後にした。

「あの…… 助けてくれて、ありがとうございます……… ……僕、アルダートって言います。貴方は？」

路地裏から人気の無い街中へと出ると、龍の後に続きながら狐は名前を名乗った。だが龍はこれと言った事は話さず、寡黙を貫いて歩いていた。どこか目的地がある様子なのだが、何処へ行くかは明確では無い様子だった。

「………… ええっと…………」

「君は、どうして俺の後をついてくるんだ……」

「え？」

そんなアルダートの様子を見てか、龍はゆっくりと歩を緩め彼に問いかけた。その問いかけを聞いて、アルダートは少し驚いた様子で言った。

「……この街には、昔自分の知っている友人達がたくさん居たんだ。でも、もう今は居なくて、一人ぼっちだったんだ…… ……寂しくて。」

「…………」

「それで、いっその事この街から逃げようと思ったんだけど、追っ手に追われてさっき行き止まりに行ってしまった。そしたら、貴方が来てくれたんです。」

「……そうか。」

龍からの問いかけを聞き、アルダートはここまであった事の経緯を軽く説明した。今まで居た仲間達はもうここには居なく、自分は一人ぼっちだった事。自由が欲しくて逃げ出そうと思った街から追っ手を出され、捕まりそうになったこと。そんな場所に出くわし、助けてくれた龍。龍の後を静かにだけけれど、一緒にいたいと彼は願っていたのだった。

「……俺の後を着いてきたとしても、君の知る友人のように接する事は出来ない。着いてくるなら、好きにすればいい…………」

「……！ はい！」

そんなアルダートの願いを聞いて、龍は好きにするよう言うと、再び歩き出した。その言葉を聴いて、アルダートは嬉しそうに返事をする、顔色を一つも変えない彼の後を再び追いかけた。冷たい表情だけれど、自分が居てもいいと言う言葉を聴いて、嬉しかったのだろう。

「……あ。龍、さん。名前、聞いてもいいですか？」

「名前……？」

「はい。名前がないと、なんて呼んで言いか分からないので。出来たら、呼び名を教えてくださいませんか。」

再び彼の元へと追いついたアルダートは、ふと思った事を問いかけた。その問いかけを聞いて龍は驚いた様子でそう言い立ち止まると、アルダートは問いかけた理由を軽く説明した。

「名前………… ……」

「どうしました？」

「……俺には、名前は無い。呼び名が欲しかったら、好きに決めてくれ。気に入るものなら、そ

れに返事をしよう……」

アルダートからの問いかけに龍はそう答えると、軽くそう言った後再び歩き出した。よく分からない事を言われ一瞬彼は迷ったが、呼び名がないと不便と改めて思い、再び彼の元へと移動しつつ呼び名を考えた。

そして、一つ候補が上がった。

「見知らぬ、人……… ……そうだ、『ストレンジャー』って言うのはどうですか。」

「……好きにしてくれ。」

「はい！ ストレンジャーさん！」

アルダートはそう言うと、龍は変わらない表情でそう言った。その返事を聞いて、彼は龍に呼び名を与えて、後に続いて行ったのだった。

ストレンジャーと名前をつけた、見知らぬ龍の後に。

突如出合った名を持たない一人の龍。何のためにココに来た、そういった話は何も聞かず、アルダートは行動を共にするかのよう、寄り添い歩いていた。

しばらく歩き、彼らとはある廃ビルへとやってきた。

「……ココなら、人目にあまり付かないな。」

ストレンジャーと呼び名を貰った彼はそう言いつつ、ビルを眺めていた。四階立てのそのビルにはガラス窓等は無く、外見だけの廃ビルだった。

「どうするんですか？」

「寝泊り場所だ。……苦手か。」

「あ、いいえ。気にしないで下さい。」

アルダートは何のためにココへ来たのか知らず理由を聞き、そう答えた。彼の行く場所なら着いていきたい。元々もう行く先が無かった彼にとって、何か目的がありそうな行動をする彼に魅かれるのは不思議ではなかった。アルダートの了解を得た後、ストレンジャーはゆっくりとした足取りでビルの階段を上っていった。その後を、アルダートも軽く駆けていった。

しばらく歩き、三階部分へとやってきた彼らは広間へと向って歩いて行った。およそ畳三十畳以上の広い場所がそこにあり、仕切る扉等も無い場所だったが、普通にいる分には申し分無い広さがそこにあった。

「……少し、そこにいな。」

「あ、はい。」

ストレンジャーにそう言われ、アルダートは元は扉があったのだろう階段付近に待機し、ストレンジャーを見ていた。すると彼は、軽く翼を羽ばたかせ目に付く埃を全て吹き飛ばすと、アルダートの中へと入れた。

優しく出来るかどうか分からないと言っていたが、彼なりの配慮だったのだろう。アルダートは嬉しそうな表情を浮かべていた。

「広い場所ですね。ココが、僕達の新しいお家ですか？」

適当な場所に腰を下ろしつつ、アルダートはそう問いかけた。軽く頷くストレンジャーを見て、彼は再び笑顔を見せた。

「仮だがな…… 食料を持って来るから、ココで待っててくれ……」

「はい。」

問いかけに答えストレンジャーはそう言うと、アルダートをその場に残し再び外へと出て行った。元々店等が無く自然も乏しいこの街に食料確保の手段があるのかと少し疑問に思ったが、彼はそれでもストレンジャーの帰りを待っていた。

彼が今居る街は、お世辞にも治安が良い街とは程遠い世界でもあった。一度外に出れば薄気味悪い風が彼らをそよぎ、追っ手に見つかり捕まれば牢獄行きの酷い世界。アルダートはそんな世界になる前の世界からこの街に住んでおり、最近代わって行ったこの街が嫌いだった。それでも、彼は何か大切な物があると思い、この街にとどまっていた。

一部の異変を察した存在達はこの街から早々に去ってしまい、自分の知らない外の世界へと向かってしまった。今でも彼はそんな外の自由を求めており出ようと試みたが、時既に遅し。彼らの敵が全ての出入り口を封鎖しており、地上空中共に閉鎖されていた。文字通りの牢獄のような地獄の街に彼は閉じ込められてしまい、逃げる毎日だった。

だからこそ、こういった優しい存在に巡り合えた事は心から喜んでいた。自ら行動を共にしようとする存在はいなく、彼は一人きりだった。皆が思い描くようなヒーローはこの街には居ないため、彼らに希望は無かった。自らはそんな街を『英雄達の消えた街』と言っていた。平和も希望も無い、寂しく残酷な街と言う意味を込めて。

「……おまたせ。」

しばらくして、アルダートの待つ廃ビルにストレンジャーが戻ってきた。出て行った時と変わらない格好のまま戻ってきた彼の手元には、持てるだけの食料が手にもたれていた。主にサンドイッチやおにぎりと言った『携帯できる食事』が、そこにはあった。

「凄い……こんなに、何処にあったんですか？」

運んできたたくさんの食事を見て、アルダートはストレンジャーに問いかけた。

「外に居た先ほどの連中から貰ってきたんだ。……追っ手ココまで来たようだが、今は大丈夫。誰も居ない。」

「そうだったんですか……」

「さ、食べな。食べれるだけ、今は平和なはずだ……その後、少し休めばいい。」

「あ、ありがとうございます。……頂きます。」

持っていた食事を一時床へと置き、ストレンジャーはそう言い食事を促した。アルダートはその言葉を聞きその通りだと思い、持って来てくれたたくさんのサンドイッチを一つ手にし、食べ始めた。

「……美味しい。久しぶりに、ちゃんとしたご飯を食べれた気がします。」

「良かったな……」

静かに食べていた彼はそう言うと、無邪気に次々に食べ始めた。よほどお腹が空いていたのだろう。ちゃんと噛んで食べているにも関わらず、次々と食事が消えていった。ストレンジャーも手にしたサンドイッチを開封し、食べた。

食事を終えた頃には、街は夜の闇に包まれており、薄暗い雲間から指す月明かりがビルを照らしていた。再び外へと出向いたストレンジャーが調達した布地を彼らは床に敷き、寝床を作った。

「ストレンジャーさん。」

「……どうした。」

「貴方は、この街にどうして来たんですか？ ココは、とても平和や治安のいい場所ではないのですが……」

カーペットを二重にして作った寝床に横になりつつ、アルダートは問いかけた。元々自分意外の存在は、捕まっていたり他の場所に身を潜んでいたりとしているため、彼のような存在を見たら

噂が耳に入ると思っていた。

だが彼の様な存在の話を目にした事が無かったため、外から来たのだと彼は思ったのだ。

「……探している人が居てな。」

「人、ですか？」

「ああ…… ……名前も姿も分からないその人を、俺は探している…… とても大切な人だったはずなんだが、覚えていないんだ……… 何処に居るのかさえ、分からない。」

問いかけに対しストレンジャーはそう話しつつ、窓辺の先に見える月を見ながらそう呟いた。彼には彼なりの目的があってココに居る様で、自分では到底叶える事の出来そうにない目的を持っているようだった。

「……君は、どうしてこの街に居るんだ。自らが理解してるほど、いい場所ではないんだろ。」

「はい…… ……元々僕は、この街の住人でした。昔はもっと平和な場所だったのですが、今では地獄のような酷い街になってしまった。僕は、掴めるか分からない自由が欲しくて、外へ出てきました。……ですが、貴方に会う前に追っ手に見つかってしまい、追いかけていたんです。」

「そうだったのか……」

変わって今度は、ストレンジャーが彼にココに居る目的を問いかけた。昔からこの地に住んでいた事を彼は話し始め、平和だったあの頃が街に戻って欲しいと願っていた。自らの手で得られるか分からない高望みの願いでも、彼は叶えたいと願っていた。

「いつもいつも、寂しくて日の光の差さない地価に居るのが嫌だった…… もっと皆が笑顔になれる場所が欲しくて……」

ポンッ

「え……？」

そんな事をいつしか涙目で話していたアルダートを見て、ストレンジャーは優しく頭を撫でた。

「……心配するな。目的は違えど、君とあったのは何かの縁だ。俺が、しばらく君と一緒に居る……」

「ストレンジャー……さん……」

「さ、早めに寝な。……また見つかったりしたら、時によっては君も走らないといけないからさ。」

慰め励ますように彼はそう言うと、アルダートに寝るよう勧めた。これ以上寂しい思いを胸に抱いたまま起きているのは辛いだろうと思ったのだろう。

彼なりの、心遣いだった。

「……はい。……お休みなさい、ストレンジャーさん。」

「お休み。」

共に居てくれるという言葉を受けて安心したのか、アルダートはそう言うと目を閉じ、寝てしまった。そんな彼をしばらく見ていたストレンジャーは、身につけていた上着を脱いで、彼の上に

かけた。軽い寝息を立てて休んでいるアルダートの寝顔を見て、ストレンジャーは安心したような表情を見せた。

『何かを求めて集まるこの地は、願うものがあると言っていたな…… ……何があるかはわからないが、君の様な寂しい思いをした存在が、まだ居るのか………』

彼なりにこの地に居る存在達が、皆共通点を持っていることをその時理解した。追っ手達も理由がある事を食料を貰う際に絞めた時に知り、アルダートの言葉を聞いてようやく分かった。

この地には似た存在達が集まっている。そして、何か大きなものが彼らを酷い仕打ちの籠に閉じ込めているのだと。

『……貴方が居たら、そんな事にはならなかったんだろうな…… ……俺の探す、あの人が居たなら………』

ストレンジャーは軽くそう呟くと、再び外に浮かぶ月を見た。丁度雲間から出てきた月は三日月で、ぼんやりとだが綺麗に輝いており、こちらをほのかに照らしていた。

寂しさを恐れる存在達を、優しく照らすかの様に。

初めてに等しい、外の世界での夜。徐々に暗がりを照らしていた月の時間が終わると、街の外れから上り出した太陽が街を少しずつ照らしだした。太陽に近い位置から日光が照らし出し、灰ビルに等しい建造物に色を取り戻していった。

それと共に、日光と共に出だした朝靄は街に朝が来た事を知らせて行ったのであった。

『…………… ……朝……………か。』

とある灰ビルで横になっていたストレンジャーは、ガラス窓の無い窓辺からの日光を浴び目を覚ました。ゆっくりと身体を起こし背を伸ばすと、隣で寝ているアルダートを一瞥した。未だに彼は夢の中に居る様子で、彼が寝た後にかけて上着を毛布に眠っていた。軽く体を丸めており、少し可愛らしい寝相であった。

彼が寝ている事を確認すると、ストレンジャーは敷布団の端に置いた靴を履き、その場に立ち上がった。今は上着を着ていないためズボンのみの井出達だが、外の外気は暑くも寒くもないため、特に気にしない様子で窓辺に向かって行った。

窓辺に向かい窓枠に手をかけながら、彼はその場から外を見渡した。すでに日は昇っており、彼等が歩いてきた道路には軽い霧がかかっていた。しかし彼が今いる三階付近は靄が無く、朝の陽ざしが優しく降り注ぎ目の前の風景を明るく染めていた。

灰ビルばかりに等しい街出会ったが、朝方のこの風景だけは少しだけ幻想的にも見えた。時間が止まったと言うのか、はたまた壊れてしまった街と言うのか。動いている物はほとんどない場所であったが、それでもその街は生きていと言えそうな、そんな風景が広がっていた。

点々と立っているビルに、いつから止まっているのかわからない電車が走る陸橋。誰が飛ばしたのかわからない、小さな紙屑は空を舞う。寂しい風景ではあったが、日の光だけで優しさが見え隠れしているのを、彼は感じ取っていた。

【まだ希望が残っている】

そう、感じていたのだ。

『……食事を取った後、また行動するか……………』

朝焼けの風景を楽しんだのち、ストレンジャーは元来た道に戻り。アルダートが目目を覚ます前に朝食を調達しに、外へと出て行ったのであった。

スタスタスタ……………

「……………」

寝床として確保したビルの階段を下りると、ストレンジャーは辺りを見渡し適当に行く方向を決

め街を散策し出した。先日の食事調達も似たような行動を取っており、特に目指す場所は無いが何か無いかと探していたのだ。そんな彼の元に、アルダートを捕まえようとした連中に遭遇し、食糧を得たのだ。

今日も似たような感じだろうと、彼は何故か確信している様子で周囲を散策していた。

しばらく移動すると、彼は小さな空き地にやってきた。乱雑に生えている雑草がその地を埋め尽くしており、道路一帯が灰色なのに対しその場所だけは緑色であった。小さな土管やタイヤが点々と置かれており、しばらくしたら廃棄所になるのでは。

と、思われる場所でもあった。

「……？」

空き地をしばらく見ていたストレンジャーは、何かを見つけた様子で空き地に足を踏み入れた。彼が向かった先には、雑草の中で懸命に咲いていた一輪の花があった。薄い水色に白色のグラデーションがかかった、五つの花弁がある花だった。

花の近くで膝をつくると、彼は軽く手を伸ばしその花に触れた。

『……まだ、生き物が生きられる土地ではあるのか……… 悲しい出来事ばかりだと言ってはいたが、兆しはいくらでも見つけられそうだな……』

寂しいその土地でも、こういった小さな幸せを見つけれただけまだ平和な方なのだと思っただ。本当に荒んだ世界であれば、自然が生き延びられるほど大地は正常ではなく汚れに満ちていた。今は住んでいる存在達が落ち着いていられない場所になっているだけであり、切っ掛けさえあればいくらでも改善出来る。彼はそう思い、花から手を離し再び立ち上がった。

カサッ……

「………」

すると、彼が空き地へ入る際に通ってきた入口付近から草を踏む音が聞こえた。ゆっくりとストレンジャーが振り向くと、そこには先日の連中がその場に数人立っていた。だが前回とは違い、今回は余裕そうな表情をしていた。

「よお、昨日は世話になったな。龍さんよ。」

おそらくリーダーと思われる男は、ストレンジャーを見ながらそう言った。昨日同様に裾がボロボロの服を纏っており、おそらく着替えはしていないであろう恰好をしていた。

「……何か用か。こんな朝早くから、ご苦労だな………」

「俺達に邪魔伊達をする奴は、お前が初めてだからなあ。悪いが、今日はちとばかり付き合えや。朝早くにこんなちんけな場所に居るって事は、暇なんだろう？」

軽く挨拶をしつつ、ストレンジャーは彼等の居る方へ一歩踏み出した。その場で何か行動してしまえば、今足もとに咲いている花が犠牲になると、彼は考えたのだ。

すると、相手側はそう言い少し時間をくれと言ってきた。おそらく、昨日同様に喧嘩を始めるつもりなのであろう。今日は体制が万全な様子で、軽く両拳をぶつけながら言っていた。

「………… 無駄な時間は過ごしたくないが、すぐに済むなら構わない。」

「安心しろやあ、すぐに終わらせてやるからさ。お前が……死ねばなああ！！」

バツ！！

少しの間考えストレンジャーが返答すると、彼はそう言い集団で空き地に踏み入り襲いかかってきた。前回と違い狭い場所ではないため、多人数が有利だと言わんばかりにストレンジャーを囲うように彼らは走ってきた。

敵との間合いを考えつつ、同様にストレンジャーもその場から駆け出し囲まれる前にと右へ走った。向かった先には、空き地に唯一ある物体である土管とタイヤが置かれていた。それを利用しようと、しているのであろう。

「逃がすか！！」

ストレンジャーの行動を見て、敵はそう言い進路を変え彼を追いかけた。何がしたいのかは彼らにはわかっていない様子で、ひとまず間合いを詰める事を先に行動している様だった。

ガシッ！

「……ッ！ ハッ！」

一足先にストレンジャーはタイヤを掴むと、ジャンプしつつ空中でスピンしその反動を利用しながらタイヤを投げ放った。投げ放たれたタイヤはそのまま空中で横移動を開始し、周りながら敵の1人の顔面目がけて飛んで行った。

「グァッ！！」

思った以上にタイヤは頑丈な物だったためか、敵の一人は手で防ごうにも重みに耐えきれずそのまま攻撃を受けた。シンプルなゴムタイヤ以上にそのタイヤは固く、どうやら中型車用の固めの物のようだ。その証拠に、タイヤの表面には凸凹の溝が入っており、これまた当たったら痛そうな表面である。

思った以上にタイヤのダメージが大きい事を確認すると、続けてストレンジャーは残りの連中に向かってタイヤを拾い、同様に投げ放った。しかし今度は攻撃を見切っていた様子で、一人は横へ避け、一人はその場にしゃがみタイヤを避けた。

「同じ攻撃が、二度通用すると思うなよっ！！」

攻撃をくらい一人が動けない事を確認すると、敵はそう叫びストレンジャーとの間合いを詰めた。そしてそのままの体制で、右ストレートを彼のボディに叩き込もうとした。

バシッ！

「ッ……！」

しかしパンチは数秒遅く、ストレンジャーは両手でその攻撃を受け止め、続けてやってくる攻撃

に反応できるよう体制を整えていた。すると、彼の読み通り敵はボディに入らなかった拳を見て、今度は左手で攻撃をしかけてきた。

その繰り返しがしばらく続き、ストレンジャーは一つ一つの攻撃を冷静に見切り、無力化していった。

「クソッ！ 何で入らねえんだ！！」

「……………」

「だったら、これならどうだああ！」

「！」

攻撃がなかなかヒットしない事にいらだつ1人に対し、残っていた1人がストレンジャーの横から回し蹴りを放った。これにはさすがに受け身を取れない事を悟り、ストレンジャーは大地を蹴り一度上空へ逃げた。背後の翼を広げ放物線を描くように彼は跳ぶと、跳んだ先にあった土管の一つを敵目がけて蹴りあげた

「なっ！！」

ドォーンッ！

「ッ！ くそっ！！」

大き目の土管であったにも関わらず、蹴られた土管は宙へ浮き敵の一人の上空から大地に目がけて突き刺さった。その拍子に、敵は土管の中へとスッポりはまってしまい、両手両足を拘束される形で埋まってしまった。

必死に顔だけ出したものの、体は完全に入ってしまった様子で、抜けようにも抜けられない様子だった。

「……………」

敵二人が動けない事を確認すると、ストレンジャーはゆっくりと地面に降り立ち残った一人を一瞥した。軽く距離は空いており、再び行動しようものなら彼は別の手段で敵を倒そうとしていた。体制は整っており、どんな攻撃に対しても反応が出来る状態となっていた。

「チッ。……やっぱりお前はそう簡単にはやられねえか。あのキツネと違って、逃げるような目をしてねえもんなあ。」

「……………」

「これだけは使いたくなかったが、もう倒すにはこの方法しかねえか。」

ゴソゴソ……

「……？」

大体予想していた様子で、簡単には死んではくれないだろうと敵は呟いた。敵が何を言おうとストレンジャーは表情を変えず、敵である事だけを認識しておりそれ以上は何も考えてはいなか

った。しばらくすると、奥の手とばかりにそう言いポケットから一つの物体を取り出した。取り出した物体は、透明の液体が入った瓶であり、所々外見がトゲトゲした代物だった。軽く瓶を引き抜くと、敵は振りかぶったかと思うと勢い良くストレンジャーめがけて瓶を振り下ろした。すると、

パシュッ！

「……！」

ストレンジャーの立っていた場所周辺で空気の刃が生まれ、周囲の雑草を刈り取られた。何が起こったのかわからない様子で、ストレンジャーは驚き刈られた雑草を見た。

切断面を見てみると、何か切れ味の良い物体が生まれ切り取られたかのように、葉は綺麗に切られていた。刈られた雑草は宙を舞い、風と共にどこかへ運ばれて行ってしまった。

「お、どうやら何が起こったかわかんねえみたいだな。龍さんよお？」

「ッ……」

「ま、驚くのも無理ねえか。俺達だって、簡単に手に入れられる代物じゃねえってことぐらい、分かってて使ってるからな。」

攻撃した直後の反応を見て、敵はストレンジャーが何をしたのかを理解していない事を思った。ただ瓶を振っただけにも関わらず、周囲の雑草が綺麗に刈り取られてしまえば、無理もない。少し余裕が出来た様子で、不敵な笑みを浮かべつつ敵はストレンジャーと対峙していた。

「……………」

「さあて、どういたぶってやろうかねえー……………」

軽く瓶の蓋を締め、手の上で軽く瓶を投げつつ敵はそう言った。先ほどまでの劣勢ぶりは何処へやらの状態となっており、今は余裕そのものの笑みを浮かべていた。何を使っているのかすらわからない武器を使っていれば、それだけ有利になったと思っているのだろう。

仕方なくストレンジャーは対峙したまま、瓶そのものと先ほど切断された雑草を静かに見比べていた。一部の雑草のみが水平に切断されており、他の部分は先ほどと変わらず天に向かって伸びていた。どうやら振った先の一部分に変化を起こさせる事が出来ると予想し、ストレンジャーは再び敵を見た。

「武器、か…… ……それを持ち出したと言う事は、俺はそれだけ排除対象として認識されている……と、言う事なんだろうな。」

たとえそのまま攻撃された所ですぐには殺られないと判断したのか、ストレンジャーは軽く相手に確認するかのよう問いかけた。

「まあ、別に野放しにしようが見捨てようが構いはしねえんだけどさ。一応こっちも仕事っていうか、生きるためにしてる事だ。」

「……生きるため？」

「この世界は上の監視下に置かれて、もう俺達には自由はねえんだ…… だからこそ俺達は強さを証明し、この街から出て行こうと思っている。」

「……………」

先ほどまでの挑発口調とは違い、敵は顔を少し横へとずらしつつそう呟いた。彼等にも生きる意味を探しており、この街に居る事を望んでいないと言う事を知った。だからこそ早く抜けられるためにも、彼らは力を証明しなければならない。そのための手段として持っている物こそが、先ほどの瓶型の武器だった。

理由はさておき、彼の話聞きストレンジャーは理由があって自分と対峙している事を悟った。

「だからこそ、俺はお前を倒す…… 強いと認識したやつを、野放しにはできねえんだよ！！！」

バツ！！

「ッ！」

自分を倒そうとする理由を知り、そう言った矢先敵は再び瓶の蓋を引き抜きその場で振った。すると、先ほど同様に周囲に風の刃が発生し、ストレンジャーに向かって襲いかかった。

『奴にも理由がある…… だが、俺にも……………！』

ガサッ！

「何っ！」

攻撃が向かってくる事を知りつつ、ストレンジャーはその場にしゃがみ雑草の中へと隠れた。先ほどの攻撃で足もと周辺が攻撃される事を思わせていた敵は、ストレンジャーのその行動に驚きつつも再度瓶を振った。

すると、彼のしゃがんだ場所へと向かって攻撃が迫ってくるのを知らせるように、雑草が次々と裂かれて行った。

『見える……！』

雑草が裂かれたのを見て、ストレンジャーは身をかがめた体制のまま雑草地帯を駆け回った。攻撃の波が見えないのなら、見えるように工夫するまで。彼はそう考え、今一番視覚として捉えやすい周囲の雑草を盾に使ったのだ。

彼の予想は的中し、敵が瓶を振るごとにストレンジャーへと向かって直線状に波が向かってくるのが見えた。しかし収束させた物を放っているわけではない様子で、雑草の切れ方は場所によって異なり、斜めに切れているところもあれば水平線上に切れているところもあった。また、周囲が切れているにも関わらず何も被害を受けていない雑草もあり、どうやら一定の周波を相手にぶつけている事が分かった。

敵の使っている武器の特徴が解り、ストレンジャーは翼を広げ再び宙を舞った。

「逃がすかっ！！」

パシュッ！

彼の行動を見かね、敵はそのままストレンジャーへと向けて攻撃を放った。宙には視覚で捉えられるものがない事を知っておきながら、彼はそのまま宙を飛び交い先ほど投げ放ったタイヤのうちの1つを回収し、彼に向かって投げ放った。その行動を見かねた敵は瓶を振り、攻撃が命中したのかタイヤの表面は次々と裂かれ、表面のゴムが薄くなった状態で敵の元へと到着した。

しかし裂かれた分威力が下がっており、敵はそのまま素手でタイヤを殴り、叩き落とした。

『裂く力事態は強くない…… その上固定周波を放っていないと言う事は、攻撃の波に法則性は無い…… 刃を発生させて、相手を攻撃するものか。』

いろいろ攻撃や動作を行い、ストレンジャーは短時間で相手の使っている武器の特徴をあらかじめ把握していた。攻撃事態は強力なものではない上に、相手も決まったところへは向かわせられるがポイントを決めて攻撃が出来ないのだ。だからこそ最初の一撃はストレンジャーの周囲の草のみが裂かれ、彼自身に傷を負わせることが出来なかったのだ。

一通り確認し終わると、ストレンジャーは再び地面へと降り立ち敵と対峙した。

「いくら遠距離から攻めようとしたり、死角に入ろうとしても無駄だ。 見えない刃がある限り、お前は接近戦では責められない！」

敵はそう言い、先ほどからストレンジャーがしようとしている事を予想しそう叫んだ。今の彼には遠距離から攻めるにも、タイヤのように個体を投げ放つことしか出来ない。敵と違い武器と呼

べるものはその場には無く、あるとしたら先ほどの土管くらいだ。

だが投げたり持って戦うにしても、彼の体格からしたら大きすぎるものであり持とうとする隙を見せた時、攻撃を受ける事が目に見えていた。

「……そうだな。ここで俺が逃げた所で、お前が追う事を止める事もないだろうしな……理由がある限り、お前はついてくるだろう。」

「まあ、そうかもな。……さて、大分時間を使っちゃったし。俺もそろそろ立ち尽くしてるのも飽きたから、歩くとするか。」

軽くトークをした後、敵はそう言い止まって居る事を止め歩き出しながらストレンジャーに攻撃を仕掛けようとした。その行動を見かねた彼は、数歩後ろへ下がりつつ間合いを一定に保とうとした。

すると、

コツンッ

『……？』

下がった拍子に、彼の履いていた靴のかかと部分に何かがぶつかった感触がした。何もないと思っていたその場に個体があるとは思わなかったからか、ストレンジャーは軽く驚き目線を下にずらした。

するとそこには、彼の持っている瓶に近いものが落ちており、雑草の中に隠れていた。瓶のデザインは敵の持っているものよりも簡素なものだが、液体の色が違い落ちていた瓶の中身は『青い液体』のようだった。

『瓶…… アイツと持っているものが似ているのなら、俺にも手段が……』

一度目線をもとに戻し、敵の持っているものと一瞥した瓶を見比べた。まさしく瓶そのものは似ており、この街にあると言う事は同種の物である事と彼は確信した。

敵に何かを見つけた事を悟らせないようにしつつ、ストレンジャーは一度瓶を踏み越え、瓶を靴のつま先の前に来る位置で止まった。ストレンジャーが止まると、敵もその場で一度止まった。

「一つだけ、聞いてもいいか……」

「？ 何だ。」

敵の行動が止まった事を確認すると、ストレンジャーは軽く相手に問いかけた。

「お前の行動理由は、それ以外には今は何もないのか…… たとえ希望が薄くても、もっとマシな生き方が出来るだろ。」

一度だけだが話をしたためか、ストレンジャーは敵の中にまだ優しさがある事を思いそう問いかけた。先ほどのように小さな希望がいくつか見つかるこの街では、考え方さえ変えればいくらでも明るく生きる事が出来る。彼らを縛る制度さえなくしてしまえば、街は生まれ変われると彼は思っていたのだ。

「ねえよ。……むしろ、希望なんてねえのがこの街だ。 じゃなきゃ、誰も地下街に閉じこもって表に出ようとは思わねえよ。 日の光を浴びた所で、何も見つける事はできやしない。」

「……だが、暴力が何かを生むとは俺は思えない。」

「……！！ 言わせておけば……！ 素で力があるやつなんかは、俺達の苦勞がわかるわけねえんだよ！！！」

だが彼らにはそのような考えを持ち合わせている暇はない様子で、ストレンジャーの言った事に反応し再び瓶を振ろうとした。その瞬間を見て、ストレンジャーは右足を軽く動かし、瓶をつま先の上に乗せ手元に向けて蹴り上げた。軽く蹴り上げられた瓶は宙を舞い、ストレンジャーの視線の高さで上昇を止め下降しようとしていた。

「何ッ！ お前、何処で……！！」

「考え方さえ変えられれば生きられるが、今のお前はその考えを持ち合わせていない…… それなら……！」

彼の目の前に出てきた瓶に驚く敵を見ながら、ストレンジャーはそう言い瓶を手に取り栓を開けた。すると瓶の中から冷気が漏れ出し、ストレンジャーが瓶を振ると周囲に氷の塊が発生した。サイズが異なり大きいものもあれば小さいものもあるが、紛れもなく『氷結』された塊が生まれたのだ。

氷が出来上がると、そのまま振られた方向へと突撃しだし敵に向かって行った。

「くそっ！！」

急な攻撃手段に圧倒されつつも、敵は瓶を何度もその場で振り刃で氷を切り刻んだ。だが裂かれた氷は無くなることはなく、むしろ段数が増すばかりであり意味をなさない。ストレンジャーからの攻撃を無効化する事が出来ず、敵はそのまま飛んできた氷の餌食となった。

「ぐああっ！！」

普通の氷よりも冷たいのか、冷気と共に飛んできた氷は彼の身体にあると次々と氷漬けにして行った。個体でぶつただけでは痛みが伴うだけだが、この氷は特殊なのか命中する毎に体を侵食するように凍らせていったのだ。冷たさが体を襲い、敵はそのまま攻撃をガードする体制で手足の動きを封じられた。

「……」

そんな敵を見てか、ストレンジャーは瓶の栓を閉め敵の元へと歩き出した。もう相手に攻撃するすべはないと思い、追撃する気にはならないのだろう。ただ静かに歩み寄り、目を合わせた。

「ううっ……！ くそっ！ 何で……石を使っても、意味ねえんだ……！！」

「……」

「紛れもない力で、俺達をここから出してくれるはずだったのに……！ 何で！！」

手足が動けないのか、必死に動かそうとしながら敵は叫んだ。しかし氷漬けになった手足はもう動かず、溶けきるまでは体制を変えられないと思われた。彼の叫びを聞きながら、ストレンジャーはただ静かに見ていた。

そして、泣き叫ぶ彼にこう言った。

「楽観的な見方が、今のお前には足りないんだ…… 力だけじゃ、この世界では生きられ

ない…………」

「！！」

ストレンジャーが言った言葉を聞いて、敵の顔は豹変した。何か見失っていたものを見つけるかのように、言葉を聞いて絶句していた。

「…………」

スッ

その後ストレンジャーは敵の様子を見て、もう力はいらないと判断したのか。戦いに勝利した戦利品として、敵の使っていた瓶を回収しその場を去って行った。

夜明け後の街の散策を終え、戦いに勝利したストレンジャー 新たな敵が沸く前にと、その足で一度アルダートの居る仮住まいへと向かって行った。手には二つの瓶型の武器があり、落とさぬよう持ちながらビルへと入って行った。

『結局、朝飯じゃなくて別の物を見つけちゃったな……… ……まあ、邪魔にはならないだろう。』

しかし彼が外へ出て行った理由は、こういった武器を手に入れるのではなく食糧を手に入れるためだ。昨日と同じ輩を相手にしていたのにもかかわらず、今日は別の物を手に入れてしまった。ストレンジャーは軽く残念そうに思いながら、階段を上り目的のフロアへと入って行った。

「……あ、ストレンジャーさん！ 何処行ってたんですか？ 心配したんですよ……？」
部屋へと入ると同時に、彼の耳に軽快ながらも心配そうに話す青年の声が聞こえてきた。声の主はアルダートであり、すでに目を覚まし身支度を済ませた雰囲気を出しつつも、起きたと同時にストレンジャーの姿がなかったことに対して心配していた。

軽く涙目になっており、それだけ目覚めた後の一人だと言う感覚が苦手なのだろう。心なしか、声も震えていた。

「すまない、一人にさせて…… 食料を取りに行ったんだが………」

そんな彼を見て、ストレンジャーは軽く言葉をかけながらアルダートの頭を優しくなでた。声をかけずに出て行った事もだが、そんなに自分が居なかったことに対して心配していたのかと思うと、そうせずにはいられなかったのだろう。軽く詫びつつも、頭を撫でられ表情が明るくなったアルダートを見て、彼の表情も少し明るくなっていた。

「あ……そう……だったんですか？ 良かったあ……… てっきり、僕みたいなのがお隣に居たら邪魔だからって。 行っちゃったのかと思いました………」

「……ごめんな。」

「ううん、大丈夫です。」

訳を聞き納得した様子で、アルダートはそう言った。元々二人で寝ると言う事自体が久しぶりだったからか、寝る前に居た優しい人がいない事がとても寂しかったのだろう。詫びを聞き、もう大丈夫だと言いつつ彼は笑顔を見せていた。

その笑顔を見て、ストレンジャーも安心した様子で頭から手を離した。

「……あ、そうだ。 コレ、ストレンジャーさんのですよ？」

頭から手がなくなると、不意に思い出したかのようにアルダートはそう言い、持っていた上着を取り出した。それは彼が寝た後にストレンジャーがかけた上着であり、丁寧にたたまれ大事そうに持たれていた。どうやら起きた後にかけてもらった事を知り、とても大切に管理していたようだった。

その証拠に、先ほどからずっと肌身離さず持っていた。

「ああ…… ……寒く、なかったか。」

「はい、ありがとうございます。 おかげで、グッスリ寝ちゃいました。」

「……そうか。良かったな。」

上着をもらおうと、ストレンジャーは羽織りつつ彼に寒くなかったかと聞いた。すると笑顔でアルダートはそう言い、久しぶりに温かい布団と毛布で寝られたと嬉しそうに話していた。休息もろくに取れていなかったのか、その日の笑顔は彼をととても眩しく感じていた。

まるで水をろくに浴びていなかった植物が、水分を得たかのように。

そんな話をした後、二人は一度寝床として使用していた場所へと戻り、そしてもう一度出かけてくると言い、ストレンジャーは席を外した。

「……ただいま。」

しばらくしてストレンジャーが戻ると、今度は手に大量に持たれた食料があった。昨日とは比べ物にならないほど大量に持たれており、それでもさほど重さを感じていない様子で平然と彼は立っていた。

「お帰りなさい、ストレンジャーさん。……昨日もでしたけど、凄い量ですね。」

「……今回は、奴らからの詫びも入っているらしい。しばらくは、調達しなくて済みそうだな。」

「そうですねっ」

今度は寂しくなかった様子で、アルダートは彼の元へと移動しつつ持たれていた食料の量に驚いていた。先日と違い、今度はドリンクまでついており何処から拾ったのかビニールに入った代物もありと、当分食糧に困りそうにないほどの量が持たれていた。おまけにお菓子も入っており、これではいつどの時間に消費したらいいのかわからないほどだ。

一部の食料を代わりに持つと、二人はもう一度寝床として敷いたカーペットの上へと座った。

「うわぁ…… お菓子なんて、ご飯の次に久しぶりです。」

「……本当に、いつ食べたらいんだかな………こんなに。」

持っていた食料を一度並べると、アルダートはそれらを見つめながら無邪気にはしゃいでいた。ご飯もそうだが、お菓子を見ると言う事自体彼には久しぶりであり、それだけ何も食べていなかった時期が長かったのが読み取れた。

ストレンジャーも軽く驚いており、貰った時もそうだが軽く呆れていた。

そんな大量の食料を得たのは、彼がビルから出た、すぐさま敵と合流した時だった。

『また、来たのか………』

上着を新たに羽織り対峙するストレンジャーは、ポケットに閉まってあった瓶を軽く掴みながら敵に言った。すると、敵達は持っていた大量の食料をその場に置き、膝をついてその場に土下座した。

『………』

『すまない、俺達が間違っていた……！ 力があれば、なんでもできるって思っちゃったんだ。』

』

その体制のまま、三人のリーダーである男はそう言った。

『俺達の暮らしがどれだけ荒んでたかは分からないだろうけど、でも…… それでも！』

『お前の言ってたあの言葉で、何かが開けた気がするんだ。』

『言葉……？』

次々に部下達もそう言い、ストレンジャーが言った言葉が胸に響いたと言っていた。しかし彼にはなんの覚えもない様子で、不思議そうに彼らの発言を聞いていた。

『自覚は無し……か。 本当、お前は真の強者だよ…… 弱者に響く言葉を、無意識のうちに言っちゃまうんだからさ。』

『……』

『詫びってわけじゃねえけど、これは俺らが蓄えていた食料全部だ。 お前と、あの狐に託す。』

『何か開けた今なら、もうこんな生活を続けていなくても大丈夫な気がするんだ。 だから、もうコイツはいらねえ。 貰ってくれ。』

どうやら彼らなりに何かをしたいと思えるようになったらしく、蓄えていた分の食料はいらないと言いだした。それだけ【籠っている】という生活をしなくても良くなった様子で、再び立ち上がりながら三人は言った。

『こんなには……いない。 せめて、一袋くらい持って行け。 ……二人分にしては、余計だ。』

しかし三人で抱えていたに等しい量であり、それを一人で持っていくにはいささか往復しなければならないと彼は思った。その上冷蔵庫のように食料を保管できる場所もないため、腐らせるのが落ちだと思ったのだろう。

一部は貰うが、それ以上はいらないと言った。

『いや、全部だ。 食えなかったら、腐らせても良い。 お願いだ。』

『……』

『お前なら、変えられるって思ってるから。 俺らはするんだ。 ……いらねえなら、このまま置いといてもいい……頼む……』

『…… ……分かった。』

それでも彼らは考えを変えず、貰ってほしいと必死に頼み込んでいた。次第に彼等はお辞儀をしており、軽く涙が流れたのか顔から水滴が流れ、地面に落ちた。それを見たストレンジャーは、しばらく考えた後全て引き取ると言った。

その声を聞き、彼らの表情は一変した。

『……お前らの努力は、無駄にはしない…… ……道中、気を付けてな。』

『ああ…… ああ……！！』

そう言いつつ、ストレンジャーは一部の食料を拾った後彼らに笑顔を見せた。声と笑顔を見て、彼らも嬉しそうにそう言い再度頭を下げた後その場を走り去って行った。軽く後姿を見た後、ストレンジャーは冷静に持ち方を検討しつつ再びビルへと戻って行ったのだ。

「……ジャーさん。 ストレンジャーさんっ」

「……？」

軽く先ほどまであった事を思い出していると、彼の耳に自分を呼ぶ声が聞こえてきた。ふと我に返り声の主を見ると、アルダートは座ったままの体制で彼の事を見つめていた。

「どうしました？ 先ほどから、ずっと黙ってましたけど……」

心配そうに彼はストレンジャーを見ており、先ほどから何度も外へと出て疲れたのだろうかと心配していた。

「……いや、なんでもない。 ただ、アイツ等が無事に新しい道へと向かって行けたらうかって、思っただけだ。」

「アイツ等……？」

「……なんでもない。 さあ、食べよう。 腐らせるのも、もったいないからな。」

「あ、はいっ いただきまーすっ」

そんな彼に一言言いつつ、先ほどあった事を掻い摘んで彼に言った。しかし誰の事かが分からないアルダートの様で、軽く頭にハテナを浮かべてるかのようは表情をしていた。表情からしてわかっていないと思ったのか、ストレンジャーは話を切り上げそう言い食事をし出した。アルダートも話の流れでそうなり、自分の元に置かれていたおにぎりを手に取り、食べだしたのだった。

そして、遅めの朝食を終えたのだった。

「……あ、そうだ。」

食事を終え、しばらくした頃。ストレンジャーは不意に思い出したかのようにそう言い、上着にしまっておいた先ほどの瓶容器を一つ取り出した。

それは彼らが持っていた装飾が施されている瓶であり、軽くデザインが工夫されている代物だった。もう一つの液体が青い方は未だにポケットに入っており、それも続けて取り出した。

「さっきの連中が持っていたんだが…… これは、何かわかるか？」

「？ それって、もしかして…… 【流星石（りゅうせいせき）】 ですか？」

「リュウセイセキ？」

出された瓶を見つつ問いかけると、アルダートは何か思い当たる節がある様子でそう言った。そしてその瓶の事を『流星石』と言い、この地方では名の知れた物体であることが分かった。

「この街特融の素材なんですけどね。 それぞれの瓶に、力が宿ってるんです。」

アルダートは軽くそう説明しながら、着ていた上着のポケットに手を入れ、別のデザインの流星石を取り出した。それはストレンジャーの持っていた瓶とはまた違い、今度は瓶ではなく栓にデザインが施された流星石だった。

栓は十字架に近い形をしており、瓶の中身自体は透明の液体だった。

「僕も別のを持ってるんですけど。 これは個々で使えるものもあれば、使えない物もあるみたいなんです。 栓を引くと、効果が出るんですけど……」

彼はそう言いつつ、持っていた流星石の栓を引き抜いた。

キュボンッ

「……！」

すると、栓に続いて中身の液体が連なって出てきた。そのまま液体が触れていた栓を先端に液体が固まりだし、一本の剣となってその場に構成された。先ほどまでの無形の代物ではなく、こちらは固有の代物のようだった。

すでに剣は固くなっており、軽くアルダートが振っても液体は飛び散らなかった。

「凄い…… これが、アイツらの言っていた力か……」

「この街には、外からの物資以前に何も手に入らないんです。 ですが、いつしかこの瓶が街の至る所で見つかるようになって、僕も手に入れられるようになったんです。 使い道は、無いんですけど……」

「そうなのか……」

軽く出来上がった剣を見ていると、アルダートはそう言いつつ再び瓶の中に剣をしまった。瓶の口に剣先が触れると液体になりだし、そのまま最初のような香水に近い形になり剣は徐々に元の姿に戻って行った。

「剣そのものって事で、僕はこの流星石は『ソード』って呼んでます。」

「なるほどな…… ……それじゃあ、これらにも呼び方があるってわけか……」

一通りの説明を受けると、ストレンジャーはそう言いつつ出してあった二つの瓶を彼に見せた。差し出された瓶を受け取り、アルダートはしみじみ外見や中身を見てこういった。

「この、青いのが『グライア』で。 もう一つは、きっと『レーム』ですね。」

「レーム？」

「【刃（やいば）】です。 振ると、カマイタチに近いビームを出して攻撃するんです。 グライアは【氷】です。」

「レームに、グライアか……」

新たな知識がいろいろと入って行く中、アルダートの言った言葉を聞きなおしながら彼は瓶を見た。簡単に見ただけで力の推測がつく様子で、彼は興味津々に見ていた。

パッと見で分かる事もそうだが、興味がなければすぐに答えが導き出せるとは思えない。ましてや戦いを苦手とする、彼なら。 なおの事だ。

「あ、そうでした。 流星石って、混ぜる事も出来るんですけど……… 知ってますか？」

「え……… 混ぜられるのか？」

話を聞き彼の説明を聞いていたストレンジャーは、不意に問いかけられそう聞き返した。するとアルダートは頷き、さらに持っていた様子で別の瓶を3つ取り出した。どれも持っている瓶とは別の物であり、デザインが微妙に違っていた。

「はい。 色つきの奴みたいに、出来ないのもあるんですけど……… 大抵は、混ぜて使用回数を増やしたりパワーアップさせる事が出来るんです。」

「使用回数……」

「液体なので、中身がなくなったら使えなくなっちゃうんです。 さっきの【ソード】みたいに、固定の物でしたら関係は無いんですけどね。」

軽く実験に近い雰囲気が出つつも、ストレンジャーはその成り行きを座ったまま見ていた。アルダートはそう言うと、一通り持っていた武器を見比べ。 先ほどの【ソード】の流星石と、別の流星石を取り出した。そして両方の瓶を先ほどとは違いゆっくり引き抜き、中身を丁寧に移し替えて行った。彼のそんな行動を、ただ不思議そうにストレンジャーは見る事しか出来なかった。

容器を移し替えると、瓶の栓を閉めアルダートは数回中身をシェイクした。すると、

ポワッ……！

「！！」

瓶から光が漏れ出し、強い光で包み込んだかと思うと。 光は急に収まってしまった。何が起こったのかわからずストレンジャーは瓶を見直すと、そこには栓のデザインは十字架で何もなかった瓶から、瓶自体に装飾が施されていたのだ。海藻が絡まるかのように数本の金属が瓶に絡まっており、美しくも新しい流星石が完成していた。

注ぎ中身が空になってしまった瓶は、光と共に消えてしまった様子で手元から消失していた。

「成功すると、さっきみたいな光が生まれて別の瓶が出来るんです。空になった方は、そのままにしておくで消えちゃうんですけどね。」

「……凄いな。初めてやったにしては、手つきが慣れてるな……」

「元々手先が器用な方なので。で、出来たのがこれです。」

一通りの説明をすると、アルダートはストレンジャーに褒められ照れつつも出来上がった流星石を彼に手渡した。渡された瓶を一通り見た後、ストレンジャーは栓を引き抜いた。

シャキンッ！

するとそこには、先ほどとは違いしっかりとした剣刃を持った剣が出来上がっていた。どうやら剣に何かを加えられた様子で、切れ味が上がっているかのように見えた。

「多分、さっきのは【収束（コンデス）】ですね。攻撃を一点に収束させる力が備わって、威力が大幅に上がってるんだと思います。」

「コンデスに、ソード……… 呼び方も、変わるのか。」

「大体の呼び方はそれぞれですけど。単純に【一点集中（コンデスソード）】って呼びましょうか。」

「……… それにしても、凄いな……」

一通りの出来事を目の当たりにした後、ストレンジャーは再び剣へと視線を移し眺めていた。剣からは小さな黄色い粒子が所々から出ており、普通に振っただけでも普通に切れてしまいそうなほどの代物に見えた。

使い道はさておき、誰が使っても触れただけで切ってしまうような代物だった。

「………」

「せっかくですから、ストレンジャーさんも作ってみませんか？」

「え？」

美しくもあり素晴らしい剣を見ていると、不意にアルダートはそう言った。元々こういった事をするにも一人だったからか、なんとなく一緒に共有したいのだろう。心なしか彼の尻尾が上下に揺れており、ちょっと楽しそうな雰囲気を出していた。

「僕のでよければ、残ってるのを使ってもらっていいので。ぜひ、やってみてください。」

「しかし……悪いだろ。いくら拾ったのだと言っても、一応お前のだからな………」

「いいえ、気にしないで下さい。それに、ストレンジャーさんにはたくさんお世話になってますから。そのお礼って感じで、見てもらっていいので。」

「礼……… か。」

そんな彼に言われたものの、ストレンジャーとしては他人の物には変わりないため持っている2

つ以外を使う気にはならない様だった。たとえ相手が一緒にやってほしいと思っても、だからと言ってアルダートの持っている瓶を使うわけにはいかない。彼なりの配慮であり、そう言ったところを気にしていた。

しかし彼からしたら、街で助けてもらった事や寝泊りや食事の面でサポートしてもらった恩がある。一緒に体験したりして楽しみたい事もあってか、純粋な気持ちでお願いしていた。アルダートにそう言われ、半ば頼まれる感じで彼は呟きつつ頷いた。

「……………」

その後手を止めていた食事を再開したのち、ストレンジャーはその場にあった瓶を手に取り他の瓶と見比べていた。先ほど軽く説明してもらった事も踏まえ、自分なりにどれがどういう力を持っているかを把握したかったのだろう。アルダートが見守る中、いろいろ検討しながら分析していた。

『……ストレンジャーさんって、真面目なんだ…………… 僕のために、ちょっとだけ嬉しいや。』そんな彼を軽く見つつ、アルダートは笑顔でその光景を見ていた。自分が頼んだ事もあるが、彼自らが乗り出してやると言うのは少し意外だったのだろう。

元々一人でなんでもやっしまいそうな雰囲気があったためか、軽く問いかけられながらもその様子を見ていた。そして、自分のために一回だけでもやってくれるその優しさが、何よりも嬉しいと思っていた。

「よし。 じゃあ……これを貰うぜ。」

そんな事を思っていると、不意にストレンジャーはそう言いアルダートの私物である一つの流星石を見せつつ言った。軽くその事に同意するように頷くと、彼は軽く笑顔になった後瓶の栓をゆっくり抜きつつ液体を移し替える作業に入った。

しかし手先に関わる作業をしたことが無いのか、軽く苦戦しているのか表情が渋かった。とりあえず液体をこぼさないようにしようとしている様子で、瓶同士を近づけつつ頑張っていた。そう言った表情を見て、クールな彼の裏を見たかのようにアルダートは軽く苦笑していた。

そんな軽い苦笑に気付く間もなく、ストレンジャーはようやく瓶の液体を移し替えた。その後栓をした後、先ほどのアルダート同様に軽く中身を混ぜるように上下に振った。

すると、

ポワッ……！

「あ……………」

中身同士が調和した事を知らせる光が飛び交い、彼の手には別のデザインの流星石が握られていた。

「成功ですね、ストレンジャーさんっ」

「あ、ああ…… ……どんな力が、あるんだろうな…‥」

その光景を目の当たりにした後、アルダートは声をかけ成功した事を喜んでいた。彼にそう言

われ、ストレンジャーはようやく緊張感が解けた様子で表情を戻し瓶を見つめていた。

出来上がった流星石は、液体が青色であり栓のデザインが変化した代物だった。アルダート曰く使用回数がある物だと言う事のため、ストレンジャーは中身の効果が気になりつつも一時自分の身に付けていたジャケットの中へと入れた。

使う機会がない事を、祈りつつ。

「……それにしても、何のためにこの石が……」

カラァーン カラァーン……

「？」

「鐘の音……？」

調合を終えたのも束の間。彼等の耳に、乾いた音であり何かを知らせるかのような鐘の音が周囲に響き渡った。その音を耳にし、二人はその場に立ち上がり音のする窓辺へと移動した。

「……えっ！」

そして、その場に広がっていた光景を目にし、ストレンジャーは驚いた様子で表情を変えた。

彼らの目の前に広がっていた光景。それは、

キラキラキラ……

カーンツ カーンツ……

「空が…… 光ってる……」

周囲の太陽の光さえも吸収したかのように、小さな粒子が街に浮いている雲間から次々と振ってくる光景だった。光に反射して振ってくる物体はとても小さく、まるで指輪にはまっているくらいの宝石が雨のように降り注いでおり紙吹雪よりも美しい光景だった。よくよく見てみると、それは一つ一つが別々の流星石である事が分かり、屋根やビルに当たり時々金属音が周囲に響いていた。

外に見とれていると、彼らの居る場所にも三つほど別の流星石が転がり込み、軽く地面にぶつかりつつも部屋の中へと侵入してきた。全て別々のデザインの物であり、ストレンジャーが先ほどまで持っていた青い流星石も一つ落ちていた。

「こんなに、大量の流星石が……」

「鐘の音が聞こえると、まるで雨のように天から降ってくるんです。 瓶自体は固形物質なので、ちょっと霰よりも当たると痛いんですけどね。」

軽く壁際へと移動しつつ感想を言ったストレンジャーに対し、それを解説するかのようアルダートは言った。先ほどまで持っていた瓶が大量に振ってくると考えると、確かに氷の塊である『霰あられ』よりも痛いだろう。下手したら怪我をしかねないほどの、物体である。

『アイツらは、この時に………　……そう考えると、鐘は不定期に鳴るのか………』

そんな幻想的な光景を楽しんでいたストレンジャーは、先ほど別れた連中がどうやって瓶を手に入れたのかを考えた。自分がまだ一度しかこの光景を目にしていはいえ、彼らの言動からも軽く推測する事は出来た。頻繁に起こるのではなく、稀にこうやって振ってくるのだと。

「でも……」

「？」

そんなことを考えていると、不意にアルダートは何かを呟いた。急だったためストレンジャーは聞き取れず、再度聞くように彼の顔を見た。すると、先ほどまでとは違いとても暗そうな表情をしていた。

まるで最初に出会ったときのように、おびえるように。

「流星石が降ってくるのが止むと……　いつも街は賑やかに……なるんです。」

「賑やかに……」

「でも、平和の賑やかさじゃないんです。」

「え……？」

軽く彼の言った事を聞き喜べそうな環境になると、ストレンジャーは軽く考えた。しかし彼の考えている雰囲気『賑やかさ』ではない事を知らせるように、アルダートは再度その言葉に言葉をつけたした。

どうやら、別の理由が含まれているようだ。

「この街での力は、流星石……　そして、その力が無防備にも空から降ってくるとなると………」

「……」

アルダートはそう言いつつ、空が止んだと同時に静かに外の様子をうかがった。その様子を見て、ストレンジャーも同様に横へと移動し外を見た。すると、

「おらあああ！　よこせえ！！」

「誰がてめえなんかに、力を渡すか！！」

「来ないで！！　これはアタシの力なんだから！！」

外は別の活気に満ち溢れており、先ほどまで静かだった街は別の雰囲気に包まれつつあった。何処からともなく殴りあう音が聞こえ、殴られた拍子に何かが倒れる音も聞こえてきた。金属音や肉体同士がぶつかりあう音も聞こえた後、何かが切り裂かれたかのような音も聞こえてきた。それこそが、アルダートの言っていた心配事の様だった。

「力である流星石を……皆は奪い合うんです……　皆、この街から早く出たいから……」

「戦争……か……」

関わりたくないのか、アルダートは寂しそうにそう呟きつつ先ほどまで居たカーペットの元へと向かって行った。少し肩が震えており、この後何かが起こる事に予想が立っている様子だった。そんな彼を見たストレンジャーは、アルダートの隣に座り優しく肩に手を回し、優しくなでた。「鐘の音が聞こえると、こうやって定期的に流星石が降ってくる……それが、そもそもの始まりでした。」

「……」

そして、何故こうなったかを。アルダートは悲しそうに、話すのだった。

そんな、寂しい話をストレンジャーとアルダートが交わしていた頃.....

彼らの居る街の中心、高くそびえ立ち雲の上にまで伸びている塔に近いお城。浅い空域にある雲の上、そのまた上に。数人の人影があった.....

「.....フフフッ また、あの連中が力を求めて動き出したのね。」

「まったくもって、こりねえ奴らだよなあー どんなに力を求めようとも、上から支給されているに等しい力じゃ敵いっこねえのにさ。」

大きな窓があり、広間に等しいホールで会話をしている二人の人影。一人は小さな羽を動かし飛んでいる妖精であり、一人は大きなブラシに近い棒状のスティックを持っているジャッカルだった。彼等は先ほど起こった流星石の事について、話している様だった。

「大分、散布が終了したみたいだ。時期にまた、愚かな連中が動き出すだろうな。」

そんな話をしていると、彼らの居るホールに別の人影がやってきた。軽く整えられた髪と尾を揺らしつつ、軽い足取りでやってくる獣人だった。さきほどまで話していた二人違い、こちらは背が高く凛々しい顔立ちをしていた。

「ニヤッニヤッニヤッ。意味も無いのに、構わずかかってくるのが面白いのニャ。」

さらにそんな彼の後に続いてやってきたのは、これまた背丈が小さい猫のような存在。しかし二足歩行で歩いており、なぜか耳が六つもある。一つはウサギのつけ耳であり、残りは普通の耳と猫耳だった。

「無駄に悪趣味ね、相変わらず。」

「なんとでも言えば良いニャ。なんと言っても、ニャー達はそんな奴等を管理するのがお仕事ニャ。楽しめれば、それでいいとは思わんかニャ？」

「ま、それに対しては同意するけどなあー やり口は同意しねえけど。」

「ニヤニヤッ」

どうやら四人はその場の管理を任された存在の様で、この後起こる事に対して行動する事が仕事のような。見た目も性格もバラバラの四人が何故仲が良いのかは、とりあえずおいておこう。

カツンッ..... カツンッ.....

「？」

そんな事を話していると、彼らの居るホールにヒールが床に着く音が響き渡った。どうやらもう一人居るようで、四人はその存在の影を見つけるとその場から移動し定位置へと移動していた。横に一直線で並び、間に立っている獣人と妖精の間をその存在は歩いて行った。見た目は妖精とジャッカルに似ているが、雰囲気は何処を比べても何か格が違うようだ。ドレスに近いが鎧にも近いその服装を揺らしながら、その存在は窓辺へと向かって行った。

「……愚かね。本当に……」

そして、適当な位置で止まり一言呟いた。そんな容姿が美しいが雰囲気の違いを見かね、四人は揃って呟いた。

「この街を管理し、全ての存在がニャー達の物。」

「たとえどんな反感が来ようとも、圧倒的な力でひれ伏せさせる。」

「悲しい出来事は、私達と貴方にとっての害ならば。」

「全力で阻止し、貴方様の心が晴れるよう誓います。」

「我等、プリンセスに仕える存在は。今日もその事を誓います。」

「……」

四人は口々にそう言い、敬意を示すようにその場で華麗にポーズを取りつつ膝をついた。その行動を前に居た存在は一瞥すると、再び前を向きなおった。すると、窓辺の前に漂っていた雲が徐々に晴れだし太陽が少しずつ顔を出した。それと同時に明るい陽ざしが彼等の元へと差し込み、影に近かった色合いが徐々に色を付けだした。

その場にいた存在は、『茶色の猫』、『青髪の獣人』、『真紅の妖精』、『橙色のジャッカル』そして、『灰色の狼』だった……

一方、その頃……

「……数年前、この街に居た英雄達が次々と姿を消した事が、事の始まりです。」

「……」

灰ビルで流星石が降り止んだと同時に、アルダートはストレンジャーに事の始まりを話していた。自分が経験し、異常現象が起こり、何故こうなってしまったのか。その事を、何も知らずにやってきた彼にだけはと。

アルダートは話していた。

「何かを察したのか、または何かの警告を受けたのかは分かりません。ですが、僕達の知る英雄達はこの街から次々と外の世界へと出て行ってしまったんです。」

「……何故、分からないのに確信を持っているかのように言えるんだ？」

「一応僕も、その英雄達とは顔馴染みなんです。ですから、大体の考え方や行い。何故そうしたかは、予想できます。……でも、あくまで予想です。」

「話を聞いたわけじゃないから、全てを理解している訳ではない……」

「その通りです。」

カーペットの上で寂しそうに話すアルダートを、優しく腕で引き寄せ寂しさを紛らわせようとす

るストレンジャー

何かの縁で出会ったとはいえ、目の前で寂しそうな表情をする彼を見捨てる気にはならなかったのだろう。同じ接し方は出来ないとは言っていたが、彼なりに何かしようとしていた。あくまで仮説による話ではあったが、街の英雄と呼ばれていた存在達はこの街にはいない。だからこそ暗く、この騒動の元凶となった存在達が現れようとも対抗策が無い。

全て頼りっきりだったゆえに、彼らには力がない。そんな時にやってきたのが、この街特融の物体である『流星石』だったのだ。

「でも、力が無い僕達の所にやってきたとは言っても。この街を管理する存在の前では、無力でしかありません……」

「管理する、存在が居るのか……」

「どちらかと言うと『支配』と言う言葉に近いです。仲違いをしようとはせず、自分達を好き勝手にコントロールしようとする。だから、存在を捕まえては地下に閉じ込めるんです。自制と言う感情に閉じ込めて、思いのままにしよう。」

「……そうだったのか。」

流星石はあくまで小さな力であり、その力をどれだけ確保するか。それが、その街に居た存在達がまずする事だと彼は言った。

力がないのなら鍛えれば良いと思うものも居れば、逆にその力事態を奪ってしまえばいい。そう言った力の証明の仕方が個々で別れると同時に、弱肉強食に近い考え方も生まれてしまった。平穏を皆望んでいるのにもかかわらず、どこかで考えがずれてしまい皆が飢えてしまった。だからこそ『友達』と言う言葉はここにはなく。意見の会う『仲間』しかその場には存在しなかった。

共存するのなら、利用するまで。そう考えるものも、少なくはないそうだ。

「……ストレンジャーさん。」

「何だ……？」

話を一通り聞き終わると、アルダートは不意にストレンジャーに声をかけた。先ほどからずっと寂しそうな顔をしているが、今はちょっと違う雰囲気が出ていた。

「貴方は…… 僕を、捨てたり……しませんよね。」

「……」

そんな彼から発せられた言葉は、それだった。どうやら話をすると同時に寂しさが込み上げてしまったようで、もう一度その事を聞きたくなったようだ。問いかけた理由を考えつつ、ストレンジャーは静かにその後の言葉に耳を傾けた。

「弱肉強食の世界だと言うのなら、確実に僕は弱者です…… でも、それでも……！僕は貴方のそばに居たい、もう独りは嫌なんです！！」

「……」

「お願いですっ！ だから……だからぁ……！！仲間ではなく、友達として僕を……僕自身を見ていて下さい！！！」

ガバッ！

「……………」

その後アルダートは心に閉じ込めていた事を全て吐き出し、そのままストレンジャーに涙目で抱きついた。友人なんてならないだろうと思っは居ても、それでも利用しあうような関係にだけは絶対になりたくない。彼はその事をもう一度決心したくて、そう言いたかったのかもしれない。

抱きついたまま、彼の懐で涙を流していた。

「…………… ……アルダート。」

そんな彼を見て、ストレンジャーは頭に手を乗せつつ優しく撫でた。その間も、アルダートは泣いている様で体を震わせていた。

「俺は、誰かを利用したりだなんて思ったりはしていない…………… アイツ等も食料のために利用したり、お前を単に利用出来るだろうという考えで、連れてきたわけでもない……………」

「え……？」

「お前等が寂しそうな表情をするのが、嫌なんだ…… 元々そう言った相手の涙が嫌いだからか、そうしたくなるのかもしれない……」

ストレンジャーの言った言葉を聞いて、アルダートは目に涙を浮かべたまま彼の顔を見た。相変わらず無表情に近い顔ではあったが、それでも彼なりに言いたい事を言っている様でいつもより親身な目をしていた。

目つきは優しく、相手を思っているかのような目をしていた。

「利用したり、何かを好きにするのは……好きじゃない。お前が俺のために何かをしてくれるなら、俺はそれを受け止めてお前に何かを返そうと思ってる。」

「……でも、僕は……………」

「お前は弱者じゃない。現に、俺の知らない事をたくさん教えてくれただろ…… 違うか……？」

「……………」

彼自身が利用するという言葉自体が好きではないと同時に、恩を受けたのならそれ相応もしくはそれ以上を返す。そんな考え方を持っている事を伝え、アルダートを弱者ではない。利用する相手としても見ていないと言った。

彼の知らない事をアルダートは知っており、アルダートが出来ない事を彼が代わりに行っている。寂しいと言うのなら、自分にできる方法で彼を温める。そうやって、先ほどまで過ごしてきた事を悟らせていた。

「……もう、泣くな。無暗に泣いていても、何も始まらない……………」

「……………はい。ゴメンなさい……………」

そして軽く肩に手を乗せ目を見つめあうと、ストレンジャーはそう言いつつ自らの手で軽くアルダートの目に浮かんでいた涙をふき取った。それを見て、アルダートも彼が嫌う涙を早く止めようと、両手を使い頑張って拭っていた。ずっと就いて来ても良いと思えるように、彼の嫌いな

ところを見せないように。

アルダートは一生懸命に意識し、表情を元に戻していた。

「お前が俺のために何かをしてくれるなら、ずっとしてくれればいい。……俺も、何かをしたくてこの街に来たんだ…… 出会いは、無駄ではないと思ってるぜ。」

「……！」

「さ、行こう…… 街が奮起しているなら、早く元を沈めた方がいい。奪うのではなく、共存したいとお前が望むなら…… 俺はその手伝いをするだけだ。」

そんな彼の行いを見て、ストレンジャーは軽く嬉しそうな表情を見せながらその場に立ち上がった。そして、この街を元に戻したいと願う彼のために、何かをしようと決意した様だった。もちろんアルダートも一緒に連れて行くと言いつつ、彼は右手を差し出しアルダートの同意を求めている。

「は、はいっ！」

ストレンジャーの言葉を聞き、アルダートも同意し着いて行くと言う意気込みを言いつつ、彼の手を握った。そしてもう一度、彼のためにと満面の笑みを見せた。

その後彼らは流星石を手にし、食料をその場に外へと駆け出して行ったのだった。街を元に戻し、アルダートの望む『友人』を多くするために……

住処にしていた灰ビルの階段をアルダート達が駆け降りると、外は先ほどとは違い賑わいを見せていた。しかしそれは平和な賑わいには程遠い光景であり、皆が皆『流星石』を片手に対峙しており、相手の力となる流星石を奪い合っていた。

戦い、勝ち残り、負けたものの力を奪う。それが、この街でのルールとなっていた。

「……ううっ」

ビルから外へと出たものの、その光景を目にしたアルダートは軽く足がすくんでしまった様子でビルの壁に隠れてしまった。元々こういった争いごとを好まない性格のためか、自らが改革する以前に行動する事も苦手のようだ。

いくら自分にも戦う手段があるとはいえ、なかなか行動を移すことが難しいようだった。

「怖いか、アルダート……」

そんな彼を見ていたストレンジャーは、軽くアルダートの元へと近寄り言葉をかけた。アルダートが今の外を好まない事を知っているため、外へ出たくても出られない。その手助けをしようとしている様子が見えた。

「……ゴ、ゴメンなさい。やっぱり、今の外が怖くて……」

「無理もない。さっきと違って、今は皆の様子がおかしいからな……」

「……」

再びストレンジャーにフォローされ、アルダートは申し訳なさそうに隠れたまま詫びた。力になってくれると言ってくれた相手に対し、やはり今の自分は頼りがいが無いと感じていたのだろう。どうしても、動きたくても動けない様だった。そんな彼に一言言いつつ、二人は再び外を見た。

街中の至る所に流星石と思われる瓶が点々と転がっており、街のビル周辺には負けて気絶してしまっている存在の姿が見えた。勝ち残っている存在も手足に怪我を負っており、戦いを続けて力を手に入れる前に、体力が持たない様にも見えた。もちろんどこかで無双をしている存在が居ても、おかしくない様にも見えた。

「……僕……」

「一人でやろうと、無理はしなくていい…… ……俺のそばにいて、援護をしてくれ。大体の敵は、俺が片づけよう。」

そんな怪我をした存在も見かね、アルダートは再びその場で俯いた。彼の様子を見たストレンジャーは、何も自分一人で全部を背負わなくても良いと言った。

今は彼一人ではなく、自分も居る事を伝え協力する事を改めて言った。それだけ、彼の考えに同意できる点があり力になりたいのだろう。

「ストレンジャーさん……」

「……さ、行くぞ。ここに居ても、何も変わらないからな。」

「は、はいっ」

再び外へ出ようと話をもちかけ、ストレンジャーは軽く彼の手を取った。そして、それに引かれるようにアルダートも足を動かし街中へと出て行ったのだった。

タッタッタッ……

「……やっぱり、たくさんの人が怪我を……」

「争いが必然的に起きるなら、居てもおかしくは無いと思ったが…… ……酷いな。」

「……」

しばらく街中を走りながら様子をうかがい、アルダートは周囲に倒れている人々を見て呟いた。怪我をしてまでどうしてやるのかが分からないこの戦いに、やはり違和感を感じているのだろう。彼の呟きを聞きストレンジャーは言う、アルダートは再び黙りつつも彼の後ろ姿を見つつ走っていた。

そして、

キキキッ……！

「……っと。……」

「あっ……」

不意に前方を走っていたストレンジャーが急ブレーキをかけ、走るのを止めその場に立ち止まった。彼の行動を見てアルダートも走るのを止め前を見ると、そこには一人の人影が見えた。手には瓶が持たれており、どうやら敵対する存在のように見えた。

「おっと、随分と小柄な奴がまだ残ってたか。こりゃあラッキーだな。」

「……」

「さてと。雑魚が最後まで残るのは厳しいし、俺に力をよこせや。そうしたら、怪我せずにリタイア出来るんだぜ？」

敵意を見せつける相手を見て、ストレンジャーは軽く右手を上着ポケットに入れ流星石を握った。いつ相手が襲ってきても良いように、今の時点で体制を取っているのだろう。背後に居るアルダートは怖がっており、ストレンジャーの後ろに隠れその様子を見守っていた。

どうやら相手は体系が小さい存在ほど『雑魚』と認識している様子で、余裕の表情を見せつつ軽く瓶をお手玉のようにして遊んでいた。

「……あまりこの街のルールを知らないが、勝者はどうしたら良いんだ。」

「ってことは、初参加って奴か？ ハッハッハッ！ こりゃあボーナスチャンスってやつだなああ！ おい！！」

軽くストレンジャーが相手に問いかけると、問いかけに対し相手は爆笑しながら勝利を確信していた。しかし相手の態度は別に気にしない様子で、ストレンジャーは問いかけに対する答えを気

にしていた。

「勝った人は、負けた相手から流星石を奪う。個数はともかく、相手の戦意を喪失させたら勝ちです。」

「なるほどな……… なら、怪我はやり方次第ではゼロでも可能か。」

そんな相手の様子を見て、背後に居たアルダートは軽く彼の近くで呟き簡単な仕組みを説明した。審判者は居ないものの、相手が負けを認めた時が勝利の時と認識し、ストレンジャーは相手の怪我はやり方次第でいくらでも軽減できることを知った。そして、相手を殺して終わりにしても良いと言う事も同時に知った。

「……さああ、雑魚は一掃してやらああ！！」

高笑いしていた敵はそう言い、瓶の栓を抜きストレンジャー達の居る場所へと駆け出し襲いかかってきた。その様子を見たストレンジャーはアルダートに下がるよう言い、右手に掴んでいた流星石を取り出し栓を抜いた。

取り出した瓶は『刃（レーム）』であり、手始めにそちらの使い方を知る様子だった。

『怪我をさせずに相手をやる事は難しいが、まずは相手を倒す事が優先…… なら、まずは出来る限りの情報収集をしないと……！』

「破ッ！」

パシュッ！

いろいろ考えている様子で、ストレンジャーは戦いを意識しつつもアルダートから離れ無いようにしつつ相手を攻撃した。争いが起こる前に得た流星石の他の特徴を知ろうとしつつ、敵に向かって攻撃した。

「クッ！！」

無数の見えない刃が飛んでいくと、目視出来ない敵は特攻を仕掛けていた事もあり全身に軽い傷を負っていた。相手の瓶の栓は抜かれているものの、それでも攻撃を仕掛ける前だったためか何もできずやられていた。

「……！」

バツ！

相手が攻撃で軽くひるんでいるのを見て、ストレンジャーはその場から駆け出し一気に敵との間合いを詰めた。そして、瓶を持っていない左手でお得意の手刀を相手の首元にお見舞いした。

「ウグッ……！」

「悪いが、俺は負けるわけにはいかない……！」

パシンッ！

「！！」

急な行動からの攻撃に受け身も取れず、相手はそのまま攻撃を受けてしまった。そんな彼に耳元で軽くつぶやくと、ストレンジャーは相手が瓶を握っている右手の手首にも同様に手刀を当て同時に瓶を叩き落とした。

軽く手が麻痺した事もあり、流星石は簡単に彼の手元から離れ地面へと落下した。

「な、何っ……！ 俺が……！！」

「……他のルールを知らないが、俺はお前等を傷つけるつもりはない…… その栓を置いて、俺等から離れてくれないか。」

「ヒ、ヒィーッ！！！」

勝利を確信していたのにも関わらず手元から力が消えてしまい、敵はストレンジャーからの言葉と軽く無表情に近いその顔を見て、叫びながら栓を捨て何処かへ逃げてしまった。これ以上戦わなくて済む事を確認すると、ストレンジャーは栓を拾い落した瓶も同様に回収し、栓をした。中身は赤い流星石であり、どうやら属性付きの物のようだった。

「ストレンジャーさんっ 大丈夫でしたか……？」

戦いの一部始終を見ていたアルダートは、敵が逃げた事を確認しストレンジャーの元へと駆け寄った。攻撃は受けていなかったと思いつつも、身体に怪我がないかどうかを確認していた。

「ああ…… ……一つだけ、回収した。手荷物が、徐々に増えそうな戦いだな……」

「でも、凄いですねっ 街で怪我をして倒れてる人ばかりなのに、あんなに無傷に近い状態で勝てるなんて。」

拾った流星石を軽く見つつ、ストレンジャーは軽く呟いた。戦いに勝利すると、使用制限はあるものの相手から別の流星石を手に入れられる。と、言う事は。必然的に手荷物が増えていく計算になる。軽くその事を改めて思い、後の事を気にしている様子だった。余計な力の荷物は、移動の邪魔なのだろう。

そんなストレンジャーの心配をよそに、アルダートは彼の戦い方に尊敬の眼差しを送っていた。街中では重症に近い怪我を負った人達が多いのにも関わらず、早々に相手の戦意を喪失させただけでなくほぼ無傷に等しい状態で勝利を収めた。その事がとても嬉しいのか、穏便に近い状態で済んだ事を喜んでいた。

「君が望まない戦いを、するつもりはないからな…… ……不慣れではあるが、アイツ等から託された事もある。俺は、叶えるために行くつもりだ。」

「分かりました。……僕も、お荷物にならないようにしますねっ ……あ、そうだ。瓶は僕が一部を持ってましようか？ 結構ポケットに入るのよ。」

「ああ、済まないな……」

「いいえ、気にしないでくださいっ」

アルダートの考え方を順守し、行動する事をストレンジャーは改めて伝えた。やりかた以前に戦い方が上手な事もあり、素手でも勝ち目がある彼ならではの一言である。そんな彼の言葉を聞き

、アルダートも負けないように手伝う事を伝えた。

そして、先ほどから彼が時折見ている流星石の事を気にし自分が管理すると言った。ダッフルジャケットに近い衣服を着ているためか、思った以上に瓶をしまう場所があるようだ。外側のポケットに加えて、内ポケットも何個かありどちらかと言うとサポートの彼のため重荷とは思わない様子だった。

アルダートの提案を聞き、ストレンジャーは今は使わないであろう『炎（フラーラ）』の流星石を彼に託し、次の相手を警戒しつつ歩を進めるのであった。

初回の戦いを終えた後も、ストレンジャー達に戦いを要求する者達は後を絶たなかった。

「力……！ よこせえやあ！！」

皆が皆外へ出る事を望んでおり、そのための力を蓄えたい。ゆえに、他者が持つであろう強力な『流星石』を皆は探していた。強者と戦い、強いと思われる力を手に入れるために。

バツ！！

「！！」

そんな相手と対峙しても、ストレンジャーは決して相手に背を向ける事は無かった。今の彼を信頼する者が居る事もあるが、彼の望む願いを叶えたい。ただそれだけで、今の自分が出来る事を行い敵を倒し続けていた。

「……お前の負けだ。」

バシッ！

「グァアッ！！」

無論、倒すと同時にもう一つの願いである『他者への怪我』を最小限に抑えた戦い方をしていた。大体の戦い方は流星石で牽制し、その間に接近し相手を素手で威圧し力を使えなくする。それと同時に、初めて戦った相手が言っていた『言葉』の力も使おうとしており、一言言いつつ相手を倒すことが多くなった。

これ以上戦う必要がない事を伝えるのと同時に、軽い怪我をさせてしまう事へ対する詫びの言葉。一つ一つを確実に言い、彼は敵対する存在達を一人一人相手し、その場から早々に退散させるのであった。

「えっと…… コレは杖（ロッド）で、こっちは……」

そんな中、彼の戦いの最中邪魔にならない所で彼の様子を見つつ行動するアルダート。彼はストレンジャーが相手をし、負けを認めた存在達が置いて行った『流星石』を保持し管理していた。元々石自体には興味がある様子で、一つ一つを見比べどんな効力があるのかを調べていた。大体が原石の外見で分かるが、戦いの際に見せた攻撃の仕方等で把握をするのが一般的のようだった。少しずつ彼の身に着けているジャケットのボリュームが増すものの、左程重さを感じていない様子で彼も行動をしていた。

そんな二人の行動は、彼等の居る地域では軽く有名になりつつあった……

「……ん～ どれどれ。」

そんな彼等の噂を耳にし、一人の存在が行動を起こしていた。適当な灰ビルをジャンプしたり、足元をジェット機のように変換しながら飛ぶ奇妙な存在。手にはこれまた小さな双眼鏡が持たれており、それで存在達一人一人の行動を見ながら行動している様だった。

その日も存在は噂の大本となる存在を探し、とある壊れかけの家の屋根から様子をチェックしていた。軽く陽ざしの元昼寝をする猫のような姿を見せけているものの、猫耳以外にも兎耳も生えており、少々愛らしいと言うよりは小ばかにした感じの存在。それこそが、先ほどまで城で『ニャンニャン』言っていた『茶色の猫』だった。

「…………… ……おお、アレかニャ？」

そんな猫モドキの存在が双眼鏡を覗いていると、とある存在の姿を見つけた様子で呟いた。猫が見ている存在、それは一度住処である住居へと戻った『アルダート』と『ストレンジャー』であった。

空色の狐と蒼色の龍が、街で存在達から多くの流星石を回収している理由は詳しく分からないが、自分達を街から出してくれるような事を言っている

それが、彼等の耳に入った噂であった。

無論その噂が本当かどうかを、猫自身もいろいろとリサーチをしていた。初参加に等しい彼らが倒した相手は、およそ十六人。そのうちの八割を軽傷で倒し、残りの二割を噂で釣られ喧嘩を挑まれ、返り討ちに。

一部は彼等の話に耳を傾け、自ら流星石を差し出したものも居ると報告を受けていた。街の存在達にとっては希望の星ではあったが、猫達から見たら邪魔者の様子だった。

「ん〜…… あんまりプリンセスの望む考え方に類似はしニャいし、あれが無双の落武者とは思えないニャ。」

軽く双眼鏡を覗いていた猫はそう呟きつつ、その場に立ち上がりながら軽く見ていた方角を見つめていた。それと同時に何処からか風が吹き、猫の着ていた衣服と尻尾、そして兎耳を軽く揺らしていた。

「……大分集まりましたね。流星石。」

「そうだな……」

外での連戦に一息つこうとし、彼等は住処である灰ビルの一室でその日の戦利品を見ていた。元々外へ出た理由が争いごとの終息ではあったものの、必然的に流星石も溜まる一方であった。小さな瓶とはいえ個数が溜まれば荷物になると、ストレンジャーは一時帰宅を提案したのだ。

カーペットの上へと移動したアルダートは、ポケットに入れられるだけ入れてあった流星石を丁寧に取り出し並べていた。道中で拾ったものも含め、その数約三十個。元々持っていた物も含め、結構な数が集まったとされていた。

「こんなにたくさんあると、いろいろ調合とかで整理していかないといけませんね。使用回数がある奴なら、回数を補充しないとイケませんし。」

「そうだな…… ……いつの間にか、俺達は噂の存在になりつつあったな。」

「そうですね。」

軽く楽しそうに流星石を見ていたアルダートに対し、ストレンジャーは呟きながらそう言った。彼等も街に流れていた噂を耳にしており、それを理由に喧嘩を挑んでくる存在も少なくはなかった。逆に話を求められ、自分達の考えを聞き自ら流星石を託す存在も現れるほどであった。理由はともあれ、少なくとも街の存在達から見ると『希望』になりつつある事をストレンジャーは悟っていた。

『希望が、少しずつ溜まり出してる…………… ……それ故に、街が明るく静かになりつつあるのも事実だ。だが……………』

「……………？ スtrenジャーさん？」

軽く体制を維持したまま考えていた彼を見て、アルダートは声をかけた。少しだけ真剣な表情をしていたため、何か気になる場所があったのだろう。心配そうな眼差しを、彼は向けていた。

「？ なんだ……………」

「なんか、心配な事とかありましたか……………？ 難しそうな顔をしていましたけど。」

「…………… ……噂で俺達が希望になっていると言う事は、それを邪魔する存在が現れてもおかしくないと思ってな……………」

声をかけられ、ストレンジャーは先ほどまで少し考えていたことをアルダートにも話した。今では自分のパートナーとなっている存在であるがゆえに、隠し事はなるべく減らそうとしたのだろう。嘘偽りはなく、それでも掻い摘みながら話していた。

「邪魔を……………？」

彼の言った事に対しそういうと、ストレンジャーは軽く頷いた。何か心配しているのは事実であり、それに加えて強敵が現れそうな気がする。と、彼は予想していた。

すると、

「お～…………… 意外と、頭が回る噂元みたいだニヤッ」

「！！」

彼等しか居ないと思っていた部屋に、何処からともなく声が聞こえてきた。声を耳にし、彼等はその場に立ち上がり声の主を探していた。出来る限りの警戒をしており、互いに背中を合わせポケットに入れてある流星石を軽く掴んでいた。

「……………何処だ。姿を現せ！」

「こっちだニヤ～」

ストレンジャーの問いかけに反応し、返事をする声と共に一つの影が浮かび上がった。彼等が向けた視線の先、それは朝日が入ってくる大きな窓辺付近の場所だった。

そこには小柄な猫の様な存在のシルエットが浮かんでおり、声の主はその人物だと彼は悟った。

……………しかし、

「……小さいですね。」

「ああ。」

「ニャッ！！ 一番のクライマックスになんて反応をするニャッ！！！」

予想外の相手の登場に、アルダートとストレンジャーは今までには無い平凡な返事を返していた。さすがにそれには予想外だったのだろう、影の主は軽く奮起していた。

「一番良い中ボスポジションに対して、なーんて事を言うのニャッ！！ この愚か共めッ！」

「猫……でしょうか。ストレンジャーさん。」

「多分な。……で、お前。何か用か。」

「スルーされたニャッ……！」

しかしそれでも反応を変えないアルダート達を見かね、影はその場で項垂れつつも話た事に対するの反応に嘆いていた。無理もない。せっかくのシリアスシーンにこんな対応では誰もが嘆く。何はともあれ、それでもストレンジャーは何しに来たのかを彼に問いかけていた。

「フッフッフ…… ともあれ、よくぞ聞いてくれましたニャッ」

「……聞かないと帰らないだろ。」

「我がニャは『ネコS・バニー』！！ この街を統括する、プリンセスを守る忠実なる下部なのニャッ！！」

すると、待ってましたと言わんばかりに影はそう言い少し前へと移動した。それと同時に影に日の光が当たり、彼に色が付き始めた。

桃色の兎耳を揺らし、茶色の猫耳とショートカットの髪の毛。簡素なシャツにズボンを纏う、二足歩行する猫であった。そして、自らが中ボス立ち位置に居る事を宣言していた。

「プリンセス？」

「下僕（げぼく）……な。」

「下部（しもべ）なのニャッ！！」

アルダートが一瞬驚く中、それでもシリアス感は皆無な様子で三人のやり取りは続いていた。クライマックスに値するシーンにはあり得ない反応とパロディ振りである。しかし、それが猫である。

軽く真面目ではあるが、ストレンジャーの言った事も事実である。下部と言うよりは、使い走りの下僕に等しいその外見。シリアスの欠片もない兎のつけ耳では、どうしようもない。ましてや語尾に猫語。これまたギャグである。

「……まあいいニャ。そんな話よりも、ニャーにはする事があるからニャッ」

「？」

「君達も、この街に流れている噂を耳にしたらろうニャ。ニャーはそんな噂元である、君達に会いに来たのニャ。」

「僕達に会いに？」

「そうニャッ」

さっきまでのパロディは何処へやら。急に猫は突っ込む事を止め、急に真面目そうにそう話をし

でした。彼にもやる事があり、今日はその事柄を消化するためにやってきた、と。

そして、噂元であるストレンジャーとアルダートに会いに来たと言っていた。

「街で無双する落武者であり、街の存在達から流星石を回収していると言う。一人の蒼い龍。」

「……………」

「そして、そんな龍を慕い行動を共にし街から出る事を望んでいる。一人の空色の狐。」

「……………」

「まさに君達のようなニャ。街に希望の波を起こし、まさにナポレオンの如く疾風を巻き起こした独裁者。ん～我ながら面白いフレーズだニャッ」

『真面目なのか……？ コイツは。』

軽く噂の正体が君達だよ、と言わんばかりに猫はそう言いつつ彼等の周りを駆け回り一周した。小さな足を一生懸命動かし走り回り、その後締めと言わんばかりに一言言い惚れ惚れするかのよう言っていた。急に变化する話し方の温度差に、ストレンジャーは真面目にやっているのか小馬鹿にしているのかわからない様子だった。

それでも、自分たちに用があると事だけは理解した様子であった。

「さてと。それじゃ、ニャーがちょっとばっかし試してあげるのニャ。」

そんな温度差も束の間。再び猫はその場から歩きだし、再び窓辺へと移動しながらそう言った。

「試す……？」

「さっき言ったニャろ？ ニャーは中ボスであり、プリンセスの忠実なる下部ニャ。この街から出たいのニャら、ニャー達を倒すのニャ。」

「えっ！ じゃあ、さっきのプリンセスって……………！！」

「この街の、中心であり統括する『主』なのニャッ。」

そして彼等の敵である事を宣言し、街から出たければ自分を倒せと言った。その言葉を聞き、先ほどから気になっていた様子でアルダートは気になっていたフレーズを問いかけた。問いかけに対し猫はそういうと、右手を前に出した。

その後、

パチンッ☆

軽く指を鳴らし、何かが始まる事を知らせるかのような仕草をした。すると、

ゴゴゴゴッ……！！

「えっ！」

「地震……………！？」

彼等の居る場所付近から物音が聞こえ、足もとが少しずつ揺れる感覚に陥った。それと共に部屋の光が失われだし、窓枠に黒い物体によって光が遮れだしたのを彼等は悟った。目を窓枠に写し

、そして目の前に映った物体に彼等は目を疑っていた。

『……機械兵（マシリーン）……！』

窓枠付近に映った姿、それは。彼等よりも大きく、ビルよりも大きい巨大な機械兵の姿であった……

「……な、なんだ………！ あれは！！」

「機械兵（マシリン）よっ！！ 管理課が牙を向いたわ！！」

「に、逃げろおおー！！！」

突如街の一角に現れた、ビルよりも高い荒々しく動く機械兵。街でなお力の奪い合いをしていた存在達はその姿を目撃すると、一目散に機械兵から逃げ惑うように行動し出した。その行動と叫び声を耳にするだけで、どれだけこの兵器の力が強大なのかが分かる光景が瞬時に広がった。

「何だ……あれは………！」

そんな街の人々の声を聞きつつも、目の前に突如現れた兵器にストレンジャーも驚きを隠せずいた。先ほどまで生身の存在達ばかり居たのにもかかわらず、こんなにも戦闘兵器に近いものがこの街にあるとは思わなかったのだろう。巨大すぎる敵を目の前にし、驚くばかりだった。

「機械兵（マシリン）です。この地区を統括する存在が持つ、究極の力だと聞いています。そしてその所有者は、プリンセスと呼ばれる存在の元で行動する、四人の覇者の一人。」

「……それが、お前だと言うのか。ネコS。」

「当たり前だニャッ」

先ほどまでのやり取りはなんだったのかと思われるほどの力を見せつけられ、アルダートは軽く説明するかのように敵の正体を言った。本当にボスクラスの敵が出てきた事を改めて知ると、ストレンジャーはネコに確認を取りつつ兵器を一瞥した。

紫色を主体としたボディがそこにはあり、所々に金色の装飾が施されていた。手には大きな爪も持っており、額部分は鋼と思われる甲冑に近いフェイスメットもされていた。背後には煙突の様なパーツもついており、どんな攻撃が来てもおかしくないと思われた。

アルダート達の驚く姿を見ると、ネコは立っていた位置から移動し機械兵の操縦席と思われる場所へと移動した。

「ニャーッニャッニャッ！ さあ我らプリンセスに仕える存在の力を、見せてやるニャッ！」
操作盤を弄りつつネコがそう叫ぶと、機械兵は起動したかのように目を光らせ、雄叫びを上げた。

。

グルオオオオオオー！！！！

「ッ………！！！」

するとその声に乗って強風が周囲に吹き荒れ、ストレンジャー達が居た場所へと襲いかかった。軽くアルダートを背後へ隠しつつ、ストレンジャーはどうやってあの敵を止めるかを検討し出した。

『あからさまに今まで相手をしてきた奴等と、格が違いすぎる………！ ……これが、統括してい

る存在の力なのか……』

「ストレンジャーさんっ！ 逃げましょう！」

「……？」

未だなお強風が吹き荒れる状態に耐えつつ検討していると、背後に居たアルダートが不意にそう言い出した。予想以上の相手が現れた事へ対する恐怖とも思えたが、どうやら違うようだった。

「あれを相手にしても、僕達に勝ち目はありませんっ！ 支給された力である流星石の強化した姿が、あれなんです！」

「力の強化……」

「今まで集めた力を駆使して立ち向かった人達は何人かいましたが、それでもあのボディには傷がつかないんです！ 一方的な攻撃は、戦う前から決まってるんですよ！」

「そうニャッ！ 所詮は我らプリンセスの力を使っているお前らには、ニャー達の力に傷などつかないのニャッ！」

「……」

機械兵自体も流星石で作られている事を知り、それ同士の戦いでは力の強い方が勝つことは決定しているようだった。ましてや石同士は調合する事も出来るほど中和性があり、反発しない者同士では傷すらつかないのだ。だからこそ本体に当てない限り、どうしようもないのだとアルダートは叫んだ。

彼の叫ぶ声を聞きネコもそう言い放ち、自らが勝つと宣言した。それだけ格が違いすぎる力を使っているのだと、同時にストレンジャーは把握した。

「……力は力で捻じ伏せる……か。……好まないな。」

「えっ……？」

「力は全てに通用するものもあれば、そうでないものもある…… たとえ管理課が俺達の所へ来たとしても、俺達の希望を打破させるわけにはいかない……」

二人の意見を聞き終えると、ストレンジャーは風に対抗する様にとっていた体制を変え、普段のようにその場に立つように姿勢を取った。街に集まり始めた希望を彼は悟っており、その希望の元はアルダート本人であると彼は思っていた。

自分がサポートしていたとしても、彼の意見が無ければここまでの波を起すことは出来なかった。ここで逃げては、なんの解決にもならない。

彼はそう言い聞かせるようにアルダートを見ながら言うと、ポケットに手を入れ流星石を一つ掴んだ。

「街に平和を戻すために、俺はあれを止めよう…… 君が強く願うのなら、俺はそれを叶えるだけだ。」

「でもっ…… スtrenジャーさんが、怪我を……」

「……怪我は平和に付きものだ。……それに、怪我をしたからと言って俺が死ぬわけじゃないからな。」

覚悟が決まったかのようにストレンジャーは言う、アルダートの心配をよそに自ら立ち向かう

と意志を伝えた。そしてそのまま風の中前へ進むように足を踏み出し、部屋の窓辺付近へと移動した。

スタスタスタ……

「ネコS。俺が相手だ………！」

「ニャーンッ！」

ストレンジャーはネコに対してそういうと、背後の翼を広げ上空へと飛び立った。それを見たネコは彼の姿をとらえつつ、見た目以上の速度でその場から立ち去った。

ズーンッ…… ズーンッ……

機械兵が移動するたびに周囲に地響きが鳴り響き、徐々に遠ざかって行くのをアルダートは感じていた。

「……ストレンジャー………さん……」

敵が目の前からいなくなると、ふと我に返ったようにアルダートは移動し窓辺から移動して行った先を見た。するとそこには、小さな力と大きな力がぶつかる光景が、遠くで繰り広げられているのが見えた。

「……僕は、どうしたら……」

軽く呟くようにアルダートは言うと、その場に崩れるように地面に座り込んでしまった。

ズーンッ…… ズーンッ……

「さああナポレオンになろうとする青龍！ ニャーを倒すのニャッ！！」

「………」

住処にしていたビルから遠く離れた場所。ストレンジャーは翼をはばたかせ移動し、被害が大きく出ない場所を探しつつ機械兵を誘導していた。元よりその魂胆はネコにはバレバレだった様子で、龍が止まる時を待ちつつ敵らしい台詞を言っていた。

『アルダートには悪いが、俺もこんな相手を敵にした事は無い…… 勝ち目は低いけど、それでも次の相手の手助けになれるように攻撃できれば、上物だな。』

後方から敵の攻撃が来ない事を時折確認しつつ、ストレンジャーは相手の動きを観察していた。機械同士が接合されている部分は何やら球体による関節が出来上がっている様子で、比較的スムーズに動いていた。動き方は人と言うよりも獣に近く、尾は無いがそれでも予想以上の動きや跳

躍力があると彼は読んだ。

操作盤はネコの居る場所にしかないと判断すると、最終的には後頭部の動きを止める事が重要だと分かった。

一通り移動しながら観察を終えると、ストレンジャーは不意に飛びながら進むことを止め、滞空しつつ背後に振り向いた。そして、それと同時に敵も動くことを止め戦いが始まりそうな雰囲気が出ていた。

『……それでも、俺は奴を止める覚悟で行こう。勝者は居なくても、俺はやる覚悟だ。』

「ん～ 鬼ごっこは終わりかニャ？」

軽く覚悟を決めつつ敵を見ると、ネコはそう言いながら尻尾を振っていた。威嚇するかのような体制を取りつつ操作盤に手を触れており、やる気は十分のようだった。

「ああ…… ……ここからは、俺の相手をしてもらうぜ。」

「ニャンニャンッ 楽しませて欲しいのニャッ。」

自分の意志を相手に伝えると、ストレンジャーは手にしていた流星石をポケットから取り出し、栓を抜いた。そして振りかざすと同時に、戦闘の火蓋は切って落とされたのだった……

「破ッ……！」

上空を華麗に飛び交いながら、ストレンジャーは流星石の液体を空気中に散布した。すると周囲に炎の球体が生成され、機械兵目がけて攻撃を開始した。

ボンボンボンッ！！

「ん～ ファイヤーボールは中々の痺れ具合なのニャ。」

しかし炎を数十発同じ場所に当ててみたものの、機械兵には焼け跡すら残らず熱風によるへこみも生じなかった。再度別の場所に目がけて放ってみるものの、それでも効果は同じとみられた。

『やはり中和性が強過ぎるな……』

「今度はこっちの番ニャッ！」

「……！！」

すると今度はネコの攻撃が開始し、大きな腕が一気に動きだしストレンジャーに攻撃を仕掛けようとした。大きな爪に引き裂かれただけで、小柄な体系に等しい彼の身体は粉々であろう。切れ味はともかく当たるまいと移動し、動きをよく見て彼は回避した。

しかし、

「ニャッ！」

「なっ！」

ガンッ！

「クウッ！！」

予想以上に腕の関節部分はしなやかに動き、手首が器用に曲がったのだ。それによって攻撃内に入ってしまった事を確認すると、慌てたストレンジャーは攻撃を受け止めるように両足で爪を蹴り飛ばし、反射的に地面に向かって飛んで行った。無論それで激突するほど彼は馬鹿ではないため、地面にブツカル前に体制を立て直し、再度地面を蹴り上空へと向かって飛び出した。

「おおー 良い音がしたのニャッ 蹴りも中々だニャー」

一度地面に向かったかと思うと戻ってきたストレンジャーを見て、ネコは攻撃も良かったと賞賛した。本当に戦っているイメージはあるのかはさておき、半ば遊んでいるとしか思えないほど緊張感が無かった。

双方の意気込みがここまで違くと、やる事も一味違うようだった。

「……まさかここまで動きが良いとはな…… もはや機械ではなく、生身だ。」

「当たり前なのニャ。パーツそれぞれをより丈夫に、なおかつ錆びない加工が施されてるのニャ。永遠の若人なのニャッ」

「流星石を使っているというのは、間違いじゃなさそうだな…… 掠り傷すら、入らない。」

「当然ニャッ」

しかし上から視線は変わらない様子で、軽く話しかけつつもストレンジャーは相手の言動にも気を配っていた。いかに素早く接近し、しなやかに動く機械兵の動きを止めるか。それが課題であり、なんとかしなければならぬ問題でもあった。

手元にある流星石は数は多くないため、これらの使用回数がゼロになる前に手を打たないと、と考えていた。

『動きを止めないと…… ……動き？』

軽く考えながら滞空していると、不意に彼は何か気になる単語を見つけたように首をかしげた。大きな機械兵にダメージが入らないのならば、まずはその動きを止める事を始めなければならない。ならばその動きをどうやって止めるか、錆びない相手にと考え出したのだ。

『……中和はしても、そうなるに至るまでの時間があれば……』

そして一つの考えが浮かび、ストレンジャーは持っていた流星石をポケットに入れ、別の流星石を掴み取り出した。それは、初めてストレンジャーが調合し創り出した未知の流星石。効果は確認していないものの、初めて戦った時の『氷（グライア）』の力が入っている。

相手の攻撃を止めるのなら、うってつけの代物だ。

『……触れて数秒でも止められれば、上物だ。単品以上の力は、期待出来る……！』

「ん～？ 新しいショーの提供かニャ？」

不意に別の流星石を取り出したことを見て、ネコはそう言いながらストレンジャーの様子を見ていた。攻撃を不意に仕掛けないところを見ると、やはり進んで殺すつもりはない様にも見えた。

「.....ああ、とは言っても。俺自身何が起こるかはわからないけどな..... 試すのなら、この時しかない。」

「おお、面白い考えだニャッ ニャーはそういうのは、嫌いじゃないニャよ。」

すると考えを隠すつもりはない様子で彼は言い、軽く石を見せつつ言い放った。ネコもその考えには賛同であり、変わった事をしてくれる相手を倒すのは万々歳の様子だった。元より遊んでいるためか、こういった刺激が好ましいようだ。

彼の反応を見て軽い笑みを浮かべると、ストレンジャーは未知の流星石の栓を引き抜き、攻撃態勢に入った。瓶の栓からは、調合した相手である『氷』が入っている事を示すかのように、冷気が漏れ出していたのだった.....

地区の管理課であるネコSと、対峙し戦い勝利しようとするストレンジャー そんな二人の攻防戦が遠くで繰り広げられている中、アルダートは住処にしている灰ビルから動けずにいた。

「ストレンジャーさん……」

壁際で持たれるように崩れたアルダートは、今一番会いたいと思う相手の名前を呟いていた。元より行動する事が苦手な彼を、唯一何も言わずに引っ張り続けてくれていたストレンジャーはまさにヒーローであった。ゆえにこの地区を支配する相手と対峙してもおかしくないとは思っていたが、本人の行動理由に自分が関与している事を想うと責任感を感じている様子だった。

自分が余計な願望を彼に頼まなければ、きっと彼は怪我をすることはなかった。遠くで戦っているのであろうストレンジャーは、怪我をしてしまっているとアルダートは考えていた。

『マシリーンは街の流星石の、ほぼ全ての力を合わせた集合体。中和性を色濃く出したあの兵器に、僕達力だけでは絶対に敵わない……』

相手の使う兵器に対抗するには、自らの持つ素手で戦うしか方法はなかった。だが相手のサイズが大きすぎる事もあり、たとえむやみに叩いたり殴ったりしたとしても、それくらいで負傷するような軟な機会でもない。だからこそ彼は逃げる事を提案し、情報を集めてから行こうと思っていた。

それでもストレンジャーは止まる事は無く、自らで出来る事をその時その時で行おうとしていた。他の存在から流星石を回収している時も、丁寧かつ優しさを持って責任を負っていた。

それら全てを見直していると、アルダートは次第に俯くことを止め前を向こうとしていた。

「……そうだ。僕はもう、あの時の僕じゃない…… この街を知らないストレンジャーさんが、あんなにまでなって僕のために戦ってくれているんだ……」

そして次第に伸ばしていた足をゆっくりと曲げ、その場に立ち上がろうと足に力を込めた。両手も使いゆっくりとその場に立ち上がると、一度目を閉じその場で深呼吸をした。

その後一息つくと、目を一気に開きこう言い放った。

「……僕も、その返事を……！ 返したい！！！」

自分の意志をその場で叫ぶと、それが力になったのか。アルダートは大地を蹴り、持てるだけの流星石を再び保持しストレンジャーの元へと向かって行ったのであった。

「破ァッ！！！」

一方、そんなアルダートが意志を固め行動を開始している頃。ストレンジャーは自らが生成した流星石を使い、機械兵マシリーンと応戦していた。無論小さな力であるがゆえにダメージは入ら

ないが、彼の使っている流星石は特殊な力が備わっていたのだ。

ザシュンッ！！

彼の使う流星石は、無数の氷の矢を生成し対象に向かって攻撃を仕掛けるではなかった。それが物体に突き刺さると同時に姿を消さず、ずっとその場に残る効力が備わっていたのだ。攻撃と同時に『罨』を生成する。それが、彼の作りだした『拡散氷刃デフネスグライア』であった。

「おお～ 氷の攻撃と共に罨を作り出すとは、独裁者は随分と変わった調合をしたようだニャ。」

そんな相手の攻撃を見つつ、ネコSは応戦し氷の刃を爪で薙ぎ払っていた。たとえ刺さっても氷には変わらない力であり、一定以上の力を加えてしまえば折れてしまう。壊れた氷は日の光による熱で溶け、その場から消えて行った。

『……やはり、攻撃も当たらないし罨にしては少し効力が小さすぎるな……』
元よりダメもとで使用していた事もあり、ストレンジャーはしばし使い効力が低すぎる事を悟った。炎よりも威力が期待できないのが氷であり、その力で生成するにはいささか威力が低いのだ。一度使用するのを止めた彼は、流星石の栓を取りだし瓶に蓋をした。

「ニャ？ もう終わりかニャ？」

「……」

すると、半ば楽しんでいた様子のネコSは少し残念そうに彼に問いかけた。しかしその問いかけには返事をせず、ストレンジャーは滞空をしつつ流星石の残量をチェックした。

しばらく使用していた事もあり容量は減っており、もうしばらく使っていたら使えなくなってしまうほどの液体量だった。とはいえ戦わないわけにはいかないため、他の持っているであろう流星石を思い出したが、無制限に使える『生成系』の力は持っていなかった。そのため、今の彼には容量を持って戦う手段しか残されていなかったのだ。

とはいえ降参をするつもりはないらしく、一度彼は流星石をポケットに閉まった。そして、軽く話しかけてみる事にした様だった。

「……この街は、地区ごとに分かれているみたいだったな。他にも、こんな風に生きる存在達が居るのか。」

もとより遊んでいる感じのするネコSだったため、ストレンジャーは特に会話が成立しないであっても構わない話題を振ってみた。すると、ネコSは意外そうな顔をした後一度操作盤から手を離し彼を見た。

「この街には、いろーんな街があるのニャ。ココみたいに静かに暮らすところもあれば、賑やかなところもあるのニャ。」

「賑やかな場所が、あるのか……？」

「お、意外そうだニャ。そうニャ、繁盛してて寂しさとは無縁の場所もあるのニャ。」

「……」

問いかけに対しネコSはそう答え、再び尻尾を振りつつストレンジャーを見ていた。ネコ自身も隙を見せた所でむやみに動くとは思っていなかったため、軽めの行動くらいは平気だと読んでいた。だからこそ互いに攻撃手段から一度手を離し、こういった会話が成り立つのだろう。立場は違えど、話す事は可能な様子だった。

質問に対し意外な答えが返ってきたため、ストレンジャーは驚きを隠せずにいた。

「まさか、賑やかな場所もあるとはな…… 管理課と言うのも、意外と寂しさだけを生むわけではないみたいだな。」

「と言っても、街の輩が勝手に賑やかにしているだけなのニャ。あそこを管理する者はそれなりにそれを好んでいるみたいだから、現状維持中なのニャ〜」

『紛らわせている……のか。』

驚きつつも感想を述べると、ネコはちょっと解釈が違うと訂正してきた。自分達が明るくしたのではなく、勝手にその場に居る存在達が明るく振る舞っているだけなのだと言った。管理する存在も彼以外には居るため、その本人が気に入れば現状維持もあり得るのだと言った。

それを聞き、ストレンジャーは存在達が気分を紛らわせているのだと言う事を同時に知った。

『やはり、寂しさはどの場にも付き物か……… ……もしかしたら、アルダートと同じ考えを持つ存在も居るのかもしれないな。他にも、たくさん………』

「さてと。そろそろニャーも遊ぶのには飽きてきたのだニャー」

ウィーンッ……

「！」

軽くストレンジャーは、他の地域にもアルダートと同じ考えを持つ者が居ると確信した。街に希望が薄れているからこそ、中には平和を願い街を変えようとする存在達が居る。結託すれば、根本的な物を変えられるだろうと彼は思った。

すると、不意にネコSはそう言いだし再び機械兵の操作盤を弄り起動させた。機械の目が怪しく光ったのを見て、ストレンジャーは慌てて体制を取り直した。ポケットに入っている流星石の中から1つ適当な物を握ると、彼も戦う態勢を取った。

「龍には悪いが、ニャー達は負けるわけにはいかないのニャ。プリンセスはニャー達が居なくなことを望んでいないし、他の干渉も望んでいない。だからこそ、希望の星ははかなく消えるべきなのニャ。」

「星は煌めき続け、永遠にあるべき代物だ…… ましてや希望の星を絶たせるわけには、いかない。俺はアルダートの願いを………叶えるだけだ。」

「んー そこだけはニャー達と考えは合わないのが残念だニャ。君だったら、プリンセスが好みそうな存在ではあったのだけれど…… まあ仕方ないニャ。」

軽く最後の会話をするかのようにネコは言い、プリンセスと言う存在の考えにそむくと言った。だが彼からしたら希望はあるべきものであり、星はその場で輝き続けるためにあり根絶やしにさせるわけにはいかないと言った。

たとえ和解できる部分があったとしても、それでは意味がないとネコも殺る覚悟を決めたようだった。

「それじゃあ、ニャーもそろそろ本気で行かせてもらおうのニャ。君には、血祭りになってもらうのニャー」

「……来い！ 必ず、お前等の考え方を変えてやる……！」

その後互いに一言ずつ言うと、再び戦いの火ぶたが上がった事を確信させたのだった。

「ニャーッ！！」

戦いが再開されると同時に、ネコは猛攻撃をストレンジャーに繰り出した。元より流星石の使用回数が限られているものしか持っていない事を知った彼からしたら、いくら強くてもそれでは勝ち目は無い事を解っていた。だからこそ半永続的に動けるマシリーンが有利だと、彼は踏んでいた。

無論ストレンジャーもその事は分かっており、可能な限り無駄な攻撃は避け本体を狙って攻撃を仕掛ける体制を取っていた。ゆえに使える流星石は『炎（フライヤ）』ではあったが、相手の猛攻撃に避けるのが精いっぱいであった。翼にダメージを食らうまいと避け続け、隙を見ては火球弾を相手に放っていた。

「くらえっ！！」

ボンボンボンッ！

「ハズレなのニャッ！」

しかし本体であるネコSは機械兵から見たら目のサイズに近いくらい小さく、狙って攻撃を当てるには距離がありすぎた。その上動かしている本人が手でガードしてしまえば、無傷に等しい防御を誇っている。なんとかして突破口が欲しいと、彼も思っていた。

いろいろ考えつつ、ストレンジャーは再びやってきた腕による攻撃を空中で回避し避けた。

しかし、

「見えたニャッ！！！」

右手で攻撃を仕掛けたネコは、回避しこちらを確認しようとしていた隙をついて左手を伸ばした。

ウィーンッ！

「なっ、しまったっ……！！」

その攻撃を一足遅れて知った彼には回避が出来ず、そのまま左手に捕まってしまった。そして、

ガスンッ！！！！

「グハァッ！！」

そのままビルの壁へと押しつぶされ、背中から強烈な痛みが彼の身体を駆け巡った。

「ニャーンッ、捕まえたのニャッ」

「くっ……」

とはいえ受け身を取っていない彼ではなかったため、身体に痛みは走ったものの気を張り気絶しない様子を付けていた。ネコの勝利を確信した声を耳にしつつ、両手両足を掴まれ壁に叩きつけられた彼は、ネコの姿を見る事しかできなかった。

「よおーしっ。ココからがどうやって調理するかって所だニャ。何がお好みかニャ？」

「……」

「みじん切りか、乱切りか…… あ、ミンチにするのも良いかもしれないニャッ」

軽く倒すまでも楽しんでいる様子で、ネコはそう言いつつ軽く操作盤を弄りつつ質問を投げかけていた。【すでに君の負けは確定している】と言わんばかりの台詞を履きつつ、ネコは機械兵の手の力の入れ具合を変更した。

すると、

ギリギリギリッ……

「グァアアアアッ……！」

掴んでいた手の力が急に強くなり、彼の身体を痛みつけだしたのだ。ネコが言った調理方法の一つである【ミンチ】が、今行われている様だった。身体と手足に無差別で来る圧力に、彼は声を上げ苦しんでいた。下手したら骨がどんどん折れても不思議ではないほどの、力の入れ具合だった。

「ニャーンッ、そそられる声だニャア～ もっと言ってほしいのニャッ」

「グウァッ……」

その後もてあそぶかのようにネコは言い、それでもストレンジャーは負けないように身体に力を入れ気を張っていた。むしろ勝ち目はなくとも、一瞬にして死ぬのだけは避けたかったようだ。彼にも会いたい人がおり、こんなところで死ぬつもりはないようだった。

そんな彼を見て、軽く機械兵の顔が彼の元へと近づき、ネコは操作盤のある場所からストレンジャーを見た。

「ん～ 大分無理をしているみたいだニャ。身体に力を入れてたら、楽には死ねないのニャ。」

「ハァ……ハァ…… ……俺も、楽に死ぬつもりはない…… アルダートと……街の存在達の願いを叶えるまで……俺は……負けるつもりはない……！」

「おやおや、正義感たっぷりだニャ。」

軽く痛み到我慢をしている事を悟り、ネコは楽になればいいと言ってみた。しかしストレンジャーは身体の痛みから即座に解放されることを望んでおらず、痛みを苦しんででも希望を叶えると言いつつ放った。正義感強い彼の発言を聞き、言っても無駄だとネコは悟り再び顔を離した。

「じゃあ、仕方ないからニャーから楽にさせてあげるのニャ。」

シャキンッ！

「ッ……」

彼の痛がる表情を見てても面白くない様子で、ネコはそう言い空いた左手の爪を鋭く変換させた。切れ味の良さそうな爪で顔でも触れられたら、それだけで皮膚が裂けてしまいそうなほどの代物だ。軽く脅すように、数回爪部分を出し入れすると機械兵は腕を構えた。

「じゃあ、さよならニャ。ナポレオンになれなかった、青龍よ。」

「……………」

そして相手が動かない様右手でガッチリ固めると、ネコは左手のアームを動かし彼を殺そうと体制を取った。すると、

「やらせなああ————っ！！！」

ガシュンッ！！

何処からともなく声が響き渡り、攻撃のために動かした左腕の手首が折れている光景が広がっていた。一瞬だったため、彼等には何が起こったのかわからない様だった。

「何だ……？」

「何ニャッ！！」

何処からともなく聞こえてきた声を耳にした後の変化に驚き、二人は声の主を探した。すると、折れて切り落とされた左手の落ちた街の地面周辺に、一人の存在の姿が見えた。彼の手に持たれているものは、金色に輝く流星石『一点集中（コンデスソード）』だった。

そしてそこに居る存在にも、彼等は驚いた。

「アルダート……！！」

剣を持っていた存在を見て、ストレンジャーは彼の名前を呼んだ。すると彼は声を聞き振り向き、軽い笑顔を彼に見せつつこう言った。

「ストレンジャーさん！ 助けに来ましたよ！！」

無事で居た事に喜ぶかのように、彼は涙目になりつつそう言ったのだった。

「まさか……ニャーの腕を落とす石があるニャんてっ………！　ありえないニャッ！」
急に表れた救世主を見て、ネコは驚きを隠せず騒いでいた。元より無敵に等しい力として君臨していた『機械兵（マシリン）』の腕が、簡単にではないが折れて落ちてしまったのだ。他の流星石の力を吸収するボディではありえないと、使用者本人も驚いていた。

「アルダート……！　……んんっ！」
その隙にと言わんばかりに、ストレンジャーは捕まっていた腕から逃れようと身体を動かし必死に出ようとしていた。しばらくすると身体が徐々に抜け出し、再び彼は大空へと飛び立った。

「あニャーッ！！　逃げちゃったのニャッ！！」
軽く目線の先を彼が優雅に飛び交うと、目を覚ました様にネコは再び叫んだ。そんな彼の反応を見ると、ストレンジャーはアルダートのそばへと移動し降り立った。

「ストレンジャーさん、僕も……お手伝いさせて下さい！　夢は叶えてもらうんじゃなくて、自分でも叶えたいんです！！」

彼のそばへと行くと、アルダートは溜めていた涙が抑えきれなくなった様子で泣き出した。しかしそれでも自分の意志を伝えたいとばかりに叫び、ストレンジャーと共に戦いたいと言った。元よりこの地区の戦いや起こった出来事を彼は知っており、自ら変える事が出来るとは思っていなかった。だが今回は違い、頼ってばかりではあるが自分からも行かないといけないのだと、改めて思ったのだ。頑張っただけで拭いつつも流れてくる涙をよそに、彼の返答をアルダートは待っていた。

「……分かった、戦おう。助かったぜ、アルダート。」

「……！　はいっ！」

そんな彼の眼差しを見て、ストレンジャーはお礼を言いつつ手を差し出した。その手を見て、アルダートは嬉しそうに返事をし共に戦う覚悟を決めた様だった。

「……ニャーッ！！　もう勘弁ならないニャッ！！　ナポレオンはこの街にはいらぬのニャッ！！」

二人が敵に回った事を黙視し、ネコはいら立ちを覚えつつそう叫び操作盤を叩いていた。すると、失った左手を気にせず戦おうと機械兵は動きだし、二人を倒そうとしているのが目に見えていた。

「……アルダート、これの調合を頼みたい。」

そんな機械兵を見て、ストレンジャーはそう言いつつアルダートに先ほど使った『拡散氷刃（デフネスグライア）』の瓶を手渡した。

「これって、ストレンジャーさんが作った……」

「ああ、俺の作った流星石だ。……これも戦える力はあったが、幾分威力が低い。君の調合に任せる、強化してくれ。」

「あ、はい！」

その瓶を見つつ、ストレンジャーからの提案にアルダートは了承した。自分にもできる事を彼に頼まれ、それを出来ると彼は確信したのだ。嬉しそうに返事をし、戦っているのだという気持ちを味わっていた。

「頼むぜ。……後、しばらくそれを貸してくれないか。」

「あ、これですか……？」

彼にそう頼むと、ストレンジャーはその間対峙出来る力を持っているアルダートの流星石を貸して欲しいと頼んだ。戦っている際にアルダートに危害が来ない様、引き寄せるつもりで『一点集中（コンデスソード）』を借りていた。アルダートも彼の考えを知り素直に貸すと、そのまま行こうとしていたストレンジャーの手を引いた。

そして、こう言った。

「……無事で居てください。僕は、貴方が一緒に居てくれるって信じてますから。」

「ああ…… ……もう、無茶はしない。安心してくれ。」

互いに言葉をかけあうと、それぞれが出来る事をしようと行動を開始した。そんな彼等を見て、ネコも攻撃を開始した。

「ニャーッ！！」

操作盤を先ほど以上に乱雑に弄りつつ、ネコは叫びながらストレンジャーに攻撃をしかけた。

「力に対抗出来る力があるのなら……！ 負けない……！！」

無論彼も負けるつもりはない様子で、剣を召喚させた状態で空を飛び交った。

ガキンッ！！

「クッ……！」

一本になった腕による攻撃に対抗しつつ、ストレンジャーは剣で払ったり受け止めたりと、攻撃を無力化させていた。先ほど以上に強気に攻められる力が手に入った事を実感しつつ、願いのために戦っていた。

「『拡散（デフネス）』と『氷（グライア）』…… 強化出来るとしたら……」

一人で対峙し注目を集めている隙にと、アルダートはなるべく目立たない場所へと移動し託された流星石を生かせる素材を探していた。持てるだけ持ってきた事もあり、彼の手元にある流星石のレパートリーは豊富な事もあり、持っている範囲の知識内で一生懸命に考えていた。

誰かに頼まれた事は彼には初めてであり、もっとたくさん頼ってほしいと思っていた。だからこそ、初めてである今回の頼みをしっかりと聞き届けようとしていた。

しかしいろいろ見比べて検討するも、どれもピンとくるものが無く迷っていた。

「……あっ、『速度（アスレス）』がある。なら、後は『収束（コンデス）』があればもっと… ……あ、でもさっき使っちゃった……」

すると、不意に一つの流星石に注目しそれに合うもう一つの流星石を探しだした。しかしそれは

先ほど例として剣（ソード）に合わせた物であり、在庫切れの様で彼は後悔していた。

「うーん…… あれ？」

仕方なく別の方法を考えていると、不意に向いた方向で見つけた物を見てアルダートは考える事を止めた。彼の見た方向には、先ほどの降ってきた石達の中で見つからなかったのであろう流星石が1つ転がっていた。

よくよく見ていると、今彼が丁度求めている範囲系の流星石によく見る水草模様の様な装飾が見えた。

「アレがあれば、きっと……！」

その流星石を見かね、アルダートは今必要である二つの流星石を手を持ちその場を駆け出し取りに向かった。だが彼の向かった先は、丁度機械兵が対峙する先の路地だった。

「ニャ？」

不意に対峙していた広場の土地を駆ける存在を見かね、ネコは攻撃を一時的にやめた。走っていた相手はアルダートであり、よくよく見ると彼の向かっている先には一つの流星石が転がっていた。

『ニャニャ〜ん。あれが狙いかニャ。』

狙いが流星石だと確信し、ネコは不意に攻撃する相手をストレンジャーからアルダートへと変更し腕を動かした。

「何っ……！ アルダート！ 逃げろ！！」

不意に別の方向へと攻撃を開始した機械兵を見かね、ストレンジャーは腕の先に居るアルダートを見つけ叫んだ。

「えっ？」

その声を聞き声のした方向を向くと、すぐそこまで機械兵の腕が迫っていた。慌てたアルダートは必死に前に向かって走りだし、腕から逃れようとした。

ズドンッ！！

「うわあああああっ！！！」

すると攻撃されるすぐ先に走り抜けた様子で、手から伸びた爪は地面へと刺さり彼は突き刺さった振動の拍子に前へと身体が傾き前へと向かって転がり出した。そしてそのまましばらく転がり、止まった所で顔を上げ攻撃の目を見た。

「クッ……！！ 負けないんだからああっ！！」

すぐには攻撃してこない事を見て、アルダートは必死に腕に力を入れ起き上がり、再度その場から駆け出した。

「逃がさないのニャッ！！」

攻撃が外れ再び走り出したアルダートを見て、ネコは突き刺さった爪を地面から抜きだし再度彼

に攻撃をしかけようとした。すると、

ガキンッ！！

「ニヤッ！？」

「クッ！！」

爪の向かった先にはすでにストレンジャーが移動しており、持っていた剣で攻撃を受け止めていた。彼の行動を阻害する動き全てに立ち向かうのをあらわにしており、先ほどまで落ちていた彼の表情は必死の顔へと変化していた。

それだけ、アルダートの事を守ろうとしているのだと言うのが良く分かった。

「行けっ！ アルダート！！」

攻撃を受け止めたままストレンジャーはそう言い放ち、聞こえているかどうかわからないアルダートに向かって叫んだ。その頃アルダートは流星石の所までたどり着いており、走りながら落ちている流星石を拾おうとしていた。

そして、

ガシッ！

「取ったっ！！」

落ちていた流星石をしっかりと拾い上げ、何の流星石かを見た。流星石を見ると、それは今彼が一番欲しいと思っていた『収束（コンデス）』の流星石だった。すぐさまアルダートはそれを見て、三つの流星石を急ぎつつもゆっくり引き抜き調合を開始した。

「ニヤニヤニヤニヤニヤニヤッ！！！」

その頃ストレンジャーは、ネコからの攻撃を必死に流星石で防いでいた。機械兵とは思えないほど高速で腕は動き、連続パンチと言わんばかりに爪で攻撃していた。しかし体系よりも大きい爪を空中で何度も受け止めるのは限界がある様子で、次第にストレンジャーは後方へと送られつつも本体に直撃しないよう意識していた。

『アルダート、頼む……！ もってくれ！！』

疲れてはいるものの表情に出さない様子で、ストレンジャーは心の中でアルダートの無事と事態がまだ続くことを願っていた。たとえ希望が少ないこの街でも、願いが届かないとは思っておらず強く強く願っていた。

すると、

「ストレンジャーさん！！！」

「！」

彼の考えが届いたのか、不意に彼の耳に自分を呼ぶ声が聞こえた。その声を聞き振り向くと、ア

ルダートが彼の近くまで駆け寄り出来上がったばかりの流星石を見せた。彼の手には水晶のように光り輝く流星石が持たれており、普段見る流星石とは違う代物が握られていた。

「僕の調合ですが、出来上がりました！ 受け取って下さい！！」

アルダートはそう叫ぶと、ストレンジャーに届くように願い渾身の力を込めて瓶を投げた。

パシッ！

「！ これが……さっきの流星石……」

瓶は彼の手元へとたどり、ストレンジャーは受け取りつつ瓶を見た。栓はクリスタルの様なデザインへと変化しており、瓶自体のデザインも細見ではあるがしっかりとした代物へと変わっていた。さきほど渡したばかりの流星石とは見た目も力も変わっているのだと思い、ストレンジャーは剣を持ったまま受け取った瓶の栓を抜いた。

すると、初めて抜いた時以上に瓶から冷気が漏れ出し、瓶周辺を霧で包み込んでいた。

『これなら…… いける！』

瓶からの冷気でそう感じると、ストレンジャーは何かを確信したように瓶を握りしめネコを見た。そして、瓶を構え中身を出すように振った。

「破ッ！！」

ヒュー……

すると、彼の周囲に霧が立ち込め冷気に包まれた。その瞬間、

シャキンッ！

「ニャッ！？」

瞬時に冷気から大きな氷の塊が形成され、即座に機械兵目がけて攻撃が開始された。慌てたネコは攻撃を防ごうと右手を動かし、幾多も降り注ぐ氷の塊を防いだ。だが先ほど以上に威力が桁違いに上がっており、防いでも砕けた氷の破片が容赦なく彼を襲った。そのまま通り過ぎボディに傷をつけるものもあれば、そのまま地面へと刺さり罌と化すものもあった。

これこそが、先ほどの流星石に『速度（アスレス）』と『収束（コンデス）』を調合した結果の『氷彩零刃（デフネスグライア）』だった。

巨大にまで収束させた氷の刃を一振りで無数に生成し、最速のスピードで相手を攻撃するという最強強化に等しい代物だ。これには中和性の高い機械兵のボディでも防ぎきれず、どんどんボディに裂け目を生み出した。

「ニャアアッ！ 防ぎ切れないのニャッ！！」

「終わりだ……！！」

ズーン……

「えっ、何……？ 爆音……??」

「何が起こったんだ、一体……」

アルダート達の努力が叶い、管理課であったネコSの機械兵。彼等の攻撃に耐え切れず自爆した轟音は、街に居た人々の耳に小さくも届いていた。それと同時に互いに争い合う事を一時止め、音の下方角を住人達は見ていた。

目を向けたその先には、爆発による煙が濛々と立ち込めていた。

「爆発……？」

「行ってみよう、誰かが何かしたのかもしれない。」

その光景を目の当たりにした人々は、自らの足でその場に向かって行く光景が広がっていた。街に異変が起こって居る事を街の人々は知っており、何が起こったのかを自らの目で確かめたかったのだろう。行動は迅速であり、歩く者もいれば走って行くものも居るほどであった。

「……あっ、立てない。」

スッ

「えっ……？」

「手を貸そう。しっかりしろ。」

「あっ、ありがとう……ございます……」

中には足を怪我し、手を貸す者も現れるほどだった。先ほどまでの戦いは何処へ行ったのか、風と共に街の空気も一変するのであった。

「……」

一方、機械兵の爆発によって煙が立ち込める周辺。アルダートとストレンジャーは地上で合流しハイタッチすると、壊れた機械兵を見ていた。先ほどまで動いていたとは思えないほどに無残な姿へ変貌しており、傷すら追わない完璧なボディに切れ跡があった。

所々に氷の破片も突き刺さっており、本当に自らの流星石で倒せたことを彼等は改めて知った。

「僕達…… ……勝ったんですか？ 管理課の存在に……！」

「……おそらかな。……」

未だに目の前に広がっている光景が現実とは思えない様子で、アルダートは隣に立っていたストレンジャーに問いかけた。問いかけに対し彼は軽く答えると、機械兵を操縦していたであろうネコの姿を軽く探し、とある場所へと視線を向けた。

それは壊れた機械兵の腕パーツが転がった場所であり、どうやら大破した衝撃で宙を舞った腕にネコ自身が引っかかってしまったようであった。軽く腕の下敷きになっており、抜けようにも抜けられない様子だった。

そんなネコを見かけ、ストレンジャーは軽く移動しネコの元へと向かって行った。彼の動きを見て、アルダートも後に続いて歩いて行った。

「うニャー…… まさかニャーの作った力にニャーが捕まるとは……」

「……情けないな。力で逆に潰されるとは。」

「ニャッ？」

ボヤキながら動くことを止めたネコを見て、ストレンジャーは軽く彼に声をかけた。日の光がネコの前から消え暗くなったのを知ると、ネコも顔を上げ二人の事を見上げていた。

「ナポレオンになったみたいだニャ。蒼き龍と狐よ。」

「その偉人に慣れたかは僕達にはわかりませんが…… ……お願いします、この街を早く元に戻してください。」

「……俺はアルダートの願いを聞いて行動しているだけだ。可能なら、早めにしてもらおうか。」

特にこれと言った抵抗はせず、ネコは軽く二人に賞賛の言葉を告げた。元より殺すつもりは微塵もない上、勝つことしか無かった機械兵を打ち負かした相手が出た事は彼にとっても面白い事だったのでだろう。二人の反応を見ながらも、自分を殺らない事を悟るといつも通りの表情でネコはその場にうつぶせになっていた。

「ニャッニャッニャッ、それは無理なのニャ。」

「えっ？」

互いの願いを軽く聞くと、ネコはその願望は叶えられないと言った。彼の返答を聞き、事がこれで終息すると思っていたアルダートは驚き声をあげた。

それもそうだ。 管理課を倒しやってもらえば、それで済むだけの話だと思っていたからだ。意外な結末を知り、アルダートは困った表情でストレンジャーを見た。

「……何故、無理だと言うんだ。」

「それは、ニャーがプリンセスに言ったところで何も変わらないからニャ。ニャーの権限は一番低いニャよ？」

「一番低い存在で、こんなに強いんですか……？」

「ま、それはニャーだからなのニャッ 褒め言葉は素直に受け取っておくのニャ。」

心配そうに顔を見たアルダートを見て、ストレンジャーは彼の代わりに無理だと言う理由を問いかけた。

問いかけに対しネコはそう答え、元より立ち位置が一番低いため権限が無いと言い出した。一番低いのに対し比例しない力を見せつけられたアルダートが聞くと、それに対しては否定はせず素直に言葉を受け取るネコであった。

どうやら事実の様で、まだ自体は終息しない事を彼等は知る事となった。

「しかしニャ。」

「？」

仕方なくそれ以上を言う事を止めようとした二人を見て、ネコは軽く補足とばかりに呟いた。その場を去ろうとしていた二人は一時足を止め、ネコの発言を聞きつつ振り向いた。

「ニャーが何も言わなくとも、この地区はもう変わってるのニャ。」

「えっ…… それは、どういう事ですか??」

「後ろを見るニャ。」

「……………」

そしてネコの言った言葉を聞き、アルダートは驚きながらどういう意味なのかを聞いた。すると問われた事に対しネコはそう答え、彼等に再び前を向くよう言った。それを聞き2人は前を向くと、そこには今までにない光景が広がっていた。

それは、

「嘘、機械兵マシリーンが……」

「壊れてる…………… 力が、力に勝ったのか……？」

「や、やったわ……！ 私達、もう自由なのね！！」

「「ウォーーーー！！！」」

彼等の倒した機械兵の残骸を目の当たりにし、この地区だけでも平和になった事を知る住人達の光景だった。その上先ほどまで争っていたとは思えないほど他人の事を支えている存在もあり、街に静けさから希望を見出したのだと二人は悟った。倒すと決めた相手を打ち負かし、それだけで街の雰囲気は一変したのだ。

歓喜の声を上げる者もあり、もうこの街は暗い街ではない事をアルダートは知った。

それと共に、ネコの言っていた『変わった』とは、こういう意味だったのだと。一通りの光景を見終え知ったストレンジャーは、再びネコを見た。

「……変わったな。この地区は。」

「ニャーはもう敗北者。龍達の勝ちニャ。」

ネコの言っていた事が正しいと、ストレンジャーは軽く呟いた。その声に相手も答え、もう彼はこの街の管理者ではない事を告げた。

彼等がこの街の管理者となり、権限は全て彼等に引き継がれたのだ。隣で喜ぶアルダートを見て、ストレンジャーも軽く笑顔になりつつその光景を見ていた。

「……ネコ。一つだけ、お前が無理だと言わない事をしてもらおうか。」

「何ニャ。」

その後街の復興に向けて行動し出す存在達の動きを見て、指示をする事となったアルダート達。軽く指示を出し人気が無くなると同時に、ストレンジャーはネコに頼みごとを一つしていた。

「お前は確か『地区によっては賑わいのある場がある』と言っていたな……」

「そうニャ。この街は幾多の地区に分かれて、ニャー達管理課が収めてるのニャ。」

「……この地区が平和になった。なら、俺等は次に行くだけだ。アルダートの願いは、この地区だけではないからな……」

「そう言う事かニャ。」

そばに居たアルダートも軽く手伝うために席を外していた事もあり、ストレンジャーは軽く取れた腕の上に立ちつつネコに確認を取った。確かに彼は『ココ以外にも他に地区がある』という話をしており、平和になったのはあくまでこの場だけだと言う事も言った。それを彼は思い出した様子で、次の場所に行くための話をネコにした。

軽く何をしてほしいのかを悟ったネコは、モゾモゾと身体を動かし腕から這い出るとその場に立ち上がった。

「龍なら、そう言うと思ってたのニャ。……もしかしたら、プリンセスが探してる存在に君はなれるのかもしれないのニャ。」

「探している……？」

「表向きの評価に左右されない、心優しい存在がプリンセスの元にも居たニャ。……でも、その存在はプリンセスのそばからいなくなった。ニャーはその事がこの街の平和に欠かせない事だと思ってるのニャ。」

「……」

軽く悟る以前に言う気がしていた様子で、ネコはそう言いつつ余談を持ち出した。しかし重要な事であり、管理課の上に立つプリンセスの話は誰も知る事が無いに等しい話。貴重な話と意識しながら、ストレンジャーはその話に耳を傾けた。

「もし龍がプリンセスを倒すのではなく平和のために和解すると望むのニャら、その事も考えて行動すると言いのニャ。龍なら、なんとなく出来るような気がするのニャ。」

「……分かった。軽く、意識させてもらおう。」

「ニャニャッ」

そしてネコ自身も彼ならやりそうな気がするのと補足を加え、この後の行動の道しるべにすると言った。その言葉を軽く聞き届けると、ストレンジャーはそう言い軽くうなずいた。

彼の返事を聞き返事を返すと、ネコはそう言い一つの鍵を彼に手渡した。それは流星石を集積し固めた宝石がはめ込まれたもので、比較的小さな金の鍵だった。

「これは……？」

「これを持って、地区の外れにある大扉の元へ行くニャ。別の地区へ、一度だけ門戸を開いてくれるのニャ。あの空色狐の願いを叶えたいのなら、一緒に行くがいいニャ。」

「……」

鍵を受け取ったストレンジャーは使い道を聞くと、ネコはすんなりそう答え前へ向かって進むことを勧めてきた。互いに思い合う希望は繋げ続けばいいと思っている様子で、軽く気にしながら

もネコは言った。使い道を聞き終わると、ストレンジャーは流星石の入っているポケットに同じく鍵を入れた。

その後アルダートと合流し、彼等は別の地区へ行くことを決めるのであった。

アルダートが住んでいた区内の平和を取り戻し、街は再復興ムードへと包まれているその頃。ストレンジャーからの話を聞いたアルダートは、住み慣れ平和になりゆくその街を背後に新たな場所へ移動しようとしていた。

ネコSから受け取った、小さな鍵を使って。

「……ココだな。」

再び二人で行動する事となったアルダートとストレンジャーは、区内を取り囲む高い壁に沿って移動しとある場所へと到着していた。それは壁だけであった場所に一つだけある大扉であり、前には数人の兵隊が見張りとしてその場に立っていた。

軽く兵隊達の視線を気にしつつも、二人は大扉の近くへと歩み寄って行った。

「……」

「ココから、別の場所へ行けるんですか？」

しかし数人の兵隊達を取り囲むその扉を、難なく突破できるのかと彼は気にしていた。元よりこんな場所に近づいたことのない彼にとって、こういった新たな一歩への行動はとても新鮮だ。今では共に行動してくれる存在が居るため、さほど怖くはないがそれでも恐れはどこかにあるようだった。

「ネコの話が、正しければな……」

アルダートからの問いかけにストレンジャーはそう答えると、彼よりも一歩前に出つつ上着のポケットに手を入れた。

スッ

中に入っていた鍵を手にする、ストレンジャーは前に差し出すようにその鍵を兵隊に向けて見せた。すると、兵隊達は少し驚いた様に顔を動かし、アイコンタクトで隣の兵隊達に合図を送っていた。

「……この区内の管理課を倒した証だ。別の場所へ行きたい、通してくれ……」

「……」

そんな兵隊達の様子を見つつ彼はそう言うと、兵隊達は軽く足をそろえ敬礼し大扉を開けようとして行動してくれた。しかし、一人だけその行動を取ろうとしない者がおり、そのままストレンジャーのそばへと歩み寄ってきた。

「鍵コード、確認。指定場所はあるか。」

そして彼の持っていた鍵を軽く受け取り、本物である事を確認しつつ低い声で行き先を聞いてきた。元より扉のためその隣に行くものだと思っていた二人は軽く驚き、場所指定が出来る事に軽く驚いた。

とはいえまだよく知らない街のため、ストレンジャーはこう言った。

「……いや、ない。……ココよりも、もし何かを得られる場所があるのなら……そこへ通してくれ。」

「場所指定無し、注文受注。了解。」

すると、そんな適当ではあるが求める場所がある事を告げられ兵隊はそう答え耳に手を当てるようなしぐさをした。その後そう言い、彼等の前に立っていた位置から少し横へとずれ、道を開けつつこう言った。

「検討を祈ろう。改革者の龍、狐。」

「……ああ、ありがとう。」

特に彼等のする行動に口出しすることなく、二人の行き先での安全を膝をつきつつ祈っていた。そんな兵隊の行動にストレンジャーは返事をする、アルダートを見た後共に前へと歩きだし扉の開いた先へと向かって歩き出していった。

軽く光で先が見えないものの、彼等は前へ向かう事を止めずそのまま進んで行ってしまった。そして二人の姿が見えなくなると、兵隊達は他に了解を得ずに通ろうとする存在が居ない事を確認しつつ、扉を閉めた。

『……改革者、か……』

扉が完全に閉まると、鍵を受け取った兵隊は軽く呟きつつ扉の先を見つめるように遠くを見ていた。

「……うーん、前が見えませんか……」

「そうだな……」

そんな兵隊達の管理する扉を抜け、視界が白い場所を黙々と歩いていた2人。不意にアルダートは何処まで歩いて行くのだろうと心配になり、ストレンジャーに声をかけた。問いかけに対し彼はそう答えると、離れ離れにだけはならないようにしようと思ったのか、アルダートが居るであろう方向に向けて手を向けた。

「……あっ、ありがとうございます。」

見ていた先から優しく差し出された手を見て、アルダートは軽くお礼を言いつつ優しくその手を握った。

ギュッ

「……ああ。」

お礼を聞き手を握られたことを確認すると、ストレンジャーは静かにそう答え歩調を合わせるように歩いて行った。次第に互いの距離が近くなり、着ている衣服の色が見えるほどの距離になっていた。

どうやら視界が白いのは『濃霧（のうむ）』によるものの様だった。光は少なく乱反射する事は無いが、それでも視界を遮るには十分すぎる霧の量であった。

その後しばらく彼等が歩いていると、次第に霧は晴れだし視界に色が追加されていった。そして霧が完全に晴れると、今自分たちが居る場所を知ろうと二人はそれぞれで周囲を見渡した。

いつしか彼等は、灰ビルの多い区域からアンティークな建物の多い街へと移動していた。レンガ造りの家が点々と立ち並び、人気は無いものの先ほどよりは良い雰囲気だった。何処からともなく水の流れる音も聞こえ、自然もありそうな街であった。

「うわぁ…… なんか、可愛い街に来ましたね。」

「そうだな…… ……」

軽く周囲に立ち並ぶ家を見つつ、アルダートは住んでいた場所とは違う雰囲気驚いていた。彼の反応に軽く応答した後、ストレンジャーはその街が異様であるところを探す様に再度ゆっくりと街を見渡した。

街の雰囲気自体は、確かに先ほど居た場所に比べて良い雰囲気に包まれていた。しかし先ほど同様に人気はあまりなく、この街を管理するネコと同じ行動を取る存在がどんな存在なのか。いつ襲撃されてもおかしくない静けさを心配しつつ、ストレンジャーは前へと向かって歩き出した。不意に歩かれ手が離れてしまい、慌てたアルダートは手は掴まず彼の後を再び着いて行くように走り出した。

「……… ……先ほどと同じで、静かだな。この街も……」

「あ、そう言われると……… そうですね。」

特に目的地は無いものの、ストレンジャーは街を散策する様に誰かに出会わないかと辺りを歩いていた。彼の呟きに軽く同意しながら、アルダートも周りの様子をうかがっていた。

彼等の歩いている場所自体は比較的舗装された場所であり、道路と言うよりは石畳に近い場所だった。しかし綺麗に整えられているためつまづく心配は無く、石畳特有の足音が周囲に響いていた。彼等の履く靴は普通のスニーカーなのに対し、響く足音はまるでハイヒールを履いているかのような音だ。

それだけ、周囲に敷かれている石自体も特殊な物なのだとストレンジャーは悟っていた。

「………」

「どうしまし…… うわぁ………」

しばらく歩いていると、不意に彼は歩くのを止めた。前を歩いていたストレンジャーの足が止まった事を見て、アルダートはどうしたのかと彼の隣に移動しながら視線の先を見ながら驚き声を上げた。彼等の視線の先には、大きな宮殿の様な立派な建物がある広間へと通ずるゲートがあった。ゲートの大きさもさる事ながら、そのゲートすらも越えて見える宮殿はとても大きいものだと言った。彼等は悟った。

先ほどまでであった街並みの家々とは格が違う様子で、こちらはレンガ造りではあるが大理石で作られているかのように白く輝いていた。日の光を遮る雲は無い様子で、日光に照らされ軽く光っているかのように彼等の前に立ちはだかっていた。

「……ココは、こういう街なのか……… 自然よりも、人工物の多い街………」

軽くその街の大まかな雰囲気を見た様子で、ストレンジャーはそう呟いた。先ほどまでの地区は、壊れかけた建物や廃棄されたビルが点々と立ち並ぶ場所だった。しかし今いる地区は違い、比較的舗装が施され普通に住むにも格が違うかの様に訴えてくる場所だった。

そして何より人工物が多く、自然と言えるものはあまりない事を同時に知らせるような場所であった。

「でも、凄い芸術的ですね。驚いちゃいましたけど、とっても立派な宮殿です。」

「そうだな……」

そんな彼の考えはさておき、アルダートは無邪気にそう言いながら先を歩くように軽くゲートを抜けようとかけて行った。アルダートの変わらぬ様子を見て、ストレンジャーは軽く無表情だった顔から少し笑みを取り戻したかのように微笑み、彼の後をゆっくりと着いて行った。

二人がゲートを抜けると、外で見た外見通りの広さがある広場がそこにはあった。外同様の地面舗装が施されたその場所は、宮殿を取り囲むかのように柵に見せた壁が連なっていた。壁の先には白い宮殿があり、何の建物かは分からないが中もとても広そうな外見をしていた。

「でも、なんの建物なんでしょうね。こんな場所があるなんて、僕聞いたことありませんでした。」

いつしか隣通しで歩いていたアルダートは、初めてこの場所を知ったかのようにそう呟いた。外から聞く噂等で情報収集するのが基本であった彼なのに対し、話を聞いたことが無い建造物はこれが初めての様だった。

その証拠に軽く燥いでいる様子で、背後の尻尾が小刻みに左右に揺れており心なしか楽しそうな雰囲気を出していた。

「誰かの家か、はたまた資料を保管する様な場所なのか……… ……資料？」

「？ どうかしましたか、ストレンジャーさん。」

そんな彼の言葉を聞きながら返事をしていたストレンジャーは、不意に自ら発言した単語に違和感を感じていた。それと同時に歩が止まった事を知り、アルダートは振り返りながら彼に問いかけた。

「資料……… ……まさか、な。」

「？」

「……いや。……兵隊達に頼んだ内容で、受注したって言っていた意味はここにあるのかと、思っただけだ。」

「頼んだ内容……」

不意に彼はそう呟き、一つの仮説に行き着いたかのような仕草を取っていた。そんな自分を見ながら不思議そうに見ているアルダートを見て、ストレンジャーは軽くそう言いもしかしたらこの場に何かあるのかもしれないと言った。

彼の発言を聞き、アルダートは再び前を向き宮殿を見ながら何かがあるのだろうか、と考えていた。

「.....行こう。行ったら、何があるかが分かるはずだ。」

「あ、はいっ」

その後宮殿に向かう事を決めた様子で、ストレンジャーはそう言い再び歩き出した。彼の様子を見てアルダートも返事を返し、共に行動する様に再び隣を歩きながら宮殿へと向かって行くのであった。

宮殿の敷地内であるゲートをくぐったアルダートとストレンジャーは、そのまま目の前にある宮殿に向けて歩を進めていた。大理石で埋められた広間を通過し、何段も続く階段を彼等はゆっくりと昇って行く。そして階段を登り終えると、彼等は不意に後ろを振り向き外の様子を見た。

「うわぁ…… 綺麗。」

その光景を目にしたアルダートは、見たままの光景の感想を呟いた。

宮殿を囲うようにあるゲートは、遠くから見るとまるで小さな家々の様な風景を作りだしていた。柵に等しい代物であるのにもかかわらず、遠近法を意識して作り出したのか。家に見せかけた建造物として彼等の目に映っていた。

もちろんゲートの周りにはちゃんとした家々が立っており、無人ではあるがこちらも芸術的な代物には変わりはない。アンティークな色合いにパステルカラーの屋根が見事にマッチしており、まるで小物の様な作品と化していた。

「凄いなぁ…… ココもここで、とっても素敵な場所ですね。……あれ？」

そんな風景を見ていると、不意にアルダートは隣にストレンジャーが居ない事に気づき辺りを見渡した。

しかし階段周辺には彼の姿は無く、彼は先ほどまで見ていた宮殿の中を見ようと覗き込んだ。すると、数十メートル先に彼の姿がありアルダートが来るのを遠目でじっと待っていた。慌てたアルダートは急いで宮殿の中へと入り、彼の隣へと向かって走って行った。

その後彼が自分の元へと来た事を確認すると、ストレンジャーは軽く彼に笑顔を見せた後再び足を前へと向け歩き出した。彼の後をアルダートも共に歩きだし、二人は宮殿の中を散策し出した。

赤い絨毯の敷かれた宮殿内の通路は静かな空間を作りだしており、外同様人の気配は何処にもなかった。時折甲冑を纏った置物が点々とある以外は、これと言った変わった所も無く彼等の侵入を阻害する動きもなかった。通路を抜けると、ダンスホールに近い広い部屋へと彼等は入り込んだ。広間の壁には点々と別の部屋へと通ずる入口があり、この奥はどれくらい広い敷地があるのだろうと彼等は思った。

だがもとより広すぎると想定していた様子で、ストレンジャーは一通り辺りを見た後目的地がある様子で部屋の奥を一つ一つ顔を向け確認していた。

そして、とある通路に目を向けその方向へと向かって歩き出した。

「……ストレンジャーさん。何処へ向かって行ってるんですか？」

先ほどまで散策していた彼の様子が、今では目的地がある様子で歩いているのを悟りアルダートは彼に問いかけた。しかしこれと言った返答は無く、しばらく彼等が歩いた先に扉が見えてきた。それを見て、ストレンジャーは軽くアルダートを一視した後、口を開いた。

「情報収集が、出来る場所だ。……おそらく、あの先にあるだろうと思ってな。」

「あの部屋に……ですか？」

どうやら彼が向かっているのは、兵隊達に頼んだ『情報収集』が出来る場所となる部屋だった様だ。そしておそらくそれが出来るのは、今自分達の前にある部屋であろうと彼は言った。その後のアルダートの問いかけに彼は頷き返事を返すと、再びその部屋へと向かって歩いて行った。数十メートル先にある扉の前に到着すると、ストレンジャーは扉に手をかけゆっくりと押し開けた。

扉の先にあった場所、それは大きな書庫であった。先ほど彼等が見たダンスホールほどではないが、それに近い広間と2階3階へと昇る為の螺旋階段があった。吹き抜けの書庫と思われるその部屋は5階部分にまで広がっており、どの階にも本棚と色とりどりの厚さがまばらの本達が綺麗に置かれていた。

点々と場所によって机と椅子も置かれており、1階の広間の窓辺付近にはソファとそれに合うテーブルも置かれていた。

「凄い……書齋ですね……」

「書齋と言うより、図書館だな…… これだけあると。」

軽く扉の先に広がっていた場所を見てアルダートが驚く中、ストレンジャーもこれまでとは思わなかった様子で感想を言いつつ近くの本棚へと向かって行った。そして適当に1冊の本を手にし、軽く本を開いた。

そこには英語の筆記体に近い文字がずらりと並べられており、パッと見では読むのに慣れていない存在には解読に時間がかかりそうな代物だった。軽く本を見た後彼は持っていた本を閉じると、入っていた場所に入れ直し隣から別の本を取り出し、同じように中を見た。

すると今度は漢字のみで書かれたページが広がっており、これまた読むのに慣れていないと解読しなければならない代物だった。

「……字は、読める物から読めない物全てがあるみたいだな…… 自分達が読める物もあれば、そうでない物もありそうだ。」

一通りの手にした本に書かれていた文字を見た後、ストレンジャーは自分が読める物もあれば読めない物もあると理解した様子で言っていた。あいにく本棚に書かれている詳細はアルファベットが1つ書かれているだけであり、元より本のタイトルを意識して探していない彼にとって時間を要する様だった。

軽く彼の近くへと移動し本を隣から覗き込んだアルダートは、書かれていた文字にハテナを浮かべつつ不思議そうに見ていた。すると、

「……そういえば、ストレンジャーさん。」

「何だ……」

「情報収集って言ってましたけど、具体的にどんなのをお探しですか？ 僕も一緒に探しますっ」

不意にアルダートは、先ほどから気になっている事を問いかけた。具体的に求めている情報が何かを知らない彼であったため、大まかにどんなことを知りたいのかを気にしている様だった。事

によっては彼も一緒に探すことが可能であり、その面でもお手伝い出来ると思ったのだろう。軽く目を見て親身に言ってくるアルダートを見て、ストレンジャーは少し考え具体的に何が欲しいのかを彼に言った。

「アルダートが知るこの街…… この街で起きている事や、どうしてこうなったのか…… そう言った過去の事例や、流星石の事に関する本が欲しいな。君が知らない事を、きっと本は教えてくれるはずだ。」

「分かりました。じゃあ、僕は反対側の本棚から当たってみますね。近くで別々で探せば、見つけた後も移動しなくて済みますし。」

「ああ…… 頼む。」

彼の知りたい事柄を把握すると、アルダートはそう言い今見ている本棚の裏側から一緒に探すと言い出した。ご丁寧に近くには踏み台として使用できそうな備え付けの階段もあり、翼の無い彼でも高い位置にある本を探せる様だった。一緒になって探してくれる事を知ったストレンジャーは、彼の一生懸命に行動する姿を軽く見た後、再び求める情報が書かれた本を探しに本棚へと向かって行った。

書庫で一つ一つ本を確認し、読める物を彼等が探している頃……

「……取られたのね。見ず知らずの相手に……」

ゲシゲシッ

「ニャー…… 事実なのニャッ」

「下等が……」

彼等の居る場所とは違った場所、管理課の居る塔の広間では。管理していた一つの区域を取られた事を知った『プリンセス』と呼ばれる上層部の存在は、取られた相手であるネコSを地面にヒールで彼を踏んでいた。しかしお仕置きにしては程度が軽く、踏まれはしているが元よりプニプニしているネコのためそこまで痛そうには感じられない。

むしろネコはうつ伏せになって動けないだけの様子で、返事は普通に返していた。

「でも意外だよなあ。そういう行動をする奴が、まさかアイツの所が出るなんてさ。」

そんな仕置き風景を軽く見ていたジャッカルは、今までの環境で反逆行動をする存在が出た事に驚いていた。力だけでは、確かにネコの流星石は四人の中で一番強く『中和』する流星石の特徴を上手くとらえて作り上げた代物だ。それが負けると言う事は、予想をしていない行動が知らないところで起こっている事を彼等は意識せざる負えない様子だった。

「本当ね。一応、力では私達よりは強くて取られる危険性なんてないって思ったけど……」

「ニャーは現に負けたのニャ。改革者になろうとする、龍と狐にニャ。」

「……その割には、苦しそうではない様ね。いつもの事ですけど。」

ジャッカルの言った事に対し妖精はそう答えると、踏まれているネコの返答がさほど苦しそうではない事に軽く呆れていた。

「……嘆いて。」

「踏み心地は、いかがですかニャ？ プリンセス。」

「知らない。」

「……」

その後姫の発言にネコはそう答え、即効で返事を返す光景に遠くに居た二人は軽く溜息をついていた。しかしプリンセスに踏まれている現状を見た限りでは、誰かが止めに入っても不思議ではないのだが。元より扱いがおざなりなためか、特に割って入ろうとする存在は居なかった。

一人を、除いて。

「プリンセス。それくらいで許してやってくれないか。」

「……」

彼等の居たホールに、静かではあるが凜々しい声が聞こえてきた。その声を聞き彼等が視線を向けると、そこにはホールへとやってくる一人の獣人の姿があった。綺麗な蒼髪に暖色のバンダナをした細身の雄獣人であり、プリンセスに爽やかな笑顔を見せつつそばへと向かって行った。するとプリンセスは、先ほどまで踏んでいたネコから足を下ろし、彼の手に触れ優しく身体に身を寄せていた。

仕置きから解放されたネコは、そのままその場に立ち上がり踏まれた場所に着いた埃を軽く払っていた。

「それで、どんな存在が区域を略奪したんだ？」

軽く抱き寄せるように姫を撫でていた獣人は、ネコに対しどんな存在がしたのかを質問した。その質問を聞き、ジャッカルと妖精も軽く気になる様子でその問いかけの答えに耳を傾けていた。

「ニャーが見た限りだと、相手は2人ニャ。蒼色の龍に、空色の狐。どちらかと言うと、龍の方が強者だニャ。」

「背丈はどれくらいだ。」

「ニャーよりもちょっと大きい位ニャ。丁度、そこに居る二人とプリンセスに似た感じだニャ。」

答を聞き再度質問を返すと、ネコは二人の特徴を聞かれた範囲でいろいろ教えていた。しかしこれと言って名前を言う事はなく、出会った時で良いと判断したのだろう。

「えっ、俺達とか？」

「それもまた意外だわ。似た存在は、大抵屈伏してひれ伏してるか外へ逃げたと思ってただけれど。」

「だな。」

だが最後の返答に驚いたのは、質問した本人ではなく外部の存在達だった。元より彼等と似た存在が少ないのがこの街であり、昔英雄と呼ばれていた存在達も彼等と似た存在達ばかりだった。そのため、外へ出て行ったか無力でこの地にひれ伏す存在となっていると彼等は認識しており、それが改革者になるとは思わなかったのだろう。

普通に驚くジャッカルに対し、妖精は静かに悩むようにそう言っていた。

「……龍に狐、か。」

「ニャニャツ」

スッ

「プリンセス。少し、俺は席を外します。俺の管轄内に似た存在を見かけたから、少し調査してきます。」

ネコへ対する質問を終えた様子で、獣人はそう言い軽く姫の手を取り膝を付きながら相手に一言いいつつ許可を取っていた。元よりこういう仕草をするのもここでは当たり前の事であり、姫はその事を好んでおり彼の言った事に対し頷き、許可を与えた。

「おっ、なら俺も行こうか？ 可能性が高いなら、早めに潰した方がいいだろ。」

「それは名案ね。」

彼の管轄内にその存在が居ると言う話を聞き、ジャッカルと妖精も行動に同行しようかと提案した。危険な芽は早めに摘んだ方がいいと言うのが彼等の考えの様子で、ネコの力を負かした相手に対し興味もある様子だった。

「いや、調査段階だから無暗に俺等の姿を見せない方がいいだろ。俺の代わりに、プリンセスのそばに居てやってくれ。」

「……まあ、そう言うなら仕方ないっか。」

「いいわ。貴方の案を順守してあげる。」

だが獣人にも考えがある様子で、彼等の案には乗らず1人で行って来ると言った。元より謎の存在として扱われているのが管理課であり、姿を見せない方が賢明だと判断したのだろう。調査と言う事を口実に動いているため、と彼等に念を押しプリンセスのそばに居て欲しいと頼んだ。その後姫の手を離し、再び元来た道に戻り外の街へと向かって出て行ってしまった。

二人は彼の考えに乗り、静かに獣人を見送りつつプリンセスのそばへと移動した。

「……………」

「なあプリンセス。歌、また歌ってくれよ。俺好きなんだ、あの歌。」

「……分かったわ。」

その後彼の考えがある事を知りつつも、ジャッカルに頼まれプリンセスはそう言いつつ、テラスへと移動しつつ詩を口ずさみだした。姫の詩を軽く聞きながら2人も移動し、妖精はテラスの節

に腰かけつつその歌を聞き。変わってジャッカルは、テラスの節を背にその歌を聞いていた。

『ニャニャッ、やっぱりお主は頭のまわり方が違うみたいだニャ。あーは言っても、元より倒すつもりは無いのにニャ。』

そんな三人を見つつ、ネコは先ほどの獣人とのやり取りを思い出しつつそう悟っていた。彼は戦う事は望んでおらず、力として姫から貰っている流星石も乱用する事は無い。そうした生き方をする彼をプリンセスが好んでいる事もあってか、今回も二人の提案に乗らなかったのはそういう考えがあるからであろうとネコは思っていた。

しかし気づいたとしても、ネコは決して目の前に居る存在達には言う事は無かったのだった。

『んー………』

管理課でそんなやり取りが行われているとは知らずに、行動しているアルダートとストレンジャー一達。二人は静かにその場で『本を取っては読み、棚に戻しては別の本を手にする』という行動を繰り返し行っていた。

時刻はいつの間にか黄昏時となっており、部屋の明かりが常についているに等しい書庫ではあったが徐々に窓辺が暗くなるのを彼等は見ている。しかし、ストレンジャーが求める本がなかなか見つからない事もありアルダートは疲れた様子で近くの椅子に座り休憩していた。

「ハア……… ……こんなに探したのに、それっぽい事が書かれてる本が一冊も無いなんて。おかしいなあ……」

座ったままそんな溜息をつきつつ、アルダートは目の前に広がる広々とした書庫の風景を見ていた。一階部分を全て見終えた彼等は、今は二階部分と三階部分を見る担当に別れて行動していた。時折食事のために席を外すことはあったが、それでも時間が流れる事には変わりはない。その上疲労も溜まる為、さすがにそれには耐えられず彼は休んでいたのだ。

不意に上の階をアルダートは見てみると、そこでは変わらずずっと本を読んでいるストレンジャーの様子が見えた。彼は背中に翼がある為、届かない位置にある際は自ら飛び立ち羽ばたきながら読んでいた。自分よりも確実に体力を使っているはずなのに、それでも疲れを見せない彼に対し、アルダートは尊敬の眼差しを向けていた。

「やっぱり、ストレンジャーさんはカッコいいなあ…… ……僕も、そんな風になれたらいいのに。」

改めて彼の事をカッコいいと思い、アルダートはそんな彼のようになれずに居る事を少し残念そうに後悔していた。今までずっと彼の背中を追いかけ、今でも彼に頼られて行動していると思っていた。だが差は未だにある事には変わり無く、こういったところを見るたびに少しだけ寂しくなるようだった。

でも、諦めたらそこで終わってしまう。

それだけは彼の中でも一番分かって居る事のためか、アルダートは再び気持ちを入れ替えその場に立ち上がった。

「僕も……… ずっと追いかけるんじゃなくて、前を歩けるようにならないと。」

再びそう思うと、アルダートは右手を握りしめ胸元で手を強く固めた。その後前を向き、近くにある本棚へと再び向かい本を手にし中を開いた。

すると、

「……あっ ……コレ、もしかしたら…… ストレンジャーさんっ！」

彼の手にした本は自らが読める言語で書かれており、軽く内容を読んだ後アルダートは上の階に居るストレンジャーの名前を呼んだ。するとそれに対する返事が軽く返ると同時に、吹き抜けの広間に飛び立った彼の姿が映りアルダートの元へと降りてきてくれた。

その後手にした本をアルダートはストレンジャーに手渡し、彼の求める本かどうかを確認した。

「……コレだ。周辺の本も、少し拝借しておこう。」

「はいっ」

どうやら彼の目当てに近い本だった様子で、ストレンジャーはそう言いアルダートが見つけた本が入っていた書庫を見つつ他にも良い本があるかもしれないと言った。彼の声聞き、アルダートは別の場所に置かれていた荷台を手にしその本と近くにあった本を手にし積んでいった。一通りの本を集めると、彼等は広間にあったソファとテーブルの元へと移動しようと言い1階の広間へと向かって下りて行った。

それから荷台に積んだ本を数冊手にし、彼等は揃ってソファに座り一つ一つ読んでいった。近くにあったランプにも流星石で明かりを灯し、夜になっても彼等は作業を止めようとはしなかった。そして、気になった所を見つけてはアルダートはストレンジャーに声をかけ、確認してもらおうと時折話をする以外は口数は比較的減っていた。

声を掛けられていたストレンジャーはと言うと、何処からか拝借したのであろう紙とペンを使い文字を書いていた。どうやら気になるところをメモしている様子で、後でアルダートに見せるつもりでいたのであろう。

そんな作業を続ける事、しばらく……

パタンっ

「フウ…… ……これで、全部読み終わりましたね。」

「そうだな……… ありがとう、アルダート。」

積み込んだ本全てに目を通し終え、彼等は少し休憩するかのようソファに持たれ一息ついていた。アルダートの表情を軽く見たストレンジャーは、ずっと一緒に探してくれた彼にお礼を言いつつ軽く笑顔を見せていた。

「あ、いいえっ」

そんな彼にお礼を言われ、アルダートは嬉しそうに照れつつ笑顔を返していた。

「君が教えてくれた事もだが……… これで大体の現状は掴めた。問題は、ネコの言っていた『プリンセス』だな。……どの本にも、その事だけが書かれてない。」

「そうですね………」

一通り読み終え本で得た知識を確認する様に、ストレンジャーはそう言いつつ先ほどまで使っていたメモ用紙全てに目を通しつつそう呟いた。彼等が管理課と呼ばれる理由や、地区と呼ばれる

街の分断の理由。流星石の特徴や調合方法の参考例など、さまざまな事柄を彼も知ることが出来た。

後は今後のなりゆきや手法だけが求められるため、その点の配慮をしようと考えている様子だった。

『……あっ、本片づけないと……』

メモを見て考え事をしているストレンジャーを見て、アルダートはとりあえず使った本を片づけようとその場に立ちあがった。すると、

ガチャンッ

「？」

彼等の居た書庫と通路を仕切っていた扉が開かれる音が聞こえ、彼等は視線を扉へと向けた。そこにはランプを手にし歩いている一人の存在の姿が映っており、夜の闇に照らされ顔元が良く見えなかった。

しかし体系だけは良く見えており、彼等とは違い体格の良い存在が居る事だけは分かった。

「こんな所で、何をしているのかな……？ ちょっと変わった、お客さん達。」

「……」

しばらくその存在の姿を見ていると、影はそう言い書庫へと入りつつ澄んだ青年らしい声を発しながら問いかけてきた。部屋へ入ると同時にその存在の姿が見えだし、彼等の前へと来る頃には色も姿もはっきりしてきた。

藍色の髪を軽く整え、パステルカラーのバンダナを額に巻いた男の獣人。瞳の色は新緑の濃さを表現する様な緑色で、肌はパステルオレンジ色をしていた。体格は良く、青年の頃合いにジャストミートするほどの逞しい獣人だった。しかし口調は何処か優しく、表情も柔らかく警戒してはいるが敵視している様子はなかった。

「もしかして…… ココの管理主さんでしたか？」

とはいえ、自分達が誰であるのかを知りたい事には変わりはない様子だったため、アルダートは一つの仮説が浮かび軽く相手に問いかけてみた。すると獣人は軽く頷き、どうやらこの宮殿の所持者である事が分かった。

「あっ、勝手に上がってゴメンなさい…… 僕達、ちょっと本を読んで……それで……」

「……そうみたいだね。何か探し物か。」

「ああ……」

慌てた様子でアルダートはそう言いながら、怒られても仕方がないと思いつつも理由を説明していた。何を探していたかまでは言わなかったが、ここへ来た理由だけでも説明したかったのだろう。軽く獣人がそう問いかけると、今度は座っていたストレンジャーがそう言いその場に立ち上がった。

「勝手に上がりこみ、管理している書物に手を出した事……それは詫びよう。……だがその前に

、貴方の名前を聞かせてもらえないか。」

「？ それは意外な問いかけだな。名前は普通、自分から名乗る物だと思ったのだけれどさ。」

「.....それもそうだな。すまない、訂正させてくれ。」

アルダートが返答に困って居た事を見た後、ストレンジャーは再度相手に謝りつつ名前を聞きたいと言った。だがそれは相手にとっては意外な返答だった様子で、言っても良いが普通は自分から名乗る者なのではないかと言った。

そう言われ、ストレンジャーは相手の意見が正しい事を悟り今言った事を取り消してほしいと言った。

「俺はストレンジャー仮の名前ではあるが、今はそう呼ばれている。」

「僕はアルダートです。」

「ストレンジャーに、アルダートだね。.....俺の名は『クラウ・ルミナシール』 俺の大切な人から、もらった名前だ。」

二人は名前を名乗ると、獣人も続けて名前を名乗った。その後書庫の本に関する話を一時置き、三人は使った本を元の本棚へと戻しに向かって行った。

「.....なるほど。それでここへ来たのか。」

「あ、はい。」

持ち出した本を全て元に戻すと、三人は出会い初めに使っていたソファの元へと戻り話をしていった。二人がソファへ座る中、クラウは別の場所から持ってきた椅子に腰かけアルダート達の話聞いていた。そして、何故ここへやってきたのかを知った。

「それで、知りたい事は知れたのか？ 言語多様の書物があるから、探すのも苦労したと思うが。」

「ああ.....この街を平和にしたい、そうするための知識はほとんど知ったつもりだ。」

「僕はそんなストレンジャーさんのために、一緒に本を探してたんです。」

「そうだったのか。」

軽くクラウは問いかけると、彼等はそう答えこれ以上本を探し読むつもりは無いと言った。彼等の返答を一つ一つ聞き、クラウも彼等がここに居る事も無いだろうと判断した様だった。

「.....もう夜も遅い。今日はここに泊って行ったらどうだ。」

その後ソファの近くにある窓辺から外の様子を見た後、クラウは二人にそんな提案をしだした。元より外での野宿を勧めるつもりは無い様子で、街の雰囲気上道路では寒いと思ったのだろう。軽い笑顔を見せながら、彼はそう言った。

「えっ、でも..... 急にお邪魔したら.....」

「良いんだよ。どのみちこんなに広い場所だけど、使っているのは俺一人だからな。」

「そうなんですか.....？ ありがとうございますっ」

しかし提案にはすぐに乗れない様子で、アルダートは今いる宮殿のつくりを思い出しつつ断ろうとしていた。こんなに広い所に過ごしたことはない上、ましてや勝手に書庫を使った事に対する

負目もあったのだろう。だがさほど気にしていない事を再度彼が言うと、アルダートは少し意外そうに言いつつも提案に乗りお礼を言っていた。

そんな彼の嬉しそうな笑顔を見て、クラウも少し笑みを浮かべながら客人が出来た事を喜んでいた。

『……………』

だがその様子を、一緒に居たストレンジャーはあまり喜んでいない様子だった。それどころか、どこか彼の事を警戒している様子でもあった。

宮殿の所有者であるクラウドに許可を得ると、アルダート達は別の場所にある客間へと通された。クラウドが先導するように先を歩きつつ、手にしていたランプで辺りを照らしながら歩いていた。その後をアルダートは少し楽しそうにしながら着いて行き、彼の少し後を先ほどから変わらぬ表情でストレンジャーが歩いていた。相手に軽快している事を悟らせない様、表情はあくまで普通を貫いている様子だった。

『……やっぱり、君だけは少し違うみたいだな。改革者の、龍さん。』

そんな彼の様子を横目で見つつ、クラウドはそんなことを思っていた。元より出会い当初からしばらく会話をし、進んで話をせず最初から警戒している事を彼は知っていた。

見た目通りの抜け目のない態度と、その言動。そして支えたいと願う存在が慕うほどの行動力と、その情報収集能力。どの面でもアルダート以上にステータスがが高く、彼の上着に入っているであろう流星石の事もクラウドは知っていた。

クラウド自身も流星石は持っており、身に着けている衣服の下から軽くその瓶の姿はちらほら彼等にも見えていた。アルダートはさほど気にはしていない様子ではあったが、ストレンジャーはそれを見た時から相手が何をしても良いように警戒をしていたのだ。時折彼が髪的位置を直そうと手を動かした際、彼の手も軽く上着に入るか入らないかの位置で手を止めているのも見ていたのだ。その上でクラウドはこんな提案をし、その日の夜の行動を見るつもりでいたのだ。

そんな両者の警戒がありつつも、クラウドは客人を泊める際に使用する部屋の一室にアルダートを案内した。もちろん二人で一緒に寝られる様ベットが二つの部屋へと彼は案内しており、備え付けのシャワー室も使用していいと言った。

「それじゃあ、俺は別の部屋で寝ているから。ゆっくり休みな。」

「ありがとうございます、クラウドさんっ」

その後部屋の明かりをつけた後、彼はそう言い2人を残してその場を後にした。丁寧な対応をしてもらった事に感謝をしつつ、アルダートは笑顔でお礼を言い彼の後姿を見送った。

「……うわぁあっ、フカフカのベットですっ！」

クラウドの姿が見えなくなると、アルダートは早速部屋にあったベットの元へと駆け寄った。そしてベットの布団に手を付き、先日彼等が過ごしていた場所で使用した毛布の感触ではない事に驚きを感じていた。

布団の質感は『ウール』と言うよりは『シルク』に近く、さわり心地は良く羽毛布団で作られたふかふかのベットだった。ベット自体にも弾力があり、適度に固くそれでも低反発性のある寝心地抜群と思われるベットだった。その上天蓋付のベットであり、客間としては最高級の代物だと思われた。

「ストレンジャーさんっ、ベットふかふかですよ！ 僕初めてですっ！」

「……そうか。良かったな。」

「はいっ！」

一人テンションが高い事は気にせず、アルダートは無邪気に隣に居たストレンジャーにそう言った。すでにベットに腰かけていたストレンジャーは変わらぬ表情で彼にそう言い、ベットの上で軽く飛ぶように跳ねている彼の事を見ていた。

その後何かを思い出したかのようにアルダートはベットから降りると、一足先にシャワーを浴びると言い隣接するシャワー室へと向かって行ってしまった。一人残されたストレンジャーは、アルダートの姿が見えなくなると部屋の様子を軽くうかがった。

ベット以外は大したもの無く、テーブルとイスが点々と置かれているだけのシンプルな物だ。壁際にはサイドテーブルと花瓶も置かれており、大きなガラス窓からは夜の闇でも生える綺麗な満月が見えた。しかし置かれてる小物全てが敵の範囲化である事を忘れてはおらず、一つ一つを確認し危険性がない事を確認していた。

『アイツが管理課の一人、藍髪の獣人に間違いはない……でも何故、俺達を見つけた時に手を出さなかったんだ……？ 自分が所有する建物の中なら、迎撃態勢を取れば即座に俺達を倒す事もたやすいはずだ。……わからない。』

花瓶やテーブルを確認しながら、ストレンジャーは軽くそんなことを考えていた。すでに相手が倒すべき敵の一人である事を確信しており、間違いなく隙を見せたら倒されると思っていた。そのため書庫でのやり取りをする際も、彼の視線や手の動きに気を配っており、上着の中に入っている流星石を即座に仕えるよう待機していた。

しかしそれらしい動きは何一つ見せておらず、部屋の外でも待機している様子もない事を彼は意外そうに感じていた。

彼が何を考えているのか。

それがまったくわからない様子だった。

『この部屋自体も、さほど危険性は無いみたいだな……そうなる、今後の動き次第か……』

その後部屋の隅々をチェックし終え、アルダートが戻ってくる頃には彼なりに安全を確認した状態だった。そして彼の勧めもありシャワーを浴びると、二人はそのままベットへと入り床に就いた。

それから時間が過ぎ、夜の闇は静かに朝日によって溶かされていった。アルダート達の寝る寝室にもその朝日は静かに差し込み、天蓋についていたカーテンを抜けて彼等の目元にも朝日は優しく触れだしたのだった。

「……うーん……」

窓辺のベットで寝ていたストレンジャーは、カーテンを抜けてほのかに照らされ出した部屋の雰

困気に目を覚ました。別の街でもアルダートより早く起きる事の多かった彼ではあるが、その日は敵の行動もあり浅い眠りを常にとり続けていたようだ。

その証拠に、纏っていた衣服はすぐそばに置かれており、流星石に関しては枕の下に置かれていた。一つ一つが寝る前と同じことである事を確認すると、ストレンジャーは静かにベットから降り窓辺へと向かって行った。

「……朝、か……」

朝日に再度照らされ出した街の雰囲気を見つつ、ストレンジャーは再び朝がやってきた事を悟った。客間から見える街の景色はとても綺麗で、まるで先日見た流星石の雨の時の様に輝いていた。朝靄で家々が軽く暈されて見える中、不思議と幻想的に見える景色に彼は静かに見ている。

『結局、警戒する事もむなしく朝が来たな…… アルダートの平和のために意識してたが、奴は本当にそうなんだろうか……』

そして朝が来たと同時に、本当に彼は敵なのだろうかと再度疑ってしまうようだった。本に書かれていた管理課の存在を、彼はアルダートに軽く話す前にクラウと会ってしまった。そのため彼にはまだその事を話しておらず、ストレンジャーも確信はしているが決定点に欠ける様子で考えていた。

管理課と言う存在は四人おり、ネコSがそのうちの一人の『茶色の猫』あることも彼は知っていた。そして残りの三人は『真紅の妖精』と『橙色のジャッカル』、そして『藍髪の獣人』である事を知った。どれも色と特徴的な事が書かれており、事実判別するにもその点でしか判断する事しか出来なかった。

クラウは確かに綺麗な藍色の髪の毛をもっており、間違いなく獣人だ。だがアルダートの接し方を見ている限り、とても敵とは思えなかったのだ。

『……危険性は薄いと思うが、いつ牙をむけるかわからない。早く、その事を見破らないと……』

「……？」

軽くその事をストレンジャーは考えていると、不意に気になる物を見つけた。それは先ほどまで見ていた左側の街の景色とは別の場所であり、反対側の右側の景色だった。そこは今いる部屋と隣接する宮殿であり、その宮殿の屋根に一人の存在が座っていたのだ。

そして座っている存在に、彼は見覚えがあった。

「クラウ……？」

不意に考えていた事を悟らせるかのように見えた存在を見て、ストレンジャーはアルダートを起こさぬように静かに歩きつつ。なおかつ前回の時のように心配させない様、行先を軽く書いたメモを残し部屋を後にした。

「……」

ストレンジャーが見た宮殿の一つの屋根の上に座りつつ、クラウドはその日もやってきた朝日を静かに見ている。就寝と言えほどの深い眠りは彼は取る事は無く、軽い休息を取り朝日を見る事が一つの楽しみだった。そして宮殿内で一番朝日がよく見える場所、それが今彼が座っている箇所の屋根の上だった。

「.....今日もあの人が寂しく思う、一日がやってきたのか.....」

それと同時に、少しさみしそうにクラウドはそう呟いた。朝日が見えると同時に、嬉しさと寂しさが同時に彼の元へとやってくるのだ。しかしこの瞬間を見ない限り彼は新しい日が来たとは感じられない様子で、とても大切な時だと思っている様だった。

そして、彼が大切に思う存在が寂しさを感じてしまう日が再びやってきてしまった事も、同時に悟るのであった。

静かに一人、朝日を見て黄昏ていると

スッ

不意に背後で何かが降り立つ音が聞こえ、クラウドは振り向かず来たであろう相手に対し声をかけた。

「……おはよう、ストレンジャー よく眠れたかな。」

「……………」

そこに立っていた存在、それは先ほど眠っていた部屋を後にし近くの部屋までやってきていたストレンジャーだった。屋根に上るための階段等に検討がつかなかったため、近くの部屋の窓から空へと飛び立ち、ここまで来たのだ。

一番自分の事を警戒しているであろう彼なら、即座に来てもおかしくない。クラウドはそう考えた様だった。

「心配されるほど、俺は眠っていないと思われていたみたいだな……」

「仕方ないさ。君が考えている事と、俺が考えている事はおそらく同じだろうからな……

… ……」

声に対しストレンジャーはそう答えると、朝日を見たままの体制でクラウドはそう言った。彼が言うほど熟睡は確かにしておらず、どちらかと言うとまだ軽い眠気がストレンジャーの中には残っていた。

そのため否定はせず、問いかけに対しそう答えたのだ。ストレンジャーにそう言われ、クラウドは静かに振り向きしばしの沈黙の後こう言った。

「俺の事を、とても警戒しているんだろう……？ 君はさ。」

「……………」

互いに思っているであろう事をクラウドは言うと、彼は何も言わず静かにクラウドを見ていた。その目は静かに彼の事を見つめており、その場から何か動きを見せてもさほど行動しそうには無い様子だった。

「無理もないな。君が読んでいたであろう書物の一つに、俺達管理課の事を書いた本があったから。藍髪の獣人、そこで引っかかっているんだろう……？」

「……………事実、お前は本当にその存在なのか……？ アルダートが心配そうにしない存在が、管理課だとは俺は思えない。」

「そっか…… ……君は、俺の事を敵だとは思いますが確信にかける様子だったのか。どおりで、警戒態勢がいつまでも抜けないわけだよ。」

ストレンジャーがおそらく読んだであろう書物を片づけた時、クラウドはそう感じていた。そして

それから話をし、案内をしてからも自分の行動をずっと見ていた事もクラウドは知っていた。今もなお警戒する事を止めない様子で、口調からも優しい表情を見せないストレンジャーに彼はそう言いつつその場に立ち上がった。

「警戒しなくても良いって言ったところで、君はそれを止めるつもりは無いだろうけどね。……俺は、確かに君が思う管理課の一人の存在だ。プリンセスの元で行動する、藍色の髪の毛を持った獣人だ。」

「……………」

「そして、俺が君達と接触した理由。それはネコSから聞いた、改革者の話が事実かどうか。それを知る為だ。」

「そうだったのか……………」

静かにクラウドはそう言いつつ、ストレンジャーの隣をゆっくりと通り過ぎつつ話を続けた。そして何故自分がその場に來た事も同時に話し、偽りや誤解等があったらそれを換えようとしていた。話を一通り聞くと、ストレンジャーは右手を入れていたポケットから手を出し、静かにクラウドが居る方向へと向いた。

「あの子狐君は分からないが、君は間違いなくその素質は持っている。君の持っている力がどれくらいかは分からないが、おそらくそれを生かすほどの希望が君の中にはあるんだろう。」

「……俺の希望、それはアルダートの願い自身だ。彼と出会い今まで行動を共にしてきたが、自然と俺の事を意識づけてくれるほどの存在だ。……あそこまで俺を慕ってくれる存在が、今まで居るとは思わなかったからな。」

「そうだったのか。……その願いを悟れない様じゃ、俺はまだプリンセスの事を完全に把握できていない証拠だな。」

「……………」

警戒する事を止めた事を悟りつつも、クラウドはストレンジャーに今まで見てきた結果を軽く報告した。改革者にふさわしい行動ぶりを見せており、紛れもない力がその身体の中には入って居る事を告げた。しかしそれだけの力を勇気づける希望が、この街の何処で見つかったのかが分からないと言うと、ストレンジャーはそう言いアルダート自身がその希望だと告げた。

名前を持たない自分を慕い、なおかつずっとそばに居たいと思う存在が今まで彼の中にもいなかった。ゆえに1人で行動する事を好み、誰にも知られず誰にも認識できない『見知らぬ人』で居た。そしてそんな自分にピッタリの名前を付け、今もなおずっと一緒に居たいと思いつけているアルダートを彼自身も好きでいた。

だからこそ彼の願いを叶え、同時に自分がもとより探していたであろう存在に出会える日が来ることを願っていた。

互いの話を一通り終わると、クラウドはそう言い再び朝日を見た。その目は何処か遠い場所を見つめる様に、寂しくもあり温かさを求めるような目をしていた。

「……それで、どうするんだ。アルダートには、このことを告げるつもりなのか。」

クラウドの行動を見て、ストレンジャーは同じように朝日を見つつ彼に問いかけた。たとえ背後

であっても、今の彼なら特に何もしないと思ったのだろう。静かに問いかけ、そして同じ時間を共有していた。

「いや、まだそれには及ばないと思うね。俺にも時間はさほどないとはいえ、焦って余計な事をしてプリンセスのためには絶対にならないと思うから。……そして、あの人のためにも。」

「あの人……？」

「ああ、言ってなかったね。俺にはプリンセスと言う心から大切に思う、大好きな人が居る。……でも、その人に出会う前に。俺には大切な人が居たはずなんだ。……でも今じゃ、何処に居るかわからないんだ。」

「……………」

彼の問いかけに対しそう答えると、目先は変えずにクラウドは顔色を暗くしつつそう言った。不意に気になる単語を聞いたストレンジャーの反応を見て、クラウドは改めて説明する様に自分の過去を語りつつ右手を見せた。

彼の右手の薬指には一つの指輪がついており、綺麗な淡い色の宝石が付いた銀の指輪が付けられていた。そして、それを貰った相手であろうプリンセスの事を心から想っている事を告げると同時に、もう一人大切に思っている存在が居ると言った。

クラウドの過去を聞き、その上層部の存在をどれだけ思っているかをストレンジャーは考えつつ聞いていた。

「……君は、プリンセスの事は嫌いかな。あの書庫には、その書物はおいていないけれど。君の考えが聞きたい。」

不意に話を終えると同時に、クラウドはストレンジャーにとある質問を投げかけた。それは自分が今大切に思っている謎の『プリンセス』と呼ばれる存在の事であり、置いてある書物のどれにも書いていない事をあらかじめ告げつつ問いかけた。

「……ネコからの話を聞いた限りだと、街の存在達を苦しめるだけの存在だと思っていた。……でも。」

「？」

問いかけに対し返事を返しつつ、ストレンジャーは一瞬を空けてそう言いつつクラウドの目を見た。不意にこちらを向くとは思っていなかった様子で、クラウドはそんな彼の様子を見ながら言葉に耳を傾けた。

そして彼は、こう言った。

「クラウドの話を聞いた限りだと、そんなに苦しめる存在ではないと思った…… お前ほどの心優しい存在が、そんなに残酷な事をする存在を心から好きになるとは思えない…………… ましてやその人から貰ったであろうその『繋がり』を、常につけているとは思えないからな。」

「……そっか。」

彼の返事を聞くと、クラウドは軽く目を閉じ少し笑顔を見せながら彼を見た。ストレンジャーの表情は先ほどから変わりはないが、それでも目はまっすぐ前を見ており曲がる事のない意志の中に居ると彼は悟った。

そして返事を聞いた事に感謝し、クラウドは笑顔で言った。

「ずっと俺を警戒しなくても良いとは、言わない。……でも、その考えだけはずっと持っていて欲しい。あの人のためにも、約束してくれ。」

「……分かった。」

短くも決定的な事に欠ける言葉ではあったが、クラウは彼にそう言い約束して欲しいと言った。それに対し、ストレンジャーは静かに頷き考えを変えずにいようと彼に言った。その後彼の案内に従いつつ、ストレンジャーは再び宮殿の中へと戻って行った。

それからは二人でアルダートの元へと向かい、彼と共に食堂へと二人は通された。誰が用意したのかわからない食事を振る舞われ、二人はそれでも警戒はせず温かい食事を口にした。そんなアルダート達の様子を、向かい側の席でクラウは静かに見守り自分も食事を取っていた。

その後宮殿の事をアルダートに問われ、三人は宮殿の中を散策する事となったのであった。

「本当に広いんですね、ここって。」

「まあな。」

アルダートの提案により、宮殿内を散策する事となったストレンジャー達。書斎から移動する際に通った通路とは違う場を通りつつ、日差しの差し込める中庭へと彼等は向かって行った。

宮殿の入口の豪華な造りもさることながら、彼等の向かった中庭もとても豪勢な造りとなっていた。丁寧に刈り揃えられた芝生に、彼等が管理者である事を象徴するかの如く整えられた数体のオブジェと生垣によるモニュメント。点々と設置された花壇からは綺麗な花々が咲き乱れており、まるで春先の空間に迷い込んだかのような雰囲気漂っていた。

しかし時期は肌寒くも無く熱くもないと言う妙な頃合いであり、間違っても『春』ではない。それだけは言える、その日の四季だった。

「中庭ですよね！？ 凄い、まるで公園みたいです！」

目の前に広がる中庭を見て、アルダートは驚きながらも隣に居たクラウに問いかけた。すると彼は軽く頷き、所有地であり持ち場でもある事を同時に伝えた。

「敷地の一角を全て使った庭園だ。良ければ見てくると良いよ。」

「うわぁ！ ありがとうございますっ！」

中庭全体を見てきて良いと言われ、アルダートは笑顔でお礼を言い中庭へと入り込んだ。大理石で出来た足場を軽く跳びながら移動しており、無邪気に彼ははしゃいでいた。それだけ、この空間が気に入ったのだろう。

「…………… ……これだけの場所が、ここにもあるのか。」

そんなアルダートの様子を見ながら、ストレンジャーは軽く呟きながらそう言った。宮殿の造りは今朝のやり取りで一通り見ていた事もあり、どれだけの土地を管理しているのか彼には想像もつかない。

だが、これだけの自然を有する場所がある事は嬉しいようだった。

「プリンセスが好む場所を管理するのが、自分だからね。あの人少しでも心の苦しさを緩和出来る場所、時間を俺は造りたいんだ。」

「……もう一人、会いたい人のためにもか。」

「そうだよ。」

呟き声に対しクラウはそう答えると、アルダートの様子を見つつ中庭へと足を踏み入れた。自分が大好きな人の好む場所を作りだし、なおかつそこを管理するのが自分の仕事だと言った。それに対しストレンジャーは問いかけを彼にすると、それにもクラウは肯定するかのよう返事をしつつ頷いた。

その後2人は特に会話はせず、静かに中庭の空間を楽しむかのように吹いてくる微風に髪をなびかせていた。何処か遠くを見ている気もする二人ではあったが、今では互いに警戒する事は無く

静かにその場の時間を堪能している様だった。

大切な物を守ろうとする存在と、願いのために行動する存在。

対なる存在同士ではあったが、今は特に気にしていない様だった。

「……一つだけ、今の君にしてもらいたい事があるのだが。受けてくれるかな。」

「? ……なんだ。」

しばらくすると、クラウドは不意に隣に居たストレンジャーに対し提案を持ちかけた。何かをして欲しいと敵側の存在から頼まれるとは思っていなかった様子で、ストレンジャーは軽く驚きながらも内容を聞いた。

「俺達は確かに敵同士、それに対する行動もしないといけない。……君の実力を知りたい、少しでも相手をしてもらえないか。」

「……………それは『この街の力を使って』の応戦をしてほしい、と言う意味か……………」

「多少の情報提供をしないとけないからね。それも込みで、素手でのやり取りもしてほしい。」

彼の頼みは、敵であるがゆえにしなくてはならない行動。相手を負かせるための行いであり、情報を上に伝えないといけないと彼は考えた上で行ってほしいと言ってきた。

もちろんストレンジャーからしたら大切な情報収集の場ではあるが、流星石の使用制限を減らすと言う事でもある。メリットもあるがデメリットもある様子で、返答に困りながらも少し考え結論を出した。

「……分かった。お前の願い、叶えよう。」

「感謝するよ、見知らぬ龍君。」

考え出した上での結論を聞き、クラウドは軽く笑顔を見せながら彼にお礼を言った。敵同士でなければ、これ以上のコンビは生まなかつたらう。そう思わせるような二人であり、宿命には逆らわない様子で彼等は返事をし互いに握手をした。

その後アルダートが庭園に居ないと心配すると言うストレンジャーの申し出を聞き、彼等は庭園で暴れても被害が出にくい場所へと移動して行った。

「……ココなら、広い空間であるし花達に被害が出る事は無いだろう。」

やり取りの後、彼等は庭園の中央から少し外れた位置にあるちょっとした空間へと移動していた。そこは大理石で作られた足場が綺麗に集まる場所であり、一休みするための空間であり広々とした場所でもあった。所々に足場と同じ素材で作られた柱が立っており、外の空間と同化するための施しもされていた。

その後クラウドは下げていた流星石を1つ手にし、軽く身体を柔らかくするようにストレッチをし出した。それを見たストレンジャーも同様に着ていた上着を脱ぎつつ流星石を手にし、手足を痛めないようにとストレッチしていた。

両者が倒すためではない戦いだとわかっている、それでも全力で行こうとする雰囲気は漂っており、少し間違えたら相手を倒しかねない雰囲気も出していた。だが互いに手加減はする様子で、実力を相手に示す場にはもってこいの空間が出来上がりつつあった。

「……いつでも良いぜ、クラウ。」

一通りの準備運動を終えた様子で、戦う態勢が出来上がったストレンジャーはクラウに声をかけた。それに対しクラウは軽く頷き、こちらも準備が出来た様子で軽く構えを取っていた。

「それじゃあ、お手柔らかに頼むよ。見知らぬ龍であり、改革者の龍『ストレンジャー』」

「お前こそ、な…… 藍髪の獣人『クラウ・ルミナシール』」

バツ！

その後戦闘前の一声を駆けるように言い合うと、両者は大地を蹴り戦闘へと身を投じて行った。

「ハアッ！」

戦いに身を投じ、先に攻撃を仕掛けたストレンジャーは流星石を一度ズボンに入れ素手での戦いを彼に挑んでいった。背丈差もありボディに力強く入れる事は困難ではあったが、それでも彼は頼まれた戦い方に近い行動をしようとしていた。そんな彼の真正面から見る強い眼差しを感じ、クラウもそれに応戦しようと瓶を再度腰から下げ素手で挑んで行った。

バシッ！ バシッ！！

「ッ……！」

しかし何回か相手のボディに向けてストレートパンチを放つものの、なかなかクラウの身体に入る事は無かった。全て相手の掌や腕で受け止められてしまい、それなりに威力を絞って放つても良い感触の攻撃は出なかった。

「なかなか良いな。体系と予想する切れのある攻撃とは、また何か違う。」

「……やはり、そう簡単にはボディに入るわけないか。お前等の主が認めた、四人の管理課の上位者の一人ってこともあるか……」

その後も蹴り上げや回し蹴りによる攻撃も放つと、攻撃を見切りつつクラウがそんなことを呟いた。大体の威力の予想はついていたものの、どうやら予想以上の威力を出していた事に驚いたのだろう。

ストレンジャーも彼同様の考えを持っていた様子で、そう簡単に倒れる相手ではない事は両者が分かって挑んだ勝負。それは長期戦以前に、とても楽しい戦いになるであろうと両者は軽い笑みを浮かべ戦いを楽しんでいた。純粋な敵同士ではなく、互いに認め合う好敵手の様に。

「素手はもう十分楽しめたな。……そしたら。」

スッ

「……流星石か。」

数発の素手による攻防戦を十分楽しめた様子で、クラウドは不意にそう言いながらストレンジャーとの間合いを取る様に後方にバク転した。その後下げていた流星石とは違う石をズボンから取り出し、彼に見せるようにその瓶をちらつかせた。

「打撃武器による君の力も見させてもらおうか。おそらく剣術は得意と見えるから、君にはこの武器で対抗してもらおうよ。」

一通りの戦いを見て何かしらの予測をした様子で、彼はそう言うと言っていた流星石をストレンジャー目がけて放り投げた。

「……それも、予測済みか。」

「どうやら、当たっているようだね。」

パシッ

「……否定はしないさ。」

シャキンッ！

彼の予想に否定はしない様子で、ストレンジャーはそう言いながら投げ放たれた流星石を受け取り、吹きながら栓を引き抜いた。すると、栓に続いて液体が流れ形が形成され細長い棒状の杖がその場に形成された。

「『杖（ロッド）』か……… ……面白いな。」

「さあ、その武器で君はどう戦うかな。見させてくれ、改革者の龍……！」

バツ！

出来上がった武器を見てストレンジャーは軽く吹き、何の流星石であるかをわかっている様子で武器を見ていた。何時しか色合いがまとまり茶褐色の杖が彼の手元にはあり、先端には無色の水晶がはめ込まれていた。武器を持ったことを確認すると、クラウドは持っていた別の流星石を武器へと変換させ再び彼に戦いを挑んで行った。

もちろんそれを見たストレンジャーも動きを見せ、両手でしっかりと握った杖と共に、再び彼に挑んで行ったのだった。

「ハァアアッ！」

手元に生成した『槍（ランス）』を構えると、クラウドは攻撃を開始した。両手で持っていた武器を右手にしっかりと持つと、彼はストレンジャーに向けて槍を振り下ろした。それを見かねたストレンジャーは、攻撃の方向と着地点を推測し身体を右へと移動させつつ杖を構えた。

「……破ッ！！」

攻撃を回避し隙を突くように彼は気合を入れ腹から声を出し、杖を振るった。行動を見たクラウドも攻撃を避ける様に身体のバランスを後ろへと向け、再びバク転をしながら避けようとした。すると、

パシュンッ！！

「なっ……！」

彼の振った杖の先端から小さな閃光弾が飛び出し、弾け飛んだ様な破裂音が響いた。それと同時に一時的に風が周囲に飛び交い、クラウドが取ろうとした行動のバランスを崩した。片手でバランスを取ろうとしていた事もあり、そのまま彼は前のめりに地面へ身体が傾き後転した。

「……まさか、何も施していないその力を放つなんてね。驚いたよ。」

仕方なくそのまま転がり体制に戻すと、クラウドは再びその場に立ち上がり口を開いた。本来であればただの打撃武器でしかない『杖ロッド』では、槍よりも切れ味はないものの棍棒として使うことが普通だと彼は読んでいた。ましてや自らが貸した流星石と言うこともあり、予想の範囲内で収まると思っていたようだ。

しかし現状ではその予想を超えた威力を発揮し、発動した本人であるストレンジャーも不思議そうに見ていた。

「……本来なら出ないのか。……大丈夫か。」

「普通なら、な。平気さ。……まさか敵対している存在に気を使われてしまうなんてね、情けないな。」

「……………」

借りた力にも関わらず予想外の行動をした事を知り、ストレンジャーはクラウドを見つつ声をかけた。それに対してクラウドは返事をし、敵対している彼に気を使われている事に少し恥を覚えているようだった。

たとえ表向きの敵であっても声をかけたことは不味かったと知り、ストレンジャーもそれ以上は何も言わなかった。

「仕方ないね、こういうのは止めにしよう。……後は、本気の力で戦うだけ。もう手加減はしないよ。」

バランスを崩した際に落としてしまった流星石を回収しつつ、クラウドはそう言った。自らが提案した行動とはいえ、まさか自分が彼に対して劣勢になるとは思わなかったのだろう。少々意外な結末でもあり、遊ぶ戦いでは満足はしなくなってしまった様だった。少しだけ彼の目つきも変わっており、先ほどまでの柔らかい笑顔から真剣な目つきへと変わっていた。

そんな彼の様子を見て、本当に自分の前に立っているのは敵なのだとストレンジャーは改めて認

識した。たとえ話をした相手であっても、互いに立つ位置は違い護るべき物も違う。彼の護る物は『大切な存在』であり、自分の目指す『希望』とは共存し得ない関係。本当に敵でなければ、どれだけ違う関係に慣れただろうか。ストレンジャーは静かにそんな事を思っており、この世界が作り上げた悲しい関係を改めて知るのだった。

「.....分かった。俺も、自らが持つ力で戦わせてもらうぜ。」

「頼むよ、ストレンジャー」

本来のやるべき事を自覚したように言ってきたクラウの提案を聞き、ストレンジャーは静かに返事をし持っていた流星石を元の瓶の姿へと戻した。それと同時に、ズボンのポケットに入れていた彼の持つ力を取り出し本気で対立しようと思うのだった。

静かに行動し準備をする彼を見て、クラウも槍を捨てベルトに引っ掛けていた流星石を手にした。彼がつもっても強いと思われる力であり、下手したらネコの時同様に化物と化して襲ってくるかもしれない。

どんな力であっても対抗しようと、ストレンジャーは気合を入れなおし再び対峙するのだった。

「さあ…… 来い！！」

「行くぞ……！！」

対峙し準備が整ったと同時に、クラウの叫び声を聞いてストレンジャーは行動を開始した。走りながら距離を詰めると同時に流星石の栓を開け、周囲に冷気を漂わせながら瓶を振った。それを見たクラウも同様に瓶の栓に手をかけ、静かに栓を開けた。

ヒュー…… シャキンッ！！

「破ッ！！」

周囲に生成した氷の塊を目にすると、ストレンジャーは再び瓶を振りかざしクラウへと向かっていくよう指示した。手の動きによって微量の風が生まれると同時に、氷の塊は瞬時に移動を開始し塊のまま彼へと攻撃を開始した。

「『氷（グライラ）』か、面白いね。……でも。」

シュンシュンッ！

「水……？」

自らの元へと接近してくる氷の塊を目撃し、その場に立っていたクラウは瓶を振りかざし中から液体を放出した。中から出てきた水色の液体は連なったまま宙を飛び交い、鞭の様に變形した。

とはいえ物体は水に違いはなく、先ほどの『杖（ロッド）』の様に色は変わらず質感を液体として保持したまま姿を保っていた。

「ハァッ！！」

しばし形を作るように鞭を振っていた、その時。クラウは迫り来る氷の塊目掛けて攻撃を開始し、鞭で叩く様に氷を叩いた。攻撃を受けた氷はそのまま周囲に向けて飛び交い第二の攻撃を開始しすると、それを予測していたかのように彼は振った体制を保持しつつ足を捻り、その場で少し回転した。

そして回転した運動エネルギーを利用したまま再び鞭を動かし、弾け飛んだ氷をなぎ払う様に鞭で防御した。その行動をしばらく繰り返し、ストレンジャーからの攻撃をほぼ全て無効化していた。

一部の弾け飛んだ氷で自らの身体に攻撃をしないものはそのまま彼の横を素通りし、背後の地面に突き刺さっていた。彼の使っている力、それは『水（イアーラ）』と『弾力（エラティ）』、そして『曲力（ミスキー）』を併せ持った流星石『水力光鞭（イアーラミスティ）』だった。形の安定しない水そのものを素体とし、さらに弾力と曲る力を組み合わせ安定した形となる打撃武

器へと形を変えた代物だ。

その動きは鞭そのものであり、生み出された新たな生成系の流星石でもあった。

「鞭……か。」

「ただの鞭だと、思ってもらっても困るよ。俺の力はただの力ではない、プリンセスを護るための……華麗なる遊戯だ！」

意外な武器を使っていることを目撃したストレンジャーは、彼の周囲に突き刺さる氷で乱反射する光の光線を見ていた。凛々しい顔と身体付きをしている男の獣人の、華麗な攻撃であり優雅な戦い方を見せていた。庭園に咲く花が風に吹かれて舞い、突き刺さる氷から出た日の光がさらに彼を美しく見せていた。

何処か楽しんでいた彼の光景を目にした直後、クラウドはそういい手にする流星石を持ってストレンジャーに攻撃をしかけた。立っていた位置から少し移動しつつ鞭を振り下ろし、彼の立っている場所目掛けて攻撃を落とした。迫る鞭の攻撃を目にし、ストレンジャーは翼を広げ上空へと避けた。

しかし、

「残念だけれど、甘いよ。」

「何ッ……！！」

パシュンッ！

「クッ！！」

床へと打ち付けられた鞭はそのままバウンドし、本来の鞭の攻撃ではあり得ないほどの弾力性を発揮し出したのだ。まるでボールを地面に思い切り投げたかのように鞭も跳ね上がり、飛んだにもかかわらずストレンジャーの顔面に鞭の攻撃が到達した。

予想外の攻撃を頬に食らい、ストレンジャーは打たれた頬に走る痛みに耐えていた。

「……悪いけど、もう手加減はしない。プリンセスの希望になりえるのはどちらか、ここで決着をつけさせてもらう。ストレンジャー」

攻撃と同時にバランスを崩した彼は、一度体制を直しつつクラウドを見た。その様子を見たクラウドは静かにそういい、もう手加減をするつもりはないと改めて宣言していた。

「さあ、改革者の龍。……俺を、倒してみてくれ。希望のために行動し、プリンセスを泣かせるのであれば……俺は、もう君を味方だとは思わない！」

軽く見つめられたクラウドは少し俯きつつ呟いたと思うと、その直後に顔を上げ彼に向けて宣戦布告をするのだった。その表情は真剣そのものであり、これ以上の仲違いは使命に変化が出てしまうと思ったのだろう。それだけ互いに和解する時間が長すぎた事もあり、両者が相手の事を考えすぎた。

現に自分が怪我をしそうになった時にストレンジャーは気遣う言葉を向けたため、クラウドにとってそれは優しさに近い言葉でもあった。だが相手は敵であり、自分の大切な存在の命を奪いかねない存在。それを改めて知ったと同時に、それ以上の仲は自分の生きる意味を失いかねない。心

を鬼にしたかの様に、クラウドは武器を振り彼を倒そうとするのだった。

『クラウド…… ……お前って本当に、優しい奴だな……』

そんな彼の行動の急変振りを見て、ストレンジャーは地面に降り立ちつつそう悟っていた。つい先ほどまでのやり取りと敵であるが故の行動を取りたいと告げられた時から、彼はクラウドの事を敵だとは思っていなかった。

例え言動が変わり本当に敵だと悟ったとしても【倒すべき相手】ではないと思った様だ。表情は変えないものの、彼をそうさせてしまう今の仕組みがある事をストレンジャーは悲しんでいた。

「……」

「どうした、ストレンジャー…… 俺は元から君達の敵のはず、ためらう必要なんてないはずだ。何故君は行動しない。」

流星石を握ったまま棒立ちになっていると、クラウドはそんな彼の様子を気にし攻撃を誘うような言動を向けた。もうそれ以上の優しさは欲しくない、敵ならばどちらかが倒れるまで戦うしかない。そうでなければ、この時まで続いた優しい時間を再び自分は求めてしまう。軽い焦りもある中、クラウドは行動して欲しいと思い言葉をかけていた。

しかし相手の優しさを知ってしまった以上、ストレンジャーにとってそれ以上の行動を取る事は出来ずに居た。使命は違えど、自分と似ていると思える考えを持った存在に初めて出会った。そんな相手を倒そうとは出来ず、ストレンジャーは少しだけ顔を俯かせていた。

すると、

「……あれ、ストレンジャーさん。クラウドさん……？」

「？」

不意に二人しかいなかったその空間に、別の声が聞こえてきた。軽く緊迫した空気が張られていた二人は我に返り、声が聞こえてきた方角を静かに見た。そこには庭園を散策し終え、軽く数本の花束を持ったアルダートが立っていた。

散策する前に来た場所に2人が居なかった事もあり、心配になって探しに来た様だった。その証拠に少しだけ息を乱しており、軽く駆け回っていた雰囲気を出していた。

「あの…… 流星石を持って、何をしてるんですか……？」

「……」

頬が少しだけ赤いストレンジャーと、流星石から生成した鞭を持ったクラウド。その二人が距離を置いて互いに面を向かって対峙している光景を見て、アルダートは恐る恐る二人に問いかけた。先ほどまでの中の良さそうな雰囲気が一変し、まるで敵同士であるかのように闘っている二人。事実が分かる光景を目の当たりにし、それが事実ではないと願っているかのように彼は言っていた。そんな彼の話し方を聞いて、ストレンジャーは少しだけ顔をそらし返答に困っていた。

「済まないね、子狐君。俺は元々、君達の敵なんだよ。」

「えっ……」

「俺は『クラウド・ルミナシール』 プリンセスの元で行動する、管理課の一人の『藍髪の獣人』

改革の行いをしたという君達の情報を聞いて、君達の事を見させてもらっていたんだ。」

「……………」

パサッ……

そんな彼の様子を見たクラウドは、静かに体制を戻しつつアルダートに説明をした。元々彼等の敵であり、改革という街での変革をしたという情報を聞きつけ様子を見ていた事、自分の正体を静かに話した。

初めに聞いた言葉では理解出来なかったアルダートではあったが、自分達を騙し優しい雰囲気を見せていた事を知ってしまった。驚いた拍子に、彼が持っていた数本の花束は彼の手元から滑り落ち静かに地面へと落下した。事実を知ったと同時に、自分と行動を共にしているストレンジャーが対峙している理由を彼は同時に悟るのであった。

「そんな……嘘ですよ。クラウドさんが敵なんて……………」

「本当だよ。現にそれが証拠だという光景が、君の目の前に広がっているはずだ。そして君の大切な龍君を、俺はこの手で傷つけた。」

「……ッ！」

両者がどうして対峙しているかを知ると、アルダートは震える声で事実を否定する様に呟いた。それに対してクラウドは念を押す様に再度告げ、大切な相方であるストレンジャーを傷つけた事を話した。それを聞いたアルダートは、大切な友人を傷つけられたと知り唇を噛みつつその場を駆け出した。

そして、

ガシッ！

「どうして……！ どうしてそんな事を言うんですか！！ クラウドさんは本当は優しいはずですよ、僕達と一緒に居た優しいクラウドさんが、本当のクラウドさんのはずです！！」

「……………」

その足でクラウドの元へと近づき、彼の服を掴みつつアルダートは叫んだ。それが事実だとは思いたくない、今まで自分達が接してきた彼は何だったのか。例え策略であったとしても認めたくない、アルダートは言った。

服を掴まれ駄々をこねるかのように言ってくる彼を見て、クラウドは寡黙を貫き彼の事を見ていた。

すると、

サッ！

「ふぁあっ！」

「！ アルダート！！」

クラウドは流星石を持っていなかった左手で彼を羽交い絞めにし、ストレンジャーに顔が見えるように捕まえた。とっさの事に行動出来ず捕まってしまう、アルダートは声を上げた。そんな彼の声と現状を見て、ストレンジャーは迂闊だったと後悔しながらも彼の名前を呼んだ。

「……さっきも言ったはずだよ。俺は、君達の敵だと。無防備にも武器を持たないで敵の懐に来るなんて、君は少し冗談が多すぎるみたいだね。」

「うう…… クラウ……さん……」

「さぁ、改革者の龍。君が早く行動をしないと、君の大切な希望を俺の手で絶やす事が出来る状態になってしまったよ。どうするのかな？」

細身の身体で身動きが取れない事を確認すると、クラウドはアルダートの耳元でそう言い再度敵だと言う事を告げるかのように言った。細くも太い腕で捕まれてしまい息だけは吸える状況の中そう言われ、アルダートは少し苦しくも泣きながらクラウドの名前を呼んだ。

そんな声を聞き流しつつ、彼はストレンジャーに再度行動をする事を促す様にそう言い、右手に持っていた鞭を軽くアルダートの頬に当てた。冷たくひんやりとした感覚が頬に伝わり、アルダートは静かに泣いていた。

「……」

そんな光景を目の当たりにし、ストレンジャーは行動するも迂闊に動いてはいけないと考えた。例え仲が良かった相手であっても、敵であり自分が迷っていた結果今では人質を取られてしまった。自分の浅はかな行動によってそうってしまったと思い、再度行動を考えていた。何時しか目の色が輝いており、相手を倒そうとする決意を固めようとしていた。

「どうした、行動しないのかな。……そうしたら、君の大切な希望を根絶やしにするしかないみたいだね。ストレンジャー」

「ッ……」

しかし長い時間考えている余裕は無い事を悟らせる様にクラウドが言うと、ストレンジャーは手を上着のポケットに入れ流星石を漁っていた。早く行動しなければ、何時アルダートを殺されてしまうかもわからない。そう思うだけで、彼の気持ちを焦らせていた。

すると、

「ストレンジャーさん………お願いします…… クラウさんを………

「助けて……下さい……」

「えっ……」

「アルダート……」

不意にアルダートは泣きながらそう言い、自分ではなく自分を捕まえているクラウドを助けて欲しいと告げるのだった。

自分を助けるのではなく、敵を助けて欲しい。その発言には驚いたのか、言葉を聞いた両者は驚きつつ視線をアルダートに向けた。

『何で、自分の事ではなく俺の事を……』

「アルダート…… どうして、そうして欲しいんだ。」

この状況で向けられた言葉を聞き、クラウは驚きつつも何故その考えに至ったのかわからない様だった。普通であれば敵意と恐怖を覚えた存在は、自分の事を優先して助けて欲しいと思うと思った。もしくは自分は死んでも良いから、早く敵対する存在の隙をついて倒してほしいとも言うと思った。

しかし彼の言った言葉は、その両方のどちらでもない意見であり、とても新鮮な意見だった。そんなアルダートの言葉を聞いて、ストレンジャーは敵意を向けていた事を忘れ彼に理由を問いかけた。

「僕自身の事も大切ですが、僕よりももっと…… もっと希望を持っている人が居るって知ったから…… そんな人を、貴方に倒して欲しくないんです。クラウさん、本当は良い人だから。」

「まだ君は、そんな甘い事を言い続けるんだね…… 自分が死ぬかもしれない、この時に。」彼の考えを聞き、クラウはまだまだ甘い子供なのだと思いますと思い再度彼に対して忠告をした。今その気になればどんな方法でも命を絶たせられる、いつだって殺せるのだと。

「どうしてかは、わからないんですが…… クラウさん、本当は僕達を倒す事よりも。対立した関係を失いたくないんですよね……？」

「……」

「何でかはわからないんですけど、自然とそんな風に思ってるんだって思うんです。……僕を捕まえている左手が、冷たい思いじゃなくて。優しい思いに感じるんです。なんでも創りだせる、優しい思いなんだって。」

しかしそれでもアルダートは話す事を止めず、何故かそう思っているのだろうと思った事を静かに告げた。言葉を聞き黙るクラウに対して、彼は続けてそう言い敵ではないと何度も何度も言うのだった。

首に回している左手が冷たい思いではなく、優しい思いからそうしているのだと。まるで全て見通しているかのように、泣いていたアルダートは静かにそう言い涙を拭っていた。

「……」

スッ

「？ ……何故、流星石をしまった。ストレンジャー」

そんな彼の考えを聞き、ストレンジャーは持っていた流星石を静かに上着の中にしまった。その光景を見たクラウドは驚き、アルダートを掴んだまま問いかけた。

「戦う理由が、お前には無いからだ……クラウド。俺達に対して、何かを感じてその行動を取ったのなら……俺はそれを否定しない。」

「なら何でしまったんだ……！ 君達にとっての、その力を！」

「例え戦いを望んでいたとしても、俺はアルダートの希望を絶やす事はしたくない…… だからこそ、俺は戦う事はしない。」

問いかけに対し彼はそう答え、街の力を使って相手を倒す事をする必要がなくなったと告げた。自分達に対して行ってくれた配慮と行動には感謝はするが、優先すべき考えはクラウドではなくアルダートなのだと。どちらが自分にとって考えに近いかを考えると、やはり彼の考えはアルダートに近いのだと思った様だった。

その証拠に、迷っていた表情は何時しか元に戻り、優しい眼差しを向ける彼がそこには居たのだ。

「……自分の身が、傷ついても……か！！」

パシュンッ！

「クッ！！」

「ストレンジャーさんっ！！！」

優先されなかった考えを聞き、クラウドはそう言い右手で持っていた鞭をしならせ彼に向けて放った。攻撃は再び顔へと直撃し、ガードを取っていなかったストレンジャーはそのまま叩かれた方向へと体制を崩した。

「ッ…… やっぱり痛いな……鞭は。」

よろけつつも足をしっかりと付け、ストレンジャーは再び叩かれた頬を撫でつつ呟いた。肌が切れる時よりも痛みは残るものの、いつしか和らぐと思いきや改めてその武器の威力を感じていた。誰かを守るためのその武器は、他人を傷つけるものではない。そこに何か理由があり、彼は管理課の上位に位置するのだと思った様だった。

「それでもその気にはならないのか、君は。どんなに自分の身が犠牲になったとしても、君はその行動を止めないのか！」

「……犠牲だとは、考えていない。初めは俺もそう思っていたが、それは違うんだってな……アルダートが、教えてくれたんだ。」

「この子狐に……？」

本気の体制ではなかったとはいえ良い攻撃が入ったと思っていた彼は、まだその考えを持ち続けるのかと叫んだ。するとストレンジャーは痛む箇所を撫でていた手をおろし、犠牲があるから生むのではないと話し、それを教えてくれたのはアルダートなのだと続けて言った。

それを聞いたクラウドは自らが捕まえている弱気な子狐を見下ろし、優秀だとは思わなかった存在が理由だと言った言葉に驚いていた。

「一人で行動を起こす事は、きっと俺には無理だ……… 友人であり仲間が居るからこそ……成し遂げられるモノもあるんだってな。」

「それだけの力を持っておきながら、言う台詞には見えないな。」

「変だと思ってくれても、別にかまわない。俺はそう思い、正しいと思った事をする……… 敵であっても、敵だと認識しないと決めた相手には。俺は刃を……向けない。」

自らが思っていた事を覆し、正しいと思わせてくれるような行動を取れる様になった事。彼は静かにそう思った事を話すと、クラウドはおかしな考えを持っていると否定した。しかし彼はそんな否定を気にせず話し続け、敵だと思わない君には刃は向けないと告げた。

その後立っていた位置から静かに歩きだし、彼等の居る方向へと向けて歩み出した。

「………独裁者……か。……でも今の俺には、そんな相手は必要ない！」

静かに近づいてくる彼を見て、クラウドは呟いた後今は必要ないと叫んだ。それと同時に再び鞭をしならせ、彼に向けて攻撃を放った。

「あっ！！」

「スウー…… 破ッ！」

バシンッ！！

それを見かねたアルダートが声を上げると、ストレンジャーは左手を上着のポケットに入れ1つの流星石を取り出した。そしてそのまま瓶の栓を抜き、生成した『杖（ロッド）』を使いその攻撃を薙ぎ払った。払ったと同時に風が弾け飛び、鞭の一部分である水を弾いた。

「無駄な事を……！ 俺にはプリンセスしか居ない、あの人以外に大切な人はココには居ない！！」

鞭の一部分が弾け、威力が落ちたのを見かねたクラウドは自分の居る位置へ鞭を戻し再度攻撃を放った。しかしその攻撃をストレンジャーは歩きつつも冷静に一つ一つ杖で弾き、床に着いた反動でやってくるカウンターにも反撃を試みた。

何も施していない杖から出る一瞬の風は水を飛ばし、水面の静けさを変えるかのような行為にも見えた。

「だからと言って、自分の考えを否定する様な輩を俺は野放しにはしない……… 考えが間違っている相手が居るのなら、俺達はその考えを正すだけだ。」

「君に何が解る！！！ プリンセスの涙は、俺達にとって一番の苦しみだ！ 俺達があの人と共にいる幸せを感じても、あの人だけは何も感じることなく常に涙を流し続けるんだ！ 枯れた心さえも潤わさない、あの涙が！！」

「……それでもお前は、幸せを求める行動を止めようとしなかった……… 違うか。」

「あっ……」

攻撃を弾いたと同時に言われるクラウドの言葉を聞き、彼は表情を変えず歩く事さえも止めようと

しなかった。どんな位置からもやってくる鞭の攻撃を冷静に跳ね返し、背後からやってくる攻撃さえもその身に寄せ付けようとはしなかった。弾けた水は至る所に付着し自然に帰って行く中、まるで乱舞しているかのようにストレンジャーは行動を止めようとはしなかった。彼の言った『遊戯』とは、こういう事なのではないか。ストレンジャーは払ったと同時にその言葉を言うと、クラウの攻撃の手が一瞬止まった様にも見えた。

その隙をついて、彼はクラウの元へと接近しつつ杖を上方へと投げた。その行動に驚いたクラウは鞭で杖を払おうとしたが、彼の攻撃はそこではなく自身の身体から来ることを後から知る事となった手元が軽くなったストレンジャーはそのままアルダートを掴んでいるクラウの左手を引きはがし、彼の身の安全を確保した。そのまま続けてやってくるであろう右手の流星石を手刀で弾き、ストレンジャーはクラウの事を両手で押し倒した。

おそらく来るであろうその行動を阻害する様に、倒れた事を見ると彼の胸に両手を置き真っ向から相手を見るように目を見た。それと同時に、囷として使った杖は静かに地面へと落下し乾いた音が周囲に響き渡った。

「……君の負けだ、クラウ……… 君は優秀でも、守るべき相手がそばに居ないとな…… プリンセスはきっと、その事でも悲しむんだと思うぜ。」

「………」

身体が押し倒され冷たい床の感触と日差しを浴びつつ、クラウは彼から一言そう告げられてしまった。何処か絵になるその光景をアルダートは見つつ、真剣な眼差しを敵に向けるストレンジャーを見ていた。何を言われても構わない、何を思っても構わない。護るべきものがあるのなら、感じたその時からずっとそばに居ればいい。彼の強みである『言葉の力』を使って、ストレンジャーはその行為を終わらせるのであった。

負けを指摘されると、クラウは脱力感に襲われ身体を大の字に伸ばし静かに空を見上げた。何処か寂しそうな表情をしており、これほどまでにそんな感情になった時はあっただろうか。そう考えているであろう雰囲気を見せていた。

「負け……か……… ……ネコの言ってた通り、君達はこの世界を変えるつもりなんだね…… 完敗だよ、その力と考えには。」

「……俺も、お前となら共に歩めるような気がしたんだがな…… 今のままじゃ、きっとそれは敵わない。いつか変える時まで、お前は大切な人と居ると良い。……お前の鼓動からは、そんな醜い音を伝えてはこないからな。」

「ハハハッ、プリンセスと同じ事を君も言うなんてな。さりげなく聞いて、自分の心を見抜く様な言い方をされたら困るんだよなあ…… 本当に。」

本当に負けた事を知ると同時に、ストレンジャーの言った言葉にクラウは笑い声を上げた。その表情は純粋な笑顔であり、自分の思っている相手と同じことを言われてしまい少し驚いたようだ。とはいえ、なんとも思っていなかった相手に自分の鼓動を聞かれ感想を言われると、いろいろと気持ちに困るようだ。

軽く起き上がる様に手を動かすと、それを見たストレンジャーは身体を移動させ彼が起き上がれるように配慮した。

「……俺の負けだね、ストレンジャー アルダート。……ここまでとは、思ってなかったよ。」

「クラウさん…… 僕……」

ゆっくりと立ち上がると、クラウはそう言い2人に自分の負けだと改めて言った。情報を聞き見る事で行動を止めようとしていたのにもかかわらず、結果最終的な場所まで行ってしまった。それでも後悔はしていない事を彼は思い、二人に笑顔を見せていた。

そんな彼を見て、アルダートは呟きながらそう言った。

「良いよ、何も言わなくても。むしろ悪い事をしたのは、自分の方だからね。ゴメンな。」

「いいえっ、僕の方こそ……！ 貴方を、疑って……」

「……」

ポンッ

「ふわああっ ……クラウさん……？」

先ほどのやり取りで自分が疑った事、自分のせいでストレンジャーを迷わせてしまった事。その事に対して何かを言いたかったのだろうと思い、クラウは何も言わなくても良いと告げむしろ自分の方が悪いと言いつつ、頭を下げた。

そんな彼にアルダートは弁解しようとするも、言葉に迷ってしまい上手く口が動かなかった。すると、そんな彼を見かねたクラウは手を伸ばし優しく彼の頭を撫でた。

「君はずっと、笑顔で居な。龍君のためにも、ずっと希望で居続けるんだよ。一人じゃ駄目な事は、二人でやればいいんだからさ。」

「あ、はい…… ……ありがとうございます、クラウさん。」

「こちらこそ。旅路、気を付けてな。」

頭を撫でながら膝を曲げ、彼はそう言いつつアルダートにそう告げた。そんな彼の優しい笑顔と言葉を聞いて、アルダートは静かにお辞儀をし彼に礼を言った。それに対し彼は返答をすると、撫でていた右手をポケットに入れ一つの鍵を取り出した。

その鍵はネコSの時にも貰った地区の外へ行くための手段であり、通行証として使われる代物だった。今いる地区の管理課を倒した際に貰える、改革者として行動をするものへの賛同の証。取り出した鍵をアルダートの前に出すと、彼は手を出しその鍵を受け取った。

「さ、行きな。君達の希望を、俺の希望にも代えてくれ。」

「……ありがとう、クラウ。……元気だな。」

静かにその鍵を託すと、彼はそう言い二人を外へ行くよう指示した。自らが求める物がこの先にあるのなら、それを取りに行けばいい。希望だと感じ共に居るべきだと感じるその相手と共に、行動すればいい。励ましであり宣誓を聞き届けると、ストレンジャーは礼を言いアルダートと共に庭園を後にして行った。

『改革者の龍、見知らぬ人【ストレンジャー】か…… ……プリンセスの運命を、変えてくれ……』

そんな二人の姿を、クラウは静かに見送るのだった。花卉の舞う、庭園の小さな空間で。

管理課となる二人の存在を打ち負かし、再び地区の外へと出る手段を手に入れたストレンジャーとアルダート。その時その時で繋がる場所が変わる大扉へと向かいながら、彼等は時々吹いてくる風を感じていた。時刻は何時しか昼前となっており、美しさのあるその街での平和はとても静かな物だと彼等は感じていた。

「………… クラウさん、これからどうするんでしょうか……」

先ほどまで戦っていた相手であるクラウの管理する宮殿を後にしたアルダート達。不意に優しい笑顔で見送ってくれた彼の事を想いだし、アルダートは少し寂しそうに元来た道を振り返りながら呟いた。彼のイメージする管理課の存在達とは違い、あからさまに優しい性格をしていたクラウ。

そんな彼を倒した事になっている自分は、本当に正しい事をしたのか。アルダートは少し不安げな様子を見せていた。

「……心配しなくても、奴なら平気だろう。たとえ管理する地区を俺達に譲ったとはいえ、プリンセスとやらの殺されるわけでは無いだろうからな……」

「えっ、そうなんですか？」

何度も何度も宮殿を見返すアルダートを見て、ストレンジャーは静かに言い彼の心配はする事は無いと告げた。元々自分達が地区の主を倒したからと言って彼等が死ぬと言うわけでは無く、ただ単に管理する人物が入れ替わったという『評価』を得たに過ぎない。

現にネコが生きている事はクラウからも聞いており、ストレンジャーは残酷な制度が何処までも広がっているわけでは無いとわかっていた。ゆえに、アルダートが心配になっている彼の安否は気にする事は無いと言うのだった。

とはいえその話は初耳に等しかった様子で、アルダートは意外そうに彼に問いかけた。

「管理課と呼ばれる存在は四人いるが、四人しかいないとも言える…… 幾多の地区を纏めているという事は、一つ一つのミスで命を絶たせるような姫でも無いだろう……という推測だ。事実は分からないが、クラウが死にはしないさ。」

「そうでしたか…… 良かったです。クラウさん、良い人ですから。」

「そうだな…………」

問いかけに対し彼はそう答え、多いようで少ない管理課の命をミスだけで絶たせる事は無いと推測が立っている事を告げた。事実、彼が見てきた管理課は根っからの悪人ではない事をストレンジャーは感じており、ましてや婚約をしたかの様に接しようとしているクラウの行動が一番その推測を確定させるかのような行為でもあった。心から愛し接している存在に、会いたい存在が見つからなくても決して当たることなく接し続け、常に優しい眼差しを向けている。

ネコも悪戯をしているかのような小馬鹿な言動等々は目立つものの、それでも悪人ではない事は彼にもわかっていた。皆は『プリンセスの考え』に則って行動しており、その考えに反発している自分達の前に立ちはだかった。ただそれだけなのだと、ストレンジャーは思うのだった。

そんな彼の考えを聞き、アルダートは安心したかのように笑顔を見せ再度クラウは良い人だと言うのだった。敵である事実を告げても彼の考えは一向に変わらず、詫びがあったとはいえアルダートはクラウの事が好きなのだ。優しい存在には優しい存在が寄ると良く言うが、クラウの場合はやはり例外の点が目立つのかもしれない。「もう一度会いたいな」と楽しげに話す彼を見て、ストレンジャーは静かに微笑み大扉を目指すのだった。すると、

ガタガタガタガタ.....

「？」

彼等の歩く道路に、何かが走る音が響きだした。不意に感じた物音の正体を知ろうと周囲を見渡す彼等の視界に、一つの馬車の様な影が見えた。物音の正体は道路と細くも丈夫な車輪が擦れる音であり、時々聞こえる足音は車を引く馬の足音の様だった。

突如やってきた馬車を見て、ストレンジャーはアルダートの手を引き轢ひかれない様にと、道路中央から建物の近くへと移動した。しばらくして接近してきた馬車はゆっくりとスピードを緩め、彼等の前で停車した。薄くも透明感のある桜色の車体は、素材は何で出来ているのかと思えるほど神秘的な外装をしていた。

操縦席の後ろに席があり、手綱が無いのにも関わらず前方の馬は正確に乗車した存在の命令を聞いてここまでやってきたようだ。その馬車に乗って存在に、彼等は見覚えがあった。

「クラウさん？」

「やあ、まだここに居たんだね。良かった、間に合って。」

馬車に乗っていたのはクラウであり、どうやら彼等に再度会うためにここまでやって来たようだ。慌ててはいない様だが、次の地区に移動する前に会えた事に喜んでいる口ぶりで話し、彼等の前で馬車を降りた。その後再度笑顔を見せた後、ゆっくりと彼はその場に膝を付いた。

「.....どうしたんだ、クラウ。」

「もしこの地区を他の誰かに譲った時、プリンセスがして欲しいって言った約束があってね。それを果たしに来たんだよ。」

「約束ですか.....？」

意外な役者の登場にストレンジャーは軽く驚くも、やってきたクラウは約束があった事を話し彼等にその事を行いに来たと言った。とはいえ彼等の知らない約束に等しい話であり、すぐには意味が呑み込めずアルダートは不思議そうな顔をしたまま彼を見ていた。

「正確には、俺が託した訳では無いんだけどね。それでも君達は、俺にとって大切な存在だ。これを受け取ってもらえないかな。」

そんな彼等を見て軽く苦笑しながら彼はそう言い、ズボンのポケットから流星石を二つ取り出した。取り出した流星石は普通の代物とはまた少し違った物ではあるものの、餞別として持ってきた様子でクラウは丁寧に彼等の手に一つずつ流星石を手渡した。

「きっとこの先、同じ力を使おうとしても君達の行く手を阻む存在が居ると思う。弱い力ではあ

るけれど、君達の役に立ってくれれば俺は嬉しいよ。」

「あ…… ありがとうございます、クラウさんっ」

自分の考えを告げ約束を果たした彼を見て、アルダートは笑顔でお礼を言った。そんな彼にクラウは再び笑顔を見せ、アルダートの頭を優しく撫で「しっかりするんだよ」と再度励ますのであった。

「俺の考えた調合ではあるけれど、きっと君達の役に立つと思う。アルダート、君のは『弓（アロー）』だ。前衛で活動出来ないと思うなら、援護をして龍君を助けてあげな。」

「はい！」

「改革者の龍、ストレンジャー 君のはあの時使った『杖（ロッド）』に、君に相応しいと思う力を注いだ物だ。近距離で戦うにはなかなか難しいと思うけれど、君なりの戦い方をこれからも見せてくれ。」

「……感謝するぜ、クラウ。ありがとう。」

その後彼等に託した流星石を軽く説明し、彼等が持っている持っていないは気にせず相応しいであろう力を渡した。アルダートが受け取った流星石は『弓（アロー）』と呼ばれる物で、瓶自体の変形させる時間を無くし必要だと感じたその時に攻撃が可能な代物だった。瓶先から大き目の矢を放ち、援護でも活躍したいと願う彼の行動をサポートする流星石だった。

変わってストレンジャーが受け取った流星石は何かは彼は話さず、あの時使った『杖（ロッド）』である事を彼は告げた。その上クラウが考えた調合を施した代物であることを付け加え、何かは言わなくても君なら使いこなせるだろうとクラウは言った。互いに受け取った流星石を見た後、二人はクラウに礼を言い軽く握手を交わした。

「それじゃあ、検討を祈るよ。改革者のお二人さん、君達の望む希望をこの街に巻き起こしてくれ。」

握手をし終わると、クラウはそう告げ再び馬車へと乗り込んだ。馬車の淵に手をかけ華麗に乗り込むと、尻尾の位置を直し彼は馬車を走らせようとした。

すると、

「あっ、クラウさんっ！」

「ん？ 何かな、子狐君。」

そんな彼を呼びとめようと、アルダートは声をかけた。その声を聞き馬車を走らせようとしていたクラウは手を止め、ゆっくりと下ろしつつ彼に返事を返した。

「クラウさん。その馬車って……」

彼が声をかけた理由、それはクラウが乗り込んだ馬車の事だった。この世界には生き物と呼ばれる生き物は生活しておらず、ましてや透明感のある馬車の素材はどう考えても流星石だと思ったのだろう。元々流星石に興味があったアルダートは、その馬車が何なのか気になってる様だった。

「ああ、これかい。コレは、プリンセスから頂いた俺だけの流星石だ。『幻想車（ファンタジア）』と言って、あの人の望む行動をするために使っているんだ。」

「ネコSの使っていた『機械兵（マシリーン）』と、同じ流星石か……？」

「そうだよ。……もともと、俺はこの力を支配には使わないと決めている。プリンセスは共存を望んでいても、破壊は望まないからね。」

「そうだったんですか……」

質問に対し、クラウドは丁寧にここまで来るのに使った乗り物の説明をした。アルダートの読み通りで、馬車は流星石で出来ておりクラウドは『幻想車（ファンタジア）』と呼んでいると言った。燃料や障害物を気にせず相手を送迎する力であり、その気になれば壁さえも壊す万能の移動車である事も同時に話し、クラウドはその使い方をしていない事も同時に告げた。ネコSとは違った使い方をする所も、彼なりの配慮であり悪用するつもりは元々無い様だった。

その後続けて質問がない事を確認すると、クラウドは再度座り直し周囲に障害物がない事を確認した。発信前の確認の様子で、確認を終えると再び彼等の事を見た。

「……それじゃあ、気を付けて行ってきな。お二人さん、幸せな結末を祈っているよ。」

そんな二人からの最後の会話を終わると、クラウドは再びそう言い軽く馬と思われる生物に指示を出した。その指示を受け馬達が軽く鳴くと、馬車は静かに走りだし彼を元来た道へと送り出すのだった。

旅路を見送られ去ってゆく姿を見送ると、ストレンジャーは軽く声をかけ再びアルダートと共に歩き出した。受け取った流星石を何度も見返し上着の中へと入れると、二人は大扉の前へと到着した。そこには一度通った時同様に数人の兵隊達が並んでおり、扉の前へとやって来た彼等を警戒していた。その後アルダートは受け取った鍵を静かに兵隊達に見せると、数人の兵隊は驚き左右に居た同僚にコンタクトを取る様に手で動作を取っていた。

「僕達、この地区の管理課から認められた者です。ココを通りたいのですが、門を開いては貰えませんか？」

代表してアルダートが彼等に声をかけると、兵隊達は行動を開始し門を開ける準備に入った。兵隊の内の一人在りも鍵を受け取りに来ると、アルダートは素直に確認を取りに来た兵に鍵を渡した。鍵を受け取った兵隊は鍵を確認すると、手元から消し二人を一瞥した。

「コード確認。……お前等、通るのは二度目だな。行先はあるか。」

どうやら鍵を確認した兵隊はあの時の存在だった様子で、見覚えがある様子で行先を聞いてきた。問いかけに対しアルダートはストレンジャーの顔を見ると、彼は静かに頷き「好きな場所で良い」と彼に告げた。その言葉を聞いて、アルダートも同様に頷き兵隊を見てこう告げた。

「もし、僕達と同じ行動をしている方が居たら。その場所へ連れて行ってください。同じ行動を、共にしてみたいんです。」

「場所指定無し、注文受注。了解だ。」

告げた内容を理解した様子で兵隊は答え、門が開く音と共に彼等の横へとずれ道を開けた。

「……行ってきな、改革者達。共に行くと望むのなら、その希望を叶えるがいい。」

道を開け餞別であろう言葉を投げかけ、兵隊は静かに敬礼し彼等の旅路を見送りだした。その光

景を見たアルダートは頷き、返事を返しつつ横に居たストレンジャーに手を差し出した。

「行きましょうか、ストレンジャーさん。」

「ああ……」

そんな彼の手を静かに握り、二人は門の中へと向けて歩み出して行った。扉の先から発光する眩い光を見つつ、二人はそのままゲートを抜けて行った。二人の姿が見えなくなると、兵隊達は周りに誰も居ない事を確認し門を閉じた。

ガチャン……………

『変えるつもりみたいだな……奴等は、この街を……………』

旅路を見送った兵隊は体制を直し、アルダート達の行動を見て心の中でそう呟くのだった。誰も叶えられないと思った、街の改革をしようと本気で思っている事を。

夕闇の暗がりの時間が徐々に終わりを告げる、とある街のとある一区。そこは街の静けさが目立つこの街では珍しく賑やかな場所であり、比較的人の多い地区でもあった。商店街とは言えないが、露店が立ち並ぶその地区は食物で困る事のない場所だった。

「.....入らない.....」

そんな楽しげな場所では、一人の存在が寂しげに呟いていた。その地区には似つかわしくない溜息をついており、周囲の朝日さえ目もくれず。窓辺に差してきた朝日を背に、その存在は壁に背を預け屋根の無い天井を見上げていた。

「.....俺に必要な相手なんて、居ない.....」

孤独そうにそう呟く、一人の茶色の犬。それが、この街で行動する事となる一人の存在だった。その日も犬は、再びやってきた朝日を感じ寂しげに呟く事を止めなかった。たとえ街が明るく華やかな街であったとしても、彼にとってみれば何の興味も持たないつまらない街。そんな場所に居たとしても、自分にとって最良と思われる行為が出来るとは思っていなかったのだ。

「.....こんな街..... 大嫌いだ.....」

そして呟く事を止めず、ただ一人孤独な環境を壊れかけた空き家で過ごすのだった。何も変わらない、何も変えられない。『信用』する事を止め、一人で行動すると決めた犬。

彼の名は『カツキ』

この話の主人公となる、優しさの笑みを失った存在なのであった.....

そんな孤独を、彼は好き好んで選んだわけではなかった。彼にも仲間と呼べる相手、友人と呼べる相手はたくさんいた。しかし過去にたくさん住んでいた『英雄』達が消えた事により、彼はその平穏と安らぎの空間を失ったのだ。

英雄達が消えた事によって起きた、この街での事件。それは『暴動』であり、今の状況に至るまで幾度となく繰り返された事件だった。無論それを止められる存在はその地区にはおらず、微力ながらも英雄になろうとした存在達が必死になってその事件を終息させようとした。しかしその行いは、平和を対価にあるモノを失うきっかけにもなってしまった。

そしてその失ったモノの影響を色濃く受けた存在。それが、カツキなのだ。

彼の友人は正義感が強かったのか、その騒動を終息させようと懸命に行動していた。無論彼もその一人であり、平和を求め一時はそんな集団との行動を共にしていた。それが彼の望んだ事であり、この後いつやってくるかもわからない平和のために戦っていた。

力となる流星石も当時は使用しており、その力で仲間のために。平和のためにと使用していた。

だが.....

ドサッ！

『ウグッ.....！』

その事件が起こったのは、平和と呼べる時期がやってくるほんの少し前の事。彼は当時行動していた集団の一人に突き放され、地面に尻もちをついていた。身に着けていた衣服はボロボロであり、懸命に闘っていた名残がそこには残っていた。

何故突き放されたのかと思いながらも、彼は顔を上げその集団の顔を見た。すると、そこには今まで共に行動していた仲間なのだろうか、本気で疑ってしまう光景が広がっていたのだ。皆が皆、彼の事を仲間だと思わない目つきをしていたのだ。

『お前、そんな事で俺達と行動してたのかよ。そんな成りで、ましてや力すらもまともに扱えない奴が。』

『.....何で！ 俺が何をしたって言うんだ！！』

仲間だと思っていた集団の一人の言葉を聞き、彼は表情を変え怒鳴る様に怒った。今まで共に居るべきだと思っていた人から、そんな言葉を発せられては彼も黙ってははいられなかったのだろう。相手の一人を睨みつけるように見ると、別の方角からも声が聞こえてきた。

『何をした？バーカ、そんな事も自覚ねえのかよ。』

『無駄無駄、こいつはなんも出来ない能無しだ。言ったところで何が変わるって言うんだよ。』
どうやら自覚していないうちに、彼は周りに迷惑をかけていたのだと一人は言った。懸命に努力した事すらも認められず、彼はそう言われ悪いのは自分だとその時思った。しかしそれが事実なのかかわからず、顔を俯かせながら唇を噛んでいた。

『それもそーだよなー ほらほら、こんなの放置して行こうぜ。もうすぐ落ち着いて、俺達の望んだ世界がやってくるんだ。』

『さあ、アタシ達も行くわよ！！』

タッタッタッ.....

『何で..... 何で.....！ 何で！！』

そんな連中の発言が終わると、リーダーと思われる一人の存在の声により集団は再び一つになり、彼をおいて何処かへ行ってしまった。その姿を見て後を追いかけてやろうとしたカツキであったが、なぜか足が動かず必死に腕に力を込め起き上がろうとした。だがそれでも動かない身体をよそに、集団は次第に黙視できない場所にまで向かってしまい、彼の視界から消えてしまった。自分が何をしたのかもわからない、何かをしてしまったのかもわからない。事実がどちらなのかも解らず、彼は一人苦悩し苛立つように地面を殴っていた。

何処にも行き場が見つからない悔しさを感じ、信じていた仲間を失った。いや、仲間だと思っていた友人に捨てられてしまった。そう感じるたびに、彼は次第に他人と接する事を止め、一人で生きるようになったのだった。

「……………」

孤独感が常に付きまとう日々を、彼は心底嫌っていた。誰にも頼れない。いや、頼ろうとしても頼れない。過去のトラウマが彼の心を苦しめ、外に出る事すらも避けたくなるほどであった。だが食事や歩くことをしない限りこの街では生きていけないため、彼は他人との干渉を出来る限り避けながら行動する日々を送っていた。華やかで有名な露店の通りを歩くことはせず、適当に散歩するかのように食料を求めていた。

昔持っていた力は当に捨てており、今の彼は無力の塊であった。ゆえに再び争いが起こったとしても、彼は立ち向かわず流れに身を任せる覚悟でいたのだ。元より生きていても仕方ないと感じてしまう日々を送っているがゆえに、身投げを考える事も時々あった。

しかしそれでも、彼の事を陰ながら支えようとしている存在が一人いた。

「カツキー」

暗がりの続く裏道を歩いている彼の事を呼ぶ、一人の青年の声が聞こえてきた。名前を呼ばれカツキーが振り向くと、そこには空色の針鼠が彼の事を呼ぶように手を振りながら彼の居る場所へと駆けてきた。

「…………… トライム。」

その姿を見ると、干渉する事を避けていた彼は走ってきた存在の名前を言った。トライムと呼ばれた針鼠は彼の元へと到着すると、軽く走り乱れた息を整えつつ持っていた袋を彼に差し出した。差し出された袋を受け取ると、カツキーは中身を軽く確認した。

そこには数個のバターロールが入っており、水の入ったペットボトルが二つ入っていた。

「今日の分の食事だ。俺達二人分、ちゃんと持ってきたぜ。」

「……………」

袋を持ってきたトライムは彼にそう言いつつ、笑顔で彼に報告した。望んで持ってきてもらっているわけではないが、それを受け取ったカツキーはこれと言った返事は特にせずしばらく見ていた。そして、不意にこう言った。

「……安全だよな。コレ。」

「え？」

持っていた袋を一度締め、カツキーは普段から持ってきてもらっている彼に対しそんな問いかけをしていた。さすがに普段渡している事もあってか、彼にとって不思議な問いかけの様だった。

「何言ってるんだよ。今日貰った物だから、別に腐ってるとかは無いぜ？」

「……そうか。」

不意に問いかけられ、トライムはそう答えつつ再度袋を開け中身の匂いを嗅いだ。本日の分の支給であり、それを人ごみを嫌う彼のために毎日彼は取りに行っているのだ。そのため、異物が混入する事はまずない。

彼からの返事を聞くと、カツキはそう言いつつ袋をトライムに返した。

「ハァ…… 毎回の事だけども、驚くからそう何回も聞くな。信用されてみたいじゃないか。」

「……信用、か……… ……俺の事を必要とする相手なんて、誰もいないのにさ………」

「あ、おいっ……」

とはいえ毎日のお決まりの問いかけの様子で、トライムは返答した後苦悩する様に文句を垂れた。すると、カツキは嫌いな単語を言われた様子でそっぽを向いてしまい、そのまま再び目的のないまま道を進んで行ってしまった。そんな彼を見て、トライムは彼を止めようと手を出したが、彼の事をつい考えてしまいそれ以上声をかける事が出来ずにいた。

この街に居るカツキの過去を知る数少ない人物、それがトライムだ。かつては彼と同じ集団で行動していたが、今となっては無法者集団になりつつあるその集団から彼をかばい、数日間失踪を遂げていた彼の元へとたどり着いたのだ。その時の彼はすでに病んでしまっており、こうやって外へ出るまでに至ったのは彼の努力の結果でもあった。

しかし、

「……ウグッ………！」

クラッ……

「あっ！ カツキ！！」

そんな彼を支えている彼ではあったが、今の彼はとても弱っていることも同時に知っていた。心の支えを失って時間が長い事もあり、すでに身も心もボロボロの彼を必死に生き長らえさせようとしていた。最近頻発して起こすようになった『頭痛』の事も気にかけており、原因が分からずその悩みも抱えていた。

だが1人で居てはいつ自害するかもわからないため、何を言われてもトライムはカツキの元を離れようとはしなかった。頭痛によって身体のバランスを失ったのを見て、トライムは慌てて彼の事を抱きかかえた。そして意識がある事を確認し、彼に手を貸し身体を支えた。

「大丈夫か……？」

「……悪い……… ……大丈夫だ、いつもの事だから…… グウウァッ！」

「カツキ！！」

支えている間も頭を押さえ、懸命に頭痛と戦っているカツキにトライムは声をかけた。すると先ほどよりも彼の事を信頼した様子でそう言い、普段起こっている事だから大丈夫と彼は言った。しかし顔は苦痛で表情がゆがんでおり、再び襲いかかってきた頭の痛みに彼は苦痛の声を上げた。

慌てたトライムは袋を持ったまま彼を支え、一時彼と生活を共にしている空家へと向かって歩いて行くのだった。

いつしか『頭痛持ち』となり、日々苦しむ事となってしまったカツキ。それを支えるトライムではあったが、彼も彼なりに何かできる事をしたいと望んでいた。街の雰囲気は変わったとはいえ、唯一彼の生活は平和にはならなかった。

その事が日々彼の頭をよぎり、改革を行っていたグループから抜けた後もずっと考えていたのだった。

「……………」

一時空家へと戻ってきたトライム達は、痛みを落ち着かせるために普段使用している医薬品をカツキに服用させた。街で合法的に手に入れたものであるがゆえに効力は高く、しばらくするとその痛みも薄れてくるほどだ。そうすればまた彼が苦しむ事無く、時間を少しだけではあるが平穩に過ごせると思っていた。

しかし続けて服用する事による効力の低下は、どうしようもない事ではあった。

「ハア…… ハア……………」

飲んだ直後ではまた効力がないためか、カツキは痛む頭を抑えつつ楽な体制を取っていた。普段寝泊りで使用しているソファに腰かけ、そのままあおむけになるのが一番楽なようだ。そんな彼を見て、トライムは静かに見守る事しか出来ずにいた。

「大丈夫か、カツキ。」

「ああ…… ……悪い、トライム。少し、横になるよ……………」

「おう。」

辛そうな彼に一声かけると、先ほどとは違い少しだけ信用してもらえている言葉が返ってきた。時折彼がそう言う事には無理もないと思っていたためか、トライムは時折呟き混じりに一言言う以外は彼を攻めようとはしなかった。元より悪いのは改革側であり、全員が救われていない改革では彼も納得していないのだ。

ゆえに、もう一度変わらないといけないと彼は考えていたのだ。

『……早く、この辛さから解放してやりたい…… ……でも、俺に出来るのか……？ そんなことが。』

とはいえ、一人でそんな大きな事が出来るのだろうかと考えてしまうのが普通だ。トライムもそのうちの一人であり、いつしか眠ってしまっているカツキを見つつそんなことを考えていた。本気になってやろうとは思っても、多人数で成し遂げられたかどうか分からない事を個人でやるのは無理だ。どうしてもそう考えてしまう様子で、椅子に腰かけつつ空を眺めていた。

『なあ…………… ……お前だったら、出来たのかな…………… ハンメル。』

そして、ここにはいない存在の名前を口にしつつぼんやりとするトライムなのだった。

そんな空家での寂しげな風景が広がる中。

タッタッタッ……

「ハア……ハア……ハア……」

人通りの多く賑わいが絶えないとされている、露店の広がる商店街の通り道。そこでは1人の存在が、色とりどりの商品にも目をくれずに通りを駆け回っていた。紫色に白色の狼であり、どうやら追手から逃げている様子だった。

『何処だ…… 何処に居るんだ……！ カッツ！！』

「居たぞっ！！」

「クッ！！」

探している存在が居る様子の狼の背後から、彼を捕まえようとする集団。声を聞いたたびに舌打ちをしつつ、狼は通りに時折転がっている木箱を障害物として通った道に置き、追手との距離を取ろうとしていた。

時折裏道に入り視界から消えようと努力するものの、なかなか一筋縄ではいかない様子だった。

「待てええ！ アイツは何処に居るんだ！」

「教えろ！ ドリフト！！」

追手達も彼の巧妙な策にはまるまいと足を前へと踏み出しており、こちらも探している存在が居る様子だった。ドリフトと呼ばれた狼は特に叫び声には返事をせず、ただひたすらに前へと進み逃げつつ探す行動を続けていた。

『お願いだ…… 絶対に、死ぬんじゃないぞ…… 俺が、お前のそばに行くまでは……！！』

追手達の距離を確認しつつ、ドリフトはただひたすらに今会いたいと思う存在へ対し願い続けていた。相手の死が近いと悟っている様子で、走りながらも願う事だけは彼は止めようとはしなかった。

「待てええ……！」

「……」

そんな彼等の走り回る商店街の風景と、叫び声が周囲に広がる光景を見ている一人の存在が居た。通り道沿いに立ち並ぶビルの屋上の柵に座り、ドリフトが駆け抜けた後を追手達を通る光景を静かに見ており、干渉はしないがその成り行きを見守っている様子だった。

屋上付近を吹く風が、その存在の身に着ける桃色のワンピースドレスを靡かせ静かな雰囲気を作っていた。纏っている存在、それは『雀』だった。

「……つまらないわね。同じことをずっと続けるなんて、何も成し遂げられないし変わりもしないのに……」

街中で広がる逃走劇を見ながら、雀は不意に口を開きそう呟いた。どうやら心配で見ていると言うわけではなく、ただ単にその行動を取る理由が馬鹿げていると言う風に見ている様だった。髪を靡かせ時折手で退かすものの、それでもこれと言った行動を取ることなく様子を見ている様だった。

すると、

カツンッ……カツンッ……

「……………」

不意に彼女の後ろから物音が聞こえ、彼女は座っていた場所に足を置きその場に立ち上がった。そして、特に後ろを振り向くことなくその場から飛び立ち、別のビルへと移動した。背後に翼をもつ彼女も空を飛ぶことが出来る様子で、特に羽ばたきはしなかったが水平に飛びつつ別のビルの上へと降り立った。

到着すると再びその場から逃走劇を静かに見ているという、その行動を繰り返していた。彼女もその行動自体にマンネリを感じている様子で、街の雰囲気は変わっても楽しくもなんともないと思っている様だった。

「捕まえたああ！」

そんな事を思っていると、再び彼女の背後から捕まえてこようとする存在の音が聞こえた。しかし再び彼女は同じように空を飛び、再び別のビルへと移動しその行動から避けていた。彼女も追手から捕まえるべき対象として見られてはいるが、特に何をしようというわけでもないため一筋縄で捕まるつもりは無い様。そのため無言ではあるが静かに飛び立ち、追手が来ない空を移動してその行動から避けていた。

すると、

「逃がすかあ！」

今度は到着するビルを予想して待機していた追手達が沸きあがり、彼女を捕まえようと手を伸ばした。

「……ハア。」

すると今度は彼女は逃げる事はせず、溜息を一つした後スカートの中に入れていた物を取り出した。それは流星石であり、珍しいデザインをした代物だった。

「！ マズイ、逃げろ！！」

「……………」

彼女の取り出した流星石を見て、背後に居た追手はそう叫びその場から逃げようとした。しかしすでに手を伸ばしている追手達にはその行動は出来ず、逃げる事はしなかった。

すると、次の瞬間

「……退いて、焼き尽くして……………」

シュッ

彼女は一言呟くと、流星石の栓を抜きその場で軽く振るった。その瞬間彼女の周囲に火柱が立ち上がり、彼女を包み込むように塔のように燃え上がった。

ボワァアッ！

「グァアッ！ なんだっ！？」

攻撃から避けられず火を直に浴びた追手達は手をひっこめ、距離を取りつつそう叫んだ。しかし攻撃はそれだけでは止まず、彼女は日の中で両手を伸ばし軽く手で薙ぎ払うかのように動かした。すると、塔の形態をとっていた炎はすぐさま周囲に向かって進みだし風にあおられたかのように追手達を飲み込んだ。

「グァアアアアッ！！！」

灼熱の炎に包まれた追手達は次々に声を上げ、その場に倒れてしまった。前身は焼け焦げ、飲まれた時間もあってか生きてはいない様子だった。

横目で追手達が止まった事を確認すると、雀は瓶に栓をし再びポケットの中へと入れた。

「……本当、つまらないわね…… 街も、他人も……皆……」

そして再度そう呟き、軽く吹いてきた風に髪を靡かせていた。

彼女の名前は『ベルミリオン』

その地区では強力な流星石『熱風烈波（ベーズフラーラ）』を使う、追手達の対象とされている少女なのであった。

そんな一瞬の戦いがビル屋上で送られている事は、街の存在達は知る由もなかった。街の露店は賑わいと喜びに包まれており、戦いとは無縁であり寂しさを感じる事は左程なかったからだ。しかし、中にはそんな楽しげな空間に入れずひたすら何かと戦う存在達も少なくはなかった。

「……………」

そんな逃走劇と戦いが行われていた事を知らずに、寝てしまっていたカツキ。いつしか目を瞑り寝てしまって居た事を改めて知り、ベットとして使用しているソファの上で身体を起こした。その後頭に宿っていた痛みから解放されたことを知り、近くでは椅子に座ったまま寝てしまっているトライムの姿もあった。

「……ゴメン。」

そして再び彼に迷惑をかけた事を知りつつ、カツキはソファから足を下し地面に足を付けた。そのまま壊れかけた窓ガラスのある窓辺へと移動し、軽く外を見つつ様子をうかがった。

相変わらず外からは露店から聞こえる楽しげな会話と呼び子達の声が聞こえ、常に賑わう事を止めようとはしなかった。共よりこの街が好きではない彼にとってみれば、それは酷い雑音であり好ましい声ではなかった。その後再びベット周辺へと移動し、トライムが取ってきてくれた朝食用のパンと水を手にし軽く外へと出て行った。

外へと出ると、午前中にあった日差しが変わらずに街を照らしておりとても暖かかった。軽装に近い彼の衣服では丁度良い気候であり、そのまま少し移動し適当な塀の上へと昇り腰かけると、持っていたパンを齧りつつ遅めの朝食を取っていた。彼からしたら、こういった静かな空間で行う一人ぼっちの朝食が好ましい様子で、静かであり周りを気にせずにいられる空間を好んでいた。他人を信用したくないと言う気持ちからか、他人を気にしなくていいこの空間が唯一落ち着くのだろう。

トライムが休息を取っている間だけでも、彼に迷惑を駆けまいと彼なりの配慮をしている様にも見えた。

「……ハア。……いつもと同じ味。」

しかし、食べている食事にあまり満足していない様子の彼であった。配給されているに等しい食事な上に、元より味付けなどされていないパンと水とでは味気なさが目立つ。そう言った感覚から新たな感覚を得るには、やはり露店に赴き商品を購入するしか方法は無い。だがその方面には出たくない様子で、仕方なく持っていたパンを全て口の中へと放り込み食事を終えた。

その後彼は、軽く視線を空へと向けた。空は青空に点々と雲が浮かぶだけのとても良い天気であり、時折飛び交う鳥達の姿も見えた。自ら空へと飛ぶことは敵わないが、それでもそう言った『自由に過ごしている』と思われる生き物達は彼は好きだった。

信用等の言葉とは無縁であり、自由に自由に好きなところへ行ける。それが、今彼が求める自由の様だった。

「空とか、飛べたらな…… 俺も、こんな息苦しい所から早く出ていけるのに……………」

「……そうかしら。」

「？」

空を飛んでいた鳥達を見ながらカツキが呟くと、不意に彼の後方から声が聞こえた。声を聞き後ろを見ると、そこには先ほどまで屋上で風を感じて佇んでいた雀の少女の姿があった。ゆっくりとした足取りでこちらへと向かってきており、適当な位置で足を止めるとカツキを見ていた。

「空を飛んだって、何か変わった事を感じられるわけでもないわ…… 退屈な事には変わりないし、無駄な事をしている人達が視界に映ってかえって疲れるもの。」

「……そうは感じないからな。俺は。」

寂しげにカツキの言った事に反論する少女を見た後、彼は彼女の言った事に対してそう言った。互いに感じる物は別々であり、自分はそう感じるが相手はそう感じない。彼はそれが分かっており、たとえ他人の意見であっても自分の考えを変えるつもりは無いようだった。

「地上に居たって、自由になれるわけでもない。行動しても、結局意味の無い行動に成り下がった。……だったら、別の行動をしたくなるのも普通だろ。」

「……新しい行動に手を出すと言うのは、私も賛成するわ。変わった事が出来るのであれば、私もそれを望みたいもの。」

再び空へと視線を戻したカツキは、空を見ながら軽くそう言った。彼の意見に対し彼女はそう答え、もしそれをするつもりならば私もそれをしてみたいと言っていた。

「……でも。」

「「それは一人では出来ない。」」

その後彼女が言いかけた事に対し、二人は声をそろえてそう呟いた。軽く言おうとしていた事を言われ、彼女は少し驚きながらカツキを見た。

寂しげにその場に座る青年は、軽く空を見ているだけでそれ以上の事は何もしていない。武器と呼べる武器も持っていない上、軽装過ぎてむしろ肌寒いのではないかと思われるほどの井出達だ。後ろ姿しか見れなかったが、それでも十分魅かれるものがあった様だ。

「……貴方。名前は？」

そして不意に、彼女は彼に名前を聞いていた。それに対し、彼は少し彼女の方を向きつつ「カツキ。」と告げた後、再び空を見上げていた。

「カツキ…… ……カツキね。」

名前を聞くと、少女は再び少し前へと移動し彼の座っている塀部分に軽く手を触れた。その後塀を背にしもたれると、彼女も同様にその場から空を見上げた。同じ空を見て、少しだけ気分が変わったのだろう。出会い当初のつまらなそうな表情から、少しだけ笑顔が戻っているかのようにも見えた。

彼女のそんな行動を軽く横目で見ただけで、彼は特に何も言わずにその場で空を見上げていた。静かであれば干渉する必要が無い様子で、かえって同じ時間を共有している事に少しだけ楽しさを覚

えている様だった。軽く吹いてきた風に衣服をなびかせながら、二人は空を見ていた。

「……あっ、カツキー」

そんな二人だけの空間でいると、不意に彼の事を呼ぶ声が聞こえてきた。名前を呼ばれ再び視線を前へと向けると、カツキの前には先ほどまで寝ていたトライムの姿があった。

「もう平気なのか？ 出歩いて。」

軽く彼が寝ていた場所に姿が無かったことに心配していた様子で、彼はそう言いつつカツキの顔色をうかがっていた。顔色は先ほどよりも明るく、今では元気な彼でいるのが見てとれた。

「ああ…… 飯も食べたし、今は大丈夫。」

「そうか。……あれ。」

トライムからの問いかけに彼はそう答えると、不意に彼のそばに居る少女の姿を見て驚いていた。元より他人を寄せ付けようとしなかった彼のそばに、ましてや少女が居るとは思わなかったのだろう。異様な光景を目にし、少し意外そうに彼女を見ていた。

「カツキ。知り合いか？」

「……いや、さっき会ったばかり。……」

問いかけに対し彼はそう答えると、静かに再び少女を見た。すると少女は背にしていた塀から身体を起こし、彼等の居ないところへと向かって歩き出した。それを見たカツキは何か言おうとしたがうまく言葉が出ず、その場で行動しようにもできない様だった。

「……なあ、お前。ちょっとだけいいか。」

そんな彼を見て、トライムは彼の代わりに適当に彼女に声をかけた。すると彼女はその場で足を止め、少しだけ振り返りつつこちらを見ていた。

「少しだけだけどさ、カツキと居てくれてありがとう。名前、よかったら教えてくれないか？」少女に対しそう言うと、礼を言いつつ名前を教えて欲しいと彼女に頼んだ。すると、少女は少し横を見た後彼等の方へと振り返りつつこう言った。

「『ベルミリオン・スパロウ』 ……カツキ、またね。」

軽く彼女は名前を名乗りそう言うと、彼女は背に羽を出し空へと飛んで行ってしまった。そんな彼女の後姿を見ていると、カツキは塀の上へと立ち上がり彼女の後姿を見送った。

「……良いな。空。」

「へ？」

不意にカツキはそう呟くと、トライムは不意に言った発言を聞き取れなかった様子で声を上げた。その後彼は塀の上から地面に飛び降りると、トライムを見ようと振り返った。

「……疲れたから、また少し休むよ。」

「あ、ああ……」

振り返ったと同時に彼はそう言うと、元来た道に戻りつつ彼の横を通り過ぎた。しかし通り過ぎると同時に、ある言葉を口にした。

「……ゴメンな。トライム。」

「？」

トライムに対して彼はそう言うと、カツキは再び表情を戻し先ほどよりも気分が楽になった様子で住処へと戻って行った。そんな彼の様子に少し戸惑いつつも、再び後を見守ろうとトライムは走りだし、彼の後について行ったのであった。

ベルミリオンと名乗る少女と出会ってからというもの。カツキは何かきっかけを見つけたかのように、今までとは違う一面を見せる事が多くなってきていた。それを一番に悟った相手は、彼と接する期間の長いトライム。

かと、思われた……

「ハア……ハア……ハア……」

街の一角にある路地裏に逃げ込んだドリフトは、乱れた息を整えつつ追手から見えないようにと暗がりには逃げ込んでいた。丁度廃棄用の器材が点々と置かれている場所だったため、自身の身体を消すにはうってつけの場所であった。息をひそめながらも、今その場にいない相手の事を考え空を見ていた。

「ハア…… ……何処に、居るんだ…… カッツ……」

眩き混じりに言葉を吐くと、ドリフトは寂しそうに軽く涙を流していた。

探している相手が近くに居るのは分かっているのに、その存在の姿を見つける事が出来ない。それどころか静かに探す世暇さえ残されていない今の彼にとって、休息を取る事すら厳しい現状であった。食事などをろくに取らずに走り回る事も増えており、自身の体力が何時まで持つかも彼自身は気にしていた。

出会うべき相手に会う前に、自分が倒れては意味がない。ドリフトの中で燃え上がる意識そのものだけで、今の彼は活動しているに等しかった。絶対に会わないといけない人が居る、ただそれだけで。

「……」

ガサッ

「……！ 居たぞっ！！」

「クッ！」

そんな寂しげな空間すらも長続きしない様子で、ドリフトは再び聞こえた追手の声から逃げるべくその場に立ち上がった。そして視界に映った相手から逃げるべく、相手が来た路地とは別の方向へと逃げようとした。

しかし、

ガッ！

「くあっ……！」

その場にあった小さい木箱に足を引っかけてしまい、彼はそのまま地面に倒れこむ形で路地裏に

倒れこんだ。それを見た追手達は、チャンスを逃すまいとばかりに彼に駆け寄り、そのままドリフトの手足を地面に押さえた。

「クッ！」

「さあ、ようやく捕まえたぞ……！ ドリフト、奴の居場所を教えてもらおうか。」

「……………」

倒れたままうつ伏せの状態に来る問いかけと共に、手足を押さえつけられドリフトは唸った。だが相手が欲する情報を元から持っていない事に等しい彼にとって、返す返事もなくそのまま顔を地面に向けていた。

「言え…… 言うんだ！」

グッ！

「ガァアッ！」

問いかけに対し返事がない事を悟ると、追手の一人が握っていたドリフトの右手を持ち上げ捻りあげた。普段ではありえない方向に手が曲がったと同時に、ドリフトは声を上げ痛みを耐えていた。その後別の箇所からも痛みが伴いだし、どうやら他の追手達も手足を捻ったり踏んだり拷問する体制になった様だ。彼の背後にある尻尾も持ち上げられてしまい、ひどい有様ではあったが彼は必死に耐えていた。

今いない相手に会うまでは、絶対に死ねない。

それだけが彼の心を前へと向かせており、軽く涙が出てくるのに対し彼は声を上げながらも耐えていた。

「……チッ、しぶとい狼だ。」

「ハァ……ハァ……」

どんなに手足を痛みつけても口を割ろうとしないドリフトを見て、追手の一人は一度捻るのを止め再び彼を地面に押し付けた。痛みが弱くなるのを感じ、ドリフトは一息つこうと呼吸を荒くしつつもうつ伏せになっていた。

「しかたねえ。口を割る気が無いっていうんだったら、死んでもらおうしかねえぞ。糞獣が。」

「……………」

これ以上の拷問は無く止めを刺すかのように追手は台詞を言うと、背後で何かを取り出す音と共に彼の目に流星石の姿が映った。目に映った流星石は、瓶自体に特殊な加工はされておらず液体自身が黄色い代物だった。どんな効力があるのかは彼自身も分からないが、致命的なダメージが来る事だけはわかった様子でドリフトは虚ろな目を向けながらもその力を見ていた。

「もうどんなに身体に痛みが来ようが、お前は何も言う気は無いんだろうしな…… だったら、このまま雷撃と共に心臓の動きを止めてやらあああ！！」

追手の一人はそう言うと、瓶を引き抜きドリフトの身体に向けて雷を放とうとした。こればかりは耐えられるかわからないと悟り、ドリフトは目を瞑り覚悟を決めようとした。

その時、

「待ちなさい。」

「！」

振り下ろされそうになった瓶が途中で停止し、それと共に彼等の耳に声が聞こえてきた。声のした方を見てみると、それは上空に映った影からの声の様でゆっくりと彼等の前にあった木箱の上に降り立った。

「ベル……ミリオン……」

降り立った存在を見て、ドリフトは途切れ途切れの声で彼女の名前を呼んだ。そこに居た存在とはベルミリオンであり、追われている身でありながらもドリフトの前へとやってきた存在だった。背後の翼を消しつつ追手を一瞥すると、手にしていた流星石を軽く前へと向けた。

「その子を殺すと言うのなら、まず私を倒す事ね。物騒な物でそれ以上の傷は、何も生まないわ。」

「ほお、カモがネギを背負ってきたとはこういう事を言うのかもなあ。汚れた雀が。」

「小賢しい台詞は、終わった後に言う事ね……」

顔見知りである様子で、ベルミリオンはそう言いつつドリフトを離すよう彼等に命じた。しかしその交渉を飲むような追手達では無い様子で、軽く小馬鹿にするように彼女に言いつつ抑えていた数人の追手達が立ち上がり彼女も捕獲しようとしていた。行動が気に入らない様子で彼女は呟くと、瓶の栓を取り外し軽くその場で液体を振りまいた。

すると、

ボワァァッ！！

「グァァッ！」

まるで路地全体に液体を振りまいたかのように地面から炎が吹き出し、追手達全員を覆い尽くし出した。事前に策を練っていた様子で彼女はその場から床に降りると、追手達が手を離れた隙にとドリフトの手を取り路地の外へと向けて駆け出した。

軽く足がもつれるものの、ドリフト自身も必死に足を踏みだし彼女の後に続いて外へと向かって行った。

「ま、待てっ！！」

吹き荒れる炎に翻弄されつつも追おうとした追手はそう叫ぶも、吹き荒れる熱風にはなすすべもない様子で行動する事は無かった。その隙に逃げ出した2人は、そのまま上空へと飛び出し彼等の来ないであろうビルの上へと向かって行った。

「ハァ……ハァ……」

「……本当に、貴方って馬鹿ね。そんな身体になるまで、探す相手が居るの？」

昼間の日差しが降り注ぐビルの屋上へと降り立ったドリフトは、そのまま前のめりになりつつも息を整えだした。手足の節々が痛むものの身体自体は無事な様子で、意識をしっかりと持とうと頭を左右に振り正気になろうとしていた。

そんな彼を見ながら軽く膝を曲げたベルミリオンは、彼の顔を覗き込みつつそう問いかけた。無駄な行動をしているのを何度も見かけていたため、どうしても彼女自身は理解出来なかったのだろう。呆れながらもその思考を知ろうと、そう言っていた。

「居るぜ…… アイツには、俺が必要ってことが分かってるからな…… たとえ離れ離れになろうとしても、俺はアイツが望む限り絶対にそばに行くって決めたんだ……」

「……」

「グリップ達に、俺は託されたんだ…… だから、絶対に……！」

俺はカツツの元に行くんだ！！ 身体がボロボロになって、アイツを悲しませることになっても！ 俺はそばに行くって決めたんだ！！」

「……」

問いかけに対しドリフトは小声でそう言っていると、次第に声のボリュームを上げながら彼女に向かってそう言い放った。無駄に探したとしても、それは無駄ではないと彼は思っている様子で必死に伝えようとしているのが彼の目からも伝わってきた。

そんな彼を見ながらベルミリオンは先ほどから変わらない目つきで彼を見ており、何を言ってもその考えを変えるつもりは無いのだろうと思った。それを悟ると、彼女は静かにその場に立ち上がり軽く横を向いた。

「貴方の言うカツツって、『カツキ』の事……？」

「えっ……」

軽く屋上にあるフェンスに両手を置きながら、ベルミリオンは先ほどから気になっていた相手の事を質問した。知らないであろう彼の事を言われ、ドリフトは驚きながら彼女を見た。

「お前、知ってるのか！？ カツツが何処に居るか！」

「言わなくても、多分貴方なら行くでしょうね。その場所に。……その子が今、どうなってるのか。貴方はわかるの？」

驚き振りを見て探している相手であることを知ると、ベルミリオンはそう言いながらカツキの事を問いかけた。もし本当に会うべき必然性があるのなら、今の彼の事をどれだけ感じているのかもわかっていると彼女は読んだのだろう。

返答によって、この後の行動を取る体制が表情から見て取れる。

「……きっと、過去のアレで心がズタズタになってる。カツツは元々そういう事に強い方じゃないから、いつもいつも一人で頑張ろうってしてる。……でも今回ばかりは、傷つけられ過ぎた。だから早く、アイツにあって俺が道を示してやりたいんだ。」

「そう……」

彼の考えるカツキの現状を聞き、ベルミリオンはそう言いながら持っていた流星石を彼に手渡した。それは先ほど追手達が使おうとしていた流星石であり、すれ違いざまに取り上げた『雷（トネーラ）』だった。

差し出された流星石を見て、ドリフトは軽く手を伸ばし瓶を受け取った。

「あの子なら、この先の路地を行って古びた家に居るわ。……無事に、示してあげられると良いわね。」

「！　ありがとう！」

ベルミリオンはそう言いながら軽く微笑むと、ドリフトは嬉しさのあまり満面の笑みを見せながらお礼を言った。そしてそのまま流星石を持ったままビルのフェンスに手をかけ、そばにあった雨水を地下へ流すためのパイプを頼りに下へと降りて行った。

そんな彼を見て、再び彼女は空を見上げた。

『あの子が、貴方の探していた相手なのね。……羨ましいな、思い出と共に行動出来るなんて。私には、思い出なんて何もないのに……』

軽く嬉しい事があり喜んでいる反面、彼女は少し寂しそうにフェンスに持たれ、顔をその場に預け外を見ていた。

「……あーらあ、逃したの。目の前にしておきながら、二度も三度も……」

「も、申し訳ありませんっ……」

ドリフトが新たに向かうべき場所を見つけた頃。

その地区のとある大きな温室の一角では、そんなやり取りをする集団がいた。温室には色とりどりの花々が咲き乱れており、その場だけはとても平和であり外の妙な賑わいの空気とは違った空間を保っていた。

報告をしていた追手達は、上司に位置する存在に報告をし満足のいく報告を持ってこれなかった事に苦し紛れにそう言っていた。花を象った玉座に座っていた上司はそう言うと、その場から立ち上がりゆっくりと彼等の元へと向かった。

そして、

スパァンッ！

「グァッ！！」

手にしていたスティックで相手の頬を叩くと、叩かれた追手の一人はその反動で殴られたまま別方向へと飛ばされてしまった。女性の腕力ではありえないほどに相手は飛ばされており、先ほどまで白かった頬は赤く腫れ上がっていた。

「……… 貴方達も……」

スパァンッスパァンッ！！

飛ばした相手を一瞥した後、残りの存在達に向かって上司は再びスティックによる叩き攻撃を繰り返した。そのまま座って報告をしていた存在達は別方向に飛ばされてしまい、頬を抑えながらも再びその場に土下座していた。

「仕えない存在は、苗になりなさい。」

その後上司はそう呟くと、殴られた存在達は身体に違和感を覚え頬を抑えた。

すると、

ポコッ……！

「！！」

殴られた箇所に一輪の花が咲きだし、それと共に咲いた箇所から激痛を伴いだしたのだ。顔に近い箇所からの激痛を感じ、追手達はその場でのだえ苦しみだし地面を転がった。花を中心に顔には根っこのように血管が伸びだし、彼等の身体に異変が起こっているのが良くわかった。

「たとえ使えない存在でも、血肉くらいにはなるでしょ？ さあ、綺麗な花を咲かせて頂戴。」

「ぐああああああっ！！！」

再び玉座に戻った上司はそう言うと、追手達は徐々に広がる痛みを苦しみだした。苦しむ存在達を目にし、上司は不気味な笑みを浮かべながらその様子を堪能している様子でゆっくりと愛でていた。

「お、お許しをメイリー様あっ！！」

「お、俺達は……！ 苗じゃ！！！」

「黙りなさい、下等が。使えない存在は、私嫌いなの。お解り？」

「ガアアッ！！」

メイリーと呼ばれた上司はそう言うと、再びやってきた激痛に追手達は苦しみだした。しばらくすると、足にまで伸びた根っこは足を突き破りそのまま地面に刺さり徐々に根を張りだした。それによりどんどん成長する花を見て、メイリーは嬉しそうな笑みを浮かべながら巨大化する花を堪能していた。

「ウフフッ、本当に綺麗ね…… 使えない存在はゴミ同然だけど、貴重な肥料に変わりのないもの。」

しばらくして悲鳴すら上げなくなった追手達を見て、メイリーは背後の羽をはばたかせながら花の元へと向かって行った。顔にはすでに正気の色は無く、いつの間にか無くなった目からも咲きだす花をメイリーは静かに見ている。すでに彼等に命は無く、全ての行動が花によって奪われたのが分かる光景だった。

この温室に美しい花々が咲き乱れるのは、彼女の要望を叶えられなかった存在達の命そのものだった。身体すらの自由を奪い、体内で生成される成分全てを花の栄養源にすることでどんな時期でも美しく咲いていられる。

メイリーはそれによって生み出された花々を愛でる事が大好きであり、使えない存在の報告を聞かなくて済む事から次々に苗にしていった。今の行いによって新たに3輪の花が出来上がり、それに満足している様子でメイリーは花を見ていた。

「……本当、逃した存在一人をどうして処分出来ないのかしら。狼なんて、汚らわしい独り身の存在じゃない。」

彼等の報告を再び思い出した彼女はそう言うと、持っていたスティックを握りしめ羽ばたきながら外へと出て行った。

その頃……

「……………」

見ず知らずの場所で命が落ちた事を知らない、青年カツキはと言うと。その日もやってきた朝日を窓辺で眺めつつ、トライムの帰りを待っていた。

晴天に変わりのない青空を静かに見ており、時折見せる鳥達の姿をぼんやりと見ている。その日そ

の日でする事は同じではあるものの、それ以外の事をする気力を持たない彼にとってこれ以外する事が無い。時折の広場で外を見る事はあるが、最近ではそれをする事も減っていた。

「………… つまんないな。」

軽くそう呟いた彼は、その場で見事に飽きた様子で部屋の中に戻った後外へと出て行った。頻度が減ったとはいえ、彼が外へ出なくなると言う事に繋がったわけではない。天気が良ければ外へ出るし、行動目的が無くても何か変わった事が見つけられるかもしれない。最近の彼は少しだけポジティブな目線で見事が可能になった様子で、その日も外へと出て定位置である塀の上へと登って行った。

そして再度空を見上げ、青空をのんびりと見ていた。

『………… ドリ…………』

その後その場にはいない存在の名前を、心の中で呟いていた。

『俺、本当に何がしたくてココに居るんだ………… 世界が変わって、街が変わって、住処が変わって。周りばかり変わって、自分だけ何も出来てないじゃん。……何がしたいんだ。俺って…………』

空を見ていた目線は徐々に下へと向かい、カツキはうずくまる様に身体を丸めていた。徐々に顔の明るさも失われていき、生きるための目的が見えない様子で苦しんでいた。その時その時で出来る事をしていたのにも関わらず、自分には何も出来ない。

それだけが毎日見え隠れしている様子で、彼は軽く吹いてきた風に髪を揺らしつつ丸まっていた。

「……なあ、俺………… 何が出来るんだよ…………何がしたいんだよ………… ……ドリ…………ッ！」

「カツツなら、なんでも出来ると思うぜ。俺は。」

「……？」

次第に心の声が口から出た様子で、カツキは呟いた声に対する返事を耳にした。不意に聞こえた声の主を確かめようと、丸まっていた体制から静かに顔を出し前を見た。

すると、彼の見た先に一人の影がありこちらへとゆっくり向かってきていた。それを見かねたカツキは体制を元に戻しつつ、その存在が誰なのかを確認しようとしていた。

「何が出来るとか、そんな明確な事は必要ない。カツツはカツツ、自分らしく生きていたい事をするのがカツツじゃないか。」

「ド…………リ…………！」

ドリフトッ！！！」

バツ！

その後聞こえてくる声と影の色がハッキリすると、カツキはその場にいた存在を見て驚愕した。そして相手の名前を思いきり叫ぶと、座っていた塀から飛び降りそのまま大地を蹴り彼の元へと向かって行った。

そこに居たのはドリフトであり、先ほどのベルミリオンとのやり取り後すぐさま彼の事を見つけた。しかし寂しそうにしている彼を見てすぐにはいかず、タイミングを見ていた様子でゆっくりと彼の元へとやってきたのだ。

涙目になりながら自分の元へとやってくる彼を見て、ドリフトは優しく彼を抱きしめた。

「ドリフト………！ ドリフトおお………！！」

「カツツ……… ……一人にして、ゴメンな。」

泣きじゃくりながらも叫ぶ彼を宥めるようにドリフトは言うと、優しく背中をさすり彼の欲していた自分がそこに居る事を伝えた。それが切欠となったのか、カツキは込み上げてくる感情に耐え切れず泣き叫び、ドリフトの手の中で涙を流した。そんな彼を見て、ドリフトはただ優しく撫で落ち着くまでそうしていようと決めるのだった。

「……良かったわね、カツキ。」

二人きりの空間になっているのを、遠くから見守っていたベルミリオンは静かに見守る様に見ていた。その後聞こえていないであろうカツキに対し軽くそう言い、優しい笑みを浮かべていた。会いたかった存在に、出会えて良かった。今までずっと耐えていた感情を、抑えなくても良いきっかけに出会えた。辛かった思い出ごと綺麗サッパリに忘れてしまえば、また笑顔を見せてくれる。彼女はそう思っている様子で、ビルの屋上から彼等を優しく見守っていた。しかし、

「……こんな所にいましたのね。」

「！！」

静かに見ていたベルミリオンの背後から声が聞こえ、彼女は驚きながらも背後を見た。するとそこには、不気味な笑みを浮かべながら自分を見ている妖精の姿があった。妖精と言っても彼女と同じ背丈ほどある妖精であり、その笑みもあってか恐怖を彼女に与えていた。

「今までの拘束から逃げられたからと言って、調子に乗らない事ね。汚れた雀。」

「メイリー！ ッ！！」

背後に立っていた存在が言った事に対しては何も言わず、ベルミリオンは敵である事を再確認しその場から逃げようとした。

「あら、何処へ行こうというのかしら。」

シュルシュルシュルッ…… ガシッ！！

「ッ！！」

しかしすでに敵のテリトリーに入って居た事を後に知らされ、メイリーの言葉と共に行動し出した蔓に捕まってしまった。綺麗なワンピースごと彼女を縛り付けており、磔にされる形でベルミリオンは拘束されてしまった。

「無駄な抵抗はおよしなさい。そうでないと、貴方も使えない家来達のように苗になるのよ。」

「ッ…… ……………」

ベルミリオンを縛りつけた事を確認すると、メイリーは顔を近づけ至近距離で彼女にそう言い聞かせた。元より彼女の事を知っている様子で、ベルミリオンは抵抗はせずただその場で静かにしていようと決めた。

そして近くに居る存在を悟られないかと、軽く気にしていた。

「？ ……あらあ、これは絶好なターゲットね。」

スッ

「……！ 待って……止めてええっ！！！」

しかし軽く視界が泳いだ事を見逃さなかった様子で、メイリーは軽く彼女の見ていた方角を見て嬉しそうに言葉を漏らした。そこにはビルの間から見えるカツキとドリフトの姿があり、拘束すべき対象が揃っている事に歓喜したのだ。

せっかくのチャンスを逃がすまいと、メイリーが取り出したスティックを見てベルミリオンは叫んだ。

「ウッフッフッ……！ 見いつけ…………たああっ！」

「カツキ！ ドリフト！！ 逃げてえええー！！！」

その後メイリーがやるであろう行動に予測がついていた様子で、ベルミリオンは遠くに居るカツキ達に聞こえるであろう声量で思い切り叫んだ。それと同時に、自身を拘束していた蔓達がメイリーのスティックにより動きだし、彼等を捕まえようとするのであった…………

「……？ 何か聞こえなかったか？」

「えっ？」

再開したことを喜んでいたカツキとドリフトは、不意に聞こえた声に疑問を抱いていた。しかし何を言っていたかはわからなかった様子で、辺りを見渡ししながら声の主を探した。

「……何も居な」

「っ！！ 危ねえっ！！」

ガバッ！

「ふおおおっ！」

辺りを見渡し誰も居ないと言おうとしたカツキを遮り、ドリフトは危険を察し何かから逃げるようにその場からカツキを抱え退避した。急なことで何が起こったのかわからなかった彼ではあったが、その後に立っていた場所へとやってきた物を見て目を疑った。

「……！！ 蔦！？」

「チッ、アイツかっ！！」

彼等が対比した場所にあったもの、それは比較的大きな蔦のような植物だった。だがただの蔦ではない様子で自ら動いており、何かを捕獲しようとして失敗したらしくその場でうごめいていた。急に現れた植物を見て、ドリフトは誰が来たのかを察し隠し持っていた流星石を取り出し栓を抜いた。

すると彼の手元には、手元に銃が付いた槍のような武器が出現し鋼の様な材質に変化した。武器の形状を完全に変えた事を確認すると、ドリフトはトリガーを引き槍の先端から弾丸を発射した。発射された弾丸はそのまま蔦へと命中し、蔦の一部を引き千切る様に打ち抜いた。

「……………」

ひとまず安全が確保された事を知り、カツキは動かなくなった蔦を見た後ドリフトを見た。武器を構えたまま何かを警戒するように辺りを見渡し、蔦の持ち主を探している様子だった。

「何処だ……！ 姿を現せ！！」

そんな彼を背後に隠しつつ、ドリフトは周囲に向けて言い放った。すると、

「ウフフフ…… やっぱり、そう簡単には貴方達は捕まらないのね。家来達全員を、退けて来た事はあるみたいじゃない……？」

周囲に向けて叫んだ声に往古してか、何処からともなく薄くも響き渡る声で彼らの耳に入ってきた。何がやってきたのかわからない様子のカツキを見つつ、ドリフトは急な攻撃にも対応できるよう警戒を怠らなかつた。

「誰……？」

「この声に、その物の言い様…………… お前だな、メイリー」

「ウフフ…… ア・タ・リ。」

ヒラヒラヒラ……

「……！」

動揺する彼を置いてドリフトは言う、声の主は正解を告げる様に言いながら彼らの向いていた方角にあるビルの屋上から突如襲来してきた。ゆっくりと重力を無視するように華麗に降りてくる妖精を見て、カツキは驚きながら彼女を見ていた。やってきた人物、それは新緑のワンピースドレスに身を包んだ真紅の妖精だった。

「妖精……？」

「正しくは妖精女王（ティターニア）だ、カツツ。……メイリー」

「ウフフフ…… ようやく見つけましたわ、朽ちた犬に穢れた狼。今日が、貴方達の命日みたいじゃなくって？」

メイリーと呼んだ妖精を見て言葉を失っている彼にドリフトはそう言うと、武器を持ち直しつつ二人の間に入るように対峙した。そんな彼等を見ながらメイリーは不気味な笑みを浮かべると、小馬鹿にするように言いながら地面に足が付くか付かないかの位置を羽ばたきながら停滞していた。

妖精女王の名に恥じない身嗜みと物言いであり、ドリフトにとって一番会いたくない相手の様だった。

「何の用だ。もうお前等が管理する場所は、すでに無いはずだ。」

「ええ、そうね。貴方達に追いやられて身を追われた私でしたけれど、今はそのような事はいつでもいいのですよ。貴方達を根絶やしにすれば、それで大丈夫なのですから。」

相手を警戒するような口調でドリフトは言う、彼女は笑みを崩さず彼等の言った事に返事を返した。どうやら昔から敵対している相手の様子で二人は話しており、地区が変化した今でも敵同士の様だった。

「さあ、貴方が背後に隠している彼を渡していただけます？ その子は私達の行動に一番相応しくない考えを持つ子なのですから。」

「俺……が？」

そんな彼女に言われ、背後に居たカツキは意外な言葉に疑問を抱いていた。彼からしたら彼女は見た事のない相手であり、何故自分に会いたいのか検討も付かなかったのだろう。自分を守るように立っているドリフトならまだしも、狙われる理由がわからないようだった。

「クーデターの行動を共にし、今でも息永らえている貴方は危険な芽。不要なの。お分かり？」

「……………」

しかし彼女が狙う理由を聞き最終的に付け加えられた言葉を聴いて、カツキは落胆するように表情を曇らせた。味方だと思っていた存在達にも必要だとは言われず、対峙する敵にもそう言われてしまっははどうしようもない。自分の存在価値は何処にあるのか、彼は再度考えてしまうようだった。

「まあ、もっとも。そんな行動を後々気付いた集団が人情を捨てて貴方を退かしたのは、少しばかり予想外ではあったのだけれど…… 今となっては、そんな努力も無駄に終わるのだけれどもね。」

「えっ…… 人……情……？」

「お馬鹿ねえ、貴方。それだけ強い意志と調合し得た力があるのに、何故貴方が捨てられなければならないのかしら？ 考えたことはなくって？」

気分を暗くしていた彼を気にせず話を続けていたメイリーは、すでに処分したのであろう過去の改革者達の行動に一部予想外の事が起こった事に不満を抱いていた。今までの状態であれば集団全員で街を取り戻し、平和に浸っている所を一気にたたみ掛け崩壊させる。それを彼女は望んでいたのにも関わらず、その行動を起こした時に彼一人だけがその場に居なかった事は驚いたのだろう。すでに終わっていることではあるが今でも不満を持っていると、彼女は笑みを消し冷酷な表情で言っていた。

しかしそんな彼女の言った言葉に予想外の単語が含まれていたことに、カツキは意外そうに呟いた。だがそんな事はどうでもいい様子で彼女はいい、自分のステータスが高いのにもかかわらず何故そんな事が起こったのか。考えた事はないのかと、再度小馬鹿にするように言い放った。

「……不要、だから…… 俺は、皆に必要とされない…… 差別すら……仲間でもするような奴だから……」

「下らないわねえ、本当。全然魅力を感じないわ、貴方って。こんなのが殿方だって言うのかしら？」

「……」

考えるよう言われたカツキは思った事を口にすると、完全に彼女から否定されてしまい再度口を閉じてしまった。元々今の彼には自分に自身を持つ事は出来ない事もあり、考えそのものを根本的に否定されてしまっは自信の自の字も沸かない。

寂しそうな表情をするカツキを見て、ドリフトは苛立ちを覚えつつも彼を座らせないよう右手を彼の肩に置き少しでも安心してもらえよう配慮していた。その手を見て、彼は顔色を暗くしつつもその手のぬくもりを感じ両手を優しく彼の手に合わせていた。

「まあ…… そんな低脳な魅力の貴方なんて、早急に苗になってしまえば…… 文句はないのだけれどねええ！」

バシュッ！

「クッ！！」

軽く二人の友情に近い光景を見つつも、彼女は何も気にせず自らが行っていた事を終らせるべく攻撃を再開させた。手にしていたステッキを前に振ると、背後で待機していたのであろう植物達がいっせいに巨大化し彼等に襲い掛かった。

それを見たドリフトは自分と彼を守るべく再度槍を構え、攻撃を払うように動かそうとした。

だが、

「雷撃……！ 水晶波（すいしょうは） ああー！！！」

バキューウーーンッ！！

「ッ！！」

不意に彼らの元に1つの影が入り込み、言葉を言い放ちつつ持っていた流星石を振り放った。すると、周囲に眩い閃光が放たれ周囲一帯に落雷の轟音が響き渡った。その音と光を目にし、カツキとドリフトは目を強く瞑り耳を押さえた。

メイリーも急な事に驚きを隠せず、同様に目と耳を押さえていた。

「何事っ…… ……！！」

「……！！ トライム！」

光と轟音が落ち着き、その場に居た存在達は目を開けると新たに介入した存在の姿を目にした。

そこに立っていた存在、それはドリフトが居ない間ずっと彼を見守っていた存在。

トライムだったのだった……

突如現れた黒幕と、自分達を助けるべく戦いに参戦を挑んできたトライム。低脳だと自らを見下していた自分を守ろうとする存在達を見て、カツキは驚くことしか出来ないで居た。

「ハア……ハア…… ……良かった、間に合って……」

轟音と眩い閃光が落ち着いてしばらくした頃、自らが持つ力を使って危機を脱した事を悟りながらトライムは息を整えていた。どうやら決死の覚悟と体力全てを使ってその場に入り込んだこともあり、危険もあったため焦ったのだろう。

無事に守れたことに喜びながら、彼はカツキを見ていた。

「トライム、どうして……」

「守りたいからに決まってるだろ。ドリフトほどじゃないかもしれないけど、俺もお前が大切なんだ……… 失うなんて、考えたくもないからな。」

「……」

先ほどから自分を守ってくれる存在達を見て、どうしてその行動をするのかがわからない様子でカツキは呟いていた。メイリーとの先ほどのやり取りもあり気持ちが墜ち気味だったのにも関わらず、変わらずに希望を見せるかのように行動する2人。トライムとは街が変わった頃からの関係もあったが、やはり聞きたい気持ちでいっぱいの様だ。

そんな彼に問われ、返事の内容は変わらず笑顔も変えずにトライムはそう言った。彼からしてもカツキを失うような事は考えたくない様子で、危険が迫れば自分の力で退ける。出来ない時は共に果てようと、考えていた様だった。

「……本当、無駄な行為を行う輩が多くて困ってしまうわね……… 植物達を感電させるなんて、威力は対したものだけれどちょっとばかり考えが甘いのではなくって。」

「何っ？」

彼等の守ろうとする行いに見飽きた様子で、メイリーは行動すらも無意味である彼等に不満を抱いている様だった。だが強力な一撃であるが発生させた力に問題があると言うと、トライムは完璧に決まったと思った攻撃を否定され違和感を覚えた。

「植物は大地の力を糧に生きる生命。雷電は地と対なる力、それゆえに……… 私の敵ではないという事よ。」

「痩せ我慢を言うな。落雷は天からの裁き、触れれば火にもなる力だぞ。」

「そんな事は、触れた後に起こる事でしょ？ だとしたら、触れる前に対処してしまえばいいのよ。」

違和感に対する解説をするかのようにメイリーは言い、どうやら新しく来た存在は敵ではない様だった。しかし彼女の言い分は強がっているだけだとトライムは否定し、たとえ無力化する力で生命を作り出したものであっても触れてしまえば消えてしまうといった。だがそれは『接触』した時であるが故の結果であり、触れなければ意味がないと彼女は言い放った。

それと同時に、彼女は軽くステッキを振り何かを呼ぶような仕草をした。すると、彼女の背後から鶯達が集いだし何かを見せるかのように集まりだした。集まりだした鶯の中央には、一人の存

在が捕まっていた。

「……！！ ベルミリオン！！」

鳶達によって拘束されている存在、それは先ほど彼等の危険を叫ぶ前に捕まってしまったベルミリオンだった。すでに彼女には意識はなく、礫に近い形で拘束されており柔らかい服の外見を無視し手足を縛り付けていた。

「ウフフフ。そう、貴方の言うように触れてしまえば無くなってしまうものよ。でも、触れなければ意味はないわ。ましてや貴方の持つ力は、長距離には向いていない。」

「ッ…… 卑怯だぞ！！ そんな手を使うなんて！！」

「卑怯？ あら、私にとって見ればそんなことは思ってないわ。彼女は私の敵でもあるのだし、亡くなればそれで好都合ですもの。彼女は私の糧となったのよ。」

やせ我慢だと言った反論とばかりにメイリーはそう言い、トライムの攻撃手段である流星石の弱点を見つけた様子で言った。

そう、彼の持つ力は『ゼロ距離』に固定し威力を高めた代物であるがゆえに、遠距離による攻撃手段を持っていないのだ。ましてや力に『雷（トネーラ）』の力が入っており、下手したら壁として使用している鳶に拘束され身動きが取れないベルミリオンの命も危ない。

そんな仲間思いの関係を利用し、どちらが亡くなろうと構わないと彼女は高笑いしつつ言った。

「さあ……どうするのかしら。貴方にとって亡くなっては困る相手なのでしょう？ ……そう、貴方の大切な大切な『時間の友人』を探す手段だものねえ。」

「ッ……！」

攻撃しようにも出来ないトライムの様子を見て、メイリーは彼の会いたがっている友人の探す手段をなくしては困るだろうと言った。それを聞いた彼は事実その様子で、他に持ち合わせている流星石がない事もあり対抗策に困っていた。

「時の……友人……… まさか、ハンメル！？」

そんな彼女達のやり取りを聞き、何かを察したかのようにカツキは不意に友人の名前をあげた。それはまだ街が変わる前、カツキが捨てられた集団の中で唯一彼との関係が良好であり信じていた相手。それが『ハンメル』であり、普段着ている服装や持ち物から『時間の友人』と呼ばれる事が多かった相手だ。

カツキが唯一集団内で頼っていた相手であり、捨てられた時に戸惑いながらも自分の元を去った光景は今でもカツキの中に残っていた。しかしメイリーの言う『人情』によって捨てられたのであれば、彼が一番苦しい思いを背負ってその場を去ったのだと彼は思っていた。

「ウフフッ、さあ。おしゃべりはここまで。これからはどんな舞踏会を繰り広げてくれるのかしら。とっても………楽しみだわああ！！」

一通りの話を終えると、メイリーはそれ以上話すつもりは無いと宣言し再び攻撃を開始した。彼女の持つステッキの指示を聞き、再び待機していた周囲の鳶達はカツキ達目がけて特攻を仕掛けてきた。

「クソッ……！ アイツは死んでなんかいない！！ 俺はアイツに会うまでは、俺は死ぬわけには行かないんだああ！！！」

先ほどの会話によって希望が失せかけているのか、トライムは叫びながらも再び持っていた流星石を使って攻撃の無力化を図った。幸い襲ってくる蔦達はベルミリオンを拘束している蔦とは違う位置から生えている事もあり、たとえ電撃が地面に伝わったとしてもそのまま大地に逃げると思われた。しかし威力調整を間違えれば確実に彼女の元にも電気が流れるため、本気で行けないのもまた事実だった。

「…………… 仕方ない。トライム、行けっ！！」

「！ ドリフト！？」

「防御に徹しても、ここじゃ俺達が不利だ！ 公道の広い所へ！」

そんな彼の攻撃に迷いが見えたのか、ドリフトはそう言い持っていた槍である程度の蔦を切り裂き彼のために道を作った。彼等の今いる場所では日の光も少なく、ましてや広い場所ではない事もあり不意に背後から来られては避ける手段もない。そのため裏道を抜けた先の『道路』へ移動する事を提案したのだ。

それを聞いたトライムは彼の考えに賛同し、切り裂かれた蔦の間を抜け彼女の横を通り過ぎた。すれ違いざまに思い切り蔦を踏み付け、近くに落ちていた石を拾い彼女目掛けて投げ放った。

パシッ！

「ッ！」

投げられた石はそのまま彼女の頬に直撃し、軽く痛みで表情を崩した。幸い小さい石だと言う事もありそれ以上の威力は無いものの、女性の顔に傷をつけるという事は反感を買うと言う事でもあった。

「……良いわ、なら貴方から苗にして差し上げる……！！ 私の顔に傷をつけただけでなく、植物達に怪我を負わせる愚か者がああ！！！」

怒りを身に覚えたのか、彼女はそう叫び蔦達の攻撃の手を一斉にトライムへと向けた。すると蔦達は狭い路地を這い巡り彼の行く先々から強襲を駆け、彼の動きを止めようと試みた。

「へへっ、それくらいなら避けられるっつーのっ！！」

しかし普段からこう言った行動には慣れてる様子で、トライムは強襲を駆けてくる蔦達を華麗に避けそのまま行動へと移動した。その後を集合体となりベルミリオンを拘束していた植物も移動をはじめ、狭い路地を強引に抜けて行動へと向かって行った。

それによってビルは強力な圧力で触れた場所から粉々に砕け始め、周囲に轟音を響かせ始めた。

ゴゴゴゴッ……！！！！

「逃がさないわよっ！！ やっておしまい！！」

そんな植物達を一度外へと出すと、メイリーは背後の羽根を羽ばたかせ空から彼の逃げた公道へと向かって行った。

「……………」

半ば囿に近い形でその場を去ったトライムとメイリーを見届けると、ドリフトは一度槍を元の形に戻しカツキを見た。背後で守られていた彼は不安な感情に何度も何度も襲われた事もあり、俯き暗い顔を見せながらその場で震えていた。

過去に信じた仲間は訳があって自分を捨てたとはいえ、今になってもう一度戦う事を望まない彼にとって苦しいのだろう。ましてや心の傷が深すぎる事もあり、たとえ切欠が多くても蔑まれた彼女の言動もあり病んでいる様だった。

「カッツ…… カッツ！」

「……？」

「こっちっ！」

グッ！

そんな彼を見ていてもたっても居られなくなった様子で、ドリフトは彼に声をかけ強引に手を取りその場を走り出した。掴まれた手の力が強かったこともあり、強制的にその場から動かされ足がもつれつつもカツキは彼の後姿を見た。

「あっ……ドリ………」

「良いからっ！ 早く！！」

走りたくない気分だった様子でカツキが言う言動も遮り、ドリフトはその場を駆け出しトライムの向かった道路の方角へと向かって行ったのだった。

その場に居ては駄目だと感じ、何処かへ連れて行くかの様に。ドリフトは走る事も手を離す事も、やめないのだった。

ドリフトに手を引かれ、カツキはもつれる足を必死に動かし彼に着いて行こうとしていた。しかし不意な事もふまえ走る気力さえも失いつつあった彼にとって、その行動は難しく時々つまづく物が無いのにもかかわらず彼は倒れそうになっていた。

そんなカツキを必死に連れて行こうと、ドリフトは彼の足を気遣いつつ倒れそうになった時は両手で必死に彼の身体を支えた。そして彼の身体に怪我が無い事を確認したと同時に走り、再び倒れては気遣うという行動を繰り返していた。彼からしたら何故そこまでして自分の事を支え走らせようとするのか、今のカツキには理解出来ない様だった。

「アッハッハッハッハッハッ！ さぁあ蔓達よ、あの愚か者を根絶やしにしておしまい！！」
トライムと彼を追って公道へと出たメイリー達の元へと到着すると、カツキ達は周囲に轟く彼女の声を耳にした。声を耳にしたドリフトは、徐々に走るスピードを緩め一度カツキをビル蔭へと隠し公道を見た。

するとそこには、彼女の生成した蔦の集合体がドンと公道を埋め尽くしトライムを捕獲しようとしていた。メイリーの居る頂上付近にはベルミリオンが未だに拘束されており、迫ってくる攻撃をトライムは流星石で対抗するも全力で行動出来ない様子を見せていた。基本は攻撃から逃げる事を優先にしており、距離を取り雷電が強く流れない位置に移動してから放つ。その行動を繰り返しており、どちらかと言うと彼の方が劣勢に見えた。

その後ドリフトは、彼等の居る周囲の様子を見た。公道の脇に立つビル街周辺には彼女の攻撃の手によって壊されたのか、その場で開かれていたであろう市場の露店が残骸となり散らばっていた。周囲には人気は無く、どうやら不意に現れた管理課の蓄えていた力を見せつけられ逃げ出したのだろうと彼は予想した。

今この状況で力となる流星石を持っているのは、彼を含めトライムとベルミリオンだけに等しい。しかしもう一人、その力を持っているであろう存在が彼の後方に居た。それは彼の探し求めていた友人である『カツキ』であり、行動する事は無かったもののズボンの右ポケットには何か道具が入って居る事を彼は知っていた。何とかして戦える戦力を増やし、彼女を止めないとドリフトは考えていた。

しかし、今の彼をどうやって励ますか。ドリフトはその事を考えるだけで時間が足りないとはばかりに顔を左右に振り、落ち着こうとしていた。そんな彼を見て、カツキは不意にドリフトの頭を撫で出した。

「カツツ……？」

「……大丈夫か、ドリ……… そう言っても、俺じゃ何の励ましにもならないかな………」
不意な事だったためドリフトは少し驚くも、彼の純粋な思いでその行動に出た事を彼の口調から悟った。まだ彼の中で行動したい気持ちはあり、それに火をつける事さえ出来ればいくらでも行動出来る。改革時の意欲は残っていると悟り、ドリフトは頭に寄せられた彼の手を優しく握り

彼を見た。

「ううん、凄い嬉しいよ。カツに撫でてもらうの、とても久しぶりだからさ。」

そして静かにお礼を言いながら笑顔を見せると、カツキは軽く返事をし再び顔を俯かせた。何か悪い事を言ったつもりは無かったものの、今の彼の意欲を沸かせるのは至難の技だろう。ドリフトは彼の手を静かに下ろし、顔色を気にしながら何を言おうか考えていた。

『カツ..... 俺、お前と一緒に居るだけで何でも出来るって思ってるんだぜ。.....でも今のカツからしたら、過去が酷過ぎてまた自分が駄目なんだって思う事が怖いんだよな。.....』
励ます言葉はあっても、今の彼に相応しいと思える言葉が見つからない。今の自分に出来る最大の努力さえも出来ない、ドリフトは悔しい思いが込み上げるも必死に落ち着きながら考えていた。

すると、

バシンッ！！

「ギャアアッ！！」

不意に彼等の近くで、悲鳴と共にビルに物体がぶつかった音が聞こえた。慌てたドリフトは音の正体を確認めようと再び公道を見ると、そこにはボロボロの姿になりつつあったトライムが蔦に挟まれ壁に打ち付けられている光景が広がっていた。

「アッハハハハッ！ 捕まえたああー！」

「トライム！！」

その光景を目にしたドリフトはひとまず彼を助けようと、再び流星石を武器の姿へと変え公道へと飛び出した。ビル蔭に隠したカツキの事も気にかかるが、今はそちらが優先と踏み大地を蹴った。

すると、

シュルシュルシュルッ！

「クッ！！ 邪魔するなあああ！！」

新手の姿を確認したのか、メイリーの指示を受けずに蔦が動きだし彼の行動も阻害させようとしていた。そんな蔦達を見てドリフトは槍を振るい、襲い掛かる拘束の手を手当たり次第に絶ちだした。時々その場に止まり親玉に向けて弾丸を放ち、隙を作ってはトライムの元へと向かっていた。無論それくらいでは彼女の攻撃の手も止まず、次々と蔦を生みだし彼の足元を集中的に狙いだした。

「ド.....リ.....」

そんなドリフトが応戦し金属音が周囲に響き渡る音を耳にしてか。ビルの蔭に隠れていたカツキはゆっくりとビル蔭から公道に顔を出し、外の様子を窺った。するとそこには、拘束され身動きが取れないトライムを助けようとするドリフトの姿があり、手持ちの槍を使い蔦の胴体を裂きな

がら走っていた。

周囲に散乱する蔦は意識があるかのように大地にもぐり、その場に根を生やそうとしているのが見て取れた。このままでは、彼が不意な攻撃にやられてしまうかもしれない。そう思うカツキではあったものの、外へ出ようとしたその瞬間……

ズキンッ……！

「グウァッ！！」

彼の持病である頭痛が不幸にも襲い掛かり、彼に牙を向け出したのだ。締め付けられるかのような痛みで襲われた彼は、その場にうずくまり痛みむ箇所に乗せた。しかしそれくらいで収まる彼の頭痛な訳もなく、徐々に彼の頭に根付くかのように脈拍にそって痛みを脳内に走らせていた。

「あぁっ……くうぁっ……！ な……んで……… 俺が……俺ばかり……！！」

頭の痛みにも耐えながらもフラッシュバックする記憶を見て、カツキは悶え苦しみだした。今一番目にしたくない捨てられた時の映像が瞑っているはずの目に映り、不安な気持ちに襲われた彼は叫ぶようにその過去を否定していた。

自分は何もしていないはずなのに、何故そうされたのか。何故自分だけそんな体験をして、周りとは隔離されたかのような生活をしなければならぬのか。そんな現実を思わせる記憶ばかりが脳内をよぎり、カツキはどっちが現実なのか解らなくなるほどに苦しんでいた。

「ド……りいっ………！！ 皆ぁ……！！」

「ハァアッ！！！」

ジャキンッ！！

そんな彼が苦しめる間も懸命に闘っていたドリフトは、トライムを縛り付けていた蔦の元へと辿り着いていた。自らが持つ槍の先端で蔓を切り裂き、そのままトライムを引っ張り出すかのように彼の事を引き出した。その後迫ってくる攻撃に対しても彼は策を練っており、不意にベルミリオンとの別れ際に得た流星石『雷（トネーラ）』の液体を周囲に散布した。

黄色い液体は空気に触れ小さな雷となり、直線上に飛び交い迫ってくる蔦に攻撃を開始した。触れた途端に空気中の酸素と発生した火花で放電し、蔦の先端を燃やした。その隙にと、彼はトライムを連れ安全な場所であり再び見守るべき相手であるカツキの近くへ走り出した。

「クッ……二度に収まらず三度にまで……！！ もう許さないわよ！！ 貴方達！！」

蔦の先端に着いた火を地面に擦り消しつつも、メイリーは逃げたトライム達の姿を追った。計算に入れて行動したのか、彼女の死海を潜り走った彼等の姿を瞬時に見つける事は出来なかった。

しかしすぐさま視界に映り火が消えると同時に、彼女は攻撃の手を彼等に伸ばそうとしていた。

「助かったぜ、ドリフト！」

やられてしまう所を助けてもらった礼をドリフトへ告げつつ、トライムは背後から迫ってくる鳶の動きを見ながら前へと走っていた。礼に対しドリフトは軽く頷きながらカツキの居るビルの影へと向かい、路地を見た。

するとそこには、頭痛に襲われその場から動くことが出来ずにいた彼の姿が映っていた。何時しかうずくまる体制から地面に横たわる体制となっており、頭が痛むのか苦しそうな表情のまま頭を押さえていた。

「……！ カッツ！？ しっかり！！」

「なっ！ まさかまた頭痛が！」

何かにやられたのかと心配するドリフトを見て、トライムは持病の頭痛だと判断し携帯していた頭痛薬を取り出した。しかし背後からやってくる敵の気配を感じ、薬を路地へと投げトライムは攻撃をジャンプして避けた。無論その攻撃はドリフトの目にも入っており、そのまま路地の中へと飛び込み彼の投げた頭痛薬を手にした。

「またっ……！」

「悪いドリフト、もう俺は助けなくても良い……！ カツキを頼む！！」

「トライム！！」

再びやってきた敵の攻撃を目にし彼が呟くと、トライムは再び囧になるが助けなくても良いと彼に告げその場を走り出した。それと同時に、今まで守ってきたカツキを守ってほしいと告げ、彼はドリフトにカツキを託すのだった。

「メイリー！ こっちだ！！」

「お待ちなさいっ！！」

例え目に見えた囧作戦であっても、トライムは負けずにメイリーの前に立ちはだかり流星石を手にした。先ほどから同じ手段しか取れないものの、それでも今は止まるわけには行かない。今倒すべき相手は目の前に居るが、たとえ倒せなくても時間稼ぎはしなくてはならない。

トライムはそう考えている様子で、必死に彼等のためにと時間を稼ぐのだった。

『トライム…………… ……………』

そんな彼の行動を目にし、ドリフトは手にした頭痛薬をカツキに服用させようと彼を抱きかかえた。抱え右手で器用に箱を開け、中に入っていたタブレットタイプの錠剤を手にし彼の口の中へと入れた。飲むための水が無く飲み干せるか心配だったものの、口に入れられた薬を感じカツキは一生懸命に飲み干した。その後しばらくして、頭痛が和らいだのか段々と表情が落ち着き彼の呼吸も整いだした。

落ち着いた彼を目にし、ドリフトは静かにカツキを床に寝かせ起き上がるのを待とうと彼を見ていた。

『カッツ……！ お願いだ、助けてやってくれ……！！』

そんな彼を見ながら、ドリフトは静かに祈り彼が再び目を開けてくれるのを待つのがだった。時間が無いと焦りながらも、彼の身体を気にするかのよう。

「ううっ……」

「！ カッツ、しっかりっ」

しばらくして服用した鎮痛剤の効力が出てきた様子で、カツキは痛んでいた頭からゆっくりと手を下ろし虚ろな目で空を見た。それを見たドリフトはゆっくりと彼の視界に映るように顔をだし、彼の表情を見た。少し疲れた顔をしているものの、それでもまだ元気そうな方であり行動してもおかしくない様子を見せていた。

その後軽く手を動かし起き上がろうとしていた彼を見て、ドリフトは手を貸し彼の身体を起こす手助けをした。ゆっくりと起き上がると、カツキは再び路地から顔を出し外の様子をうかがっていた。

路地の先の公道では今でもタイムがメイリーと対峙しており、同じ手法しかないもののそれでも時間稼ぎをしてくれているのが目に見えた。自分もそんな事が出来たら良いなと思う反面、行動出来ないほどの気持ちの欠落が彼を襲った。しかしドリフトからしたら手足を軽く動かし何かしようとしている彼を見ると、言葉をかけたくなる様子で優しく肩に手を乗せた。

「カッツ……！ お願いだ、助けてやってくれ！！」

「……」

戦う気力を持っていなかったカツキの代わりに対峙していたタイムを見て、ドリフトは必死に説得していた。たとえ今の彼にそんな事をしてもらうなど無理であっても、それでも彼はしてほしい事だけを素直に伝えていた。大好きな彼にそう言われ、カツキは返答に困りつつ視線をいろんな方向へと向け悩んでいた。

「……でも、俺は馬鹿で身勝手に…… 仕えないって言われるほどの無能だし。ドリに頼まれても、俺がなんか出来るわけ……ない。」

「そんな事無い…… カッツは何時だって、俺と一緒に居たいって言ってずっと俺の事を好きでいてくれる！ それだけでも出来ないなんて言えないだろ！？」

「……」

目の前に立ちはだかる敵を目にし、立ち向かう事すら出来ないでいる彼は呟きながらも彼にそう言った。もちろンドリフトもその事は理解しており、それでも彼自身を『仕えない』なんて思っていない事を伝えつつ地面に置かれていた手を握った。

触れた手の感触を感じ、カツキはゆっくりと彼の顔を見た。

「お前は仕えなくなてない。俺はカッツが好きだし、カッツは俺の事が好きなんだろ？」

「……」

「それだけでも、立派に出来ている気持ちだって俺は思うぜ……？ もし今お前自身が何も出来ていないっていうんだったら、またこれから創りだせばいいんだよ。」

必死に説得する大好きなドリフトを見て、カツキは何も言わずに彼の言葉に耳を傾けていた。たとえ何も出来ないと言っても、現に好きな相手とそばに居られる事を知れただけでも生きる意味が見つかった。過去は何時振り返ってもおかしくないとはいえ、それでも今その時に得られる『

安心感』がそこにはあった。

彼が常に望み、この街が変わったと同時に失った願い。それが今、自分の目の前にある。

それを知ったと同時に、カツキは彼の言った事に対し不思議そうに問いかけた。

「創る……？」

「ああ。カツツは、俺達と違って何かを生み出す力を持ってる。だから、それを使えばいいんだよ。カツツが好きな物を、好きな時に生み出せばいいんだよ……！」

「……俺が、創りだせる力を……」

懸命に励ます彼の声を聞き、カツキは四つん這いに近い体勢から正座する体制へと身体を変え、ゆっくりと自分の手を見つめた。何時しか行動する事を止め止まってしまった手の力は、いつでも使おうと思えば破壊へと繋げることが出来る。

でもそれを変えさえすれば、彼の言う通り自分は何かを作りだすことが出来る。

気に入らなければ壊せばいいし、変えたいと思えば作り変えればいい。

言葉から徐々に勇気を貰ったかのように、カツキはしばらく手を眺めていた。そして、彼はそのままの体制で彼にこう言った。

「……なあ、ドリ。」

「何だ、カツツ。」

「……」

俺って、本当に仕えない存在じゃないのか……？ 不要な存在じゃないのか……??」

最近の会話上、再度同じことを聞いてしまう癖が抜けていない様子で彼はドリフトに問いかけた。すると、問いかけられた事柄に関しドリフトはしばらく考え、彼に返答した。

「少なくとも、俺は不要なんて思ってない。俺の願いは『共に居るべき友』の所へ行くこと。それはカツツ、お前自身と一緒に居る事なんだぜ。」

「俺……？」

「ああ。……不要なんて思ってたら、こんな願いを俺は持つ事は無かった。この街ですぐに、消えたと思うからさ…… だからカツツ、俺の前でそんなことを言わないでくれ……！」

お前は仕えなくなってる、俺達を守ってくれるたった一人の友なんだから！！！」

「……！」

問いかけに対し返ってきた返事を聞いて、カツキは驚愕しながら急に込み上げてきた涙を目から流した。今まで抑えていた感情そのものを開放してくれたかのようにドリフトの叫び声が周囲に

響く中、涙を流しながらもドリフトに抱き着いた。

そしてそのまま涙を流しながらも、力強くも優しく彼の事を抱きしめた。抱かれたドリフトも、それに対し優しく返答する様に彼の事を抱き返した。

「……本当に、ドリなんだよな……… 俺とずっと一緒に居てくれる、ドリなんだよな！」

「ああ！ もう絶対に離さない、お前を一人になんかするもんかあああ！！」

泣きながら叫ぶカツキの声を聞いて、次第にドリフトも涙目になりつつ再度そう叫んだ。その後彼等は戦いが目の前で繰り広げられている戦場に居る事も気にせず、その場で泣いていた。

大好きな相手と一緒に居る、叶えたい願いを叶えられた。そして、今日の前に居る相手が寂しがっていた事を知ったため、両者が安心するまで抱きしめていた。強く強く抱きしめあい、嬉しさと安心感を2人は味わっていた。

「……ドリ。俺、やってみる。」

その後壊れかけた心が治った事を悟ると、カツキは静かにドリフトの身体から手を離しその場に立ち上がった。流れていた涙を拭うように右手を動かし水気を取り終えると、路地から移動し目の前に立ち上がる敵を一瞥し対抗する事を露わにしていた。

「もう、誰に言われても俺は構わない。俺は俺だって、今教えてもらったから……！ お前だけでも、絶対に守ってみせる！！」

「カッツ……」

「……こんな時が来るなんて、もうないと思ってたのにな……… ……取っておいて、良かった。」

同様にその場に立ち上がったドリフトが彼に返事を返すと、カツキは右手をズボンのポケットに入れ中を探り一つの流星石を取り出した。それは以前改革をしようと立ち上がった際に使っていた流星石であり、彼曰く『二度と使う事のない代物』とされていた力だった。それを使うと決めたとする事は、彼自身が戦うと言う事を決めたとする事でもあった。

彼の使う流星石、それは『圧力風爆（ヴェトラエミデラティ）』

四代元素の一つである天下の風そのものを自らの力とし、相手にぶつけると言うシンプルな代物。それでも威力は計り知れない物であり、誰が相手であっても彼は負ける事が無かった。

だがそれでも彼自身の力は低く、他者に認められることが無かった。カツキはその事を一番理解しており、仕えない存在だと蔑まされても使う事を止めなかった。そして今こそ、使うべき力だと感じた代物だった。

「ドリフト。……俺。」

スッ……

「えっ……」

「……… 俺も戦うぜ、カッツ。」

負ける可能性が高くても戦うと決めたカツキは、後方に居るであろうドリフトに下がるよう言おうとした。すると、不意に彼の肩に温かい感触が伝わりと同時に優しい声が伝わってきた。隣にはいつしか笑顔で自分を見ているドリフトの姿があり、共に戦うと言ってきたのだ。

「もう一人で悩まなくていいんだ。これからは俺等を頼ってくれれば、カツキは望むだけ強くなれる。俺はその手助けをするぜ。」

「ドリ……………」

「さ、行こう。もう一人にしないって約束したんだから、絶対にお前を殺させたりはしない。一人で倒せない相手だったら、二人で倒せばいいんだ！」

俺達は負けない、負けるはずがない！！」

「……！！ ああ！！」

そして彼の声聞き、再度励まされた様子でカツキはそう叫んだ。その後互いの手を握り強く握り返すと、共に流星石を手にしたまま敵の居る方角へと向かって走って行った。

『俺達の願いは叶った…… 今なら、この世界は俺達が変わえられる！！』

二人はまるで共鳴するかのように心の中でそう叫ぶと、掴んでいた手を離し左右に別れ戦闘態勢に入った。そんな二人の目の色を見て、メイリーは静かにステッキを振り合図を送るのだった。

「さあ……！ かかっていらっしやい！！」

育成し作り上げた蔓の集合体のそのまた上、自らの台座と思われる大輪の花の上でメイリーは叫んだ。遠回しなその声を上げた後、メイリーはステッキを振り蔓達に攻撃を命じた。その合図に応呼してか、蔓達はそれぞれで近くに居る目標に向けて攻撃を開始した。

「蔓に触れれば俺達の負け、幾多の攻撃は俺達の絶望…… なら！」

スッ

「例え低能だとさげずんたその声でも…… 俺は………！ 負けない！！」

蔓達の攻撃を見て安全圏外と思われる場所を走りながら、カツキは持っていた流星石の栓を開けた。そして手元周辺に液体を振りまき、自らが調合し創りだした力を発動させた。

両手の中に風を集めるような仕草をすると、周囲の風達は彼の願いを叶えるかのように次々に集まりだした。目で見えるほどに彩りも変化し出し、彼の手の中には風玉と思われる大きな自然の玉が生成された。

「ハァアアッ！！」

相手を攻撃するための手段が整うと、カツキは作りだした風玉を発射させるかのように左に振りかぶり前へと放り投げた。すると風玉は前へと向かって飛び出した瞬間、弾けて前方一面に向けて強烈な風圧を放った。風は風力もあり次々とカマイタチへと姿を変え、蔓達の集合体へ向けて攻撃を開始した。

「ウフフッ 威力は凄くても、届かなければ意味はないわっ！」

彼の攻撃が始まった事を目にする、メイリーは蔓達に指示を出し風が来る場所周辺に防御壁を展開させた。それにより命中した箇所の蔓達ははじけ飛ぶものの、ぶつかる回数が増えていくにつれて風の威力は弱まって行った。

再度風を作り発射させようとするカツキの動きも見て、彼女は蔓達に攻撃の指示を与えた。すると、溜めこんでいる体制であった彼目がけて蔓達が急襲をかけてきた。

「させないっ！！」

ガシュンッ！！

そんな彼へ向かった攻撃を見て、間に割り込んだドリフトは槍を振り攻撃してくる蔓達を切った。近距離に特化した分動きはスムーズであり、自分と彼を守る分には十分すぎる範囲だった。その後続けてくる攻撃に備え、彼は手元のトリガーを引き援護射撃を放った。

放たれた弾丸はそのまま直線に飛び、先ほどカツキが攻撃した防御壁の根本を根こそぎ撃ち抜いた。

「おるうあああッ！！！」

バシンッ！！

盾となり自分を守ってくれたドリフトの姿を見た後、再度攻撃の準備が整った様子でカツキは風玉をバスケットボールの様に地面に打ち付けた。すると風玉は弾力性のあるボールの様に弾み、地面を飛び立とうとした瞬間に弾け、再び蔓達に向けて攻撃を開始した。

弾力による運動エネルギーも追加された事もあり、反射角に沿って動く風の威力が大幅に上がっていた。再びやってきた風圧に耐え切れず、多量の蔓達は風に切りとられ宙に吹き飛ばされて行った。

これこそが、彼の創り上げた流星石【圧力風爆（ヴェトラエミデラティ）】だった。

四代元素の中で上位に位置する『風』の力を使い、圧縮し固めた風を放つシンプルかつ強力な力。弾力性もあるその力は、彼が改革を乗り出した際に幾多の攻撃パターンを編み出す事にも繋がった代物。今となっては墮ちてしまったその力も、今変えるべき目の前の現象を変化させるにはもってこいの力であった。

ドリフトの持つ力と相対的と言う事もあり、相方としての相性も抜群であった。

「ッ！まさか、ここまで貴方達がやるだなんて思ってもみなかったわ。そんなに、周りの存在が大切？」

吹き飛ばされた蔓達を見て、再び周囲の植物を集めながらメイリーは彼に問いかけた。先ほどまでの意気消沈していた彼とは違い、今の彼の目は輝き正気に満ち溢れていた。存在が一番輝ける瞬間であり、何事にも屈しない不屈の精神とも思われる光景であった。

「ああ、大切だ！ 例え俺を捨てた奴等がこの街に住んでると言われても、俺にはまだ護るべき相手が居る..... そいつさえも、殺されてたまるかああ！！」

「フフッ、意気込みだけは買ってあげる。.....でも、貴方の力だけでは無理よ。こっちには、こんな事も出来るんですからねえっ！！」

問いかけに対しカツキは叫ぶと、小馬鹿にはせず彼女も本気とばかりに杖を振った。すると、蔓から飛び出していた刺が宙へと放たれ彼等目がけて攻撃を仕掛けたのだ。その動きを見た2人はその場から回避する様に移動し、双方に別れた。

しかし、

シャキンッ！

「ッ！」

ただ回避するにも刺と言う事もあり、幾多の飛び道具を華麗に避けるには今のカツキには難しい事だった。纏っていた衣服に刺が突き刺さり、その拍子に布地が破れ段々と皮膚に近づいてきたのだ。致命傷となったのは、左腕に向かって飛んできた一撃であった。

「カツッ！」

「.....大丈夫だ、ドリッ.....！おりああああっ！！！」

別の位置で攻撃を避けていた相方の声を聞き、カツキは返事をしながら風を集め飛び交う刺に向かって放った。すると風に巻き込まれた刺は有らぬ方向へと吹き飛ばされ、周囲のビルに向けて突き刺さった。動く事の出来なくなった刺はそこから進む事は無くなり、彼等に向かう攻撃は一瞬にして消え去った。

「へへッ、どうだっ！！」

「やるじゃない？だったら、これならどう？」

挑発交じりに彼は言い、服に刺さっていた刺を払い腰に巻いていた上着を脱ぎ捨てた。活動し身体が熱くなった様子で、その顔はとても生き生きとしていた。戦う事に対しての意欲かは解らないが、今までの暮らしと比べてとても生きがいを感じている様だ。

『元気ハツラツ』と言った方が正しいのかもしれない。

そんな彼の言葉を聞き、彼女も負けてはおらず次の行動へと移った。再び声と指先で合図を送ると、鳶達は動きだし目にも止まらぬ速さで動き出したのだ。そして、彼等を拘束すべく襲い掛かってきた。

「そんなの.....払えば効かないぜっ！！」

瞬時に動く鳶の動きに目もくれず、彼はそう言い圧縮した風を自分の周りに展開した。すると、風が防御壁になったかの様に接近してくる鳶を払い、自分の身に寄せ付けまいと彼の身体を護り出したのだ。弾かれる攻撃を目にし、鳶達は意識がある様に触れるか触れないかの位置でとどまり、様子を見ていた。

「そう、貴方には効かないわ.....でも、そっちはどうかしたねええ！」

「えっ！？」

彼の攻撃方法を見て左程驚かない様子を見て、カツキは慌てて別の位置に居るであろうドリフトを探した。タイムはすでに別の場で戦っており、彼等の近くにはおらず拘束の心配は少なかった。だが近くで戦っているはずの彼は別であり、自分にとって大切な人の事を思い焦っていた。

すると、彼の顔が左へと向き紫色が彼の視界に映った。だがその発見は少し遅く、前方からの攻撃を払っていたドリフトの後ろから数本の鳶が接近してきた。そして、

ガシッ！！

「うわああっ！！！」

「ドリッ！！」

不意に隙を突かれ捕まってしまったドリフトを見て、カツキは彼の名前を叫んだ。全力で鳶の拘束が酷くならない様彼自身も努力しているが、おそらく誰かが助け出さない限り逃れられないだろうと思われる攻撃だった。

周囲の鳶達は収束し太いロープとなって、彼の手足を縛りつけようとしていた。それを槍で必死に防いでいる状態に等しく、劣勢すぎた。

「さあ、貴方も死になさい！！！」

「クッ……！」

彼の元へと移動し助けようとするも、自身を護っている風は位置を変えてしまえば再び生成しなければならない。液量がどんどん減って行く彼等に対し、無制限とも思われる彼女の攻撃は非道同前であった。そんな光景を目の当たりにし、どうする事も出来ずにいた。

『……まだ、死にたくないんだ……！！ 嫌だあああ！！』

そんなドリフトを助けようとするも、今の自分の状況にカツキは目を強く瞑った。近接で応戦する力は手元にないため、彼の持つ力では応戦するには時間が足りないのだ。メイリーの声に反応し再び接近する蔦を見て、カツキは諦めそうになる心で叫び声を上げた。

すると、

【ワァオオオーーン………！】

「えっ……？」

何処からともなく、獣の遠吠えと思われる声が周囲に響き渡った。その声を耳にし、涙目になっていたカツキは正気に戻りつつ声の主を探した。

周囲に響き渡る声を聞き、何処から聞こえるのかとカツキは周囲を見渡した。

「何……この声……？」

「犬……… あっ！！」

「えっ！？」

周囲に響く遠吠えを耳にし、メイリーも一時手を止め声の主が何処か探した。これ以上新手が現れてもっては彼女自身にも不利に等しく、ギリギリの戦いが行われている今には不要すぎる手助けだ。声の波長をカツキは分析していると、不意に視界に一つの影が目映った。影を目にし声を上げると、メイリーは彼の見た方角を見ようと背後を振り返った。

そこには、四足で歩く一匹の獣の姿が見えた。太陽が丁度影の背後にある為、逆光で見えにくいものの茶色の犬である事が分かった。その声に、カツキは聞き覚えがあり姿に見覚えがあった。それはたった一人の、彼にとって支えとなっていた存在。

「ゲン……タ………！」

視界に映りおそらく助けに来てくれたのであろう相手名前を、カツキは呟きながら涙を流した。もうこの世界には居ない、元気な姿を見せてくれるはずのない彼の愛犬『ゲンタ』だったのだ。性格はキツく彼に懐く事のなかった彼が現れた事を見て、カツキは号泣した。何故来てくれたのかはわからないが、姿を見た瞬間に目から大量の涙が湧き出したのだ。

「何ですって……新手なの！？」

不意に現れた新参者を目にし、メイリーは急遽狙う相手を変更し現れた柴犬に攻撃を開始した。しかし相手は純粋な犬であり、中型犬とはいえ小柄な体系もあってか蔓の合間を掻い潜りあっという間にカツキの元へと向かってしまった。

そして自らが持つ鋭い牙をむき出しに、何時しか隙をついてカツキを縛り付けていた藁を噛み千切りだした。一つ一つではあるものの、それでも行動は素早く千切った際に口に残った異物は早々に吐き出していた。

足の拘束が無くなると、カツキは流れる涙を拭つつその場に立ち上がった。

【惨めだな、カツキ……… 俺になんと姿みせとる。】

「ゲンタ……… 何で………」

【俺は、俺が正しいと思う事をしとるだけばい。信じろ、お前自身を……… お前はそんな、弱い男じゃないはずけん。】

頭に直接響く形でゲンタは話し、カツキに告げるべき言葉を告げていた。半泣きで居る彼に厳しいも優しい言葉をかけ、お前は弱い男ではないと言った。そう告げると、再びゲンタはその場を走りだしメイリーの操る藁の集合体に向かって盛大に噛みつきに向かった。

無論そうはさせまいと彼女は藁を動かし、ゲンタの身体を縛りつけ引きはがそうとした。だが彼は噛みついた部位を離そうとはせず、唸りながらも必死に抵抗していた。

「あっ！！ ゲンタっ！！」

【行け！ お前は生きるんだ………！ 俺に惨めな姿を、見せるんやない！！】

身体を縛られ苦しい表情を見せたゲンタを見て、カツキは再び彼の名前を叫んだ。しかし彼は自分に構わず、その場を生き抜き惨めな姿を見せつけるんじゃないと再度叫び返した。それを聞いて、カツキは流れる涙を必死に堪えつつ歯を食いしばり走り出した。

「ッ……！！ うあああああ——！！！」

それと同時に、周囲に散布した流星石で風を集合させ、渾身の力を込めた最大級の風玉を鳶の集合体へとぶつけた。風が鳶に触れると同時に破裂音が周囲に響き渡り、彼もろともその場から近い物体全てを吹き飛ばした。

植物は風圧に耐え切れず引き千切れ、ドリフトを捕まえていた鳶達も千切れた残骸がぶつかり身を崩して行った。吹き飛ばされたカツキはそのまま道路を転がり、地面に食らいつこうと手足を伸ばし必死に耐えていた。地面にぶつかった衝撃で身体が痛むも、泣くまいと必死に堪え風に対抗していた。

「うっっ……！！！ くああああっ……！！！」

「キャァァァァ——！！！」

生まれた爆風に煽られ、操作していた場所からメイリーも吹き飛ばされ悲鳴を上げた。その拍子に彼女の服から一つの鍵が落下し、彼女を何処か遠くへと飛ばして行ってしまった。

シューーンッ……

「ッ……… ……あっ、ドリ………！ ゲンタ………！」

爆風がしばし街中を通過し落ち着くと、カツキは手足に力を込めゆっくりと起き上がった。うつ伏せに近い体制ではあったものの、幸い軽傷で済み手足が動かない事は無かった。飛ばされた拍子に流星石は何処かへ行ってしまったものの、カツキはそんな事は気にせず同様に飛ばされたであろう二人を探した。

顔を左右に動かし姿を探すと、近くの瓦礫にぶつかり気を失っているドリフトが見えた。彼の姿を見つけたカツキはもつれる足を一生懸命に動かし、何度か手が地面に着くも彼の元へと駆け寄った。そして身体を揺さぶり、彼は生きているのか確かめた。

「ドリ！ ドリッ！」

「……うっ……… ……カツツ………？」

「ッ………！ ……良かったっ………！」

揺さぶりながら声をかけると、ドリフトは意識を取り戻し唸りつつゆっくりと目を開いた。軽く虚ろではあったものの、すぐに焦点は会った様子で目の色はすぐに良くなって行った。自分を助けに来てくれた最愛の友の姿を見て、カツキは再度涙を流しつつも彼を抱きしめた。その強い抱擁を感じて、ドリフトも優しく右手を彼の背中に置き、優しく撫でるのであった。

辛いことからようやく解放する事ができた

それを実感できる、彼の笑顔と涙目であった。

「……トライムと、ベルミリオンは……？」

「俺達なら、何とか大丈夫だ……ドリフト。」

「？」

泣きじゃくるカツキを慰めながら、ドリフトは顔を動かし他の仲間の姿を探した。すると彼の後方から声が聞こえ、ボロボロになりつつも両手でベルミリオンを抱えているトライムの姿があった。

遠くで戦っていたとはいえ爆風からは逃れられなかったらしく、手足に無数の擦り傷が見えた。だが辛い顔だけはせず、気を失っている彼女を運んでいたようだ。

「……カツキ。」

「トライム……… ……今まで、ゴメンな……… 俺が全部悪いのに、人のせいにして………」
彼の声を聞き、ドリフトを抱いていたカツキはその場から立ち上がりトライムに頭を下げた。必死になって看病し共に居てくれた相手にも関わらず、冷たい言動で避けていた事。トライムにとって大切な相手を探させず、自分につきっきりにしてしまった事。

他にも詫びる事がある様子で、深々と頭を下げていた。

「もう良いよ。……それよりも、あの犬って………」

「犬……？」

そんな彼に軽い笑顔を見せながら、トライムは道端に立つ一匹の存在を見ながら呟いた。彼の声を聞いたカツキは後方へと向くと、そこには変わらずに立ち続けるゲンタの姿があった。

【………】

「ゲンタ……… ……」

淡い光と共に立つ柴犬を見つけ、カツキは静かに名前を呼びながら近づいた。だが彼の身体には触れようとはせず、一定の距離を置いた状態で立ち止まった。

【終わったとか。カツキ。】

「うん……… ……ありがとう、ゲンタ。……ずっと、弱くて………ゴメンな。」

頭に響く声でゲンタは言う、カツキはそう答え彼にも頭を下げた。どんなに感謝しても感謝しきれないイキザマを見せつけられ、それが弾みとなって一撃を放った。だからこそ伝えたい言葉がある様子で、中々良い言葉が見つからずただ謝る事しか出来ないでいた。

【何故謝ると。お前は出来る事をやった、それが今やろ。】

「……うん。」

【なら、俺はそれ以上言う事はなか。……達者でな、カツキ。】

「あっ………」

とはいえそんな言葉を聞いたかった訳でもなく、彼からの言葉で跳ね返されてしまい返事を返す事しか出来なかった。そんな彼にゲンタは何も言わず、その場を去ろうと身体の向きを変え背を見せた。その場から去ってしまう光景を目の当たりにし、カツキはとっさに追いかけてようと足を出した。

だが彼に近づけば噛まれてしまうと思い、一步踏み出したがそれ以上は出ずに居た。

すると、

「…………ッ！！ ゲンタァア！！！」

【？】

「今まで……！！ 俺を支えてくれて、ありがとな——っ！！！！」

【…………】

何か言わなければと思ったのか、カツキは渾身の力を込めてそう叫んだ。名前を呼ばれて止まるゲンタであったが、彼の言う事に何も返事はせずそのまま何処かへと向かって走り去ってしまった。絶対に懐く事のない、彼の生き方。

それさえも、彼の事を支える存在には変わりはないのだ。次第に彼の周囲の光が強くなり、ゲンタはその場から姿を消してしまった。

「……ゲンタ…………」

後姿を最後まで見送ると、カツキは呟き混じりに名前を言い静かに涙を流した。どんなに恩を返したくても、これ以上は返せない。煮え切らない思いではあったものの、絶対に伝えなければならぬ言葉を伝えられた。

笑顔を浮かべた目からの涙は、寂しくもあり嬉しくもある雫であった。

「カツツ……」

「……大丈夫、大丈夫だよ。…………」

【もう一人は、地区の扉の前に居る………… 行け、相棒。】

「えっ……？」

寂しそうにするカツキを見たドリフトが声をかけるも、彼は静かにそう答え涙を拭った。そしてその場を離れようとする、不意にゲンタの声が頭に響いた。その声を聞いたカツキは振り返るも、そこには彼の姿は無く荒れた地区の街だけが広がっていた。

「…………」

「どうした、カツツ。」

そんな彼の様子を見たドリフトは再び声をかけるも、カツキは何も言わずただただ笑顔を见せていた。彼の笑顔を見て何かを悟ったのか、ドリフトは何も言わず彼も同じ方向を見て笑顔を見せるのだった。

「ううん、なんでもない。……トライム。」

「ん？」

「ハンメル、生きてるって。地区の外れの、大扉の前に。」

「本当か！？ くうっ……！！ やったあああああ——！！！」

返事を返しつつ前を向くと、カツキはトライムにそう言い先ほど受けた伝言を告げた。すると彼の表情が一変し、待ちわびていたとばかりに笑顔を浮かべ歓喜の声を上げた。

「……ううっ……… ……うるさいっ………」

それと同時に、彼に抱かれていたベルミリオンが目を覚まし、静かに彼の顔を叩いた。

「そうと決まったら、早く行こうぜ！！ アイツに、俺も会いたいからさっ！！！」

「おうっ！」

「もう、本当に気分で動くんだから…… ……でも、良かった。」

その後叩かれた頬を気にせず歩き、先導を切る様にトライムが歩き出した。彼の会うべき相手の居場所も分かり、地区にやって来た平和が彼等の笑顔を戻したのだろう。

落として行った地区外への鍵を持ちながら、ドリフトはベルミリオンと共に彼の後に続いた。

「………」

そんな彼等を目にし、カツキもそれに続こうとしたその時。不意に後ろへと振り向き、心の中で一言呟いた。

『……ありがとう、愛犬。』

「カツツ、早くーっ！」

「今行くから！！ ……へへっ」

聞こえたかすらわからない言葉を言い終えると、前方を歩いていたドリフトは彼の名前を再度呼んだ。彼も彼で何度も呼べる相方の名前が嬉しいのか、その声は優しくずっと一緒に居たいと言わんばかりの声であった。

その声に返事を返し、自分らしくない事を言ったと思ったのかカツキは苦笑しながら彼等の元へと走って行ってしまった。

【ワァオオオー——ン………！】

四人がその場から離れていくのを見て、何処からともなく吹いてきた風に乗って。周囲に柴犬の音が、響くのであった………

— E P I S O D E E N D —

朝焼けの日の入りを終え徐々に日が天高く昇る、とある街のとある一区。そこは寒空の気候であることを忘れさせてくるかのような、とても明るく華やかなネオン街。『ストリート』と呼ばれる商店街に近くも、巨大な通りとして名高い場所だった。

ウィーン……

「ありがとうございましたー！」

「……………」

そんな商店街のとある店舗の自動扉を抜け、店の外へと出てきた一人の青年。背後から明るく自分を送ってくれるかのように来る声に反応せず、ただ静かに青年は外へと出てきた。その後店の中と外との気温差を感じ、青年は身体を寒さに少し震わせつつ身にまとっていた上着のチャックを締めた。

「ハァ…………… この店のゲームも、対外遊び尽くしちまったな…………… やってもやっても勝てねえし、イライラすっぜ……」

チャックを締め終わると、青年は軽く店の中でしてきたであろう娯楽の感想をぼやきつつコートのポケットに手を入れ歩き出した。額にゴーグルをし、感じたストレスのままに表情をしかめる1人の黄色の狐。それが、この街で行動する事となる一人の存在だった。

狐は一人、華やかな街の至る所から聞こえてくる楽しげな声や集団のたむろをよそに、商店街の通りを歩いた。時折カップルなのか男女のペアがイチャイチャしながら楽しくはしゃぐのを見て、さらに狐は不快そうに睨みつつ視線をそらす。その繰り返しを常に行っており、唯一大人しく過ごせるであろう自宅となるマンションへと向かっていた。

自分だけが不幸、周りの幸せに対する不幸が全て自分に返ってくる。時折やってくる集団の仕打ちで、本当の『安らぎ』を知らない1人の狐。

彼の名は『シップス』

この話の主人公となる、自分の個性を忘れた存在なのであった……………

彼の居るその地区に『春』と呼べる気候が無くなったのは、丁度街の原石として知られる『流星石』が降り出した頃。幻想的であり街の力として使用されているその原石が降ったと同時に、彼は今まで願ってきた希望と呼べるものを失った。平和だった幼少期とは裏腹に、年を重ねる毎に過激になって行く周りからの対応。

そう、彼は一番ストレスを感じ自らの身を捨ててしまいそうになる経験をしてきた。それこそが

、周りからの『苛め』だ。

唯一『教育の場』と呼べる学校があったその地区で、彼は想像以上の過激な苛めを経験してきたのだ。それはドラマと呼べるほどの代物とは違い、一步間違えば彼を死なせてしまう可能性のある物も中にはあった。そんな場であっても、彼は決して逃げる事はせずただひたすらにその場を卒業する事だけを望んでいた。

しかし、最近の彼はたんに耐えるだけでは身が持たないほどの心の傷を、負っていたのだった。

「……………」

今の趣味である『ゲーム』が楽しめるゲームセンターを後にした彼は、その足で商店街から遠く離れた場所に位置する自らが住むマンションへと帰ってきた。外装は白く清楚な雰囲気があり、建物自体はシンプルな3DKのマンション。その一室に彼は部屋を設けており、近くのスーパーで購入できる食料を調理し生活していた。

ゲームセンターを好む今どきの若者にしては珍しい、自炊を行う几帳面な性格だ。その日は買い置きで料理をすると決めていたため、買い物はせずシップスは静かに階段を昇って行った。時折同じマンションに住む住人が顔を出し軽い挨拶をしてくるため、それに対し彼は軽く答え足を止める事は無かった。ましてやそのまま会話に発展すると言う事も中々ないため、彼が外で信頼する相手は居ないと言っても間違いでは無かった。

しかし、表向きな対応に対し彼は返すものの。その後の行為を、常に恐れる事が多かった。

『……うわぁ、また何か嫌な奴と出会っちゃったよ。』

すれ違いざまに聞こえてくる、誰とは言わない耳打ちに等しい陰口。

『せっかく素敵なマンションに住めたって思ったのに、こんなに酷い風評被害があるなんて思ってもみなかったわ。』

挨拶や会話を軽くかわしただけで聞こえてくる、相手を不快にさせる小声話。

『本当本当、俺等まで同士って思われちゃうんだぜ？ ひっどい話だよなー』

しかし遠慮しないで話す存在も中にはおり、それがまた彼を一層酷く害する気分させる事が多かった。そしてしまいには、同じ話が最後の締めとして聞こえてくる。

『アイツって本当、気持ち悪い。』

「……………」

シップスは常に聞こえてしまうその話を聞いてしまい、常に不快に思いながらも早く部屋に帰りたと思っていた。そして徐々に小走りになるその行動を見ると再度非難の声が聞こえてくるため、彼はフードを深くかぶりその場を駆けて行った。階段を急いで駆け上がり、マンションの一番隅に位置する自らの部屋の扉の前へと到着すると、扉を開けるための鍵を急いで取り出し開錠し、中へ逃げ込むように入り込んだ。入ると同時に周りの干渉を一切避けるかのように、鍵をかけ防犯用のチェーンも扉に欠けた。

それを終わると同時に、彼は深いため息をつき自らの情けなさに気付かされていた。

『……俺、何でいつも逃げる事しか出来ないんだ…………… 俺は何も、悪い事なんてしてねえ

のに……』

心の中で常に同じ質問を繰り返し、シップスは徐々に込み上げてくる辛さに涙した。自らが逃げ続けているこの世界は嫌い。周りよりも恵まれた環境下にあるはずのその地域が、何故自分に対しては何の効力も発揮しないのか。彼はそれを感じない日が来ないかと、泣きながら常に願っていた。

しかし、いつまで経っても叶わないその願いは虚しさだけを彼に届けていたのだった。

「……ハア。」

扉の前で流しそうになっていた涙を拭くと、シップスは溜息を付きながら履いていた靴を脱ぎ中へと入った。外の寒さとは裏腹に温かいその部屋は、何処か外とは違う空間を作っており彼の事を温かく出迎えてくれている様な気がした。

その後キッチンを抜け、寝室へと向かうための引き戸を開けた。

「ん、お帰りシップス。」

中へと入ると、そこには外の寒さとは違う空間が広がっており中に居た存在が彼に声をかけた。そこに居たのは灰色針鼠の青年であり、名前は『アシュレー』という彼の同居人だ。本来一人暮らしのつもりでいた彼にとって、軽く面倒でもあり親身になって話を聞いてくれる存在でもあった。

声をかけられ軽く手で返事を返すと、シップスは部屋へと入り自分が使用しているベットの上に倒れこむように仰向けになった。

「……」

「どうしたんだよ、また『つまんねー』みたいな顔してさ。」

小説片手に菓子を食べていたアシュレーは彼の様子を見て、軽く気にしつつ読んでいた本にしおりを挟んだ。その後軽く彼が寝ているベットのそばへと移動し、上から覗き込む形で彼を見た。

「だってつまんねーじゃん…… こんな街、居たってなーんも楽しい事なんてねえし。」

「そうか？ 結構楽しい本が多いし、安価でいろんな事が出来るって良い事じゃん。お前だって漫画くらい読むだろ？」

案の定つまらない様子でボヤク彼を見て、アシュレーは毎度の事ながら少し顔をしかめながら言った。彼もこの街の制度にのっとりその街に似合った暮らし方をしており、それなりに充実した毎日を送っているつमोरりのようだ。現に外へ出歩く事もあるが、寒い日や留守番込の日は大抵買いだめしてある本を読むことが多い。今日はたまたま小説を持っていた様子で、溜まった本が置かれている本棚は様々な漫画であふれていた。

「そりゃ読むけどさあ……… ってか、今度は何読んでんだよ。」

「最近気に入ってる著者の本。四神（よがみ）って人のなんだけど、結構面白いぜ？」

「また変わった名前だな。……四神（しじん）？」

「だから『ヨガミ』だって。」

教育の場として発展しているその街の制度は、シップス自身も利用できる場所はとことん利用している。学業として使われる書物は安価で購入する事が可能であり、自主鍛錬の場として使える施設はその区域に住んでいる限り無料で使える。そう言ったところはシップスも同意するも、

なかなかそうはいかない悩みがあるためか素直には喜べない様だった。

その後アシュレーが読んでいた本が気になり問いかけると、その本の事で話題が盛り上がっていた。彼の持っていた本の著者は『四神夏菊（よがみなつき）』と言う人の様で、今はその人の書いた小説を読んでいたようだ。どうやらシリーズ物で点々と出ている様子で、漫画を読むことが多い青年達の間でも楽しまれている物だった。

もちろん他の区域で買えば高い代物だが、ここでは安価。アシュレーはとことん読んでいる。本を見せながら説明されたためか、シップスは軽く目に入った漢字を読むと彼に苦笑しながら突っ込まれてしまった。だがそう言ったところで、自分の発言で笑ってくれる彼の事をシップスは嫌いではなかった。そして、自然と彼にも笑みが戻ってきていた。

「……あ、そういやそろそろ飯にすっか？ 今日俺の当番だよな。」

そんな楽しげな会話をして気が晴れたのか、シップスは寝室に置かれていた時計を見つつアシュレーに言った。時刻は昼過ぎを差しており、少し遅めではあるが昼食の時間である。

「おう、またチャーハン？」

「【また】とか言うなし。」

「あ、悪い悪い。」

それに対し返事を返したアシュレーではあったが、彼の発言で気に入らないところがあった様子でシップスは指摘していた。語句に指摘され軽く笑いながらアシュレーは弁解すると、シップスはちょっと不服ではある様子だが顔はしかめずそのままキッチンへと向かって行った。

『アイツ、日に日に笑顔が減ってるよな……… 外に行くたびに、そうなってる気がする。』
寝室から出て行ったシップスを見送ると、アシュレーは持っていた小説をサイドテーブルに置き軽く彼のベットの上に腰を下ろしながら考え事をしていた。軽く天井を眺め、ぼんやりと先ほどのやり取りを思い出しつつシップスの事を気にしていた。同居人であるから、と言う表向きな理由からの心配は彼自身はしているつもりは無かった。

ただ単に彼自身も初めて仲良くなった友人であり、もっと楽しく接する事が出来る日を望んでいた。だがシップスの笑顔が日に日に減る事を想った最近では、励ます以上の事が出来ない様子だった。

『俺って、本当無力だよな………』

そして、彼のために何もできない自分を憐れんでいるのであった。

彼等の住まう地区には、常に通うべき『学校』が幾多も存在していた。それぞれの年齢や学ぶべき種類の学業の数々がある場で抗議として開かれ、それを知識として蓄える場所。そのため、その地区に住まう人々は皆同じ年齢層の者達が多く居た。

昼間は望んだ場へと赴き、夜は自由に過ごすサイクル。シップス達の居る地区では、そんな生活のリズムが出来上がっていた。

『……シップ。シップ……』

「んんー……」

暗い夜の時間が終わり、朝がやって来た頃。自身が住まう部屋で寝ていたシップスは、まどろみの中で呼ばれた自分の名前を耳にした。その声を聞き現実世界へと引き戻されるも、中々目は開かない。

「後五分……… Z z z ……」

寝ぼけながら彼は遠くなる意識の中、一言つぶやき再び夢の世界へと飛び立とうとした。その時、

「起きろおおおー！！！！」

「うおおあああっ！！！」

バタバタバタンッ！！

再びやって来た大音量の声を耳にし、彼は慌てて飛び起きた。しかしその拍子にベットの上で体制を崩し、そのまま冷たい床の上に敷かれたラグマットの上へと転落した。ふわふわな毛皮の柔らかい感触が、彼の顔に伝わる。

「……だあああーうっせえええ！！ なんだ！？」

しかしそんな柔らかい感触に包まれたと同時に、シップスは起き上がり声の主を見て睨みつけた。せっかく安らかに寝ていたのを起こされたのと、大音量の音量を耳元から当てられたのが機嫌の悪さに繋がった様だ。

とてつもないほどに、怖い顔をしている。

「うっせええじゃねえだろ！！ 何時だと思ってんだ！！」

「え……？」

声の主であるアシュレーはそんな罵声に逆ギレしつつ反論し、近くに置かれていた時計を指さし何時か確認する様叫んだ。彼の質問に寝癖の付いた前髪を直しながら、シップスは時計を目にし一気に目を見開いた。

「ち……遅刻だああああああー！！！！」

苛立ちと睡眠が交互に彼の頭にやって来ていたのを差し置いて、彼は立ち上がり慌てて外へと外出する支度をし始めた。そんな彼の様子を見ながらアシュレーは溜息をつきつつ、朝食を用意しようとキッチンへと向かって行った。

『毎朝何回アイツの罵声を聞いたらいいんだかな……… 朝食当番、もはや俺みたいなもんだし。』

あちらこちらで物音がひっきりなしにする中、アシュレーは溜息をつきつつトーストを焼きつつ目玉焼きを作り出した。今日は平日の朝と言う事もあり、二人とも行くべき学びの場へと行かなければならない。2人は同じ場へと向かう者の、志望している学科は違うため学ぶ部屋は共に違う。そのため講義終わりの休み時間に会える程度であり、再び会えるのはこの部屋に帰宅してからだ。

シップスにとってみればなんてことのない一日がやってくるのに対し、アシュレーからしたら多少心配になる時間である。心配している事と言うのは、最近のルームメイトの事だ。

『感情豊かな朝が終わると、なーんかアイツ暗い顔して戻ってくんだよな。学校で何があんだろう……』

フライパンの上で焼いている目玉焼きに調味料をかけつつ、アシュレーは近くで顔を洗うシップスの事を見ていた。日に日に笑顔が少なくなっていると言う事をアシュレーは気にかけており、やって来た当初に比べると断然笑顔を見せる事が無い。逆ギレして怒る姿は比較的見るものの、爆笑するほどの笑顔はごぶさたと言えるほどに見ていない。

「んー………」

「フウ、さっぱりし……… アシュレー！ 焦げ臭いぞ！？」

「え？ あっ、やべっ！！」

考え事をしながら料理していた事もあってか、いつの間にかトーストからは黒い煙と共に焼け焦げた臭いがキッチンに充満していた。手にかけていた目玉焼きも半熟を通り越した固焼きになっており、白みの淵が黒くなっている。シップスの声に慌ててアシュレーは火を止めトーストを掴み、その上に目玉焼きを逆様に乗せた。

すると案の定、トーストは焦げ目玉焼きの裏面も黒焦げのダブルブラックのエッグオントーストの出来上がりである。確実に不味そうな朝食だ。

「まあ……難だ。遅刻しそうなんだし、二度も調理できねーよ？」

「んな事ああ聞いてねえよ！！ ……って、遅刻！！ もう良いよ、それ食う！！」

「へーい、毎度。」

バターも何も塗っていない状態の朝食を見てとぼけながらアシュレーは言うと、案の定シップスは怒りながらもトーストを啜えながら玄関へと向かって行った。そんな彼の後を追うようにアシュレーは使用したフライパンを水桶の中へと入れ、彼が靴を履き終えるのを待ちつつ事前に用意していたカバンを手にした。シップスも玄関先に置いたリュックサックを掴むと、彼より先に部屋を飛び出して行った。

外へと出ると、空は晴れており一面白色の光景が彼等の前に広がっていた。時間も時間と言う事もあってか周囲に彼等の飛び出した光景に陰口を叩く人々もおらず、学校へ向かうだけの気持ちのみを心配すればいい状況だ。どちらかと言うと今のシップスには好都合の条件だが、時間も時間の為そんな事は無い。

「寒いいー！！ 遅刻ー！！ 寒いいー！！」

昇り慣れた階段を警戒に跳び下りながら、シップスは白い息を吐きつつ学校へと向かった。

彼等の通う学校はアパートから数十キロ離れた場所に位置し、アパートからでも遠目に確認出来る位置に立っている。毎日の様に降る雪は朝になっても凍る事無く彼等の足もとに存在し、滑らせるとは違う意味で障害になる。ザクザクと音を立てながらシップスは走るも、軽く空へと跳びながら走っている状態に等しい。

それだけ、降り積もっている量が多いとも言えるのだが、下手をしたら転ぶとも言える。しかし、

「雪国生まれだから、こんなもん転ぶかよっ」

彼の生まれも生まれと言う事もあってか、雪には強く運動神経の良さから転ぶ事は基本ないのだった。登校時に使用する道路を走りながら移動し、途中木から落ちる雪の音を耳にしなが、彼は学校へと到着した。

二人の通う学校は敷地面積が広く、学校を取り囲む塀を大きく上回る外見が印象的な場所だ。降り積もる雪をもろともしないレンガ造りの校舎は、何処か古めかしくも味のある印象を与えており、大人になりつつある学生達に良く好まれている。学校へ通うための試験をギリギリの成績でパスしたシップスは、そんな学校の生徒だ。

遅刻していても門が開かれている事もあってか、彼は気にせず校舎の中へと入って行った。雪の付いた靴を軽く振りながら雪を払い、そのまま土足で入って行く。上履きが無い彼の学校は土足で入る事が基本であり、体育館以外は外履きで活動する。目的の教室へと到着すると、シップスは一度扉の前で止まり息を整え、静かに音を立てない様扉を開いた。

扉を開くと階段の様に段で作られた教室が広がり、一番下には教卓と黒板があり、講義を受け持っている先生の姿が見えた。教室内にはすでにノートを広げた生徒達の姿があり、完全に出遅れた事が分かる光景が広がっていた。そんな教室内に静かに彼は潜入すると、忍び足で近くのカウンター式の机へと向かい、席に座り一息ついた。

『ハア…… 間に合った。』

心の中で安堵するも、全然間に合っていない事は補足で付け加えておこう。そんな束の間の休息を取った後、彼は背負っていたリュックサックを隣の椅子の上へと降ろし、ノートと筆記用具を取り出し講義を受けだした。

彼の受けている講義は『医学』であり、この時間帯のテーマは『正しい薬の制作・服用』となっていた。様々な薬品サンプルを調合しどんな効果を得るのか、はたまた服用の際は『水』以外に何をしたらタブーとなるのか。また調合の際に使用する器具は何を奨め作り、道具を扱う際には何について気を付けなければならないのか。

簡単ではあるが、簡略した説明は以上である。

シップスの受けている講義は基本的に『医療』に携わるモノであり、時々実習に近い物にも率先して参加している。無論その際の周囲の目は常々気にしなければならないものの、一生懸命に作業している際は気にする余地も無い。成績はお世辞にも良い方ではないが、ちゃんとノートは取っているため比較的真面目に講義を受けている。

「Z z z……………」

『……？ ……寝てるのか。』

同じ教室内ではつい先ほどまでの彼のように寝ている者もいるが、この時間は彼は寝る事は無い。退屈過ぎる時はさすがに寝てしまう事もあるものの、今では他の寝ている相手を軽く心の中で小馬鹿にする程度だ。何時も陰口を叩かれているとはいえ、相手に仕返しをする事は彼はしない。無論喧嘩ごととなれば面倒なのも事実だが、それを彼は望まないと言った方が正しいかもしれない。

何を言われても凹む脆い心の持ち主ではなく、彼は元々優しいのだ。その証拠に、

「…………… うっ、早描き完成。」

不真面目証拠ともなる『お絵かき』を講義ノートに描き込んでおり、そこには優しい顔をした彼自作のオリキャラが描かれていた。少し乱雑に象られた線は丁寧さは欠けるものの、表情は優しく何処となく可愛い存在。

夫婦なのか仲睦まじい様子が、そこには描かれていた。

『…………… そういや、最近暇だな……』

落書きをし終えひと段落ついたので、シップスは外を見ながら心の中で呟いた。

外には雪の積もった針葉樹の姿が見え、その先には立ち並ぶビルの姿。見ていて何か楽しい風景ではないものの、半ば暇を持て余している彼には退屈な気持ちを紛らわせてくれる。ふとそんな光景を見ていた彼はジャケットのポケットに手を入れ、中から携帯電話を取り出し画面を開いた。

そこには待受画面が表示され、シップスともう一人の姿が笑顔でピースをしている男の子の写真。

『タカ、元気かな……』

そんな待受けを見ながら、遠くに居るであろう相手の事を考えているのだった。

その後しばらく退屈な時間を持て余しながら、彼はその時間の講義を終えた。ノートに書かれた講義内容と落書きを見直した後、彼は使用した筆記用具と共にノートを荷物の中へと放り込む。無論それによるプリントのシワはお約束なのだが、どうやらその辺りは彼は気にしない様だ。早々に出席表を出し、彼は部屋を後にした。

『えーっと、次は確か……生物学か。となると、分棟か。』

廊下を歩きながら彼は携帯を取り出し、次の講義は何かと確認していた。

毎週毎に組まれたカリキュラムは自身が受けた講義で決まっているため、基本的に周りに合わせない限り自身で確認をしなければならない。ましてや講義によっては部屋が不定の場合もゼロではなく、場合によっては部屋そのものの場所の確認をしなくてはならない場合もある。

とはいえ、その都度部屋の変更は彼の手元にある携帯電話に入るため、その辺は気にしていない様だった。

「……次は誰描こうかなー…… ……………？」

「でさー、その彼女がさー」

「えーっ、うっそーお？」

「まっじでー？ あっりえなーいっ」

「ガチなんだって、コレが。」

『うわっ、面倒なのが居る……………』

移動する際に通っていた通路の先で、彼はある集団を目にした。そこには軽く部屋前でたむろする男女達の姿があり、どうやら何かの話題で盛り上がっている様子を見せていた。しかし彼からしたらあまり好ましくない光景らしく、すぐに視線を別へと追いやり、歩調をほんの少しだけ早め通過しようとした。

すると、

「……あっ、出た出た。」

「まーた会っちゃったあー ツいてなーい。」

「ほーんっと、目障りな奴。」

『……………』

通り過ぎた彼の耳に入るか入らないかの声量で、集団はひそひそとやり取りを交わしていた。先ほどまで盛り上がっていた話題とは関係なく、通り過ぎようとした彼を見て会話を交わす。無論、それが聞こえようが聞こえまいが彼等には関係なく、そう話す事に快感を覚えているのかもしれない。

独りの相手に対し、集団的に行う陰口。反論すれば煙たがり、反論しなければさらに面白そうに話し出す。

エスカレートさせない様にするにはどうしたら良いのかと、かえって考えたくなくなってしまうかもしれない程に。彼は校内で、いじめに会っているのだ。

『…………』

「あっ、あそこに居る狐よ。さっきの話に出てきたのって。」

『うるさい…………』

「へえー マジで辛気臭いんだな。」

『うるさい…………』

「あっりえなーい。アレで医学を専攻してるんでしょ。勤勉じゃなさそー」

『うるさい…………っ』

「その内、医療ミス溶かして訴えられるタイプだぜ。あれって。」

『うるさい…………！』

「本当、早く消えて欲しいわ。目障りなんだから。」

『うるさい…………！！』

初めの集団のやり取りが火種になったのか、彼を見てひそひそと話す声が次々とやってきた。皆初めと同じで、声量がどんなに大きかろうと小さかろうと気にせず話し、聞こえた際の反応がどんなものなのかを楽しんでいた。だが初めから反応する気配を見せないシッパスを見てか、相手によっては不機嫌そうに再び愚痴をこぼす事も少なくない。

『俺はお前等の……玩具じゃねえんだよ…………！！』

そんな言葉を聞かされながらも、彼は廊下を歩き続け心の中で叫んでいた。

誰かに何かを言ったとしても、周りに頼っても、解決策を見出してはくれない。過去から続く虐めは限りなくエンドレスに続き、彼が小学校の頃からその被害を受け続けてきた。それでも誰かに助けを求めたくて手を差し伸べても、それが全ての成功のカギになった事は無い。

何度も何度も先延ばしされたその解決策は、気付けば彼が今の年になっても代わり映えする事は無かった。誰も彼のためにと、立ち上がってくれる事は無かったのだ。

ゆえに、彼は周りにそうしてもらいたい気持ちを捨ててしまったのかもしれない。

周りにこれ以上迷惑かけたくない、自分で解決できることが必ずある。 と。

『……平気さ。講義が終わったら、さっさとここから出て行けばいいんだ。そうすれば、こんな下らない発言を耳にしなくて済む。そうさ、そうさっ』

その後も歩くたびに付きまとう耳障りな言葉を聞き流し、彼は心の中で自身を励まし、部屋へと向かった。

そこでは次の講義で行われる『生物学』の準備が行われており、担当となる講師がいそいそと支度を進めていた。軽く入ってきたシッПСに対し挨拶をする所を視ると、周りに対し挨拶を大切にする傾向があるのかもしれない。先ほどまでの不愉快な気分が彼の心を蝕む中、彼は挨拶に対し軽く返事をし、席へと付いた。

「……ハア。精神的に来そう……」

「シッパー」

「んあ？」

半ば苦し紛れの発言が口から零れる中、シッПСは自身を呼ぶ声を耳にした。軽く疲れきったかのような返事をしながら、彼は誰がやって来たのだろうかと首を動かし、声の主を探した。するとそこには、緑色のジャージに身を包んだ小柄な狐の青年が駆けよって来ていた。

「うっすっ！ 早いねー」

「おう、まあな。……ってかソニルス、お前またジャージかよ。」

彼の元にやって来たのは、顔馴染みの友人である『ソニルス』だった。シッПСよりも年下の彼は同じくこの区域の学校に通っており、少し年下の為か同じ学区内で勉強をしている。そのため、彼の事は先輩であり友達の仲なのだ。

「良いっしょ？ 新しく買ったんだよー、ちょいブランド品っ」

「ブランドおー？」

他愛もない話題に花を咲かせながら、彼は身体を起こし彼の身に纏うジャージのロゴを見た。するとそこには見慣れないブランドの文字とロゴが縫い合わされており、どうやら彼の知らない銘柄の様だった。

「……何、それ。」

「えーっ、最近機能性が売れてるっていうあのジャージだよー？ 『ウニクロ』の。」

「それ絶対『ユニ〇ロ』だろ。ウニじゃなくて。」

「そうとも言うかもしれないっ！」

「……」

とはいえ、どうやら馴染みあるブランドのパチモンの様だった。半ば下らない話ではある物の、今のシッПСにとってちょっとした憩いのやり取りの様にも感じていた。

先ほどまで嫌味たらしい発言を何度も耳にしていたためか、軽く精神的に疲れを感じている。半分次の講義で眠ってしまいそうな疲労感を感じていたため、こんな些細な会話でもなんとなく楽しく感じてしまうのだ。相手がどう思ってそんな話題を振って来たのかは解らないが、彼は少しだけ笑顔を取り戻していた。

「ってかさー、生物学って結構おもしろくない？ 雄とか雌の身体とか出て来るし。」

「あー、それは同感だなー ただの講義のはずなのに、妙ーに面白いっつーか……」

「普通に同人誌とかに出てきそうな感じの絵が、黒板で混浴の如く成るんだもんな。」

「うわー めっちゃうらやましー 混浴とかマジで。」

「俺は普通でもいっけどねん。」

とはいえ、まだまだ盛りの若人のやり取りには変わらないのかもしれない。男の子らしいちょっと下ネタ交じりのやり取りが、なんとなく彼等の心を潤わせていくのだった。

「そういやさ、シップ。」

「ん？」

同じ部屋で同じ講義を受けていたソニルスは、隣で書き物をしていたシップスに声をかけた。目の前では教卓に立つ講師が資料を片手に講義を行っているが、彼は左程聞いていない様子。現に隣に居るシップスに声をかけているほど、今は少し暇なようだった。

「最近ちょっと小耳に挟んだんだけど、知ってるか？ この学校の噂。」

「えっ、噂？ 何だそれ。」

「最近ちょいちょい聞く様になってきたんだけどさ。この学校で、時々生徒が『神隠し』に合うって話。」

「……え、マジ？」

「マジマジ。」

彼が持ちかけてきた話題、それは彼等が通う学校の怪談だった。目の前の講義よりも少々興味を引く話題だったらしく、シップスは手を止め彼の話に耳を傾けた。

「先輩の先輩の、そのまた先輩の話らしいんだけどさ。この地区って、全体的に『学校』が多いっしょ？ それ故に若い奴等が多くて、時々夜遊びとかしてるんだよ。」

「ふんふん。」

「で、当然の如く夏とかには『肝試し』とか学校でやるって言い出して、夜な夜な悲鳴とか時々上がってるって話なんだよ。」

「まあ、そうだよな。肝試しだし。」

「でも、その肝試しなんだけどさ……」

次第に小声の小話が徐々に盛り上がり、ソニルスは声のトーンを低くしながら話し出した。心なしか表情に陰りが入るほど、周囲の環境を諸共しない怪談話が始まった……

「ある夏の事…… 若い男女のカップルを組んだ集団内の一組が、この学校を舞台に肝試しを企画したんだ。新鮮な刺激と、互いの距離感を深め合うって理由で。学校側には無許可で、行ったらしい。」

「お、おう……」

「企画した男女が初めに突入する事になって、いくつかのお化け役が定位置で脅かす準備をしていた…… 誰もが心待ちにしている、時折聞こえてくる悲鳴が何とも楽しそうな雰囲気を作ってたらしいんだ。……でも、ある時……」

『ゴクリ……』

二人の空間が徐々に暗くなっていく中、ソニルスは彼に一言一言囁く様に言った。

肝試しと名を取る行事を主催した学生の一部が、学校に無許可で夜の学校へと忍び込んだ話。普通であれば看守による制止が入りそうな中、彼等を含む集団はもろともせず中へと入り、懐中

電灯片手に行事を開始。半数が別れてお化け役に扮して中へと潜入、後から参加メンバーがコンビを組んで中へと入る。

平和に終わるはずだった夏の風物詩に、ある異変が起きたのだ。

「その男女のペアが、体育館の裏へ入り……非常階段を昇った先で……突然、彼氏がこう言ったんだ。」

「……」

「『俺、実はA子ちゃんに言わないといけない事があるんだ…… 実は、俺……』そう口にした、その時……」

「っ……」

怪談話が徐々に盛り上がりを見せ、いよいよクライマックスと思われる状態へと差し込んだ。シップスは口内に溜まりつつあった唾を飲みこみ、話のオチを今か今かと待っていた。

次の瞬間……

「うわあああああ——！！！」

「ギューアアアアアア！！！！！！」

不意に声を上げ、ソニルスがお化けに成りすましたかのように声を荒げたのだ。隣で聞き耳を立てていたシップスは突然の事に驚き、静かな部屋の中で発狂を上げてしまった。一瞬何が起こったのかさえ解らない程に、聞きなれない叫び方を彼はしていた。

「五月蠅いぞ、そこっ！！ 奇声を上げるな！！」

「「ハイ、すみません。」」※Two FOX's

しかし普通に講義を受けていた人々からしたら、彼等の発狂には動揺どころか心臓を悪くさせる程のハプニング。教卓で弁を取っていた講師さえも一瞬怯んでしまい、慌てて2人を叱りだし、しばしのお説教が彼等の元へとやってくるのだった。

それからしばしの時間が流れ、無事に講義が終了した後。

「……ったく、急に大声出すなよなー マジで叫んじまったじゃねえか。」

「めんどめんど、つい本腰入れすぎちゃって。」

「入・れ・過・ぎ・だ！」

二人は並んで講師に頭を下げ詫びの言葉を告げた後、他の生徒達とは遅れて部屋を後にした。並んで歩きながらもシップスはとぼっちりを受けたとばかりに怒っており、ソニルスは両手を合わせ謝りながらも楽しそうに歩いていた。

今回の場合、どちらが悪いと言われると何とも言えないが、あえて何も言わないでおこう。

「ソニルスー」

「ん？ おお、ライトー」

そんな楽しげな雰囲気を見せる彼等の元へ、彼等とは違う橙色の狐の青年がやって来た。彼の名前はライト、ソニルスのルームメイトでありシップスとは親しい友人同士の仲だ。ソニルスよりも黄色掛かった肌をしており、ソニルスと同じく鬣がとても長い元気な青年だった。

「お前もう終わり？」

「そそ、ソニルスも終わりっしょ？ さっき廊下に声が響き渡ってたから、居残りかと心配したよ。」

「あれはシップだよ。」

「誰のせいだっ、誰のっ……！」

後から合流したライトと共にシップスは歩きながら、先ほどの奇声に対する弁解を求めている。結局のところ両者が悪いと言えれば悪いため何とも言えないものの、彼からしたらやはり言いたい事はいろいろある様だ。

しかし上手く言葉を表そうにも言葉が出ず、自身の足りない単語力に頭を悩ませていた。

「でもさ、何の話してたんだ？ 講義中で無音の廊下に響くとか。」

「肝試しから始まった、神隠しの話。……ああ、そういやオチとか言ってなかったっけ。」

「言う前に掻き消されたからな……」

とはいえ叱られる原因の片方であるソニルスは左程気にしておらず、シップスは軽く諦めながらも先ほどの話を求めた。二人のやり取りを見てライトが軽く苦笑する中、ソニルスは怪談話を再開し普段通りのトーンでこう言った。

「あの後、彼氏が言葉を告げようとした途端に階段の底が抜ける音がして、二人の悲鳴と共に姿が消えちゃったんだってさ。元々非常階段で錆びてたから、穴が開いても不思議じゃなかったんだけど、何度かそこで消えるって話が出てるんだと。」

「学校側の策略とかじゃなくてか？」

「うん。マジで修繕した後とかに強度チェックしてるんだけど、誰かが悲鳴を上げた次の日にはぜえーったい穴が空いてるんだって。しかも3階と1階だけ。」

「え、二階は空いてないのか？」

「うん。変だよなーって噂になって、それからはそんな感じ。」

「へえー」

講義中の迫力ある演技とは違った話し方をしたためか、シップスはあまり驚きもせず平然とオチを聞いて納得していた。

つい先ほどの驚き振りを視ると、どうやら演技力と空間変化による心理的な物だったのかもしれない。しかし彼が怖い物が苦手かと言うとそう言うわけでもなく、どちらかと言うと雰囲気を楽しむ傾向がある。

何故発狂したのか、その辺はご想像に任せるとしよう。

「んじゃ、俺達こっちだから。」

「おう、また明日。」

「バイビーッ」

怪談のオチを話してスッキリしたのか、ライトに促されソニルスはその場で別れ楽しそうに去っ

て行った。二人と別れたシップスは軽く手を振りながら二人を見送り、自身も戻るべき寮へと向かって帰路を歩き出した。

『……神隠し、なあ……… 何処でもあるんだな、そういう話。』
道中をてくてくと歩きながら、シップスは階段を思い出しながら楽しく帰宅して行った。

「さーってっと、長居も無用で帰っかな～」

校内でソニルス達と別れたシップスは、一人のんびりと帰路へ向かう事を決めていた。長居するほど楽しい空間だとは彼は認識していないため、あまり長居する事は望んでいない様だ。

講義を受け、学び、それが終われば特に用の無い場所なのであった。

「えーっと、確か今日は俺が飯当番の日だったな。夕飯何にしよう。」

帰路へと向かう道中、彼は一人雪解けした道をてくてくと歩いていた。その足はまっすぐ借家へと向かうわけでは無く、彼の行く先には別の場所へと向けられていた。

彼が向かった場所、それは区内にある大きな商店街『ストリート』

商店街の双方入口には大きなアーチが来店者を出迎え、入場したと同時に店からの威勢のいい掛け声が四方八方飛んでくる。区内に住む学生達はその場で必要な備品を購入したり、昼食や夕食を頂いたり、さまざまな利用方法がある。彼もまたその場所には多い頻度で足を運んでおり、名前は知らないが顔馴染みの店員と軽く挨拶を交わす光景もあった。

「……炒飯は前に作ったし、回鍋肉って言うのも悪くねえな。……あ、蟹玉とかも旨そう。」

そんな彼が空想に拭けている中、目に映った物を見て夕飯の献立を考えていた。彼が立ち止まったのは商店街にある中華飯店であり、入口にはメニュー表と大きなポスターが張られていた。

現在エビチリフェアを行っているらしく、ポスターの至る所にデフォルトした海老達が来店者を出迎えていた。とはいえ、あまり好みでは無かった様子で彼は早々にその場を去り、献立を考えていた。

その時だ。

『そういや今日って、いつも通ってるゲーセンの新規台導入日じゃなかったっけ。………』

ふと思考回路が献立から別の方向へとシフトし、彼はある予定日が本日ではないかと思い出していた。

この商店街の一角にあるゲームセンターは彼も足蹴なく通っており、区内の学生達の溜まり場としても人気の場所。他の備品とは違い自腹で有料の施設のため毎日では通えないものの、それでも娯楽施設としては繁盛しているためか、良く学生がたむろしている光景が目に入る場所だった。そんな娯楽施設の新規台導入日が、どうやら今日の様だ。

『ん、ちょい時間あるし遊んで行くか。』

所有していた携帯電話で時刻を確認した後、彼は進路を変え商店街を歩いて行った。

「えーっと…… ……あっ、あつあつ。」

娯楽施設へと到着した彼は即座に入店し、賑やかな機械達の音を尻目に目的の物を探し出した。入り口周辺に置かれたUFOキャッチャーには彼の好きな動物のキャラクター達のぬいぐるみが入れられており、別の場所にはアニメとコラボした時計やグッズが置かれていた。また別の場所には音楽ゲームと思われる機材も置かれており、どの場所を見ても楽しげな機械達が学生達を

楽しませていた。足を運んでいない2階にはスロット台やアーケードゲームもあり、どんなニーズにも応えられそうな場所である。

そんな施設内の景品を適度に黙視しながら向かった場所に、彼のお目当ての機材が置かれていた。置かれていたのはハンドルを握るタイプのレースゲームであり、画面の上には大きく【真夜中スピーディコースト5】と書かれていた。軽く彼が画面を視つつ手荷物を籠の中へと入れると、画面が切り替わりデモプレイ映像が映し出され、操作方法が簡単ではあるが説明してくれていた。

「操作は大体前の機種と同じだな。うっしっ、腕が鳴るぜっ！」

その後軽く両手を振り適度に動ける状態へと変え、彼は手にしたコインを機械の中に投入し、ゲームを開始した。

今日から導入されたこのレースゲームは、好きな車種をマシンとして、軽くチューニングしたものを操作するシンプルな代物だ。メンバーズカードを使用すれば好きなパーツやカラーリングに変える事も出来るため、車の運転が大好きな彼にはとても楽しいゲームの様だ。その様子はプレイ前の今の状態を見ても解るほどに、表情は明るく、尻尾は左右に揺れ、とても楽しそうであった。

「……へえー、車体は大体一緒か。……おっ、こんなの導入されたのかっ！ んじゃこれにしよっと。」

車種を選ぶ画面へと切り替わった彼は品定めをしつつ、ある特定の車を見て意外そうな反応を見せていた。彼が選んだのは紺色の『ヴィジッツ』という車であり、性能は比較的シンプルではあるが速さもあり、ハンドルさばきが要求されるマシンだ。

プレイ時間がそこそこ長い彼にとって、癖があれど楽しめそうな物だと判断した様だ。

「エリアは…… まあ、中級者レベルかな。初回だし。」

その後適当なエリアを選択した後、彼はハンドルを握り直し、気合を入れ今か今かとスタート合図を待っていた。

一方、その頃……

「やっべっ、大分帰るの遅くなっちゃった。シップスの奴、飯作って待ってるだろうなー……」
シップスとは別行動を取っていたアシュレーは、彼よりも一つ多めの講義を終え、帰路へと向かう所だった。時刻はすでに夕方を示しており、まだまだ寒い今の時期ではあつという間に暗闇の時間へと変わるであろう時間だった。

今朝の朝食当番を彼が請け負ったため、夕食当番となったシップスに怒鳴られないかと軽く困っている様だ。とは言っても激怒するわけでは無く、単純に冷めた飯を提供されるだけと言っても、間違いではない。手の込んだモノであれば、なおさらだ。

『……あ、そうだ。そういや今日って新刊の発売日だったな。本屋だけ寄って行こつと。』

しかしシップスと同じく直帰する事をする様子は無く、彼もまた商店街である『ストリート』へと向かって駆けて行った。

最近彼が好んで読んでいる本の新刊が本日発売日だったらしく、彼は一角にある少し小さめの本屋へと入って行った。そこは古本屋も兼ねた書店であり、新書とは別の棚に幾多の古本が格安で売られていた。

時折謎めいた本も見つかる事から、ちょっとしたスポットとしても人気の場所である。

『えーっと、新刊新刊..... あっ、あったあった。』

本屋へと入るや否や、アシュレーは早々にお目当ての品があるであろう新刊スペースへと向かって行った。店内の一角にある漫画と雑誌のスペース前に用意されたその場所には、その日やその週が発売日となる新品の本達が積み上げられている。グッツ付きの雑誌を初めとした幾多の作品が置かれており、モノによっては宣伝文句のつけられたポップ板まで用意されている物もある。彼の求めていた新刊も、書店お墨付の宣伝付き作品だった。

彼が手に取った作品にはカラーイラストで描かれた金髪の青年の絵が描かれており、凛々しい顔立ちと共にどこか優しさを感じるタッチの絵だった。

「【四神夏菊先生・新作『鏡映した現実の風 初花咲いた戦果の叙景』】..... へえ、今回は別話の新しい作品なんだ。うしっ、買っていこっと。」

お目当ての代物を見つけた様子で、彼は意気揚々と財布を取り出しレジへと向かって行った。

その後購入した品を袋に入れてもらい、店を後にした。

「さーってっと、買う物買ったし飯食いに家帰ろっと。.....ん？」

夕刻が着々と終わりを告げだすその時、彼はある光景を目にした。彼の視線の先にはシップスが通っている娯楽施設のデモ映像が映し出されており、そこには店内でプレイ中のユーザーの映像が映し出されていた。メンバーズカードに登録している人限定のサービスであり、デモ映像として公開登録したプレイヤーのプレイ動画が映し出されるのだ。

そこに映し出されていた映像の下に書かれていた名前に、彼は違和感を覚えたのだ。

『.....おいおい、あれってまさか.....』

映像の下に書かれていた名前を視たアシュレーは、嫌な予感を感じながらも店の中へと入っていた。

ゲームセンターへと来店したアシュレーは荷物を片手に、店頭で上映されていたであろう操作主を探した。幸いにも中継されていたゲーム機種が『カートレース』と言う事もあってか、彼は比較的探しやすい様子でシート付きの機種を探していた。

UFOキャッチャーの奥に置かれていたその機械の近くから、聞きなれた声が聞こえてくる。

「……っ！ よっ、ほっ！！ うおおおー！！！」

『やっぱりか……』

声の主が熱中している様子を見て、アシュレーはため息交じりに彼の背後へと近寄った。しかし相手はプレイに夢中になっており、心なしかハンドルさばきも慣れ、さながら子供の様な無邪気な笑顔を浮かべていた。

寮生活ではあまり見る事のない、彼の新鮮な笑顔。そんな彼を見たアシュレーは仕方なくゲームが終わるのを後ろで見届け、終わってから声をかけようと心に決めるのだった。

『本当、レースゲームっつーか。こういう勝負物のゲームが大好きだよなあ、シップスは。』

「……っしゃああ！ 一位！！ んでもってコースレコードッ！！」

しばらく車のドリフトシーンを楽しんでいたその時、見事に勝利したシップスは大声で歓声を上げだした。先ほどまでハンドルを握っていた右手は、気が付けば拳を握り腰の横へと付いており、相当嬉しかったのが視て解った。

本当に、大好きなのであろうと思う光景だった。

「おい。」

「さーってっと、次は一」

「おーい、シップス。」

「んあ？ おお、アシュレー！ どうだ、お前もやるかっ??」

ゲームが終了したのを見届け、アシュレーは彼の後方から声をかけた。しかし一回目の声は高まる楽しさに掻き消されてしまい、二度目でようやく返事を貰っていた。振り返ったシップスを視ると、これまた無邪気な笑顔を浮かべており、相当嬉しい結果が出たのだろう。

一緒に遊ぼうと言い出す始末であった。

「お前、何こんなところで道草食ってんだよ。」

「道草じゃねえって。新規台入って言ってたの、今日だから試運転だよ。試運転。」

「んなこと聞いてねえって……… ってかお前、今日夕飯当番だろ？ 飯作らなくていいのか？」

「え？」

とはいえ先ほどまでのプレイを視たアシュレーからすれば、これ以上プレイする事はあまり好ましくは無い様だ。理由はすぐに解るほどの事であったのか、彼はシップスに時計を視る様促し、何時であるかを確認させた。

そんな相手の声を聞いた彼は時刻を確認すると、時刻は午後6時過ぎを示していた。

「ゲッ！！ もうこんな時間か！？」

「お前……何時からココに居たんだ……」

「えーっと、確か…… ……講義終わったのが昼後のだから……… 四時間？」

「アホ。」

ベシッ

相当楽しかったのが解るほど、彼は気付かぬうちに資金をつぎ込んでしまっていた様だ。楽しさと裏腹の軽い手刀を受け、シップスは仕方なくゲームを終える事を決めた。

「ほら、さっさと買い物行ってこい。いつもの店は閉まるの早えんだから。」

「へーい。」

半ば追い出される勢いでシップスは店を後にし、日が暮れた街を駆け足で飛び出して行った。そんな彼の後姿を見送りつつ、アシュレーは溜息を一つし、マンションへと戻って行った。

ゲームセンターを後にし、急いで夕飯の買い出しへと向かったシップス。しかし目的地の店に到着するも、すでにシャッターは降り買い物が出来ない状態に陥っていた。

「……ゲェ、閉まってやがる……」

時刻は十八時二十分を示しており、店にしては中々早い閉店時間だ。だが基本的にこの地区に住む学生達は地元で買い物をする事は少なく、何でも買い揃える事の出来る別地区のデパートに赴く事が大半だ。先ほどのストリートにもお店は幾多存在するが、食品となると外食がメインとなってしまうのだ。

ゆえに、この地区では基本的に『自炊道具』は売れないらしい。

『……じゃあねえ、コンビニ行くか。ココのコンビニ高えから、あんま行きたくねえんだけどな……』

降りてしまったシャッターを開ける術もなく、彼は仕方なく別の場所にあるコンビニへと向かう事を決意した。だがそこは目の前に立つ店ほど安価な商品は無く、自炊で節約出来る資金のほとんどを、持っていくと言っても過言ではない場所なのであった。

ピロロンポロロン～♪

「いーらっしやいませえ～」

予定変更し彼がやって来たのは、彼等の住むマンションから一番近いコンビニエンスストア。近所で帰り道が楽な場所はここしかなく、丁度顔見知りの存在が居ない絶好のタイミングで来店する事が出来た。

逆を言ってしまうえば、ピーク時の影響で品数が薄いと言う事だ。

『くっそー…… また金が減る……』

渋々店に入ると、シップスは入口に置かれていたカゴを手にし、二人分の夕食となる食材を探し出した。手軽なスナック菓子に飲み物を手にし、彼は歩きながらカゴへと入れ、商品を見定めて行く。

幸い普段後ろからやってくる嫌な視線が刺さる事が無かったため、彼はすんなり弁当エリアへと向かって行くことが出来た。だが、個々で計算外の光景を目の当たりにする事になった。

「………… あれ。」

彼の目的の品があるであろう棚を視ると、何と商品が何ひとつ無かったのだ。普通のコンビニに置かれているであろうおにぎりやら弁当やらが置かれている棚は、綺麗サッパリ白い台のみを見せている。入荷する時間は深夜となっており、これでは夕飯以前の問題である。

「マジかぁ…… 品切れかよ。」

肝心な主食を手に入れる事が出来ず、シップスは残念そうに文句を垂れていた。半ば口癖になっているが、今は気にしない。

「あ〜ゴメンニャ。さっき大量に売れちゃったから、もう無いのニャ。」

「クッ…… 結局飯抜きかよ。」

店番をしていた小さな店員から追い打ちの言葉も貰い、再び彼は渋い顔をしていた。主食無しの夕飯は腹に溜まりにくく、なおかつ量を買わなければならないためコストがかかる。

学生には手痛い出費であった。

「何か代わりになるものはと………… ……あ。」

仕方なく代用品を探していると、不意に彼の目にある物が映った。それはパック詰めで売られている『卵』であり、スーパーよりは高いものの十個入りのシンプルな物。棚に陳列されていた卵を見ると、シップスはカゴに目を移しある事を思いついた。

『そうだ。前に何かで【オムレツもどき】みたいなのやってたな、スナック菓子で作る奴。……これなら腹に溜まるか。』

彼が思いついたこと、それは焼いた卵のボリュームをかさ増しし、主食に近づける事だった。仮に冷蔵庫に何も入ってなかったとしても、思い出した方法であれば大皿2枚は軽く作れる。そう思い立った彼は卵をカゴに居れ、そのままレジへと向かって行った。

『これなら、弁当買うよりも安いぜっ！』

内心満足そうな笑みを浮かべつつ、彼は代金を支払い商品を受け取った。

「あ〜りがとうございましたあ〜」

店員からの送り文句を聞き届けながら、シップスはお機嫌でその店を後にした。

『…………な〜んか俺忘れてる気もするけど………… まあいっか。ってか。』

「いーらっしゃいませえ〜 ビールあっためまっかあ〜」

「え……!？」

『…………… 変な店員。』

背後から聞こえる妙な接客台詞に違和感を覚えつつ、彼はマンションへと戻って行くのであった。

「ただいまー」

コンビニでの買い物を終えたシップスはそのままアパートへと帰宅し、扉を閉めた。

段々と冷えだす外気とは裏腹に、彼の入った部屋は暖かく、廊下は淡い橙色の蛍光灯に照らされていた。清潔感があり温かさのあるその場所は、まるで誰かが待っていてくれるような、そんな暖かささえも感じさせる住居だった。

「……ん？ お帰りシップス、材料買えたか？」

靴を脱ぎ廊下を歩いていると、手前の部屋から同居人の出迎えの挨拶が飛んできた。部屋の扉そのものは開け放たれていたため、彼の姿が即座に目に入ったのだろう、彼は本を手にしたままシップスを見ていた。

「んーや、店は閉まった。でも、晩飯はちゃんとしたの作れるから心配すんなっ」

『ちゃんとしたのって、何だ……？』

出迎えへ対する返事をした後、彼は手にしていたビニール袋を見せつつ奥へと向かって行った。しかし去り際に意味深な言葉を口にした事が気になったのだろう、アシュレーは首を傾げながら本を置き、彼に続いてキッチンへと向かって行った。

キッチンへと移動したアシュレーが見た光景、それはいたってシンプルな学生の行動だ。手にしていた手荷物をテーブルサイドに置かれた椅子に置き、そのまま羽織っていた上着も椅子へと掛ける。買い物をしてきたビニール袋はそのままテーブルの上へと置かれ、中身を物色する光景。いたって普通である。

ガサガサガサ……

「で、結局何買って来たんだよ。」

「ん？ 卵。」

「卵って……… ……おい、何だこれ。」

そんな中身を物色する彼の隣に立ち、アシュレーは袋の中身を視ようと横から覗き込んだ。するとシップスは買ってきたパック卵を取り出し、晩御飯の材料に使う様子を見せていた。だが卵だけでは腹に溜まらないだろうと思い、再びアシュレーは袋を覗き込み、見つけた物を手にした。彼が手にした物、それは普段買い置きしてストックしてある駄菓子とは別のお菓子だった。緑色の袋菓자에描かれているのは、カエルと麦わら帽子を被ったオジサンであり、彼等の上にはデカデカとカタカナで『ロール』と書かれていた。

いわゆるポテトチップスとは違う、軽い触感が美味しい定番菓子だった。

「スナック『ロール』 それと卵で、オムレツが作れるんだってさ。前にどっかのサイトで書いてあって、丁度うす塩味だったし、調味料の節約にもなるだろ？」

「うすしお味のロール……な。まあ、いいや。腹減ったから、早めにな。」

「あいよっ」

今夜の献立を大体聞かされたアシュレーは返答に困りつつも、自身の空腹もあったため早々に晩飯にして欲しいと催促した。するとシップスは笑顔で返事をし、近くに置かれていた青色のエプロンを着用し、キッチンに立った。

まずはじめに彼が行った行動、それは必要な分の材料を用意する事だった。今夜のメニューは『ロールのたっぷりオムレツ』であり、メインであり量増しとなるお菓子と共に卵が並んだ。加えて彼は冷蔵庫の冷凍室を開け、味気ないシンプルなオムレツに彩りをプラスしようと『ベジタブルミックス』を取り出した。今夜の食材は、以上である。

その後凍結されていたため解凍する時間を短縮させようと、彼は袋から出した野菜達をレンジ容器へと移し、数分間レンジの中で温めだした。レンジが独りでに仕事をし始めたのを見た後、彼はボールに卵達を次々と投入し、菜箸を使って溶き卵へと変えだした。リズムカルかつ慣れた作業を見せながら彼は鼻歌を唄い、後方で調理を終えたレンジの音を聞き、容器を取り出した。熱がこもり暑くなっていた野菜達を軽くクッキングペーパーで水気を切り、彼はそのまま溶き卵の中へと野菜を投入した。

次に登場したのは、先程から待機していたロールと名乗るお菓子。袋から出したお菓子を手で軽く粉碎しながら卵の中へと投入し、彼は軽く手にした調味料達をお好みの味付けにし、フライパンの置いたコンロに火を付けた。

温まったフライパンにバターを投入し油分を付けた後、彼は溶き卵を適量フライパンの中へと落とし、軽くスクランブルする様に菜箸で卵を焼き出した。しかし完全にスクランブルエッグになる前に彼は半熟の卵をフライパンで操作し、丁度良い表面と中身になる様気を配っていた。しばらくの間フライパンの中で調理された卵たちは焼き色を付けだし、彼の見事な手さばきで綺麗なオムレツになるのだった。添え物として付けた、余りのロールを添えれば完成である。

「うっし、完璧っ アシュレー、飯だぞー」

その後火元の処理をした彼は、料理の乗った皿を手にしつつ別室へと移動したアシュレーを呼び、夕飯になった。

「ああ、そうそう。シップス、学校から手紙来てっぞ。」

「手紙？」

少し大きめのオムレツを食べだしていたシップスは、不意にアシュレーの言葉を聞き顔を上げた。彼が取り出したのは学校名が書かれた水色の封筒であり、どうやら文書が彼の元に文書が届いていたらしい。

しかし、ゲーセンで時間を潰していた留守中かどうかは解らない。

「何か知らねえけど、学生へのアンケートだってさ。氏名と番号書いて、学校のポストに入れとけて。これで特別枠の単位のポイントなんだと。」

「へえ、今年はそんなのやるのか…… 去年は無かったのに、今更か。」

「ん？ 何か言ったか？」

「別にい。」

とはいえ、学校からのとある講義分のポイントとなるのであれば、彼も参加しなければならない。何の講義かはすでに察しがついている様子で、彼は封筒を開けずにオムレツを食べ、合掌し食事を終えた。今夜の洗い物はアシュレーが当番の為、彼は先に部屋へと戻って行った。

部屋へと入った彼は自身の机の前へと移動し、椅子に座り備え付けのパソコンを起動させた。しばらくの間立ち上げの準備をするパソコンを見守りつつ、彼はお気に入りの動画サイトへとアクセスし、音楽を流しつつ封入されていた用紙を視た。

そこには白い紙に黒字の文字が書かれており、いたって普通の案内書が入っていた。

「えーっと…… 『生徒諸君の学校生活がより良い物になる様、今年度より各学年へ向けてアンケートを記入してもらおう。学校生活の不满、もしくは自身の理想とする生活スタイルを自由に書き込みたまえ。』……書き込みたまえって言われてもなあ……」

文面に目を通しつつ彼は手にシャーペンを持つも、何を書いたら良いのだろうかと思を悩ませ出した。

基本的にこういう文面に対する発言を求められても、大概の生徒達は決まってこういう反応をする。自主的に講義に参加する者達であれば多少の違いは見受けられるかもしれないが、こういった学校への改善の声と言うモノは、執着していなければ考え付きにくいものだ。ましてや四六時中学校に居るわけでは無いのだから、なおさらだ。

シップスは軽く悩む素振りを見せながら、鼻先にシャーペンを乗せ背もたれに体重をかけつつ、考え込んでいた。

「……なあ～ アシュレー」

「んー？」

「お前は何て書いた？ このアンケ用紙。」

そんな彼の居る部屋へと戻って来たアシュレーを見て、シップスは用紙をチラつかせながらアイデアを求めた。こういう時に案を出しあえる仲間が居ると言うのは、やはり心強い事かもしれない。

だがしかし、あまり褒められる行為ではない事をあらかじめ付け加えておこう。

「適当に書いて済ませた。別に今の生活での不便な所って言われても、そこまで目に付かなかったしな。……しいて言えば、旧校舎の洗い場が汚ねえってところかな。」

「洗い場なあ……」

「更衣室は扉も無いただの箱型ロッカーだし、シャワー室とかは開放的で普通に湿気が飛んでくるしな。酷い時は苔まであったぞ。」

「苔はパネェな。」

アシュレーが書いた内容を聞いた彼は軽く苦笑しつつ、自身も似たような物にしようとペンを走らせた。体育関連の講義で使用する旧校舎は、体育館を使用する前の更衣室として現在は使用されている。そのため聊か老朽化が目立つところも多々あり、生徒によっては汚いトイレは衛生的ではないと、不服の申し立てもあるそうだ。

だが、その辺を気にする事は無い男性勢からすれば、その辺りよりも別の面が気になる事もあるのだろう。苔まで生えだしてしまうとなれば、コレはただのネタである。

『……まあでも、学校の設備は対した不服はねえかな。寮とか完備で備品代はほぼタダなんて、何処探してもねえに等しいし。……ん。』

そんな軽いジョークなのかマジなのか解らない案を心の中で笑っていると、彼はある文面を眼にし手を止めた。そこにはこう書かれていた。

【なお、諸君を取り囲む問題に対しても取り組む姿勢を見せよう。自身が一番大切にしたいモノを、言ってみたまえ。】

「……………」

少々意味深であり、学校側からすれば何かと気にしたい内容が、そこには書かれていた。その文字を視た彼は一瞬手を止め体制を変えずに考えた後、軽くペンを走らせながら考えていた。

『…………… ……取り組む姿勢なんて、幾らでも見せられるだろうに。……どうせ改善何てしてくれねえし、何時だって【時間】を味方にするような、あんな言いぐされ…………… ……出来るわけねえだろ、大人達になんか。』

カリカリカリカリ……………

「…………… ……何てな。ただのアンケート用紙に何書いてんだか、俺は。」

その後思考と共に本音を書いたであろう用紙を彼は封筒の中へと戻し、明日も使用するであろうリュックサックの中へと入れた。こうすれば忘れモノも無いため、彼も真面目な所が見て取れる、可愛い光景であった。

「アシュレー 俺も何か読む物貸してくれよ。それ新刊だろ？」

「おう、もう読み終わったし良いぞ。俺風呂入るわ。」

「ん、ごゆっくりー」

夜の内に済ませておくべき課題を済ませた彼は、そのまま席を立ちベットで本を読んでいたアシュレーの元へと向かった。先程から彼が読んでいた新刊が気になった様子で、彼は小説を借り隣のベットへ寝転がり、本を読みだすのだった。

次の日。

再びやって来た朝日と共に朝食を済ませ、彼は講義の時間に合わせて一人、学校へと赴いていた。同居人であるアシュレーはその日の講義が無いため、彼が代理で二つの封筒をポストへと投函した。

「……うし、投函っと。これで講義分のポイント、ゲットだな。」

校内に置かれた古めかしいポストの中に封筒を入れ、彼は軽くほくそ笑んでいた。元々彼の通う学校には変わった講義が多く、出席によるポイント獲得とは違った物も数多く存在する。今回の封筒に関しても同様であり、基本的に出席をしない講義として有名なのだ。

ちなみにその講義に対する評価はと言うと、良くもあれば悪くもあると、五分五分であった。

『……そう言えば、今日はやけに雲が多いな。また雪降るのか……』

校内から外を眺めながら、彼は廊下を歩き講義の行われる部屋へと向かって行った。

「っと。さーて、筆記用具筆記用具。」

目的の部屋へと到着すると、彼は手近な席へと着席し、背負っていたリュックサックからノート一式を取り出した。今回の講義は『心理学』であり、まだ生徒の姿は無い。

ガサガサガサ……

「ん、あったあった。後はふでば…… あれ。」

そんな彼が筆箱を取り出そうとしたその時、荷物の奥に見慣れない物がある事に気が付いた。中に入っていた物、それはつい先ほど投函したはずの物とよく似た、手紙だった。

『あれ、こんなの入ってたっけ。』

不審に思いつつも彼は手紙に手をかけ、荷物の中から取り出した。差出人は特に書かれておらず、裏には焼印と思われるスタンプの跡が残っていた。

手紙を手にした彼は静かに封を切り、入っていた便箋の内容を目にした。そこには新聞の文字を切り抜きをしたと思われる紙と、文章が書かれていた。

【明日 決着 付ケル 支度 シテオケ】

『……何の決着だよ。ってか、支度って何??』

しかし送られた相手であるシップスには意味が理解出来ず、首を傾げながら中身を手紙へ戻し、数回折り曲げた後近くのゴミ箱の中へと落とした。差出人も文章の意味すら掴めない手紙と言う

のは、中々ミステリアスな品物だ。ましてや新聞の切り抜きで構成された物ともなれば、もはや『脅迫状』のレベル。

平穩などない。

『決着、決着…… ……何かゲームの大会とかあったっけ。』

再び荷物の置いた席へと着席した後、彼は手紙の意味を考えながら、講義の開始を待っていた。その時だ。

バンッ！！

「ん？」

「い、居たっ……！ シップス！！」

彼の居た講義部屋の扉が勢いよく開き、反動による壁との激突音が周囲に響いた。音を耳にした彼が扉の先を視ると、そこには息を切らしながら自身の元へと近づくライトの姿があった。

慌てながら欠相を抱えている所を視ると、こちらも平穩ではない。

「ライト？ お前今日は別の講義じゃ」

「ソニルス知らないか！？ 今朝から居ないんだっ！！」

「ない…… はぁ！？」

その場に来るはずのないライトに質問をしたのも束の間。彼は単刀直入に要件を伝え、探している相手が何処に居るか知らないかと問いただしたのだ。その声を聞いたシップスは仰天しながらもライトの手を掴み、荷物を置いたまま廊下へと向かって行った。

「おい、どういう事だよ。ソニルスが居ないって。」

「昨夜夕飯を食べた後、俺達はいつも通り寮で寝てたんだ。いつも俺が電気を消す当番だから、アイツが布団に入ったのを確認してから消すんだけど…… 今朝起きたら、居なかったんだ！連絡もない！」

「居ないって、そういう事かよ。外食じゃねえの？」

「もうお昼だぞ！？」

「ま、まあそうだけどさ……」

廊下へと跳び出したシップスはライトに事情を聴くも、あまり一大事とは思えない様子で適当な仮説を彼に与えてみた。しかしその仮説は簡単に突っぱねられてしまい、現に朝から居ないともなれば落ち着かない、現在の時刻はお昼過ぎ。

確かに留守ともなれば、少々心配になるかもしれない時間帯だ。

「とにかく落ち着けよ。まずはえーっと……検索願い？ でも出しとくか？」

「学校側が探し出したとしても、この地区広いんだぞ。早く見つけてやらないと、アイツ寒がりだし……」

「外に居るって決まってねえだろうに……まあ、しゃあない。行きそうな場所、教えな。俺も

探すよ。」

「えっ、でも講義……」

「んなもんサボりだよ、サボり。数少ない友人が困ってるんだったら、俺だってやれる事くらいさせろよ。周りの害虫からの搜索願だったら、平然と突っぱねるけどな。馬鹿馬鹿しいし。」

「……」

とはいえ頼っておく事も出来ない様子で、彼は一言そう告げ荷物を取りに戻ろうとした。そんな彼を見たライトは困りながら彼に言うも、相手の意志が固い事を知りそれ以上の事は言わなかった。

【数少ない友人が困っているなら、やれる事をやりたい】

考える事が苦手な彼らしい、実に正直な考え方であった。その後荷物を持って戻って来た彼に続き、ライトは歩きながらこう言った。

「ありがとう、シップス。」

「ん、おう。」

その言葉に対し、シップスは少し照れながら外へと出て行った。

外へと飛び出した彼等は、二手に別れながら地区内の搜索を始めた。商店街方面へと向かったシップスと、住宅街方面へと向かったライト。彼等から連絡を受けたアシュレーも別で行動してくれることが決まり、計三人でのソニルス搜索活動が開始された。

時刻は昼過ぎの、少々肌寒い曇天の中での搜索だった。

「ソニルスー 何処だーっ」

「おーいっ、ソニルスー！」

「ソニルスうーっ！！」

それぞれが近くの間をくまなく探し、たった1人の青年の事を探し続けた。顔見知りの相手には情報を求めて聞き込み調査をするも、中々良い手がかりを彼等は掴めずにいた。

時間だけが刻一刻と過ぎて行き、気が付けば夕方を越え、夜になろうとしていた。

「ハア……ハア…… マジで居ねえな、ソニルスの奴……」

「何処行っちゃったんだろ…… 連絡、マジでないし……」

「だな……」

息切れしつつも彼等は呼吸を整え、一度合流した三人は暑そうに服を掴み、脱げる範囲で上着を脱いでいた。空を見上げるとチラつき出した雪が曇天から舞い降りだし、既に夜を迎えていた。周囲の明かりが無ければ、彼等の表情すら確認できない程に暗い時間だ。

そんな時、

ガサッ、ガサッ……

「あら、貴方達。こんな寒空の下、なんて寒そうな格好してるの。」

「？」

そんな彼等の元に、一つの人影が近くへと歩み寄って来た。誰かと思い彼等が目線を送ると、そこには緑色の傘を差した亀の女性が立っていた。手にはビニール袋が持たれており、買い物帰りで見受けられる光景だ。

「男三人が揃って薄着なんて、ちょっと危ないわよ。貴方達。」

「そ、そんなんじゃねえしっ！ 人捜ししてたら、暑くなったから脱いだだけだっ！」

「人捜し？」

軽く動揺しながら上着を着ようとするライトの発言を聞いて、彼女は首を傾げながらその様子を見ていた。

彼等の息が白くなるほどに寒い場所であれば、確かに薄着で居るのは中々の場違いとも言えよう。普通に考えれば、暑くてもある程度の抑えをするべきだと思ったのだろう。目線はあまり、よろしくない物が向けられている。

「コイツの連れの、男の狐。知らないか。」

「ふーん、そう。貴方達『アレ』を探してたのね。」

「えっ？」

そんな彼女を視ながら、アシュレーは自分達は何をしていたのかを軽く説明した。連れの友人が行方不明になり、地区内をくまなく探していた事。走り回っていたがゆえに身体が暑くなり、不審に思われる行動を数人が捕って居た事を話した。

すると、それを聞いた彼女は不意にこう言い出したのだ。

「何て言ったかしらね……… ……そうそう。ソニルスだったかしら？」

「ソニルス……！！」

彼女の言った名前を聞いて、三人は驚愕を露わにしていた。

「お前、ソニルスが何処に居るのか知ってるのか!？」

「一応ね。」

突如彼等の前に現れた彼女の言葉を聞き、ライトは血相を抱えながら彼女に近づいた。平然と立ちながら静かに言う彼女に対し、落ち着きが無いが仕方がない。

彼はとても、急いでいるのだから。

「頼む、教えてくれ!! アイツは何処に居るんだ!？」

「ちょっと、痛いじゃないっ!」

パシンッ!

「うぐっ……!」

「レディの身体に、妄りに障らないで。なんて不躰なのかしら、ここの学生達は。」

「わ、悪い…… ………」

「悪い、ちょっと急ぎなんだ。俺からも頼む、教えてくれないか。」

しかしその慌て振りは相手の反感を買う事もあり、不作法も相まってか手痛い一撃を彼は受ける事となった。礼儀やらなんやら以前にあまり嬉しくない態度だった事が、今回の原因と言えよう。軽くライトを落ち着かせながら、アシュレーは代わりに居場所が何処なのかを問いかけた。

「ふーん、そう。……教えてあげても良いけど、条件があるわ。」

「条件?」

「そう。貴方達がそれを飲んでくれるって言うのなら、教えてあげるし力を貸してあげるわ。どう? 悪くない話でしょ?」

先を急ぎたい三人に対し、彼女は不意にある条件を提示した。それは求める情報を与える対価として貰う物であり、彼女にとっての『何か』をすれば提供する、と言う物だった。一件聞いている限りではシンプルな内容だが、読み解き方を間違えれば何をするか解らないとも言える。

彼女の言う何か解らないためか、頬を摩りながらライトは言った。

「そ、その条件にもよるぞ……! 飲めるかどうかかな」

「あら、知りたくないの? 彼の場所。」

「んっ……ぐうっ、弱味を握るとは……」

「丸出しの分際で言わないの。さっ、三人居れば少しは紛らわせそうだし。イイ事して遊びましょ?」

「「イイ事?」」

その後条件を飲まざる得ない状況に持ち込まれてしまい、渋々三人は彼女の条件を受ける事となった。軽く良い様に事を運ばされている感がありながらも、一同は彼女に続いてその場を後にした。

一行が向かった場所、それは商店街から離れた住宅街とは違った場所だった。その場所は昔の学校があった土地を開拓して造られた『宿屋』であり、一行が入ったのは近くに建つ小さな家。玄関を開け中へと通された3人は恐る恐る入室し、靴を脱いで奥へと向かった。

廊下を歩いた先にある扉を開けると、そこは暗がりの強い部屋の様な場所だった。しかし視界が効かないため、何があるのかが解らない。

「……あれ、暗い。」

「今灯りを付けるわ。」

パチンッ

「……うおおっ！！」

「えっ、ちょっ！！ 何だこれ！？」

彼等が居た部屋の明かりが灯された瞬間、三人は目の前に広がる光景を目にし仰天した。入室した部屋に現れたのは幾多の『ギャンブル用機器』達であり、灯りと共に華やかなネオンカラーを光らせる物も存在していた。茶色を基調とした部屋に置かれているのはルーレット台であり、壁際には種類が違うスロット台が数多く存在していた。また別の場所にはディーラーの入れるランプゲーム用の台も備わっており、普通に遊べるだけの設備が整っていたのだ。

普通に考えて、一式がそろっているだけで驚けるレベルである。

「ココが、アタシの趣味の部屋よ。さっ、適当な場所に荷物を置いて、テーブルに付いて。」

「テーブルって…… これ『ルーレット台』だろ?? どっからこんなもの……」

「通販で買ったのよ。」

「通販って……」

驚きを隠せないアシュレー達が手荷物を適当な場所に置いてみると、一足先にテーブルへと向かったシップスが質問を投げかけた。だが質問に対する返答はあっさりとしたものであり、有無を言わずに彼等のゲームがスタートした。

ディーラーとして立ったペルティが親となり、シップスとアシュレー、ライトは参加者として賭け金を置く側となった。賭ける場所は幾多も存在し、色と偶数、はたまたグループに分けられた数字に当たる事を、彼等は好きなだけ賭けられる。用意されたコインは自腹ではないため、初めは渋々だった一同も徐々に楽しい雰囲気へと入り込んで行った。

賭け金をセットした彼等を視た後、彼女は静かにルーレット台にボールを投入し、抽選が開始された。静かかつ綺麗な軌道を描きながら回り続ける銀の弾は彼等の視線を釘付けにし、自身が投入したコインに当たる事を祈りだす。シップスの賭けた黄色いコインか、アシュレーの賭けた灰色のコインなのか。はたまたオレンジ色のコインを賭けたライトに対し、勝利の女神がほほ笑むのか。

皆は今か今かと、結果を心待ちにしていた。その時だ。

カランカランカラン……

「黒（ノワール）の『26』！！」

「おっしゃあああ！！ 当たったああ！！」

「ゲェッ、お前が当たりかよ！？」

「おめでとうアシュレー」

ボールの入り込んだ場所に賭けていたアシュレーが歓喜の声を上げ、隣でハズレを引いたシップスが頬杖を突きながら文句を足れていた。何時しか完全にのめり込んでいた様子で、とても嬉しそうに彼は喜んでいて。

その後しばらくゲームはルーレットで続き、三人は何だかんだで一時を楽しんでいた。盛り上がりに乗じて用意されたレモネードは冷たく、軽い食事と共に彼等は満喫していた。

しかし、

「……なあ、何時になったら教えてくれるんだよ。ソニルス場所。」

気付いた頃には彼等は沢山の時間をその場で費やしており、気付いた時には深夜になろうとしていた。食事が出されていたため空腹感による時間の経過に気付かなかったのも、一つの理由だろう。

「教えるわよ、後で。」

「後でって…… 俺達急いでるって言ったじゃん。ルーレットも楽しいけど、ソニルス心配だし……」

「過保護なのね、貴方。」

「えっ？」

情報を持っているであろう彼女の返答に不満げな様子を見せるライトに対し、彼女はルーレットを回しながらそう呟いた。一言呟いただけだったためシップスとアシュレーはよく聞き取れず、彼等も話に耳を傾けだした。

「過保護って言うほどなのか……な、これって。普通だと思ってたんだけど。」

「あら、それなりに好意のある相手を心配するのは良い事だと思うわよ。同性同士でも、異性でもね。変な意味なしで。」

「まあ、そうだろ？」

「でも、半日留守にしたからって声を荒げて心配するのは過度よ。アタシだったらみっともないって、思うわ。」

「……」

不意に前で交わされ出した話を聞いて、二人は顔を見合わせた後ライトの顔を見た。軽く慌てていた事もあってか彼女の言葉をダイレクトに受けた様子で、少し表情が暗い様にも伺える。

「アタシもね、そう言う人を見た事あるから…… あんまり無駄な心配をして、疲労で疲れ切らない方が良くって思うの。貴方、結構根が良さそうだしね。」

「そ、そうかな……」

「そうよ。ちょっと顔は思い出せないけど、アタシの知り合いだったら普通にそう言うと思うわ。『心優しい存在は、心優しい存在達からの愛で出来てる』ってね。」

「愛なあ…… イメージ沸かねえな。」

「まっ、男だものね。ロマンの欠片も無い。」

「グサグサ言うなあ、マジで……」

とはいえ、そんな彼に対し感情を揺さぶる言葉を彼女は何度もかけていた。心配になってしまうほどの相手ある事を知り、なおかつ短時間で血相を抱えてしまう自身の事。一緒になって探してくれる友人達が居たからこそ、独りで無茶をせずに済んだ事。

幾多の状況が重なった今だからこそ、冷静になって考えられるのかもしれない。終いにはオチと言わんばかりの一言を告げられ、彼は自然と苦笑を浮かべ、笑顔になっていた。

「とりあえず言いたいのは。ちょっとでも心配してくれる人が居るのなら、その人は心配をかける様何かをするべきって事。貴方がそれなりに想うって事は、相手も何かをしないとイケないって事。バランスは常に付きまとうから、あんまり大きくし過ぎると、相手の重荷になるのよ。」

「重荷に？」

「そっ。だから、今は忘れて楽しくしてた方が良いわ。押し潰しあうんじゃなくて、一緒に重荷を背負い合うの。それが出来てスッキリしたら、アタシはちゃんと貴方に教えてあげられる。」

「……そっか。解った。」

「うん、良い子。」

素直に全てを話す事無く、彼女は彼に理解させるように言った後、台に腰を下ろしたまま静かに彼の頭を撫でた。まるで子供を宥めているお姉さんの様にも感じるその風景を視て、シップスとアシュレーは顔を見合わせた後、静かに笑った。

『……心配をしてくれる相手、か…… 居たのかな、俺にも。』

その後再び始まろうとするゲームのコインを賭けた後、シップスは不意に考え事をしながら天井を見上げた。ネオンカラーを浴び煌めく様に輝くシャンデリアは気品あふれており、今居る部屋の雰囲気にとってもマッチしている様にも見えた。

自分達が今何をしていた、何を意識し、何を忘れなければならないのか。そんな事を、ただ臆気に考えていた。

『…… 少なくとも、アシュレーはしてたな。毎日顔を見てるからって言うのもあるけど、何時も……してた。…… そういや、もう一人居たな。昔に。』

不意に宙を眺めていた彼の脳裏にある光景が浮かび上がり、彼はポケットにしまい込んでいた携帯電話を取り出した。画面を弄り画像ファイルと漁った後、彼は一枚の写真を呼び出した。

そこには並んでカキ氷を食べる自分と、灰色の狼の姿が映っていた。待受けにしていた茶色の犬達と共に出かけた際に撮った写真であり、二人の両サイドには顔は視えないが友人達の手足が映っている。自身は冷たそうに頭を押さえる中、隣で笑顔を見せながら食べている友人が、とても印象的な写真だ。

『…… そういえば、ラブは何してるんだろうな。俺…… 言うほど何もしてなかった気もする。見

てると笑ってるのに、礼って言うほどの事……してないよな、そういえば。絵とかも、描いてない……』

不意に思い出しながら見た写真の出来事を思い出しながら、彼はしばし携帯の写真を視ていたのであった。

「さーってっと、そろそろ頃合いね。」

「ん？ 頃合い？」

長丁場になりかけていたギャンブルゲームがひと段落した頃。主催者であるペルティが意味深な言葉を呟き、それを聞いたシップス達が一斉に彼女に視線を向けた。

「貴方達の求めていた情報、そろそろ良い頃だから教えてあげるわ。」

「おい、良い頃合いってどういう意味だよ。」

「それは、貴方達がこれから向かった先で解る事よ。これから言った場所に、確実にその時までに向かって。そうすれば、彼が見つかるはずだから。」

「ソニルスが、か……？」

彼女の言い出した頃合い、それは彼等が探している『ソニルス』との接触を図れる時間の事だった。初めから時間つぶしが目的だったのかと彼等は首を傾げる中、彼女は気持ち的に明るくない様子を見せ、彼等から一度視線を逸らし、こう言った。

「アタシの聞いた話だと、彼は夜中にある場所へ赴いたって話よ。学校の裏話を、貴方達も一回は耳にした事があるはず。」

「裏話って…… あの『非常階段の怪談』か？」

「そうよ。彼は一人あの場所へと赴いて、ある罠にかかったらしいの。その日は曇天で辺りも暗かったから、目撃情報も無かったって言うし。恐らく、捕獲されたわ。」

「捕獲って……！！ どういう事だよ！？」

彼等の探していたソニルスは昨晚の内に『捕獲』され、その捕獲主を捕まえなければ彼を助ける事が出来ない。それを聞いたライトは動揺しながら席を立ち、彼女に詳細を求めた。

しかし彼女は詳しい情報全てを知っているわけでは無いと告げた後、両肘をテーブルの淵に付けながら彼等を見た。

「原因の発端は私には解らないけど、そう言う事。これから貴方達が向かうのは、捕獲主が現れるポイント。この地区の大扉がある、あの通りに向かいなさい。明方までに。」

「明方って…… 後二時間か。捕獲主って、どんな奴なんだ？」

「詳しくは知らないけど、こう言われたわ。『怪物』だって。」

「ッ……」

彼等がこれから奪還する際に接触する相手、それは街の中では噂すら聞いた事のない『怪物』だと彼女は言った。無論どんな相手なのかも解らないため彼等に助言をする事は出来ないでいると、言葉を聞いたライトは怯む様子を見せ、どうするかと考え出した。

彼等がそのような相手に対抗するには『流星石』を使うしかないが、どんな相手なのかが解らないため有効性がどれくらいあるのかも彼等には想定が付かない。抜群の効力を発揮するかもしれないが、逆を言ってしまえばまったく無力となってしまう可能性だってあるのだ。どうするべきかとあれこれ考える彼に対し、隣に居たアシュレーは左程ためらう様子を見せおらず、ライトの様子をしばらく見ていた。

集団内で一番ソニルスを助けたいと願うのは彼であり、彼が一番無茶をしても不思議ではないと言う仮説は立てておかなければならない。彼の安否によっては冷静さを保てるかもしれないが、危険な状態であれば自分達ですら危険な賭けに出かねないのだ。戦闘はどうであれ、彼にとっての気にかける点は『仲間』そのものにある様にも思えた。

そんな彼の心配は前に立つライトに限らず、さらに彼の隣に座っているシップスにも同様の事が言えた。アシュレーは今の彼はどんな様子なのかと思い視線を向けると、そこには形態をみつめるシップスの姿があった。携帯をみつめながらボーっとしており、何か考え込んでいる様にも見える。

「シップス？ どうした？」

「ん？ ……いや、別に。」

「隠すなよ、こんな時に。携帯、何を視てたんだ。」

「…………… さっきの話で、ちょっとな。俺の事を心配してくれた奴って、アシュレー以外にも居たのかなって思っただけ。それだけだ。」

「俺以外に？」

「言うほど、俺は友人が多い方だとは思ってねえからさ。学校生活での大半が虐めの記憶しかねえし、学力も言うほど高くは無い。趣味に逃げてばっかだったし、何時だって気に入った親友との時間しか大切にしていなかったと思ってな。ちょっと後悔してた。」

「……………」

そんな彼に対し声をかけると、彼は軽く誤魔化そうと言葉を口にするも、再度アシュレーからの問いかけを聞いて素直に腹を割って話してくれた。

ゲームで楽しんでた際に耳にした『心配してくれる仲間』の事を思いだし、彼は自身に対し誰が心配してくれていたかと考えていた事。一人は自分の隣に座るアシュレーに他ならないが、他にも彼には思い当たる人物が何人か居た事。それを思い出した際に顔を見たくなくなったため、携帯を見つめて考え込んでいた事。

いろいろと普段から意識する事が無い事を考えていたと聞き、アシュレーは不思議そうな表情を見せながらも、彼の考えていた事を思い言葉を考えていた。

『コイツ、普段はそんな事話さないのに……俺等が楽しんでた時に、悩んでたのか。気が付かなかった……』

「後悔してるのね、意外と。」

「ん。……まあな。柄に合わないとか普通に言われるけど、俺も存在ヒトだからな。そんなくらいする。」

「でも、それって案外良い事なんじゃないかしらね。悩むって事は、それだけ経験を積んでるって事なんだし。」

「経験？」

そんな彼に対し考えていると、アシュレーよりも先にペルティが彼に対し声をかけだした。彼が話した本心の言葉を聞いて思った感想を告げられ、彼は耳にした言葉に対し首を傾げる様子を見

せた。

彼女が言うほどの事を、彼はその様に受け止めた事が無かったのだろう。新鮮な感想を聞く様に、眼を向けていた。

「人生ってどういうものなのかはアタシは興味ないけど、貴方みたいな突撃馬鹿っぽい子が悩んでるのを視るのは嫌いじゃないわ。」

「今サラッと酷い事言ったな…… ど一せ馬鹿だよ、俺は。」

「じゃあ、今度は馬鹿っぽく行動してみる？ その方が、かえって悩みも吹き飛んで良いかもしれないわよ？」

「んー……」

軽く現実に戻される言葉を放たれるも、彼は彼女からの言葉を聞き軽く悩む仕草を見せた。確かに彼自身も自分らしくない事を考えていると思っていた様子で、その様子は何処となく楽しい物を見つけようとする無邪気さも視えた。

常に悩み続ける様な存在が自分なのか、それとも悩まずに感じた気持ちを素直に行動に移すのが自分なのか。そう思い考えた頃、会話を聞いていたライトが言葉を発した。

だが、

「お、おいっ 相手は怪物だろ……？ そこまで迷惑は」

「明方までにそこへ行けば、ソニルスを助けられるのか。」

「かけられ……？ シップス……？」

彼の言葉を遮り、シップスはペルティに対し間接的な答を求める様に問いかけた。言葉を遮られた彼は一瞬驚く仕草を見せるも、彼女の返答を聞こうとする彼の邪魔にならない様言葉を慎んだ。

。

「ええ。確実に奴は来るわ。」

「ん、じゃあ行くか。アシュレー、ライト。ソニルスを迎えに行くぞ。」

「ん？ お、おう。」

「ちょっ、待ってシップス！ 本気なのか！？」

返事を聞いた彼は即決した様子で席を立ち上がり、すぐさまソニルスを迎えに行こうと言い出した。それを聞いたアシュレーは軽く驚きながらも同様に席を立つが、嬉しくも発言に理解出来ないライトが彼等の前に立ちはだかった。

少し意外な行動をされたと思い、彼は説明を求めたかったのかもしれない。

「ん、俺は一応真面目に言ったつもりだぞ。邪魔だったか？」

「あ、いや……そう言うわけじゃないけど…… ……良いのか、相手は怪物だって言うのに……」

「別にいーよ、んな事。ど一せここには、俺の友人はお前等しかいない。それにこういう時に動けないんじゃ、本当に俺の意志で動きたい時に動けないだろうからさ。言っちゃ悪いけど、予行練習みたいな感じだ。死ぬ気だな。」

「シップス……」

協力する事に対し否定されたのかと思い首を傾けたシップスを視て、ライトは誤解を解きながらも彼の決意に至った経緯を知りたいと口にした。それを聞いた彼は軽く右腕を回しながら退屈そうに説明し、彼の中で燃え滾る、この先に起こるかもしれない障害に立ちはだかる勇気を教えてくれた。

彼からの言葉を聞いたライトは呆気にとられながらも、彼の協力に心の中では喜んでいた。

「ライト、行こう。こういう時のシップスは、何を言ったって無駄だ。」

「あっ、ちょっ！ お前も酷い事言うなあ……」

「ったりめーだ、馬鹿狐。しおらしくクールに決めてると、槍でも振ってきそうな気分になるんだよこっちは。」

「テメツ、言って良い事と悪い事があるんだぞっ！！ 俺の名言を返しやがれっ！！」

「何が名言だ！！ どーせゲームの受け売りだろうが！」

「それ以外あるかああ！！」

しかし和みのムードは一変、突如目の前で殴りあいの喧嘩が始まるかのような口論はスタートしてしまった。両者の言葉を聞くも反応に困っていたペルティは仲裁をするべきかどうか迷っていると、二人は互いの服の襟元を掴み殴りかかろうとした。その時だ。

「………… ハハハ……」

「んあ？ どうした、ライト。」

「コイツの馬鹿が移ったか？」

彼等の怒りを収めたのは、彼等を視て苦笑するライトの笑い声だった。声を聞いた二人は正気に戻りながら彼に説明を求めようとするも、アシュレーの言葉を聞いたシップスに再び喧嘩のスイッチが入ろうとした。

「うっせっ！ 尻敷かれ針鼠！」

「黙れっ！ 童貞狐！！」

「ゴ、ゴメン……そう言うつもりじゃないんだ。……ただ、ソニルスで熱く成ってくれる存在ヒトが居たんだなって思ってさ。」

「…………」

「アイツ、なんだかんだで友達と居る時もあるけど……君達と居る時ほど、楽しくなさそうだったからさ。アニメとかの話も、絵の話も。だから、ちょっと嬉しくなってさ。」

だがそんな彼等を止めようとライトは両手で両者の腕をそれぞれ掴み、笑った事に対する弁解を図りだした。

自分がやり取りを視ておかしい気持ちを抱いたのではなく、そんな彼等が熱くなるほどに自分にとって大切な人のために熱くなってくれた事。彼にはそれがとても嬉しく思える事だったらしく、じつはそうでは無いのではないかと思っていた自分に対し、笑っていたのだと。ライトからの説明を聞いた二人は握っていた拳をおろし、互いに顔を見た後、苦笑しだした。

「喧嘩してる所悪いけど、さ……ソニルスを迎えに行きたい。一緒に来てくれないか？」

「お、おうっ そうだったな。」

「あー、無駄に口論したあー……」

何かと収まりが良いのか解らずに彼等は話を戻し、ソニルスを迎えに行くとした様だ。軽く楽しかった時を思い出すかのように彼等は戯言をぼやきながら、ペルティに軽く手を振りその場を後にして行った。

彼等の様子を見たペルティは彼等に対し手を振り返し、見えなくなるまで彼等を見送った。

『………… さてと、アタシも暇つぶしに見に行こうかしらね。三人の雄達と、怪物の死闘を視に。』

その後遊んだテーブルで使用した道具達を定位置に戻した後、彼女は軽く横髪を直し、彼等の後を追うようにその場を後にして行った。

ようやく彼等の探していた友人の手掛かりを掴み、シップス達は雪の降る真夜中の街を駆けていた。つい先ほどまで温まっていた身体は徐々に冷えだす中、全速力で彼等は道を走り、ペルティから情報を得た『地区を仕切る大扉の前』へと到着していた。

「ハア……ハア…… アシュレー、時間はっ……！」

「ゼエ……ゼエ…… だ、大丈夫だ……時間には間に合ってる！」

「あー良かったあ……」

とはいえ、いきなり寒い所に出た後の体力の消耗は中々のものだったらしく、彼等は再び息を整えようと両手を膝に付き、息を整えていた。その後落ち着いた様子で深呼吸した後、彼等は周囲を見渡しソニルスの姿を探した。

だが夜明け前の地区内は暗く、街灯の明かりしかないその場は雪の白さで朧気に辺りがぼんやりと認識できる程度でしかない。

「……おかしいなあ。ペルティの話じゃ、ソニルスが居るはずだったんだけど……」

「まあ、言ってたのは『夜明け前にココに着く事』だけだしな。とりあえず、相手が現れるまで待つしかないだろ。」

「シップスの言う通りだ。ライト、念のため流星石を持っとけよ。怪物が何処から来るかも解らないからな。」

「う、うんっ……」

周囲の警戒をしつつも彼等はそれぞれが調合した流星石を取り出し、栓に手を触れた状態で辺りを見渡した。その後徐々に三人は道路の中央に集まり、それぞれが互いの背中をカバー出来るようにと陣形を組み、警戒していた。

その時だ。

「れっでいーす・えーんどう・じゅえんとうるめーんっ！！」

「！？」

彼等の居た環境に響く、一声を彼等は耳に捕えた。声を聞いた三人は一層辺りを警戒し出したその時、ライトは何かを見つけ、背後の二人に解る様に目標に対し指を指した。

そこには雪の降る大地を静かに歩く、小さな人影だった。

「ニヤツニヤツニヤツ、はあ～いつ 狐子に釣られてやってきた狐ちゃん達、大変長らくお待ちせしましたのニヤツ」

「えっ、ネコ……？」

「いや、ただの猫じゃない。……お前、まさかとは思いますが……管理課の『茶色い猫』じゃないだろうな。」

「管理課……！？」

そんな彼等の元にやって来た人影が街灯に照らされ色味が付くと、ライトは現れた人物に拍子抜けた声を発した。しかしそれを聞いたアシュレーがすぐさま訂正するかのように言葉を付けたし、そこに居るのは自分達にとって敵視しても良いであろう相手である事を二人に伝えた。

それは彼等の居る地区を管理する、街を支配する管理課の事だと。

「ニャーン、よおーく知っておいでですニャ。針鼠ちゃんっ」

「気色悪い言い方するなっ……！ お前、何しに現れた。」

軽くからかわれながらもアシュレーは相手に問いかけ、何しに現れたのかと質問した。元々彼等は地区を管理する存在ではあるが、それ以上に街に住む存在全員を『支配』する形を取っている。だが彼等の居る地区はすでに『統一』された学業の場であり、彼等の出番が聊か妙だと考えている様だった。

「何って言うのは心外ですにゃあ。おミャー達が探しているであろう相手を、わざわざ拾ってきてあげたのですニャよー？」

「拾った……だと？」

「左様、ニャーは単に拾っただけなのニャ。」

パチンツ

ドサツ……！

「！？ ソニルス！！」

そんな問いかけを軽く流しながらネコは目の前で指を鳴らすと、彼等の背後で何かが雪に埋もれる物音がした。物音のした後方を視ようと一同が振り返ると、そこには俯せで倒れるソニルスの姿があった。彼を見つけたライトはすぐさま駆けつける様に彼を抱え起こすと、息をしている事を確認し、無事である事をシップス達に告げた。

「……拾った、な。信じたくはないが、お前が何もしていない証拠はあるのか。」

「ニャーニャツ ニャーも中々の嫌われ者に格上げされましたニャ。まあでも～、それはこっちにとっても中々都合の良い流れ。それで構いませんニャよ？」

「……」

何事も無く探していた友人を見つける事は出来たが、アシュレーは未だに信用出来ていない様子でネコに問いかけた。

外傷はなくとも気絶しているソニルスに何かをしたとは言い切れず、また彼が何もしていないとも言いきれない現状。ましてや相手が管理課の一人だと言う事もあれば、当然と言えば当然であろう。問いかけに対しネコはそれで良いと言うところも、また気にかかる点であった。

そんな気がかりな点が浮かぶ中、ネコはこう言い出した。

「ああ、それと～ 君達に会いたがっている相手が居るから、そちらも連れてきてあげましたのニャ。」

「会いたがっている？ 誰の事だ。」

「ん～ そうニャねえ…… そこの大きい狐さんが、ある意味知っているかもしれませんがニャね。」

「俺？」

彼等の探していた友人以外に、彼等に会いたがっている存在が居る。意味深な言葉を吐いたネコの問いかけに皆が耳を貸す中、ネコはシップスに関係があると言い出したのだ。一体何の話だろうかと首を傾げるシップスであったが、意味も理解しない間に号令がかかった。

「いでよっ！！ クァム・ヒァアアアッ！」

何かを召喚するかの如くネコはそう叫ぶと、周囲に変化が現れた。

ズーン…… ズーン…… ズーン……

「……？ おい、お前に地響きのデケエ知り合いなんて居たか？」

「言わるけねえだろ、アホアシュレー ……？ 雪が……」

「止んだ……？」

彼等の居る周囲に轟く地響きを耳にした直後、彼等の周囲を舞っていた雪達が姿を消した事に気が付いた。隣で言葉を耳にしたアシュレーも空を見上げると、止む事がほとんどない地区の雪が止んだ事を彼も確認した。

つい先ほどまで降っていた雪が、突然止む事などありえるのだろうか。一同がそう思っていた、その時だ。

ズーンっ…………… ズーンっ……………！

【ゴォォォォー……！！】

「くっ！！」

「うおあっ、うっせええっ！！」

彼等の元に、突如雷鳴の如く轟いく鳴き声が大地を震わせた。耳で感じ取れる音域限界に等しい音量の咆哮を耳にし、彼等は耳を塞ぎ音を遮断しつつ、物音のする方角を眼にした。

するとそこには、街中に立ち並ぶビルに手をかけた炎を纏う手があり、その先には炎を纏った大きな怪物の姿が映った。本物の炎を纏っているらしく、炎に照らされた大地は明るく照らされ、怪物の周囲にある雪達は即座に蒸発し、周囲に湿気のある空気を漂わせるのであった……………

「おいおいおい……！ なんだよアレ！？」

雪の降り積もった街中に突如現れた、燃え盛る業火を纏った巨大な怪物。深夜と言う事もあり静けさに包まれていた街を、怪物は轟く鳴き声を上げ、周囲の人々を叩き起こしだす。声に反応して、徐々に街中に声が響き出していた。

「何なんだよ、あの怪物は！！」

「わ、解らないけど火事よっ！！ 早く逃げなきゃっ！！」

「逃げるって何処へだよ！？」

微かに聞き取れるか聞き取れないかの遠い存在達の話し声が、シップス達にはノイズの様に聞こえます。周囲に住む生徒達が避難する中、シップス達は立ちすくみ相手を見る事しか出来ずにいた。

「ニャーッニャッニャッニャッ！ どうニャッ！ これぞ地区から春の時間を亡くし、生れた豪炎のモンスターなのニャッ！！」

「……！？ おいらネコ！！ 地区から春を奪ったってどういうことだっ！！」

敵を呼び出したネコの発言を聞き、シップスは聞き捨てならない単語に対し意見した。彼等の住む地区には確かに『春』と呼べる時間は無く、まるで『時間が止まってしまった』かのような冬の環境が続いていた。日に日に増しているであろうと思われる苛めの波もさることながら、彼は時間が流れる事を望んでいた。

だからこそ、気に食わない発言だったのだ。

「ニャに、この地区には春がくれば巣立つ輩が多いのニャ。巣立った所でどうするう、社会人かニャ？」

「そりゃあ……… 俺等は大人になったら、そうなるだろ。いずれ。」

「大人は汚れてるのニャに、良く望む奴等ニャ。春が欲しいなら、このモンスターを倒せば良いニャ。ちゃーんと春がやってくるのニャ〜」

「何っ 本当か！？」

「ニャーは嘘はつかんニャ。」

徐々に彼等の居る場へと近づき鳴き声を上げる怪物を見ながら、ネコはシップスの反論を流しながら質問を投げかけた。

彼等は確かに学生であり、いずれその枠組みから外れた『大人』と呼べる『社会人』に成って行く。だがそれは嬉しい事と共に苦しい事の始まりを意味しており、今まで通用していた事が全て覆されかねない環境へと投げ出される事も意味していた。存在によっては自らが望んだ事とは違う仕事を行わされ、場合によっては彼の様に解りきらない圧力による虐めも、ゼロではないのだ。

隣の芝生が青く見える様に、学生は大人を羨み、大人は学生の時間を羨むのかもしれない。それを彼等は知らないと、ネコはそれとなく彼等に言うのだった。

「まあ春を望むのニャら、確かにニャーは止めんにゃ。……でもニャ、お主等。おミャー等は確

かにニャーに言ったはずニャ。」

「え……？」

「『子供のまま、楽しんで過ごしたい』とニャ。アンケートに迂闊な事は書かん方が良いニャ、実現されたオチはちゃんと言わないといけないからニャ。」

「なっ！！ 俺が悪いって言いたいのか！？ 汚ねえぞ！！」

自身は頼まれた事を忠実に再現したと言いだし、軽くアンケートにその事を書き込んだ相手に一言告げた。その言葉を聞いたシップスは激怒し、自分が悪いのかとネコに問いかけた。

確かに彼は、あの日の夜の最後のアンケートにその言葉を書き記した記憶はある。だが実際に虐めがあったのは昔の事であり、彼等の居る地区に来た時からではない。しかし現に時間だけが止まったままに感じられる毎日は事実の為、考え直すと彼が書いた言葉でその事実が確定したと言っても過言ではないのだ。

軽く自分の失態を気づかないフリをしつつ、シップスは毒づきながらもネコを睨んだ。

「良く回る口だニャ。それでどーんなに多くの輩が傷ついて来たのか、おミャー等には解ってない様だにい。」

「……………」

「ま、責任は炙られてするのニャ。行けいっ！ 豪炎モンスター！！」

【ゴォォォォォー！！！！】

そんな彼等の態度を尻目に、ネコは指揮を取る様に現れた怪物に命令を下した。すると怪物は声に反応し鳴き声を発し、再び彼等の元に熱風を帯びた音波が襲い掛かった。幸いにも火傷するほどの威力では無かったため無傷に等しいものの、彼等の足元にあった雪達は姿を消していた。咆哮だけで軽い威力を目の当たりにされたアシュレー達は、流星石を握ったまま軽く対峙する様子を見せた。だが相手は巨大な怪物であり、下手をすれば触れるだけで自分達が怪我をする事が目に見えて仕方がない。雪が瞬時に蒸発してしまうほどの相手に近づける保証も無く、彼等はどのような事も出来ずに居た。

その時だ。

「炙られてたまるかっつーの……………！！」

「……？ シップス？」

彼等の行動を見ずに呟いたシップスが、彼等の前に立つ様に移動しだした。彼の行動を見たアシュレーが呟き混じりに彼の名前を呼ぶと、彼の両手には形状を変化させた彼の流星石【小乱剣銃（レーガンスネス）】が姿を現した。

短銃の銃身に鋭い剣刃が付いた彼の流星石は、その場に幾多も生成する事が可能であり、近接と共に遠距離戦闘もこなせる優れものだ。だが威力そのものは低く、回数で威力を重ねるタイプの物だった。

「おらアシュレー！！ さっさと倒して卒業すっぞ！！ 冬なんて御免だ、面倒だ！！ 俺等はちゃんと旅立つんだ！！！！ こんな世の中……！ 俺は嫌なんだあああ！！！！」

「！！ああ、分かった！！」

彼の心の叫びと思われる雄叫びを聞いたアシュレーは、彼の言葉に反応する様に流星石【中途製剣（ルメビスソード）】の詮を引き抜いた。すると彼の手元に刀身が比較的長い剣が形成され、彼もまたシップス同様に接近戦を行う態勢を示した。

アシュレーが自身の隣に並んだのを視ると、シップスは歯を見せる様に元気な笑顔を見せ、戦闘態勢に移った。

「おお、確かお主は悪魔じゃなかったかニャ？ 改革をすることは驚きなのニャ。ましてや隣は狐子3匹、割に合わんニャろ。」

「悪魔とか天使とか、別に知らねえよ。改革を悪魔がする事じゃないって.....誰が、決めたんだ！！ 俺はやるって決めたらそうするだけだ！ そうだろ、ライト！ ソニルス！」

「えっ？ ...お、おうっ！ ガキ扱いはこれ以上されてたまるか！ 俺の幸せは、俺が何とかして創るんだからな！」

「ま、ソニルスはそんなんだしな。俺も否定しない、やってやる！」

ネコの発言に対しアシュレーがそう叫ぶと、後方で目覚めかけていたソニルスが寝起きの様な声で賛同した。彼を支えていたライトも同様に言葉を告げると、ソニルスを支えながら立ち上がらせ、共に自分達が使用する流星石を手にし出した。

既に彼等の心は一つになった様子で、四人全員が怪物を倒す意志を見せた。

「ん〜 響きが好きなニャ。じゃ、このモンスターはちゃーんと倒すのニャよ。そしたら、ちゃーんと破棄してやるのニャ。」

「「上等だああ！！ この化け猫っ！！」」

ネコの一言を聞き、その場に居た四人は声を揃えて叫んだ。それを聞いたネコは軽く笑みを浮かべ、とても嬉しそうにモンスターに襲い掛かるように指示を出した。すると、再び声を上げた怪物は前進を開始し、彼等に対し襲い掛かって行った。

戦いの火蓋が切って落とされ、シップス達の真夜中の戦いが始まった。月が視えない程に黒い雲で覆われた地区を照らす、明るくも激しい豪炎の熱気。相手は巨大な豪炎を纏った怪物であったが、彼等はひるむ様子を見せることなく、果敢に立ち向かって行った。

「行くぜっ！！」

後方に居たソニルス達の体制が整うと同時に、前に立っていたアシュレーは剣を構え、怪物に向かって特攻を仕掛けだした。しっかりと剣を固定する様に右手を左手で支え、走り込みながらも何時でも攻撃が仕掛けられる体制に入っていた。それを見た怪物は地響きを起こすほどの咆哮を上げ、炎を纏った右手を大きく振り上げ、彼諸共地面を殴る様に攻撃を繰り返した。怪物の動きを視たアシュレーは避ける様に屈んだのち、すぐさま膝を伸ばして高く跳躍し、殴った反動で素早く動けない怪物の右手に狙いを定め、攻撃を行った。

「はぁあっ！！」

炎を纏った拳に剣刃の軌道が走り込み、まるで皮膚を切り裂くかのように、感触がない一線の切れ目が相手の手に生じた。しかし相手の炎の質量が大きいためか、すぐに切れ目が炎で修復され、引き戻された拳の攻撃が、再び彼に襲い掛かろうとしていた。

それを見た彼は地面に着地しながら相手を見据え、こう叫んだ。

「チッ、固形じゃねえから切れねえか。シップス！」

「ああ！ まっかせなっ！！」

迫り来る攻撃を見たアシュレーは、冷静に左後方へと跳び退きつつ、後方で待機していたシップスに行動を促す様に叫んだ。彼の声聞いたシップスはそれに対する返事をし、構えていた武器を幾多も生成し、銃剣を構え相手に向けて幾多も投げ放った。

放物線を描きながら銃は怪物目掛けて飛んで行き、アシュレーを攻撃しようとした右手に突き刺さり、燃え盛る炎に飲まれるかどうかの場所で、姿を保ちながら刺さっていた。援護とばかりにやってきた攻撃を見た後、アシュレーは再び剣を構えながら走りだし、突き刺さった銃目掛けて剣を振り下ろした。

「うらぁああっ！！」

ガキンッ！！

【グルァアアアアッ！！】

突き刺さった銃と剣が触れた衝撃で、刺さっていた銃はまるで爆弾の如く炸裂する様にはじけ飛び、先ほど以上の切れ目を拳に生じさせたのだ。すると、先ほどよりも再生する速度が遅く、切れ目から遠い部位の炎が徐々に消える様子を伺う事も出来た。

痛覚に通じたのか怪物は悶える様に叫び出し、それを見た2人はアイコンタクトを取った後、再び攻撃を仕掛けようと武器を持ち、隙を伺いだした。

「っしゅあっ！ この調子なら行けるぞ！！」

「ヒャアッハーッ！！ ざまあみろ怪物めえっ！！」

【！！ グルァアアアッ！！】

「うおっ、ヤベッ！！」

「火炎放射か！！」

だが彼等の喜びも束の間であり、すぐさま怪物からの反撃が開始された。怪物の口から放射された炎は地区を飲みこむように発射され、炎の波と化しながら彼等へと襲い掛かった。大地を走る様に炎の波が接近するのを視た彼等は、慌てて近くの物陰へとそれぞれ避難し、難を逃れたと思われた。

その時だ。

ジジジジッ……

「！！ アヂヂヂヂッ！！ 尻尾尻尾ッ！！」

「ちょっ、何やってんだ馬鹿ッ！！ 尻尾くらいの余裕みとけよな！？」

「テメエよりもデケエんだから仕方ねえだろ！？ あーっ、尾先が焦げたッ……！ クソッ！！

」

壁から出ていたであろうシップスの尻尾の尾先に火がともり、焦げた臭いと共にシップスが悲鳴を上げだしたのだ。彼の声を目にしたアシュレーは慌てて彼の元へと走り込み、燃え盛ろうとしていた彼の尻尾の炎を摘み、指の圧力で消火を行った。

だが戦場と言う事もあってか、双方ともに考えと余裕をもって行動するべきだと口論しだしてしまう始末。コンビネーションが良いのか悪いのか、何とも悩ましいほどに仲が良いと思われた。

「ニャッニャッニャッ、そのままウエルダンにしてやるのニャッ 怪物よ、やあーっとおしまっ！！」

【グルァアアアッ！！】

そんな二人のやり取りを目にしてか、ネコは再び怪物に指示をだし、炎の波の発生を促した。ネコの声聞いた怪物は再び咆哮した後、再び地区を飲みこむ様に口から炎を放射し、次々と地区に残る雪達を消失させていった。

「ゲッ、また来るぞ！」

「このままじゃ地区全体が火事になっちゃう……！」

再びやってくる攻撃の波を見た二人は物陰に隠れつつ、どうやって攻めるかと考え出した。地区を丸ごと燃やし尽くすかの様に放たれる波は熱く、一発でも飲まれてしまえば、ネコの言った通り丸焦げになる姿が彼等の脳裏に過っていた。

簡単に負けてしまうほどの相手の攻撃を放置しておけば、今度は自分達が隠れている建物全てが火事になり消えてしまう事も、時間の問題と言える事態。どうするべきかと考えていた彼等の目の前を、別の影が走り込みこう叫んだ。

「まっかせてー！ シップ、アシュレー！」

「！ ソニルス！？」

やってくる炎の波をもろともせず、彼等の前を走り抜けたソニルスは、大きな電動のこぎりを両手で持ち、果敢にも立ち向かっていく姿が映った。彼の後方ではライトが狙撃銃を構えており、どうやらシップス同様コンビネーション攻撃を仕掛ける様子を見せていた。

「【電動裁剣（トネメラーデスアックス）】で、切れない物はないっ……！ うーらああっ！！」

ブンッ！！

「援護するぞっ、ソニルス！」

振り上げた武器でソニルスが周囲を薙ぎ払うと、仰がれた火炎放射は風で角度を変え、彼を裂ける様に周囲に拡散しだした。後方で待機していたライトが彼の武器目掛けて発砲すると、剣刃に触れた銃弾が拡散し、仰いだ風に乗って炎を飲みこむ巨大な竜巻へと変化したのだ。大火事に成りかけていた炎を次々と風が巻き込みだし、天空へと運び消し去って行った。

幸いにも、上空には湿気と氷の粒を備えた厚い雲があった事もあり、炎の熱と交差し次々と蒸発しだした。それによって隠されていた三日月が姿を現し、彼等を明るくも優しい光で支援する様に輝き出したのだった

危うく飲まれそうになった地区が無事難を逃れると、シップス達は物陰から飛び出し、ソニルス達と合流し怪物を視上げた。

「どうだっ！ 参ったかっ！！」

「まだ何もやってにゃいジャマイカ、お主等。まだまだ戦いは続くのニャよっ！」

「どんどんかかって来いやああっ！！」

威勢よく彼等はそう叫ぶと、それぞれが手にする武器を構え、怪物への攻撃を再開していった。

絶え間なく続く攻防戦は時間と共に流れてゆき、シップス達は疲労感を感じながらも戦う事を止めようとはしなかった。手にした流星石は街の中で唯一管理課と対抗する術であり、彼等もまた地区へ対する『改革』を望んでいた。

自分達は何のために生きていて、生活するこの地区でどんな夢を望んでいたのか。

ただ平穏で変わり映えの無い人生を望んでいたとすれば、彼等は戦う事を望まなかったかもしれない。時間が止まってしまったと思われる彼等の学業生活は永遠と続き、その時間軸の中で常に似た生活を送り続ける事。それはその場から離れてしまった者達から見れば、未来栄光に続くその生活が夢のように感じるかもしれない。

一旦外に出て見直してしまえば、今居る生活の有能さと無能さに気付かされてしまう。ゆえに、それを知らない彼等を制止するネコ達は、ある意味では『永遠の時間』を彼等に与えようとしていたのかもしれない。

だがそれは『変化』も『夢』も生まれえない、ただ過ぎ行かない時間の中に閉じ込めてしまうと言う事。安定した生活や周囲からの圧力も感じないその世界は、彼等が外から得られる『刺激』を完全に遮断してしまうという意味も持っている。

代わるための行動を行っている人達の、変わる事のない繰り返された行い

それを眼にした存在達だからこそ、立ち上がる力さえも失ってしまったのかもしれない。自分達が似たような行動を起こした際に、成功する保証が何ひとつないからだ。

「ライトッ！ 撃てッ！！」

「OK、ソニルス！！」

だがそんな管理課の行動を阻害するかのよう、シップス達は未だに怪物との戦いを止めようとはしないでいた。自分達だけが闘っているこの状況下、周りの住人達は街から非難し、安全な場所で自分達の事を遠くから視ているかもしれない。ただ見ているだけで何もしない彼等に対し、仮にもし改革が成功した際の結果を彼等が得て良いのだろうか。

そんな理不尽な利益を獲ようとしているやもしれない住人達を尻目に、ソニルスは武器を構えたまま飛びだし、怪物の腹目掛けて武器を振るった。すると相手の腹を覆っていた炎が武器に裂かれて傷口が出来た、その時だ。

「甘いのニャッ！」

「！？」

ゴォォォー！！！！

「うわああああ！！！！」

「ソニルスッ！！」

傷口から噴き出した豪炎がソニルスの身体に襲い掛かり、一瞬にして火ダルマと化してしまったのだ。彼の悲鳴を聞いたソニルスは慌てて彼の元に駆け寄り、予備で備えてあった【水（イア

ーラ)】の栓を引き抜き、彼の身体目掛けて液体を放った。

最初は小さな水滴だった流星石は空気に触れ、即座に膨張しドラム缶一つと匹敵する容量の水へと変化したのだ。すると、

ドブァアアッ！！

「っ…………… ……冷てえ……………」

「あっ、ゴメン……………」

一瞬にして炎に包まれていたソニルス身体から火は消え去るも、水が多かった事もあり彼の着ていた衣服は一瞬にして湿り気を帯びてしまった。寒空の下びしょ濡れの服で居ようものなら風邪をひく事が目に見えるも、近くに暖房替わりとなろう怪物の熱量があったためか、その心配は無く彼等は急いで避難し体制を整えていた。

「大丈夫か？ ソニルス。」

「う、うん……… ちょっとビックリしたけど……… 服も気付いたら乾いてるし、平気。」

「ちっと休んでな。代わりに俺が行くからさ。」

そんな彼等の元へとやって来たのは、別の場から攻撃を仕掛けていたアシュレーだった。突如聞こえた彼の悲鳴に反応して様子を見に来てくれたらしく、手にした流星石の形状はそのままだに、二人の安否を確認していた。

幸いにもやって来た水量で押しつぶされそうになった以外は特に変化は無く、衣服が燃えた形跡も無く、単純に休めば大丈夫であろう状態だった。相手からの返事も聞き安心すると、アシュレーは剣を持ち直し彼等をおいて怪物の元へと向かって行った。

「行けいっ！ ジョアノウチファイヤーにヤッ！！」

【グルァアアアアッ！！】

しかし敵も大人しく相手の攻撃を見送る事もなく、ネコはすぐさま向かってくるアシュレーに対し攻撃を支持を出した。すると怪物は咆哮と共に両手から炎を噴き出し、アシュレー達と同じ背丈の火球弾を作り、攻撃を開始した。

「ヘッ！ んなもんくらうかっ！！」

攻撃を目の当たりにしたアシュレーは一言そう叫ぶと同時に、やって来た火球弾を避ける様に跳躍した。すると彼の居た場所目掛けて数段の火球弾が飛び込んだを見た後、彼は剣を構えやって来た攻撃を避ける様に、華麗に宙を舞った。

剣刃で軽く攻撃の軌道を逸らす様に切りつけながら回転し、自身の跳ぶ方向も軽く創っている様子で、彼は無傷のまま地面に着地し、一気に怪物との間合いを詰めた。その後即座に剣を構え、先ほどソニルスが攻撃を仕掛けた腹部目掛けて、剣で切り付けた。

それと先ほどのソニルスの時同様に、傷口から炎が噴射されアシュレーに対する反撃が開始されるも、彼はその攻撃を予測していた様子で剣を振り払い、空いていた左足で風を作るように回し蹴りを放った。すると炎は風に流され足にまとわりつくも、彼は靴裏と地面を勢いよく擦り合わせ、即座に沈下させ反撃が思った以上に来る事を理解していた。

『身体に近いほど、反撃が大きいな。手足くらいなら簡単に落とせると思ったが、こうなると怪物を先に仕留めて蒸発させる方が難しいな……』

【グルァアアアッ！！】

「！ チッ！！」

自身へやってきた反撃を最低限のダメージに変えた後、アシュレーは後からやって来た拳を眼にし、その場を退避する様に跳び退いた。再び華麗に宙を舞いながら後方へと降り立つと、彼は怪物を目視ししばし睨みあうように立っていた。

そんな時だ。

「アシュレーッ！ この先は俺が貰うぞっ！！」

彼の横を走り抜ける存在の姿を目視すると同時に、アシュレーの元に攻撃を受け持つと言わんばかりの威勢が飛んできたのだ。声を耳にした彼は走り去った相手がシップスである事を把握するまでの時間ロスと共に、頭の中で解っていた事を報告しそびれていた事を思い出した。

相手は炎の身体を持ち合わせており、ちょっとやそっとの威力では身体を弾け飛ばす事すら出来ない。

「？ あっ、馬鹿よせっ！！ お前の流星石じゃ……！！」

「んなもん、気合でどうにかしてやらあああっ！！」

しかし彼の制止は虚しく空を切り、シップスはその場から跳びだしながら両手に武器を構え、果敢にも怪物の顔面を掛けて攻撃を仕掛けようとしていた。飛び込んでくる存在を眼にした怪物は眼を光らせた後、素早く動きを見せた。

「捕まえるのニャ」

【！！】

「えっ？」

ネコの指示が早いか遅いか、怪物は背後に漂わせていた尾を動かし、飛び込んでくるシップスを易々と捕まえてしまったのだ。突如横から伸びてきた尾を見たシップスではあったものの、彼の持っていた武器では攻撃を払う事も出来ず、そのまま炎に飲まれてしまった。

ガシッ！！

「なっ！！ しまったっ……！！」

「燃やすのニャっ！！」

「グァアアアアアッ！！！！」

同時に大量の熱量が身体か尾へと流れ、シップスは炎に包まれ苦痛の悲鳴を上げだした。彼の悲鳴を聞いたアシュレーは慌てて武器を構え攻め込もうとするも、怪物は尾を纏う炎から先ほど同様に火球弾で攻撃を開始し、近づけさせまいと応戦をしてきたのだ。

その場から離れていたソニルス達はまだ動く事が出来ず、すぐにシップスを助ける事が出来ない状態が、出来上がってしまったのだった。

「シッフス！！　しっかりしろっ！！」

「ッ……っああ……　……」

怪物の餌食となりかけたシッフスは、遠くから聞こえてくるアシュレーの声に反応し、意識を保っていた。炎そのものに直に触れている感覚だけが全身からやってくるものの、不思議な事に身体が即座に焼け焦げる事は無く、身に着けていた衣服が軽く焦げる臭いだけが周囲に漂っていた。

半ば死にかけてたと思い数回頭を振った後、彼は顔を上げ前を視た。

「ニャッニャッニャッ　まだまだウェルダンには成りませんかニャッ、青年。」

「成るわけねえだろっ……！　死ぬなんて事、まだ考えてる場合じゃねえんだからな……」

「おや、それは少し意外な返答ですニャね。お主はこの地区で、随分とぞんざいでおざなりな扱いを受けているとお見受けしましたがニャ？」

「……」

「やれやれ、お主は何だかんだで希望に成れそうで成れそうにない素質の持ち主の様ですニャねー　ニャーからすれば、単なるお人よしにしか見えないのニャ。」

そんな彼の近くを、ネコは飛び交うように空中散歩しながら声をかけた。彼の現状をどこまで把握しており、何処から違和感を感じているのかを話すも、ネコの真意は何処にも見えてこない。ましてや相手が素直に何かを求める質問をする事は無く、ただ単に束縛される彼の様子を見て楽しんでいる様にもうかがえた。

周りからの扱いを理解してもなお、彼は何を抱いているのか。

それを知りたいようにも思える、意見であった。

「お主は周りからの蔑視と共に、激しい虐めに合っていたのニャ。担当となったティーチャーズは、そんな現状を打破する術を最初から見出していないかのように、同じ言葉を口にしたのニャ。」

「ッ……」

「誰もが後々の未来に罪を押し付け、自分達の解決能力の無さを棚に上げてたニャ。小さい学校、中くらいの学校、高い位の学校、そして……今。大きな学校でも、扱いを名義づけられたかのように、存在は同じような扱いしか受けられなかったのニャ。」

「……」

「面白いモノで、どんな場所でも目立たない子は目立たないまま。虐められっ子は虐められるだけの人生に、あたかも転落したかのように場が変わっても扱いは同じ。いやはや、ニャーからすれば変化を外部から向ける事自体おかしな行動に想えますニャ。」

初めから決まってしまった運命を知らしめるように、ネコは彼に対し言葉をかけ続けた。すると、徐々にシッフスの顔色から正気が薄れ始め、彼もまた思い当たる節がある様子を見せ始めた。虐められている現状は何処でも変わらず、担当となり味方となってくれていたであろう先生達は同じ言葉で励ましてくれていた。しかし同じ励ましは繰り返し使うごとに効力は薄くなり、段々

と彼も信用する事が出来なくなってしまった。

それだけ自身の将来がぞんざいになりかけた今、護るべきものは存在するのだろうか。

生きる希望が薄れかけた彼は、そんな事を考える様に俯きだした。

「お主はそれだけの変化を起こすために、今まで何をしてきたのニャ？　今までと同じような過ごし方を、してきたのではないのですかニャ？」

「クッ……」

「変化や改革に対する行動をしようと言う事は、それだけの結果を得られると言う事ですニャ。無論それが望むモノかは二の次ですが……！　ニャーはそういう風には視えないのですニャ、狐は。」

終いには『行動』を起こして来たのかと問いかけられてしまい、彼は何も答える事が出来ず、ただ辛い気持ちを閉じ込める様に歯を食いしばっていた。行動そのものに対するリスクを払ったからこそ、得られる結果が存在する世界。彼は今まで行ってきた行動の記憶は、どうやら彼の中には存在して居なかった様だ。

誰かが行った結果に対するモノへの概念は有れど、自身から動く事をしてこなかった。仮に行った時もあるれど、それは如何なる条件が揃ったのか、無事に終了した記憶も無い。

自分から行い、それだけの結果を獲ようと思った事が果たしてあったのだろうか。

ネコは軽く疑問視する様に彼を視ていると、不意に相手は動きを見せ出した。

「……………俺だって……」

「ニャ？」

「俺だって……出来る事なら……してえよ……！　変化を起こしてみてえよ！！　だけど、解らねえんだよ……！！　んな授業さえも、一度も行われなかった！！　教わる事すら出来なかった！！　何が変わるだ、何が上に上がれば周りも大人になるだっ……！！　何も変わりはしなかったんだよ！！　この地区に居たって、一緒だった！！」

相手からの問いかけに返答しながら、シップスは心の中で抱いた言葉を吐き出した。

どれだけの結果を獲ようとして行動しても、根本的な手段が見つからず、どうやったら得られるモノを獲られる道を辿る事が出来るのか。それはどんな教科書にも先生にも教わる事は出来ず、ただ自分のやり方を見出し、それを結果まで紡いで行く事ではしか得られないモノがある。彼にはそれが理解する事が出来ず、ただ今までの人生を同じ時間を繰り返す様に、行動を行ってきた。

そんな苦しみを抱いていた事を理解して欲しかったのか、彼はただただ叫んでいた。

「変化や改革を起こすたって……！　俺には、策略も戦略もありはしないっ……………　ただアシュレー達を巻き込んで、我武者羅に行動を起こす事しか……出来なかった……」

「シップス……………」

「現に俺がヘマをして、束縛されて焼け焦げの刑だ……………　……ハハッ、笑っちゃうしかねえよ……マジで。」

徐々に声量が落ち着き冷静さを取り戻して行く中、シップスは苦笑しながら自身を蔑んだ。支えてくれる仲間を巻き込んでまで行いたかった行動が、たった一回の自分のミスで終わりを迎えようとしている今。自分は一体何がしたかったのだろうか、彼は後悔の気持ちを抱いていた。

「ん～ それは焼身の刑に処される覚悟が出来た、と言う事ですかニャ？」

「あながち間違いじゃねえな。……お前に同意を求めた所で、そう言うのは貰えそうにねえし。……いっそ今までの人生を馬鹿にしながら、死んでいくのも悪くねえなって、今思っちゃったくらいだ。」

「おおー 中々潔い選択ですニャ。雄としてのイキザマは、心得ている様で。」

「その分、女には軽く逃げられるけどな。現に妄想くらいしか良い記憶ねえし。」

「おやおや、寂しい人生ですニャね。」

とはいえネコは彼の考えに同意を示す事は無く、ただ単に現状を楽しむ言葉を彼に告げる事しかしなかった。

しかし彼の選択には潔いと思われる『素直さ』が含まれていると、ネコは拙い賛辞を送りながらも怪物に焼身の刑を執行させようと考えていた。現に掴まっている彼は微動だにせず、そのまま焼かれたとしても決して反抗はしてこないだろうと思われた。

そんな彼の様子を見たネコは普段の笑みを浮かべるのを止め、その場に漂いながら彼を見つめていた。その時だ。

「……………」

「ならば、そのまま焼いてあげた方が半ばいい結果になりそうですニャね。どうするかねえ～、怪物さん。」

【グオオオッ】

「……おやおや、半ば同意しかねる様な返事ですニャ。それならば、ニャーも安心して命令が」

「さっせるかっ……！！ 馬鹿猫、怪物！！ こっち向けやああああっ！！」

「ニャ？」

「……？ アシュレー……？」

彼等の居る場へと届く様に、一声が彼等の耳を貫いた。声を耳にした三人は声の主を視る様に顔を向けると、そこには怪物からの攻撃を避け終え、ビルの上に立つアシュレーの姿があった。

「おいコラ馬鹿狐！！ 散々巻き込んでおきながら、自分だけ死のうなんて楽な選択肢選んでんじゃねえよっ！！ この腰抜け野郎！！」

「……………」

「俺はお前のやりたい事を優先しているとはいえ、俺の考えが無くて応戦してるわけじゃねえんだよっ！！ 俺達は人形かってんだ！！ 返事しろ童貞！！」

「なっ……！ 童貞童貞言うんじゃねえよっ……！ 好きで童貞街道歩んでるわけじゃねえんだっつーのっ！！ 俺だって彼女くらい欲しいからな！？」

「ハッ！ 自力で話すどころか、積極的に攻め姿勢見せねえ奴がねえモノねだりかっ……？ 中二野郎！！ 降りて来い！！ その根性叩きなおしてやらああっ！！」

「彼女持ちにとやかく言われる筋合いもねえっつーの！！ 降りれるもんなら降りてっから！！」

正気を失いかけていたシップスに罵声を浴びせながら、アシュレーはその場で叫び続けた。すると次第にいつもの彼が戻ったかのような返事を返し始め、アシュレーは続けて罵倒し、大人しく拘束されるなど意見した。

しかし相手は拘束された状態から抜け出す事が出来ない事を告げると、彼の言葉を聞いたアシュレーは右手に力を込め、握っていた武器の取っ手が折れんばかりの握力で握り、その場を跳びだした。

「ん”な”ら”.....!!!」

墮ちろおやあああああ———!!!」

「ゲッ!？」

「にやにやあっ!？」

刀を構えたまま跳躍したアシュレーはそのまま跳びかかり、シップスを拘束する怪物の尾を目掛けて切りかかった。丁度攻撃地点の近くに居たネコは殺意に塗れた悪魔の迫力に圧倒され、その場を逃げ出した。

その時だ。

「うらあああああっ!!!」

ガシュンッ!!!

「ッ.....! 馬鹿ッアシュレー!!! んな事したら、お前も焼け焦げに.....!!!」

「お前が焦されてるってえのに.....相棒の俺を、無視してんじゃねえよ..... 馬鹿野郎.....!」

ガシッ!

「!!!」

「こんくらいの火傷.....! 気合で何とでもして.....やらあああっ!!!」

痲痺と勢いを付けた一撃は見事に狙い定めた一撃と化し、炎を纏った皮膚を切らんばかりの攻撃へと変化した。無論それに対する反撃も掌同様に発生しだし、それを見かねたシップスは慌てて逃げる様指示するも、彼はその言葉に耳を貸す事無く武器から手を離し、囚われていたシップスの身体に両手を伸ばした。そしてそのまま彼の両脇から手を伸ばし背中をガッチリと掴むと、彼はそのまま自身の後方に跳びこむ様に倒れだし、ジャーマンスープレックスをかます勢いで彼を尾から引き抜きだしたのだった。

勢いよく引き抜かれた彼はそのまま締め付ける尾の中から解放され、そのまま地面に向かって落下を開始した。

「アシュレー……！ お、おいっ！ 落ちてるっ……！」

「……」

『コイツ……！ ダメージが大きいのに、無茶しやがった……！！ どうすんだよ、ガチで落ちるからなコレ！！』

無事に助け出されたのも束の間、シップスは落下する自分達を視てアシュレーに作戦はあるのかと問いかけた。しかし相手は先ほどから浴びていた炎の熱によるダメージが蓄積してしまった様子で、シップスの身体を掴んだまま気を失っていたのだった。

状態が良くない事を察した彼はそれ以上叫ぶ事は止め、慌ててどうするかと考えながら地面に向かって行った。

「おやおやあ。落下しましたニャ。男二人抱き合っで。」

「……チッ！ これだけは使いたくなかったんだがっ……！ しゃあねえっ！！」

「ニャ？」

軽くネコが意味深な言葉を口にする中、シップスは覚悟を決めた様子で右手で上着のポケットに手をつっ込み、中から一つの流星石を取り出した。落下しながらも左手でアシュレーをしっかりと掴むと、彼は栓を口にしたまま引き抜き、瓶の中身を地面に向かってぶちまけ、地面に向かって散布した。

すると液体を受けた地面に湿り気がおびた直後、彼等は落下し地面に激突し大けがをする。かと思われた、その時だ。

ぐおおおーんっ……

「おお～ コレはコレは、『曲力（ミスキー）』を使ってきますとはニャ。」

「ヘッ、ざまあねえなあ！ こんくらい出来んだよっ！」

「ニャニャッ 気合が有ると無いとでは、お主は随分と輝き方が違いますニャね。面白いのニャ。」

彼等が激突した地面が形成する足場の安定性を失い、底なし沼のように大きく曲がり、彼等の身体に来るであろう衝撃を全て飲み込んでしまったのだった。無論その衝撃によって地面が大きく凹んだものの、徐々に液体が乾き出し、元の形状へと戻るように地面は平行になろうと、自ら動き出していた。

「とはいえ、相棒は少々ダメージを負いすぎた感は有りますニャね。」

「まーな。……俺が自信喪失した姿は、コイツも気に入らなかったんだろ。ネコ、その怪物はまだ消えないのか。」

「ん～ まだまだ消える様子は無いですニャ。もっとも～、生まれた存在は早々に消される事は望んでいませんのニャ。」

「……ッたく、そう言うところだけは小説地味みてるよな。まあいいけどな、その方がおもしろえし。」

「ニャニャッ」

元の地面へと戻った地面にアシュレーを寝かせると、彼は一步前へと踏みだし、再び怪物を倒そうと意気込みを述べた。彼の言葉に反応する様にネコは軽く返事を返すと、再び怪物のそばから離れ、近くのビルへと降り立ち彼の戦いを観戦する様子を見せだした。元より戦う意志を見せないネコを狙うのを止め、彼は上着のポケットから流星石を取り出し、臨戦態勢を取りこう告げた。

「……次は負けねえからな、ネコ……！ 絶対そいつの、首を捕る！！」

「にゃーんっ」

誰かに頼る事ばかりせず、自らが改革に乗り出したい。そんな彼の、潔い一声が周囲に響くのだった。

「あっ、ネコ！」

彼等の居た場に軽く耳障りな声色が響きだし、壁際に集まっていた彼等の前にネコSがトコトコとやって来た。相手の姿を見たソニルス達は慌てて流星石を出すも、ネコは微動だにせずに彼等の事を視ていた。

「怪物は、もう出てこねえんだろうな。もう一匹とか抜かしたらタダじゃ済まされぞ。」

「んーニャ、アレが最初で最後ですニャよ。お主等は時間を止めていた怪物を倒したのニャ。いやー、凄い凄い。」

しかしネコはネコで仕事を済ませた様子を見せており、本当に戦っていたのかどうかさえ解らない、微妙な空気が彼等を包んでいた。

敵対していた怪物は確かに消滅し、街に平和を取り戻す事に成功した。彼等の言う『改革』が無事に行えた証拠であり、身体はボロボロでもしっかりと役目を果たせたのだ。

「あっ、そうだ。……ネコ！ 怪物を倒したんだから、アンケート用紙を白紙にしろ！」

「んー？ 何のことですかニャ？」

「「はああ！？」」

そんなネコに対し、シップスはある案件を思いだし、取り消すように抗議しだした。だが相手はその約束を覚えていないのか首を傾げだし、シップスは驚き声を上げ、疲労などお構いなしでその場に立ち上がった。無論近くに立っていたアシュレー達も穏やかな様子は無く、次々とネコへ視線が向けられた。

その時だ。

「おまっ……！ 騙したのか！？」

「ニャーは元から、時間を奪ったとは言っていないのニャ〜 モンスターが勝手に、春になる分の熱を溜め込んでただけなのニャ。倒せば必然的に、いきなり春がやってくるわけであって……」

「えっ」

ジュウー……

「あああっじいいいい！！ アチアチアチアチ！！！」

「焼ける！ 焼ける！！ いろいろ焼ける！！」

彼等の居た大地の空気が突如変化しだし、真冬の寒さから一変、突如蒸し暑い気候が彼等を襲ったのだ。冬の井出達だった彼等へ対し、真夏の様な視線が降り注ぎ、まるで熱湯の中に叩き込まれたかのような暑さに悶えだした。

身に着けていた衣服を脱ぎ捨てる様に彼等は服を捨てだし、徐々に肌着姿へと変わりだした時だ

。
「ニャツニャツニャツ とまあご冗談は無しにして。」

パチンッ

「あち…… ……あれ。」

「嘘にゃ。」

「嘘かよっ！？ ……へグジッ！！」

ネコが一度指を鳴らした瞬間、元の気候へと早変わりし彼等にありえないマジックを披露した事を告げだした。どうやら彼等の居た地面周辺を鉄板の様な材質へと変えたらしく、降り注ぎだした朝日の光を収束させ、あたかも昼間の日差しの様に演出していた様だ。

軽く騙されたと言わんばかりに彼等は叫んだ後、脱ぎ捨てた衣服をいそいそと着だし、汗をかいた身体にやってくる真冬の風に、一同はクシャミをしていた。

「ま、おミャー等の願いは確かに聞き届けたのニャ。でニャ、一つ聞きたいのニャ。そこの狐っ」

「えっ、俺？」

「おミャーじゃないニャ。そこの長身の方にゃ。」

「えっ？」

軽く風邪を引きかねない温度差に身体がやられそうになる中、ネコは軽く指さし質問を投げかけた。だが相手側は認識を怠っていた様子で間違いが起こるも、ネコは質問先をシップスだと告げ直し、彼にある質問をしだした。

「な、何だよ。」

「お主、目の前に知り合いが倒れてたら。助けるかニャ？」

「そんなの当たり前じゃん。何言ってんだよ。」

「じゃ。もしそれが『悪の知人』だったら、どうするかニャ？」

「は？ 何それ。」

「もしの過程ニャ。ほら、答えるニャ。」

「ううん……？」

彼の言う質問、それは『目の前で誰かが倒れていたとしたら、それを見過ごす事無く助けようと思うかどうか』だ。普通に考えれば誰でも助けに向かいそうになる質問ではあるが、時と場合、ましてやシチュエーションによってその行動にいろいろな差が出て来るであろう。

彼は質問に対しある付加価値を与えると、シップスは軽く頭を悩ませるも、しばらく考えた後こう言い放った。

「…… あーわっかんねー！！ もう良いよ！ 『助ける』でいい！！ 知ってる奴なら全員助ける！ それでいいだろ！？」

「投げやりだな……」

「ニャニャッ、それなら合格だニャ。ホレッ」

「あっ！」

誰であろうと助ける、知っている相手であればなおさら助けると言う、ネコは満足そうに笑った後、ズボンのポケットから一本の鍵を取り出し、彼に向けて放り投げた。宙を舞う鍵を見かねた彼は慌てて鍵を手にし、投げ渡されたモノが何なのかを確認した。

宙を舞ったのは金色の小さな鍵であり、先端には紅色の流星石と思われる鉱石がはめられていた。どうやら地区を仕切る大扉を開ける、管理課を打ち負かした証の様だ。

「それがあれば、おミャーの親友に会えるニャ。さっさと行くニャよ。」

「えっ、タカにか！？」

「ほれほれ、いけいけ～ 桜が散ったらおしまいだニャよ。」

ネコに告げられた鍵の使い道を聞き、シップスは眼の色を変え嬉しそうに鍵を握りしめた。今まで遠くに居た相手に再び会えるチャンスを目前に控え、ましてやその場へと向かうための行動を自らがした事実。それは紛れもない自信へと繋がる力強さであり、彼は再開をするであろう友人への話の種が出来たと、心から喜んでいた。

そんな彼の近くに立つアシュレー達は軽く顔を見合わせた後、彼が嬉しそうな顔をしていたためか、つられて彼等も嬉しそうに笑っていた。

『俺も、皆の所に行ける。タカにも、会える………』

「おーい、何黄昏てるんだシップス。柄にもねえーんだから、キモイし止めとけて。」

「なっ！ 別に良いだろんな事！！」

嬉しさのあまりぼんやりとしていた彼に対し、アシュレーは現実に戻す様に声をかけた。彼等の手にした鍵があれば地区をおさらばする事も可能であり、自信を付けた彼がこの場に居座る理由も無く、周囲に咲き乱れだした桜の花弁を視る限り、自分達は『卒業』したのだろうと理解していた。

学業に置き換えられた『自分達の歩む道』を、卒業と言う名の『成長と切り替え』を自分達は経験した。

ゆえに、もうこの場に居る必要はないと、彼等は考えたのだ。

「ほら、早く行こうぜ！ こんなバカおいてさ！」

「うっせー！ 俺が先導切るんだから、前歩くんじゃねえーよ！」

「あっ、マサが怒ったー！」

軽く小馬鹿にされながらも彼等は走りだし、先導を切らんと走るアシュレーを追いかける。徐々に彼を追い越したシップスが彼等の前を走りだし、手にした鍵を高らかに空へと掲げ、こう思ったのだった。

『俺も、卒業だ………！ こんな環境、俺が変えたんだ！』

自分の力で変えられた、自分の努力が実を結んだ。何も意味が無いと思っていた自分の人生が、変わった瞬間を彼は何度もかみしめるのだった。

— E P I S O D E N D —